

# 中宿在家遺跡 上豊岡一里塚遺跡

一般国道18号(高崎安中線)地域  
埋蔵文化財調査報告書

1997

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 中宿在家遺跡 上豊岡一里塚遺跡

一般国道18号(高崎安中線)地域  
埋蔵文化財調査報告書

1997

群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



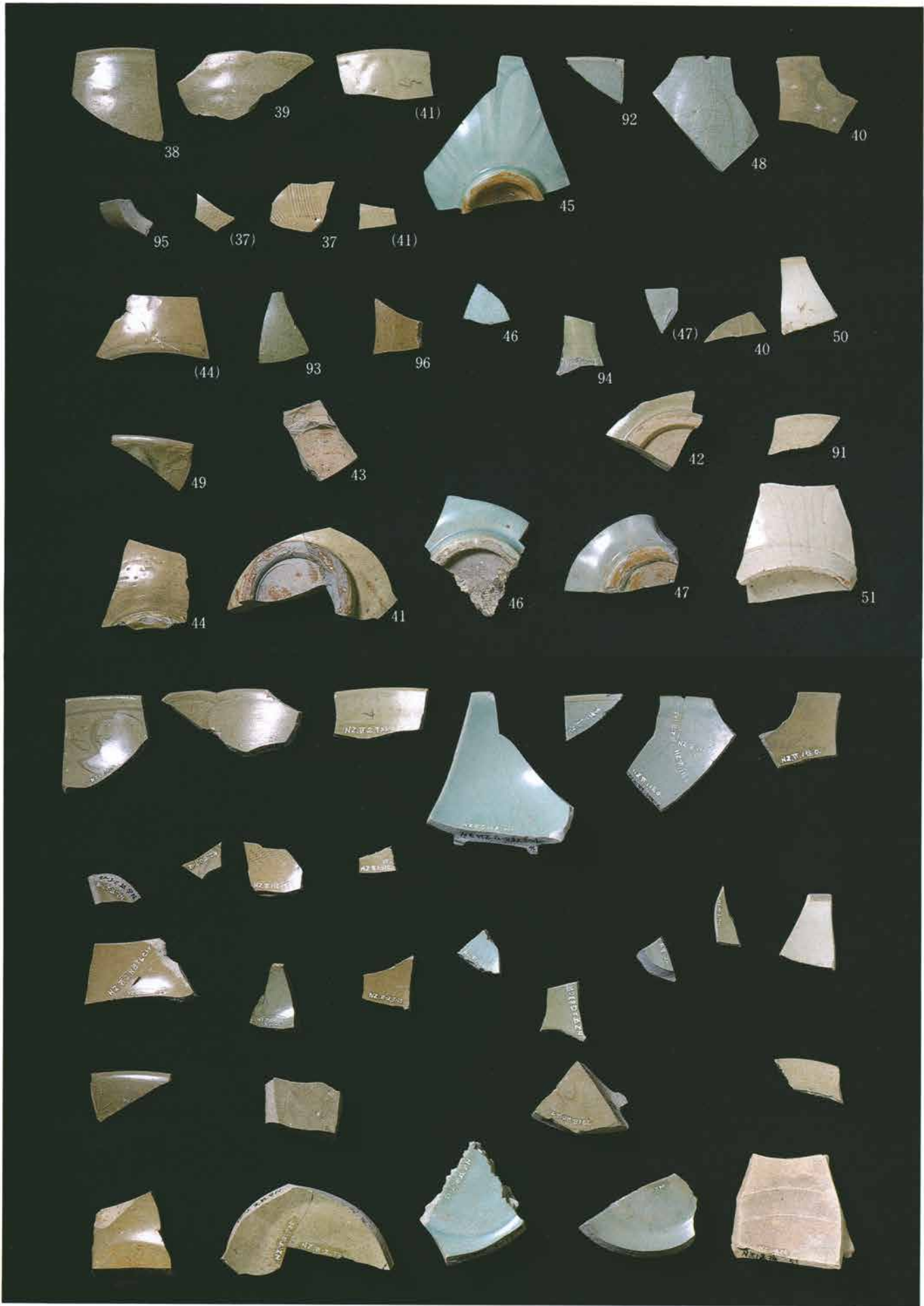




南側の野殿台地からの遠望 中央低地が遺跡地 左手前が館谷津



北東側の板鼻城跡からの遠望 奥の野殿台地下が遺跡地







## 序

国道17号線を介し本県と首都圏、長野県を結ぶ国道18号線は、中山道（古代の東山道）の面影を遺し、歴史的、政治的、経済的に重要且つ本県人になじみの深い国道ですが、現実の問題としては交通量が多く、建設省によって渋滞解消のために、安中市板鼻をさけた道路改築事業が計画され、事前に埋蔵文化財の発掘調査が必要となりました。

本報告書は、安中市の東部、中宿字在家を中心とした地域に所在する『中宿在家』遺跡について、県教育委員会から依頼を受けた群馬県埋蔵文化財調査事業団が、平成6年から同8年にかけて、発掘成果を整理してまとめたものです。

遺跡地は古代の東山道以来、交通の要衝である板鼻に近接しているために、周囲に多くの歴史的遺産が分布し、発掘された遺構・遺物にも平安時代から江戸時代におよぶもの、なかでも、富岡上野一の宮へ通じるとされる推定『上野一の宮街道』、龍泉窯を初めとする中国陶磁器等、特別重要な新知見が得られております。

さて、今回の報告書刊行に至るまでには、建設省高崎工事事務所、群馬県教育委員会、安中市教育委員会、地元関係者の皆様に大変御盡力を賜りました。ここに銘記して、心から感謝申し上げますと共に、本報告書が広く基本的な歴史資料として活用されることを念願し、報告書の序といたします。

平成9年2月28日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 **小寺弘之**



# 中宿在家遺跡



# 例 言

1. 本書は一般国道18号（高崎安中道路）改築工事に伴う事前調査である。

2. 遺跡所在地 安中市宿字在家

3. 事業主体 建設省（関東地方建設局高崎工事事務所）

4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

5. 調査期間及び調査担当者

発掘調査は平成6・7年度の2年間にわたり調査を行った。

(1) 発掘調査

調査期間 平成6年4月1日～平成6年8月31日

平成7年4月1日～平成8年2月20日

調査担当者 石坂 茂 杉山秀宏 諏訪 晶（平成6年度）

友廣哲也 新倉明彦 内田敬久 飯塚邦守（榛東村教育委員会派遣）（平成7年度）

(2) 整理

整理期間 平成8年4月1日～平成9年3月31日

(3) 原稿執筆

石井榮一（世田谷区教育委員会）

坂井 隆（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

整理・編集担当者 友廣哲也（財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団）

(4) 事務

中村英一 管野 清 原田恒弘 蜂巢 実 赤山容造 神保佑史 中東耕志 岸田治男 小淵 淳

国定 均 笠原秀樹 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 高橋定義 宮崎忠司 大澤友治 吉田恵子

今井もと子 内山桂子 山口陽子 星野美智子 羽鳥京子 菅原淑子 佐藤美佐子

6. 報告書作成関係者

遺構写真撮影 調査担当者

遺物写真撮影 佐藤元彦

整理補助員 平野照美 吉田文子 黒田紀子(旧姓鈴木) 福島和恵 吉澤照恵 深代初子 中橋たみ子

保存処理 関 邦一 土橋まり子 小材浩一 萩原妙子

委託 測量 株式会社 測研 技研測量設計株式会社

航空撮影 株式会社 フジテクノ 技研測量株式会社

7. 調査協力

大工原 豊 安中市教育委員会 榛東村教育委員会

## 凡 例

1. 報告書中では本遺跡をⅠ～Ⅵ区に分け（第1図）各々の区の中で遺構番号を付してある。これは調査年度をまたぎ調査も3度にわたったため各々の区の中で遺構番号を完結させるためにこのような形にした。このため各遺構・遺物には調査区を頭に冠してある。また遺物観察表の出土地にも区名を付してある。報告書の章目次も区ごとに分けてあり、各区に複数面がある区では第1・2面とした。  
また全調査区にまたがり平安時代末期の水田面が確認され、図面が大きくなるために水田の図は付図としてある。
2. 本報告書に掲載された遺物実測図は1/3を基本としている。しかし、陶磁器片・石造物等はこの限りではなく、その場合は図の右下に縮尺を付した。
3. 遺物写真は実測図に沿いほぼ1/3で掲載したが陶磁器・石造物についてはこの限りでない。



第1図 中宿在家遺跡区割図

## 報告書抄録

フリガナ	ナカジュクザイケイセキ
書名	中宿在家遺跡
副書名	一般国道18号（高崎安中道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	第一集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第218集
編著者名	石井榮一 坂井 隆 友廣哲也
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2
発行年月日	1997年

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ナカジュクザ イケイセキ 中宿在家遺跡	アンナカ シナカジ ユク 安中市 中宿	10211	00389	36°19'45"	138°55'45"	H 6年4月1日 } H 6年8月31日 H 7年4月1日 } H 8年2月20日	18,954㎡	国道18号 改修工事

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
第1章 発掘調査の経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 立地と周辺の遺跡	1
第2章 検出された遺構	3
第1節 I区概要	3
第2節 II区概要	5
第3節 III区概要	8
第4節 IV区概要	9
第5節 V区概要	9
第6節 VI区概要	10
第3章 検出された遺物	23
第1節 出土遺物	23
第4章 科学分析	29
第1節 自然科学分析 (1)	29
第2節 植物珪酸体分析 (1)	32
第3節 寄生虫卵分析	37
第4節 自然科学分析 (2)	38
第5節 植物珪酸体分析 (2)	43
第6節 炭化材の樹種同定	50
第5章 考 察	53
第1節 中宿在家遺跡の中近世 坂井 隆	53
第2節 遺物観察表	62
第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討 石井榮一	67
第4節 ま と め	76





# 第1章 発掘調査の経緯と経過

## 第1節 調査に至る経緯と経過

国道18号線は交通量が多く板鼻付近において恒常的な渋滞が問題となっていた。この解消のため建設省により渋滞箇所である板鼻を避けた18号線の改築工事が行われることになった。

18号線の改築に伴い板鼻の南、中宿字在家を中心とした地域の工事が行われることになった。これを受け群馬県教育委員会文化財保護課が平成5年3月に工事に先立ち事前の確認調査を行った。その結果、該当地域に平安時代の溝、江戸時代の溝、土坑、畝状遺構等が検出され、本地域での埋蔵文化財の発掘調査の必要性が判明した。平成6年4月、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を実施し、平成8年2月に全対象地ほぼ2万平方メートルの調査を終了した。

本遺跡は18号線工事の改修工事のため東西方向に長く延びている。このため調査区を東から便宜的にⅠ～Ⅵ区とし、平成6年度はこのうちのⅠ～Ⅲ・Ⅵ区を行い、平成7年度にⅣ・Ⅴ区の調査を実施した。発掘調査は県教育委員会文化財保護課の試掘結果に基づき実施された。当初本遺跡対象地の内買収が終わらない区域があったため平成6年度、平成7年度の2年度にわたり行われた。

## 第2節 立地と周辺の遺跡

中宿在家遺跡の立地は安中市の東部に位置し、JR安中駅の北東に接している。調査区の地番は安中市中宿字在家に所在している。中宿町は現18号国道が唯一碓氷川の右岸にかかる地点にある。周囲は河川の氾濫等で遺跡の所在の碓氷地域であった。このような旧地形の上の微高地上に確認された遺跡である。碓氷川を北に南には柳ヶ瀬川が遺跡に沿い、東部で北上し碓氷川へと注いでいる。

古代より本遺跡の東にある板鼻は東山道のルートとして重要な位置を占め、畿内、甲斐、越後、下野さらには東北地方への経路として重要な場所にある。東山道以来近世、近代に至るまで当地域は交通の拠点として板鼻宿が近代まで機能していた。板鼻の名は鎌倉時代～江戸時代に至るまで多くの文献にその名を残している。鎌倉時代は源義経、管領上杉家、上野守護安達氏、鎌倉執権家につながる北条氏、室町時代は新田氏、戦国時代では越後の長尾氏、甲斐の武田信玄、織田信長につながる滝川氏、江戸時代は井伊家等この地域は古代からの交通の要衝としての位置にあった。

また他にも新田氏の氏寺である世良田の長楽寺の創建僧である栄朝建立の連華寺があり、一遍上人開祖の開妙寺、鎌倉時代の上杉管領の法要を行った海龍寺、この寺には武田信玄に拘わる伝承もあり、交通の要衝に合わせ文化的にも優れたものが多い。

また県南にある、富岡上野一ノ宮へ通じるとされる宮街道が本遺跡のⅤ区とⅥ区を分ける道であると考えられるなど中宿在家遺跡の存在の意味は古くからの交通と文化の両面にわたり、重要性を示している。さらに中宿在家遺跡南の丘陵上には中世小幡氏に拘わるとされる野殿の屋敷跡、北の丘陵上には板鼻城等この地に多くの遺跡を残している。このような背景は中宿在家遺跡を取り巻く歴史的に重要な意味を多く残している。



- |                               |                                 |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1 中宿在家遺跡                      | 6 館谷津館址                         |
| 2 古城遺跡 (「古城遺跡」1988 安中市教委)     | 7 野殿天皇塚古墳 (「安中市史」1964 安中市)      |
| 3 板鼻城址 (「群馬県の中世城館跡」1988群馬県教委) | 8 野殿北屋敷 (「野殿北屋敷・西殿遺跡」1988安中市教委) |
| 4 小丸田出丸 ( / )                 | 9 西殿遺跡 ( / )                    |
| 5 鷹ノ巣出丸 ( / )                 |                                 |

第2図 中宿在家遺跡周辺遺跡 (1 : 25000)

## 第2章 検出された遺構

### 第1節 I区概要 (付図1・3)

#### 第1面

**確認遺構：**土坑6基、井戸1基、他近世の建物に伴う石敷遺構が検出された。遺構の確認面は調査区の土層から浅間山A軽石を含む層の上面に確認され、A軽石の年代をさかのぼるものではない。この結果、1面に検出された遺構はすべて近世の遺構である。1面では出土遺物も18世紀中葉をさかのぼるものはない。

1号土坑 I区北東に位置し、K15グリッドにある。長円形を呈し、長軸約1.8m、短軸約1.4m、深さ約10cmを測る。

2号土坑 I区北東に位置し、J15グリッドにある。ほぼ円形を呈し、径約1.1m、深さ約20cmを測る。

3号土坑 I区北東に位置し、JK15グリッドにある。ほぼ円形を呈し、径約1m、深さ約20cmを測る。土坑底面より石が検出された。

また、調査区北東部に入れたトレンチ内より4～6号の3基の土坑が断面で確認された。

1号井戸 調査区の北部に位置し、J18グリッドにある。井戸は表土面から底部に至り、周囲を石で組んである。井戸底面の中心に50cm、幅35cmの大きな石がおかれている。規模は径約1.8m、深さ約1.1mを測る。

**その他の遺構：**石敷き遺構1～5号が検出され、また中央部を西南方向に直線状に石垣が検出されている。また石垣の西側に炉跡が検出され、これらの遺構は近世の屋敷に付属する可能性が指摘できる。

1号石敷き 調査区の北西に位置し、H・I15グリッドにある。規模は長軸2.8m、短軸1.6mを測る。

2号石敷き 調査区北に位置し、石垣の西に接している。I19グリッドにある。長方形を呈し、規模は長辺3.6m、短辺2mを測る。石を取り除くと土坑状に掘り下げたあり深さ約40cmを測る。貯蔵用の施設と考えられる。

3～5号石敷き 調査区の南に位置し、E17・18グリッドにある。規模は3号は長軸1.6m、短軸1m、深さ約15cm、4号は長軸、短軸共に2m、深さ40cm、5号は長軸1m、短軸70cm、深さ20cmを測る。

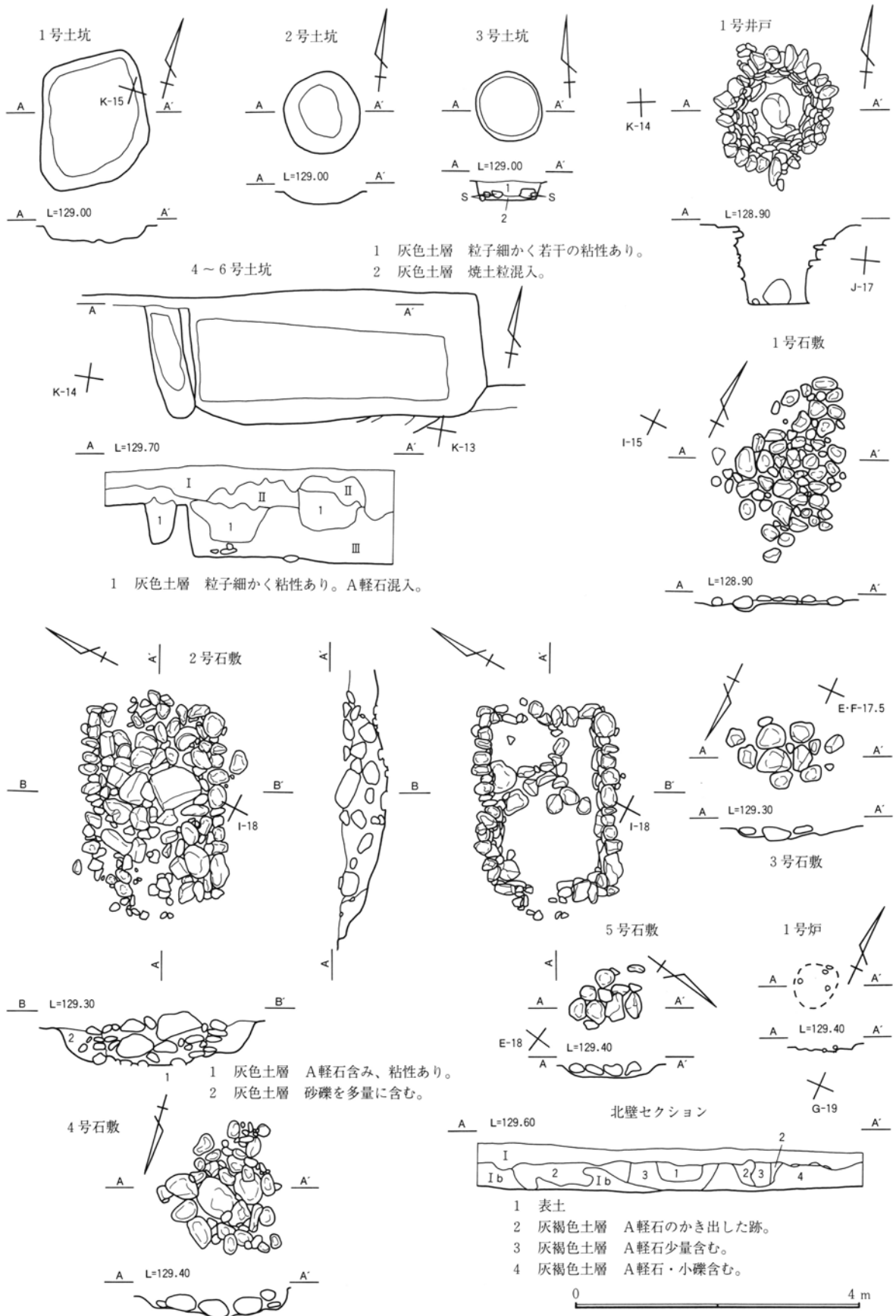
1号炉 調査区ほぼ中央に位置し、G20グリッドにある。後述するが他の石敷き遺構と合わせ近世の屋敷の跡と想定できる。

1号石垣 調査区ほぼ中央に位置し、G・H・I16～18グリッドにある。ほぼ直線状に15m、幅約60cm～1.4mを測る。

#### 第2面

浅間山A軽石下第2面には浅間山B軽石に覆われた水田跡が検出された。I区内では水田跡が確認された面積は他の区よりも狭いが、あぜと水口等が検出された。

第2章 検出された遺構



第3図 I区検出遺構

## 第2節 II区概要 (付図2)



第4図 I区石垣遺構

**第1面** I区同様まず浅間山A軽石面の下面の精査を行った。この面では畑のサク状の溝が確認された。他溝2条、土坑1基が確認されている。時期はI区1面と同時期である。第2面は浅間山B軽石下水田がほぼ全面にわたり検出された。また第2面では水田跡以外に土坑、井戸、掘立柱建物、集石が検出された。各々の時期は1～10号集石は水田に伴うことがはっきりと分かり、水田工作中的の邪魔な石を同じ場所に集められたものである。

他の井戸、土坑、溝は調査区断面の判断より浅間山A軽石の時期より旧く、浅間山B軽石の段階よりあたらしいものである。

### 1号サク状遺構

調査区の東端部に広がる畝状遺構の内3条のサクの断面を示した。各々サクの中心からの幅は約1mを測り、他のサク間も同様の幅を示す。1条のサク幅は約30cm～60cmを測りサクの掘り込みは約10cmを測る。

### 1・2号溝

1号溝は調査区東壁より西へ走り中央部で2号溝とつながり、2号溝は南へ向かう。1号溝は幅1m～2mを測り、2号溝と合流する地点では約3mを測る。深さは1号約30cm、2号約20cmを測る。新旧関係は2号溝が新しい。

### 第2面

**1号土坑** 2区東部に位置し、F26・27グリッドにある。規模は長軸1.2m、短軸約50cm、深さ約20cmを測る。

**2号土坑** 2区東部に位置し、F27グリッドにある。規模は長軸1.3m、短軸50cmを測る。

**3号土坑** 2区東部に位置し、F27・28グリッドにある。規模は長軸2m、短軸40cm、深さ20cmを測る。

**4号土坑** 2区南東部に位置し、E27グリッドにある。規模は長軸1.6m、短軸60cm、深さ40cmを測る。

**5号土坑** 2区南東部に位置し、C27・28グリッドにある。規模は径約60cm、深さ約20cmを測る。

**6号土坑** 2区中央南部に位置し、D34グリッドにある。3号井戸と重複し、新旧関係は3号井戸が新しい。規模は長軸1.2m、短軸90cm、深さ60cmを測る。

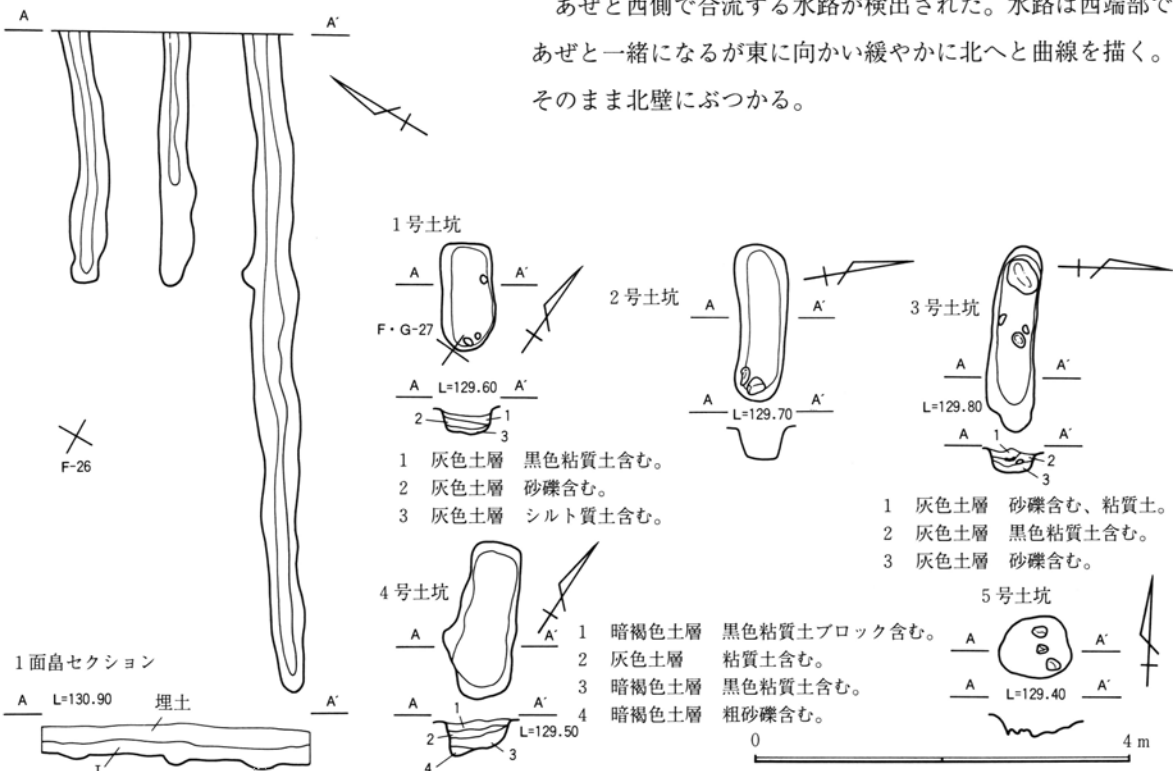
第2章 検出された遺構

- 7号土坑 2区中央南部に位置し、D34グリッドにある。8号土坑と重複し、新旧関係は7号土坑が新しい。規模は長軸1.3m、短軸80cm、深さ20cmを測る。
- 8号土坑 2区中央南部に位置し、D34グリッドにある。3号井戸・7号土坑と重複し、新旧関係は3号井戸・7号土坑より古い。規模は南北軸で1.5m、深さ10cmを測る。
- 1号井戸 2区南東部に位置し、D25グリッドにある。規模は径約1.2m、深さ約80cmを測る。
- 2号井戸 2区中央南部に位置し、D34グリッドにある。6・8号土坑と重複し、新旧関係は井戸が新しい。規模は径約1.8m、深さ約1.8mを測る。
- 3号井戸 2区南西部に位置し、D38グリッドにある。規模は径約1.8m、深さ約2.6mを測る。
- 1号掘立柱建物 2区南西部に位置し、C・D34・35グリッドにある。1間×2間で3.4m×2.4mを測る。柱穴の深さはほぼ20cm～30cmを測る。
- 2号掘立柱建物 2区南西部に位置し、D・E35・36グリッドにある。2間×2間で規模は2.4m×2.4m、柱穴の深さは約20cm～30cmを測る。
- 3号掘立柱建物 2区南西部に位置し、C・D38・39グリッドにある。2間×3間で規模は3.4m×3m、柱穴の深さは約20cm～40cmを測る。

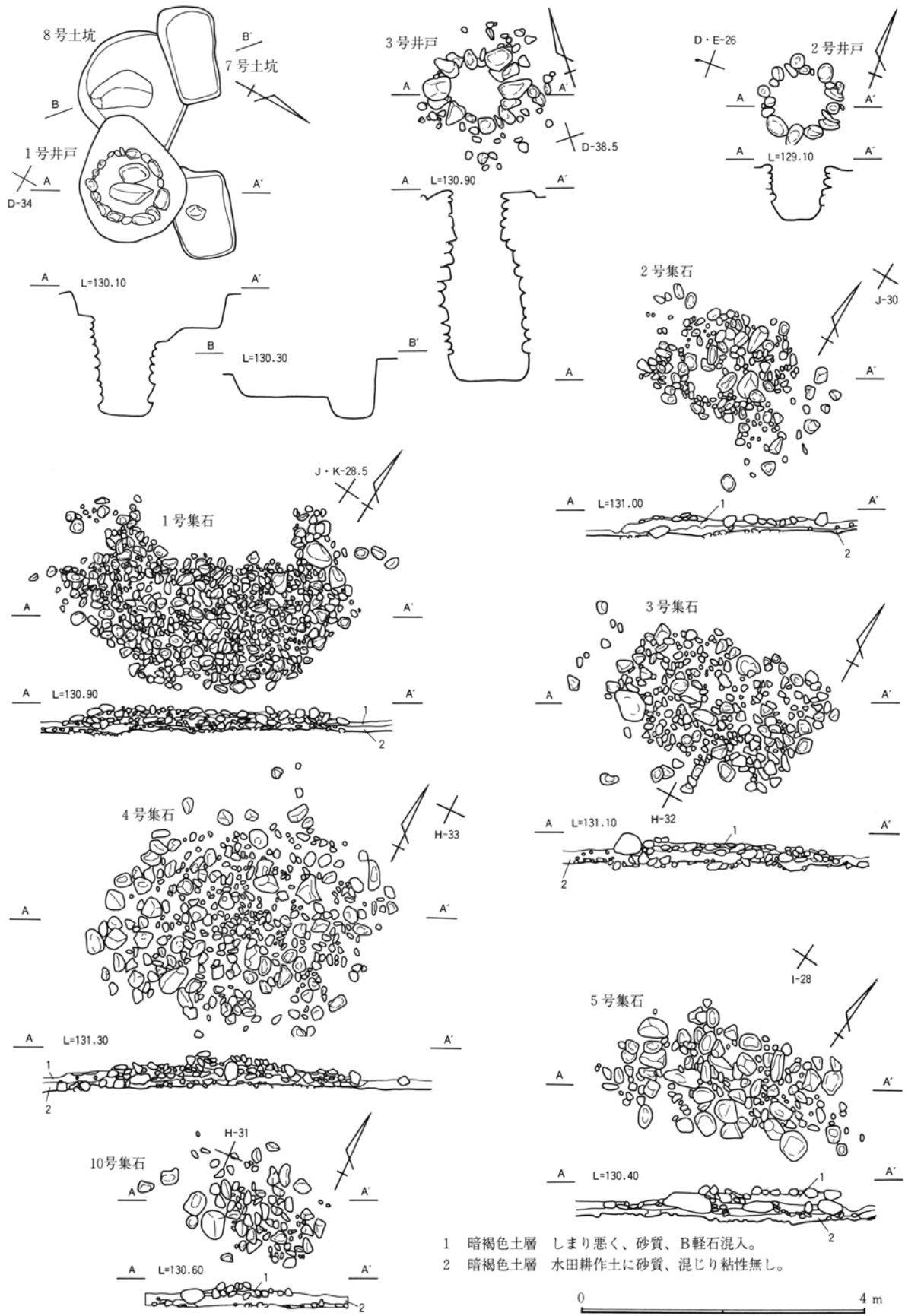
水田跡

中央部を東西にほぼ直線状にあぜが走っている。ほぼEライン北側に沿っている。幅約2m～3mを測る。東に行くに従いややあぜの残りは悪い。このあぜは本遺跡内他の区でも確認され、地形の傾斜、水の供給等の機能を果たしたものと理解できる。水田面には10ヶ所にわたり石が集められる部分がある。ちょうどあぜの分岐点や傾斜点等であり、耕作中邪魔な石をここに集積したものと理解でき、また集積場所も水田耕作の効率を考えた場所に設定したものと理解できる。中央を走るあぜ上にも多くの石が集められ補強としてか集石してある。

あぜと西側で合流する水路が検出された。水路は西端部であぜと一緒に東に向かい緩やかに北へと曲線を描く。そのまま北壁にぶつかる。

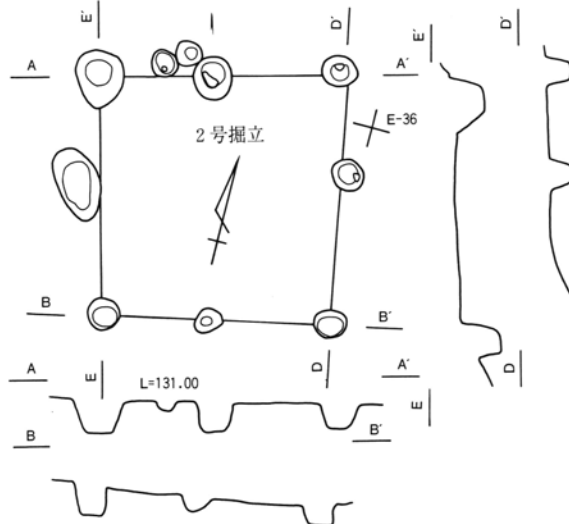
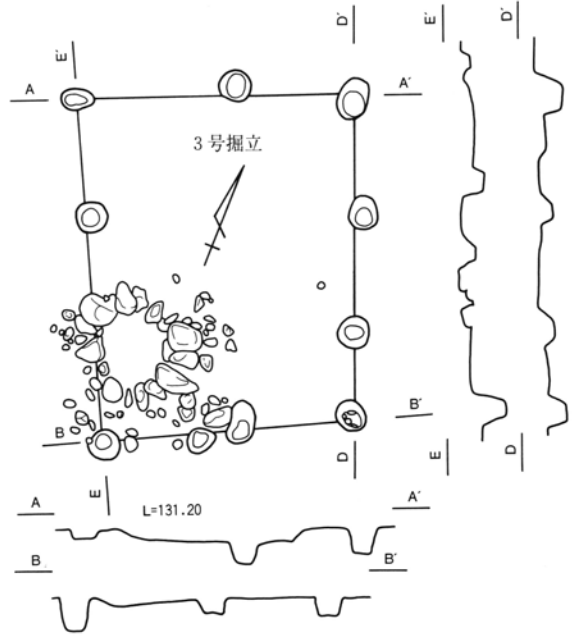
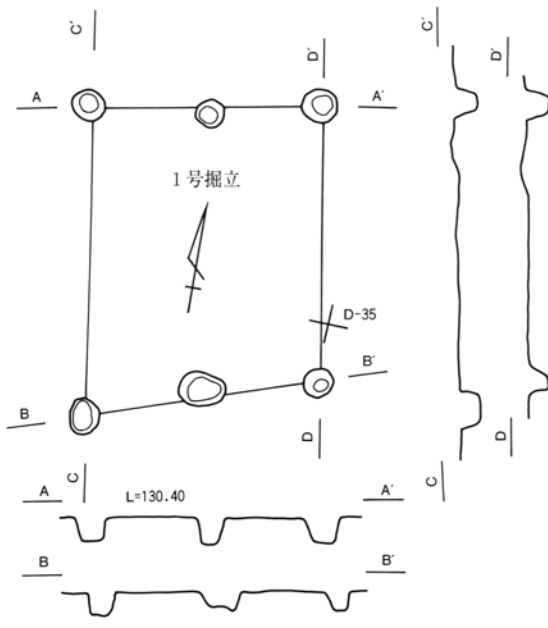


第5図 II区検出遺構



1 暗褐色土層 しまり悪く、砂質、B軽石混入。  
 2 暗褐色土層 水田耕作土に砂質、混じり粘性無し。

第6図 II区検出遺構



### 第3節 III区概要 (付図4)

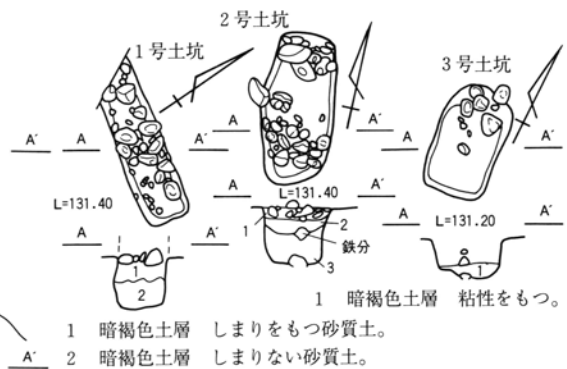
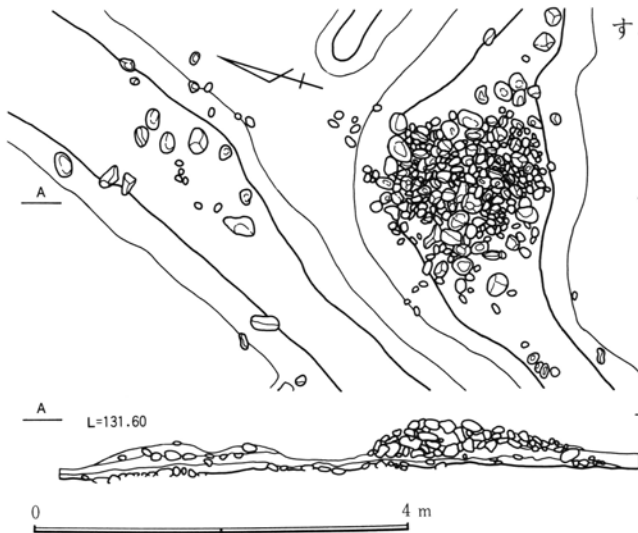
浅間山B軽石下水田が全面に広がり、B軽石以降の土坑が検出された。

1号土坑 3区西部に位置し、D47グリッドにある。規模は長軸1.6m、短軸60cm、深さ60cmを測る。

2号土坑 3区西部に位置し、D47グリッドにある。規模は長軸1.7m、短軸80cm、深さ70cmを測る。

3号土坑 3号西部に位置し、E47グリッドにある。規模は長軸1.2m、短軸70cm、深さ40cmを測る。水田は2区を東西に走っていたあぜと2区西端で合流した水路はそのままあぜの中央部に水路をもち2区同様3区内を東西走る。3区中央からやや東の部分で東西走る水路から北へ集石部で分岐する。

第7図 II区掘立柱建物跡



- 1 暗褐色土層 粘性をもつ。
- 1 暗褐色土層 しまりをもつ砂質土。
- 2 暗褐色土層 しまりない砂質土。
- 1 灰褐色土層 人頭大の礫多量に含む。
- 2 灰褐色土層 シルト質土。
- 3 暗褐色土層 鉄分凝集。

第8図 III区水口集石遺構



## 第4節 IV区概要（付図5）

全面にわたり浅間山B軽石下水田が検出された。中央部を東西走る水路がIV区でも確認されている。北と南を区画する水路はあぜの機能も備えている。事実水路を挟んだ北側では、西部では南側より高いが東部へ行くと南側より低くなる。つまり水路を挟んだ南北で東西の傾斜が異なっている。水路は水の供給とともにこのような傾斜の異なった部分をうまく水田化する意味をもっている。この結果並んだ水田面のレベルが異なり段々水田を形成することになる。水路を挟み北側西部では排水口が東へ行くと給水口になる。北側では給水口であるが、南では同じ部分を排水口に利用するなど広い範囲が水平でないこの地域の耕地利用は巧みである。現代でも本遺跡の周囲には水田が広がりこのような段々水田が今も続いている。大あぜを兼ねるこの水路は他の区と同様あぜの部分には石が積まれ補強材としての機能と給排水口にこの石が使われ水を扱う道具としても機能していた。

IV区の西北部は高台となり、このうえには道路建設まで現代の家があったため表土掘削の段階よりコンクリート等のごみが埋まっており広い部分で攪乱を受けていた。浅間山B軽石下水田はこの高台の際まで水田耕作を行っていた。

## 第5節 V区概要（付図7・8・9）

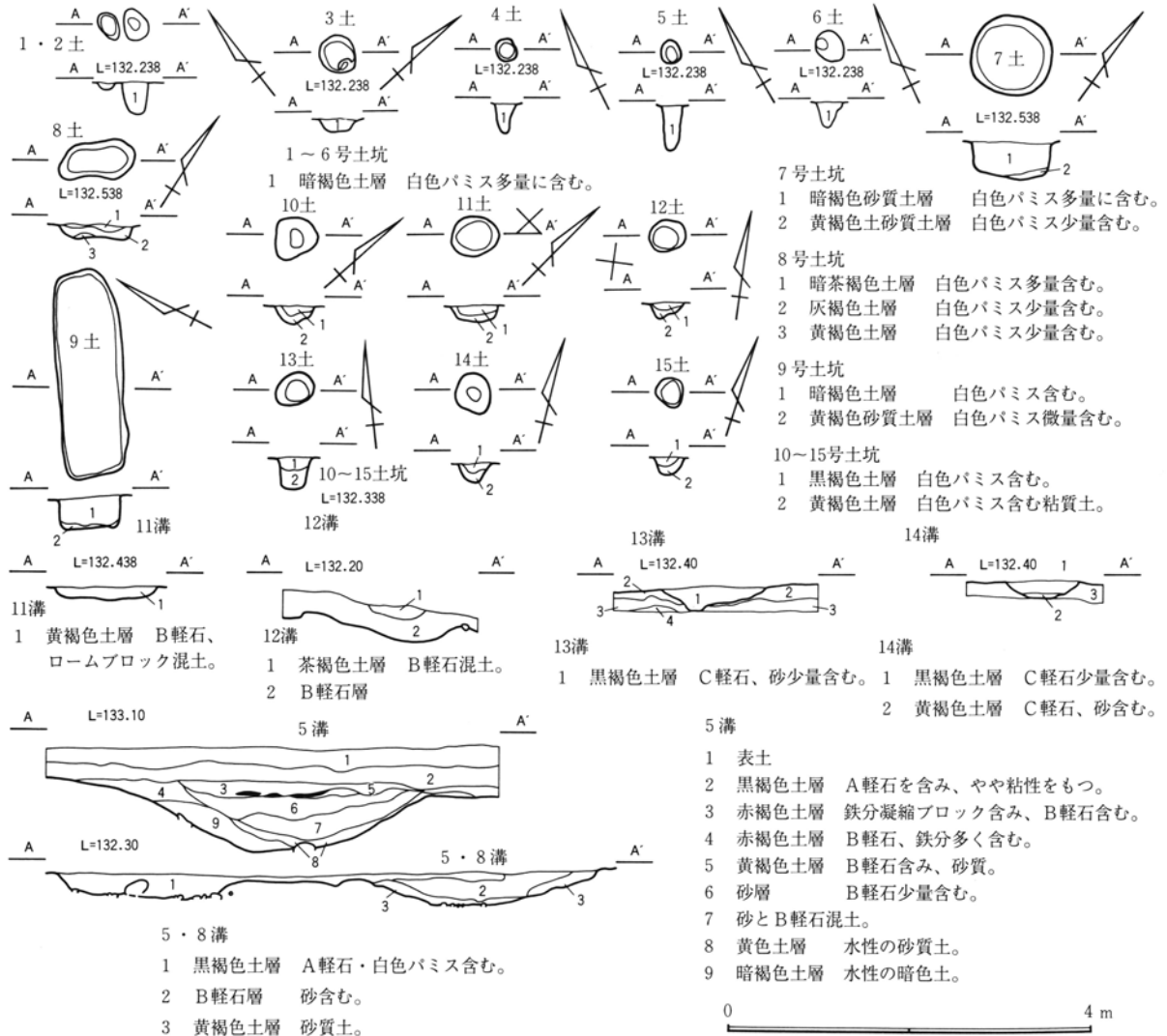
V区は南北に走る旧宮街道（後段で触れる）を挟みA・Bの2ブロックに分けられる。V-B区では調査区全面にわたり浅間山B軽石下水田跡が確認されている。IV区に引き続き北部は高台部にあり、水田面は明確ではないが南面は傾斜地に明瞭な水田跡が確認された。西側から東に向かい傾斜をし、水口も南北方向のあぜに切ってある。またII区から東西に走っていた水路・あぜはV区内東側において北高台5号溝から取水する事が判明した。IV区は同様東西走る水路を挟み南北では大まかな傾斜は西から東へ傾くが南側では溝を境として逆になっている。東西の大あぜに水を供給する5号溝は高台部をVI区から継続して蛇行する。

- 1・2号土坑 V-A区東部に位置し、N・O68グリッドにある。規模は、1・2号とも径約30cm、深さ1号約10cm、2号約40cmを測る。
- 3号土坑 V-A東部に位置し、N68グリッドにある。規模は径約40cm、深さ約18cmを測る。
- 4号土坑 V-A区北東部に位置し、N68グリッドにある。規模は径24cm、深さ約36cmを測る。
- 5号土坑 V-A区北東部に位置し、N68グリッドにある。規模は径20cm、深さ50cmを測る。
- 6号土坑 V-A区北東部に位置し、O68グリッドにある。規模は径20cm、深さ18cmを測る。
- 7号土坑 V-A区中央に位置し、L72グリッドにある。規模は径約1m、深さ42cmを測る。
- 8号土坑 V-A区中央に位置し、KL72グリッドにある。規模は長軸92cm、短軸36cm、深さ16cmを測る。
- 9号土坑 V-A区北部に位置し、M71・72グリッドにある。規模は長軸2.3m、短軸68cm、深さ36cmを測る。
- 10号土坑 V-B区北部に位置し、K67グリッドにある。規模は径40cm、深さ24cmを測る。
- 11号土坑 V-B区北部に位置し、K67グリッドにある。規模は径36cm、深さ18cmを測る。
- 12号土坑 V-B区北部に位置し、K67グリッドにある。規模は径45cm、深さ20cmを測る。
- 13号土坑 V-B区北部に位置し、K66グリッドにある。規模は径40cm、深さ38cmを測る。
- 14号土坑 V-B区北部に位置し、K66グリッドにある。規模は径38cm、深さ20cmを測る。
- 15号土坑 V-B区北部に位置し、K66・67グリッドにある。規模は径36cm、深さ20cmを測る。

### 溝

- 1号溝 V-A区にあり、北西部を北東に向かい走る。幅70cm～80cmを測り、深さ70cmを測る。

第2章 検出された遺構



第9図 V区検出遺構

2号溝 V-A区にあり、1号溝とほぼ並行するように走る。幅1m深さ45cmを測る。

5号溝 V-A区南部を蛇行しB区へ続いて検出されている。時期は浅間山B軽石に覆われた水田に伴う水路である。覆土はほとんど浅間山B軽石あるいは浅間山B軽石混土である。

第6節 VI区概要 (付図10)

当区は大部分が高台部に位置し、浅間山B軽石下水田と掘立柱建物が検出された。中央部に走る蛇行した水路はV区へ続く5号溝へつながる水路である。掘立柱建物は6棟が検出されそれぞれの主軸方位は企画が明確である。後述する宮街道に伴う施設等の可能性がある。この6棟の掘立柱建物は後段で詳述するので概略を述べると規模は最大で13mを越え、主軸方位は1号住居跡の短軸、1号井戸を含め西に30°触れている。恐らく2号～7号掘立柱建物と1号井戸は同一時期に存在したものと想定ができる。また本区にのみこのような掘立柱建物群が検出され同じような台地上のV区からは全く検出されていない。

1号住居跡

本遺跡の中で唯一の居住施設である。VI区中央部に位置し、H・I87・88グリッドにある。規模は長辺5.4m、短辺3.2m、壁高45cmを測る。床面はほぼ平坦をなし、長方形の住居跡と考えられるが竈等の施設は検出され

ていない。ほぼ中央部に小穴が検出された。規模は径25cm、深さ45cmを測る。また東壁際にも小穴が検出された。規模は径56cm、深さ40cmを測る。また東壁を除く3壁に数センチの周溝が巡る。出土遺物は陶器、刀子等が検出され時期は中世と考えられる。これらのことから1号住居跡は時期的には2号～7号掘立柱建物の時期に並行するものと考えられる。1号掘立柱建物を除く他の2号以下の掘立柱建物はほぼ同一主軸をもち特に2号・4号掘立柱建物は大型の建物である。

1号土坑 VI区西部に位置し、H93グリッドにある。規模は径76cm、深さ16cmを測る。

2号土坑 VI区北部に位置し、N87・88グリッドにある。規模は径90cm、深さ20cmを測る。

3号土坑 VI区中央部に位置し、H85グリッドにある。規模は長軸約1.7m、短軸1m、深さ10cmを測る。

4号土坑 VI区中央部に位置し、G・H84・85グリッドにある。規模は1.4m、短軸60cm、深さ20cmを測る。

5号土坑 VI区中央部に位置し、I82・83グリッドにある。規模は径1m、深さ18cmを測る。

6号土坑 VI区東南部に位置し、F81グリッドにある。規模は径75cm、深さ20cmを測る。

7号土坑 VI区東南部に位置し、D79グリッドにある。形態は方形を呈し、一辺54cm、深さ18cmを測る。

#### 1号井戸

VI区中央部に位置し、I・J81・82グリッドにある。位置的に6棟の掘立柱建物に伴う配置と考えられる。井戸は周囲に小穴が検出され上屋があったものと考えられる。周囲の小穴の規模は径20cm～40cmを測り、深さは18cm～深いもので24cmを測る。北東部の小穴は検出されなかった。上屋構造は1間、2間、柱間はほぼ2m前後を測る。井戸の規模は径1.4mを測り、深さ1.65mを測る。

#### 1号掘立柱建物

VI区南西部に位置し、F・G88・89グリッドにある。中央部にある掘立柱建物群との関係は無いものと考えられる。2間×2間の建物で南北の柱間は1.8m、東西の柱間は1.2m～1.6mを測る。小穴の規模は径24cm～36cmを測り、深さ20cm～深いもので54cmを測る。柱間の南北軸がほぼ一尺間であること、また他の2号以下の掘立柱建物群との軸のずれなどから時期的には1号掘立柱建物は新しい時期のものであると考えられる。

#### 2号掘立柱建物

VI区南部に位置し、E～G84～87グリッドにある。南西の一部は調査区域外にかかっているため確認されていない。規模は東西軸13.4m、南北軸7mを測る大型の建物である。本体は二間×五間で、四周にひさしがあるものと想定できる。

#### 3号掘立柱建物

VI区南部に位置し、H・I86・87グリッドにある。構造は二間×二間で規模は南北長3.4m、東西長ほぼ4m～4.2mを測り、やや北側が開いている。小穴の規模は径30cm～40cm、深さはほぼ24cm～26cmを測る。

#### 4号掘立柱建物

VI区南部に位置し、F～H82～84グリッドにある。構造は二間×五間で規模は南北長13m、東西長6mを測る。四周にひさしが巡るものである。小穴は径35cm～45cm、深さ24cm～45cmを測る。

#### 5号掘立柱建物

VI区南部に位置し、G～I81～83グリッドにある。構造は二間×三間で北側にひさしが巡るものと考えられる。規模は南北長8.4m、東西長5.2m～5.8mを測り、北側が開いている。小穴の規模は36cm～45cmをはかり、深さ10cm～50cmを測る。

#### 6号掘立柱建物

VI区南部に位置し、G・H81・82グリッドにある。構造は二間×二間で規模は南北長4.5m、東西長4.5mを測

第2章 検出された遺構

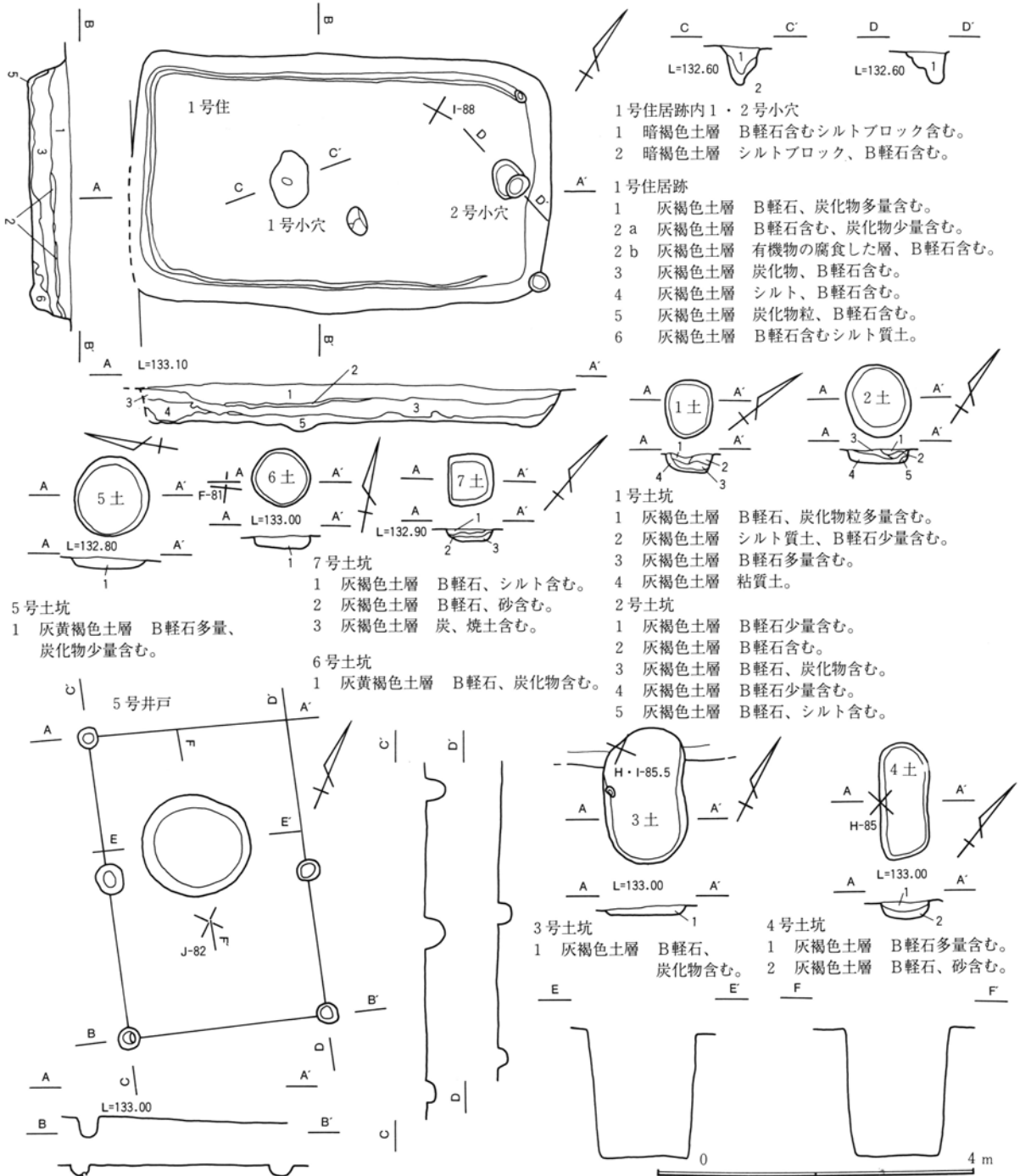
るがややゆがんでいる。小穴の規模はほぼ径24cm～25cmで深さ10cm～60cmを測る。

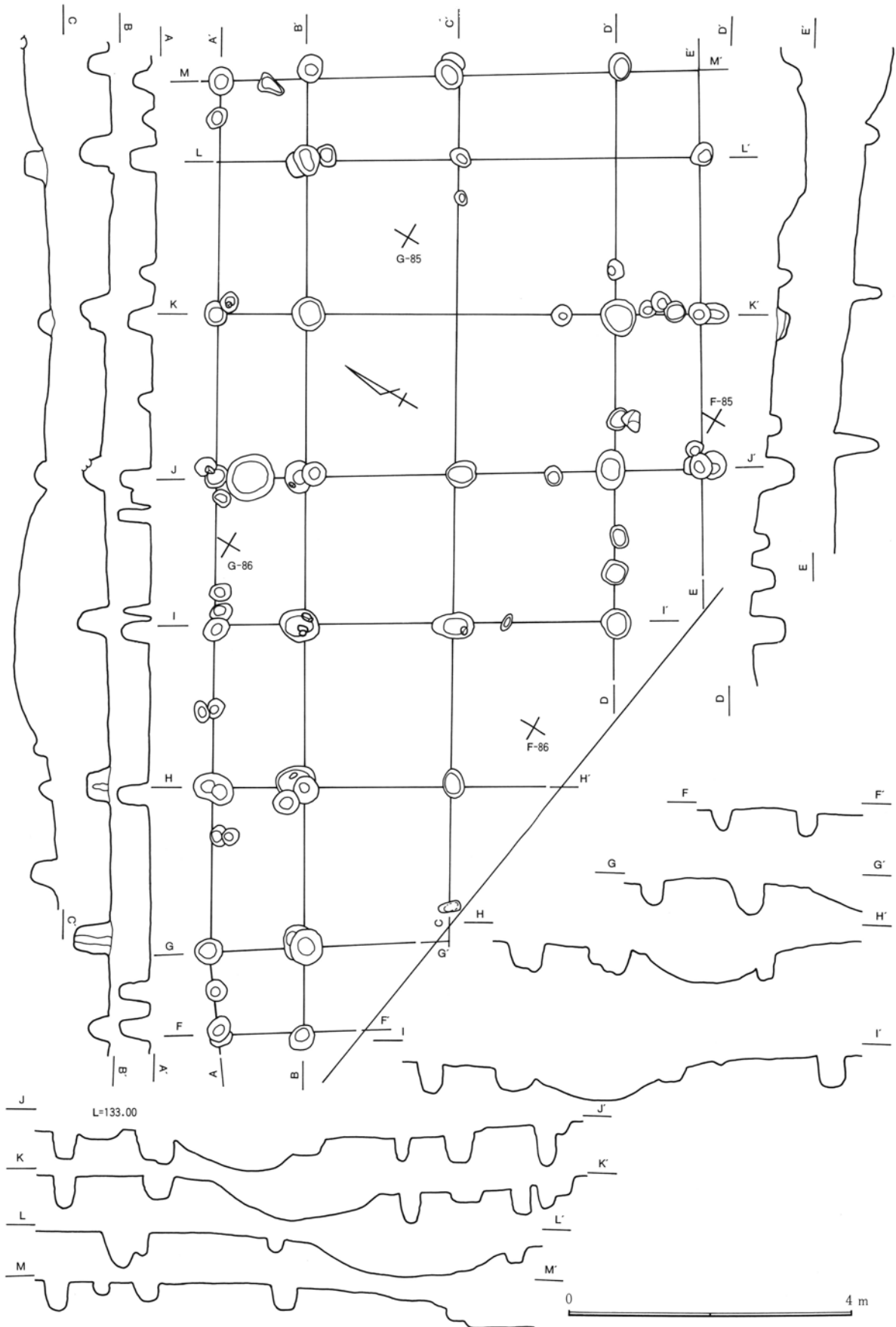
7号掘立柱建物

VI区南部に位置し、E・F80・81グリッドにある。構造は二間×二間で、東・南にひさしをもつと考えられる。規模は南北長5.4m、東西長5.6m～6mを測り、北側が広くなる。小穴の規模は径30cm～35cmで、深さ20cm～60cmを測る。

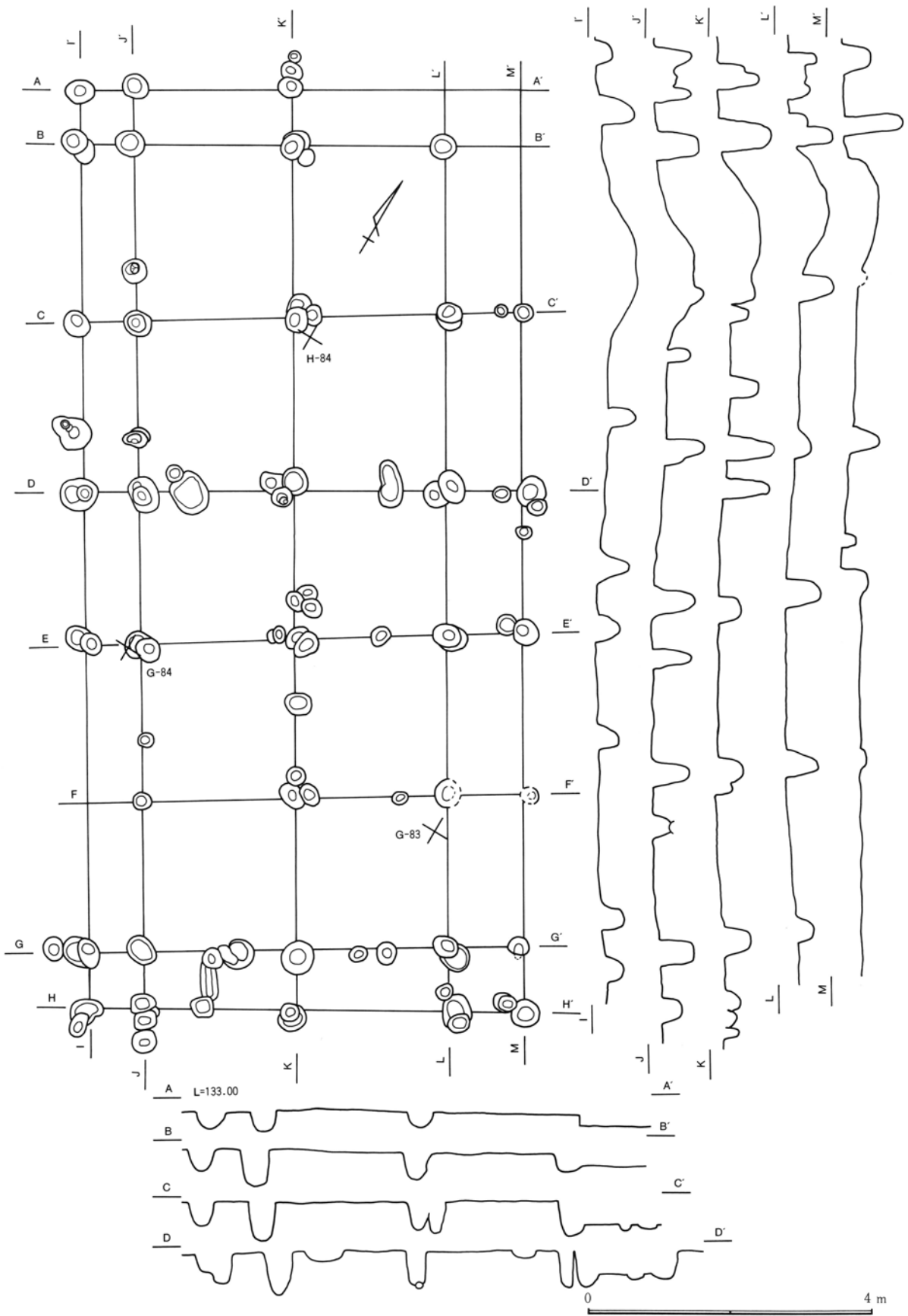
溝

VI区の南東部に蛇行する5号溝はV区の5号溝と同一のものであり、5号に付属するものとして6号・8号溝がある。5号溝はVI区からV区へと続き、V区東部で北へ延び北東部で東調査区域外へ延びる。

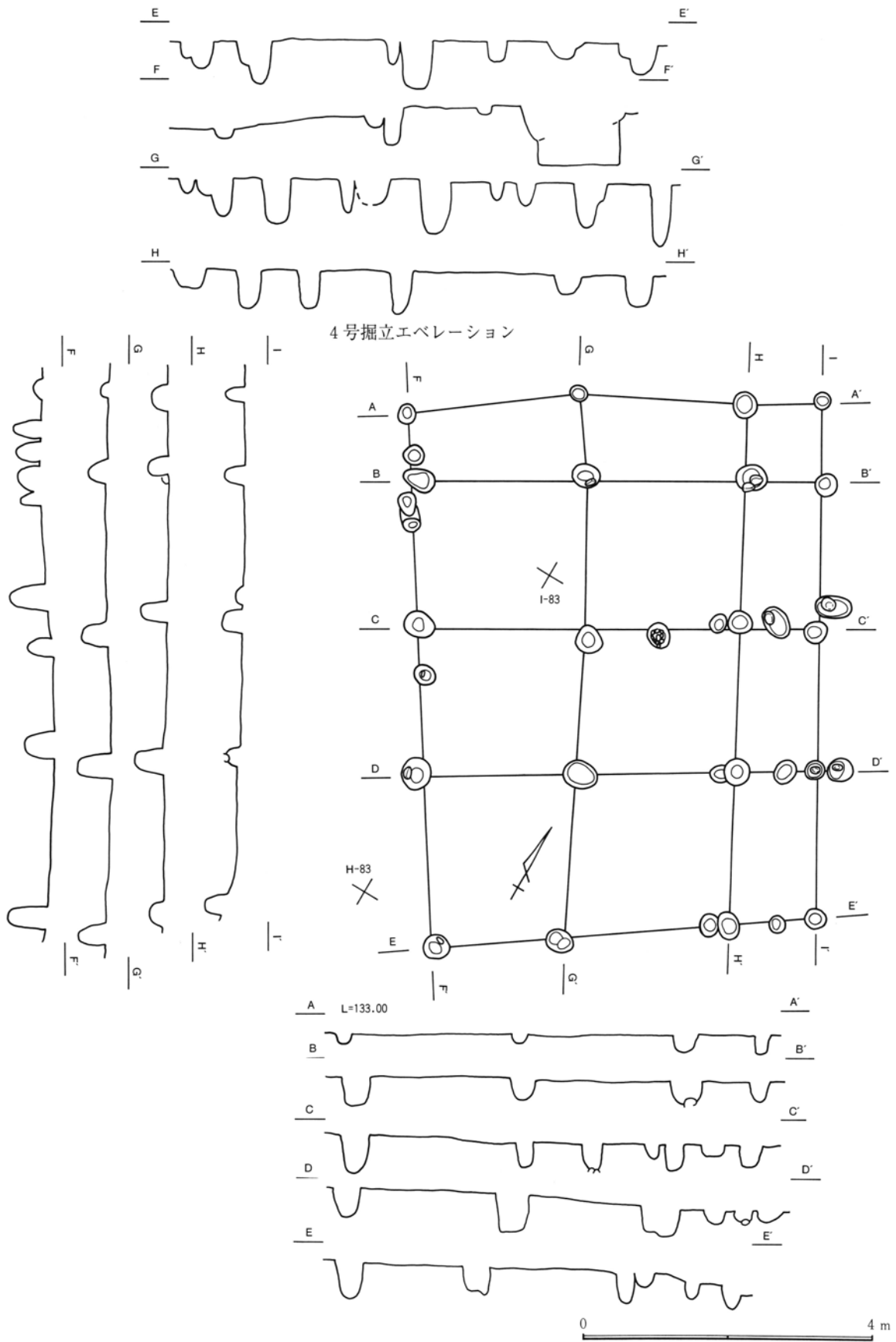




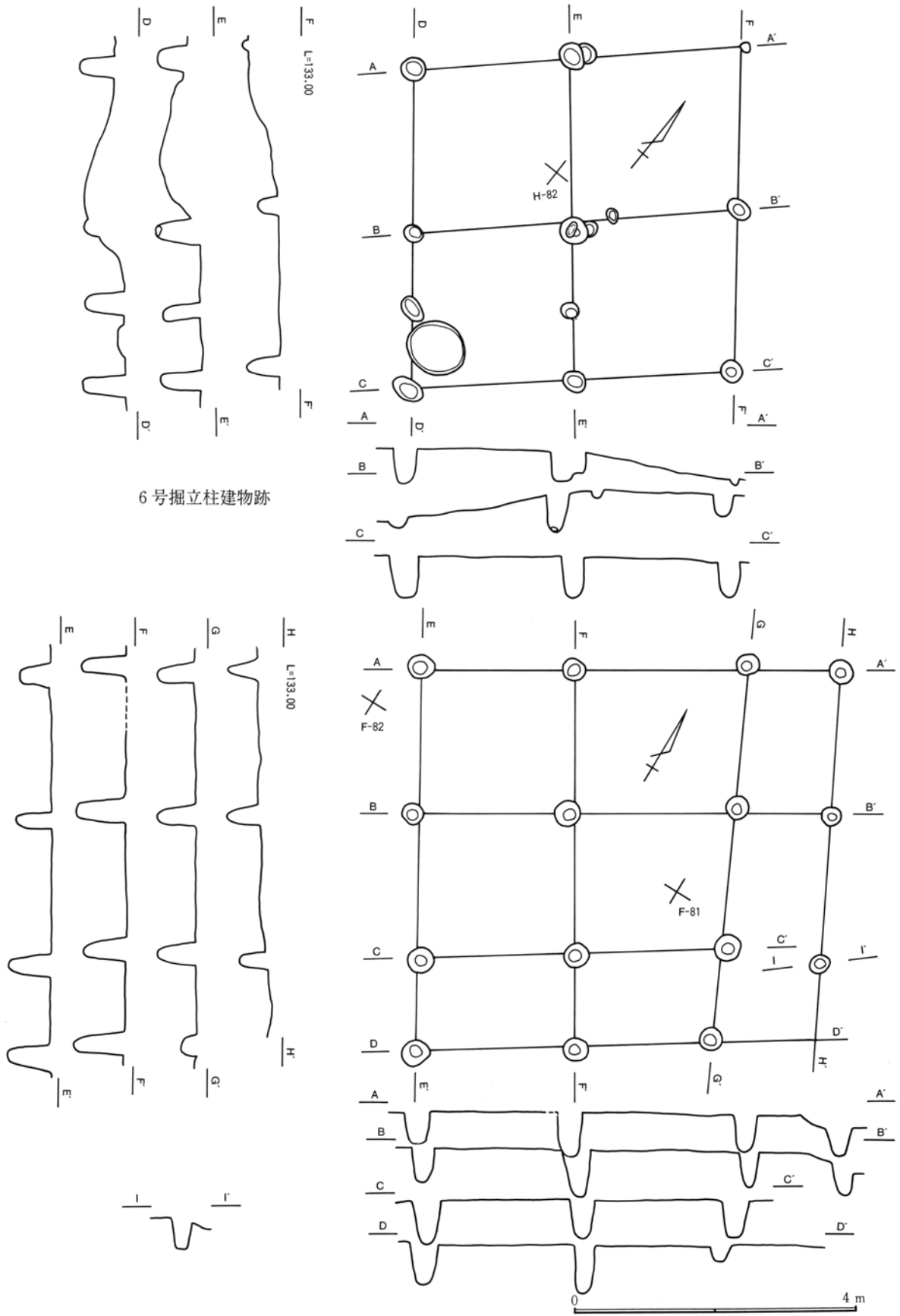
第11图 VI区2号掘立柱建物跡



第12図 VI区4号掘立柱建物跡



第13図 VI区4・5号掘立柱建物跡

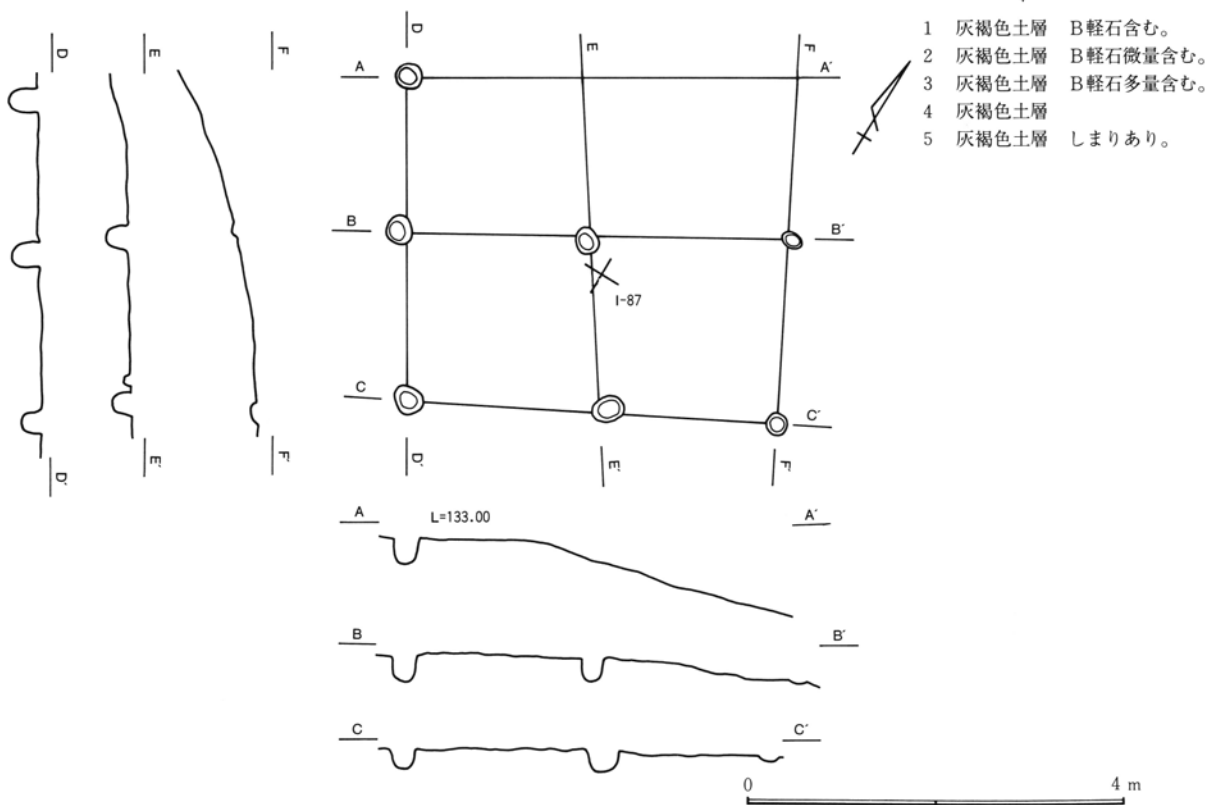
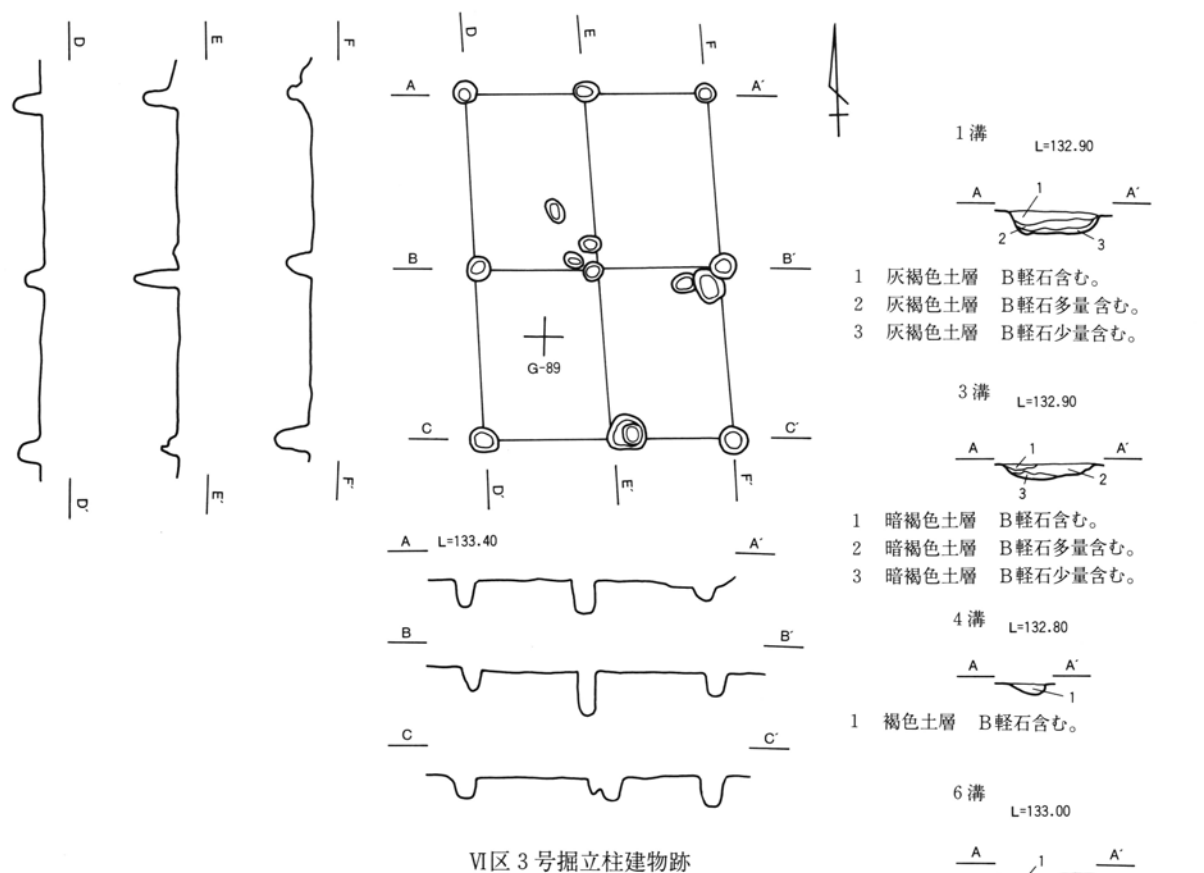


6号掘立柱建物跡

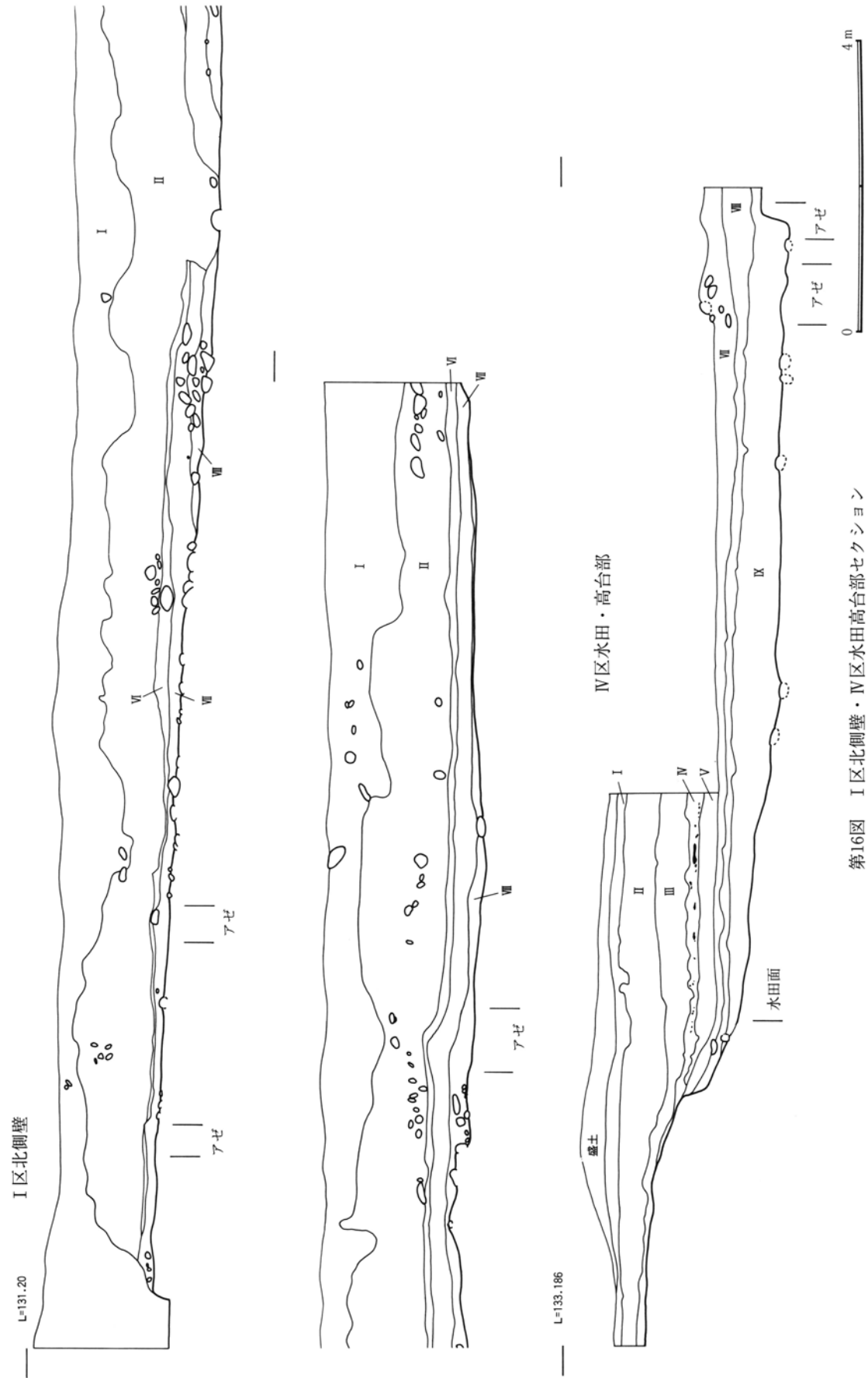
第14図 VI区6・7号掘立柱建物跡



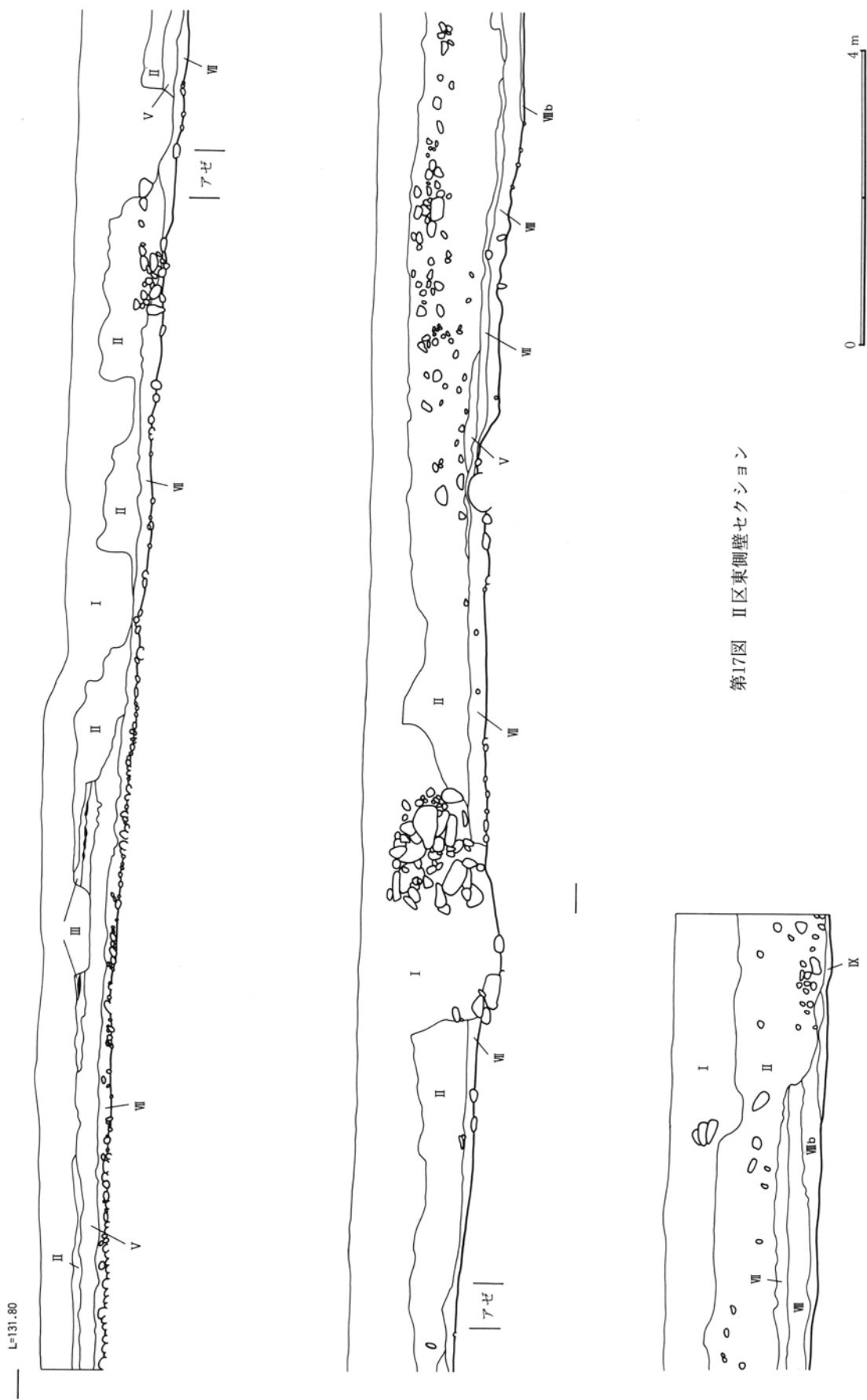
第6節 VI区概要 (付図10)



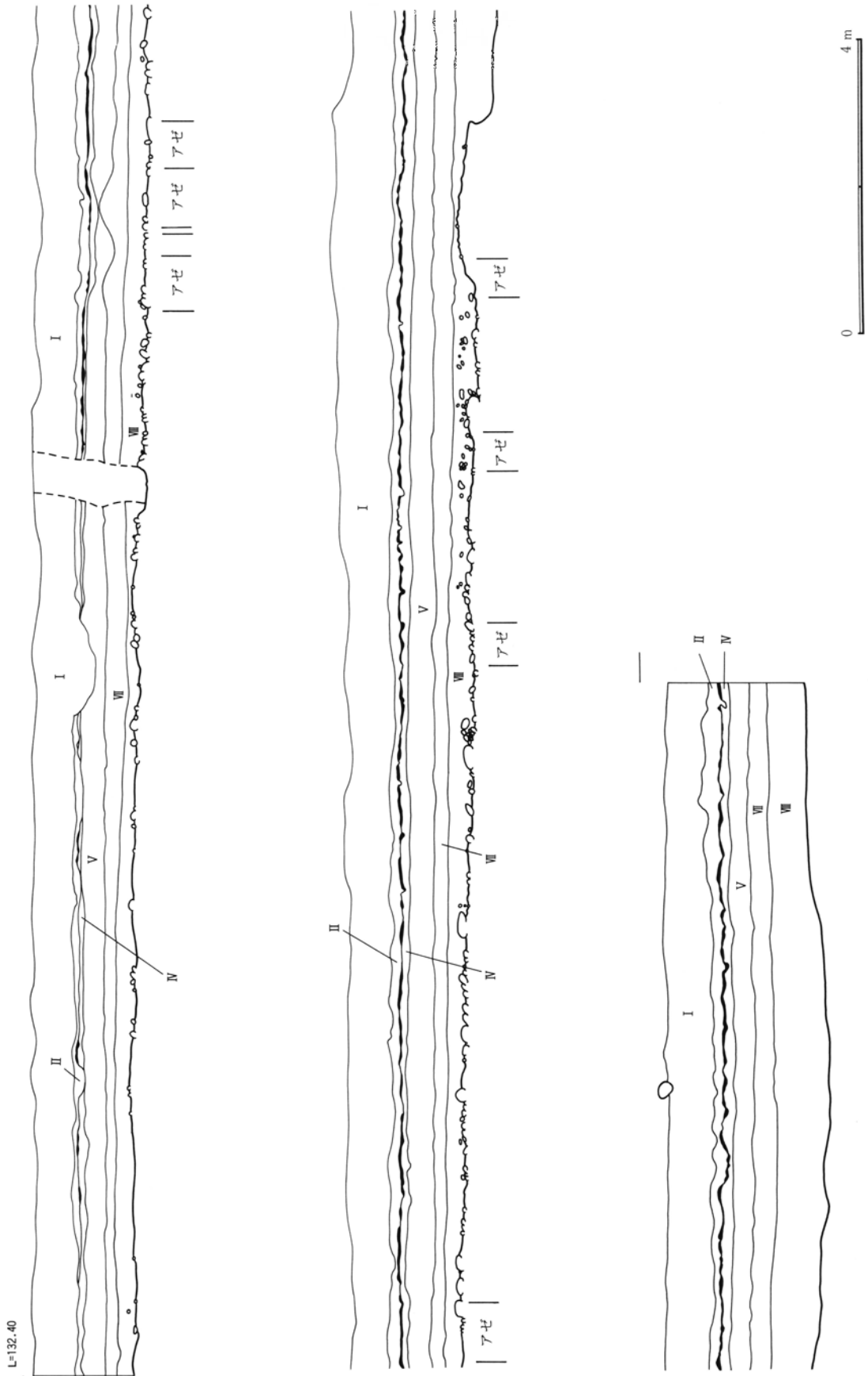
第15図 VI区1・3号掘立柱建物跡



第16図 I区北側壁・IV区水田高台部セクション



第17図 II区東側壁セクション



第18図 III区西側壁セクション



第19図 III区水田・IV区北側壁セクション

## 基本土層

- I 灰色土層 粒子が細かく、若干の粘性あり。
- II 暗褐色土層 大粒（径3～10mm）のパミスを多量に含み、黄色スコリアを含む。浅間山A軽石を少量含む。  
粘性なし。
- III 暗褐色砂質土層（径5～10mm）のパミスを含む。
- IV 黄褐色土細砂質土層 追分火砕流を含む。
- V 浅間山B軽石
- V' 浅間山B軽石に伴う黒紫色アッシュ
- VI 黄褐色土層 砂質土。
- VII 明褐色シルト質土 鉄分を含む。粘性強い。（水田耕作土）
- VIII 黄褐色シルト質土 鉄分を含み、粘性強い。（水田耕作土）
- IX 黄褐色土 細砂質、粘性無し。（砂層）

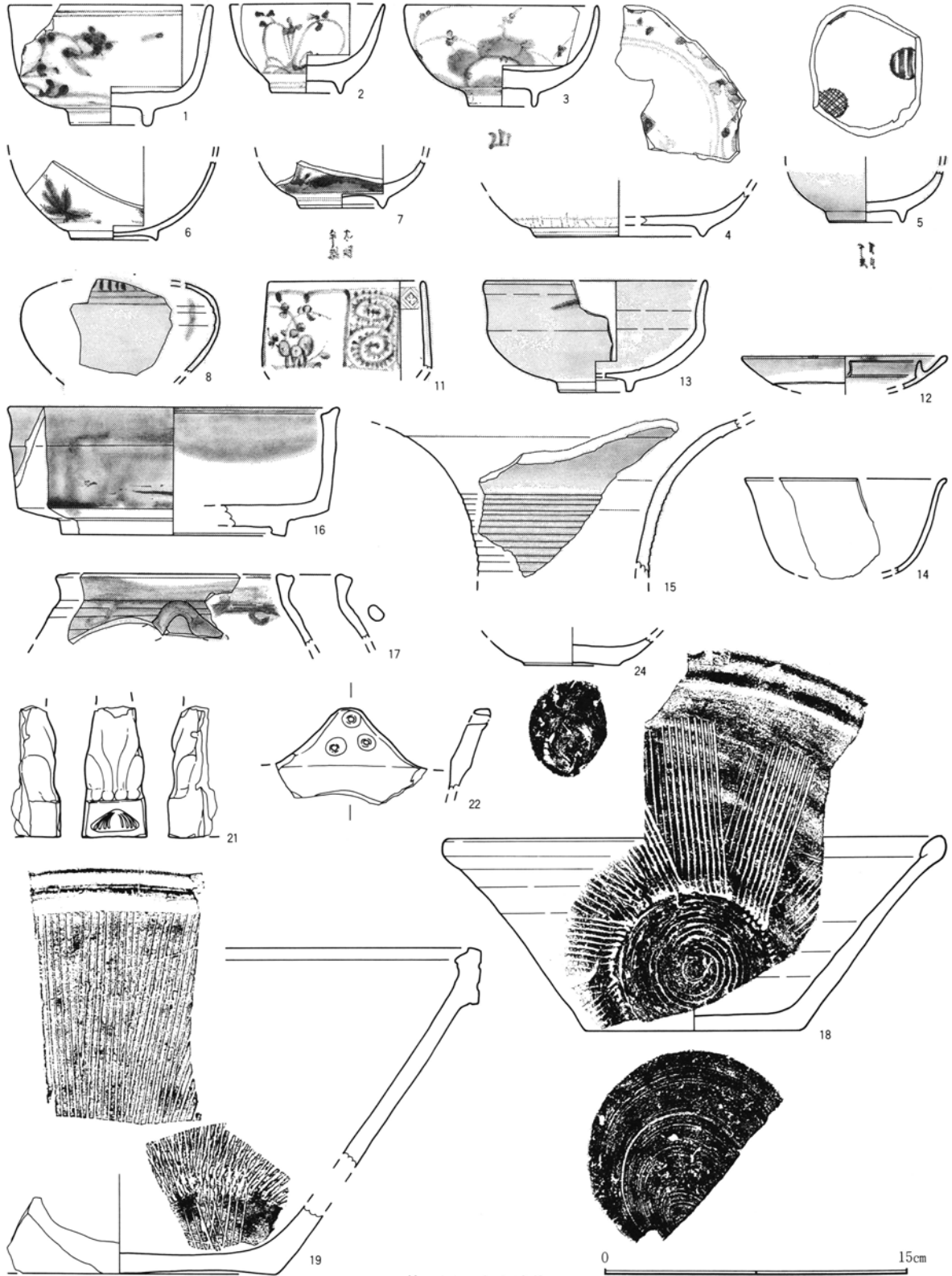
当遺跡の基本土層は上記のとうりであるが後段の古環境研究所の土壤サンプルを取り上げる段階には上記の基本8層を更に細かく細分してある。これは当地域がかなりの回数の洪水を受けていると思われるために細分を必要とした。

以下細分の分類を示す。

- |      |                                |          |                            |
|------|--------------------------------|----------|----------------------------|
| I    | 灰褐色土層 粒子細かく、若干の粘性あり。           | II l     | にぶい黄褐色土層 礫含む。              |
| I a  | 灰色土層 砂混じる。                     | II m     | 灰褐色土層 礫多量に含む。              |
| I a' | 灰褐色土層 砂混じる。                    | II'      | 褐色土層 IIとIIIの混土。礫混じる。       |
| I b  | 灰褐色砂質土層 砂礫含む。                  | III      | 暗褐色砂質土層 パミス含む。             |
| I b' | 褐色土層 砂礫含む。                     | III'     | IIIに若干のIIを含み粘性あり。          |
| I c  | 褐色土層 砂礫混じる。                    | IV       | 黄褐色細砂質土層                   |
| I c' | 灰褐色土層 砂礫混じる。                   | V        | 浅間山B軽石                     |
| I d  | 灰色土層 砂礫混じる。                    | V a      | 浅間山B軽石に伴う黒紫色アッシュ。          |
| I d' | 褐色土層 砂礫混じる。                    | VI       | 黄褐色砂質土層                    |
| I e  | 灰褐色土層                          | VI'      | 黄褐色土層 シルト質土。               |
| I'   | IとIIの混土。                       | VII      | 黄灰色砂質土層 鉄分を含む。粘性強い。        |
| II   | 褐色土層 パミス多量に含み、黄色スコリア、浅間山A軽石含む。 | VII a    | 灰色粘質土層 鉄分を含む。粘性強い。         |
| II a | 暗褐色土層 浅間山A軽石、砂礫、砂質土含む。         | VII c    | 褐灰色土層 鉄分を含む。粘性強い。          |
| II b | 暗灰褐色土層 浅間山A軽石、砂礫少量含む。          | VII      | 黄褐色シルト質土層 粘性強い。            |
| II c | 褐色土層 浅間山A軽石、砂礫少量含む。シルト質土。      | VIII a   | 灰褐色土層 軽石粒微量に含む。            |
| II d | 褐色土層 浅間山A軽石、砂礫少量含む。砂質土。        | VIII a'  | 黒褐色土層 褐色粒微量に含む。シルト質、しまりあり。 |
| II e | 暗灰色土層 浅間山A軽石、砂礫少量含む。砂質土。       | VIII a'' | 暗灰褐色土層 軽石粒微量に含む。砂質土、しまりなし。 |
| II f | 褐色土層 浅間山A軽石、砂礫少量含む。砂質土。        | VIII b   | 灰褐色土層 軽石粒微量に含む。シルト質。礫混じる。  |
| II g | 暗灰色土層 砂質土。                     | VIII b'  | にぶい黄褐色土層 軽石粒微量に含む。シルト質。    |
| II h | 褐色土層 浅間山A軽石、砂礫含む。砂質土とシルト質土混じる。 | VIII b'' | 黒褐色土層 シルト質。しまりあり。          |
| II i | にぶい褐色土層 浅間山A軽石、砂礫含む。           | VIII c   | 黄褐色土層 シルト質。しまりあり。          |
| II j | 褐色土層 浅間山A軽石、砂礫含む。              | VIII c'  | 黄褐色土層 シルト質。しまりあり。礫混じる。     |
| II k | 黄褐色土層 シルト質土。                   | VIII c'' | 黒褐色土層 シルト質。しまりあり。          |
|      |                                | VIII d   | 灰褐色土層 シルト質。しまり弱い。          |
|      |                                | VIII e   | 暗灰褐色土層砂質土。シルト混じる。          |

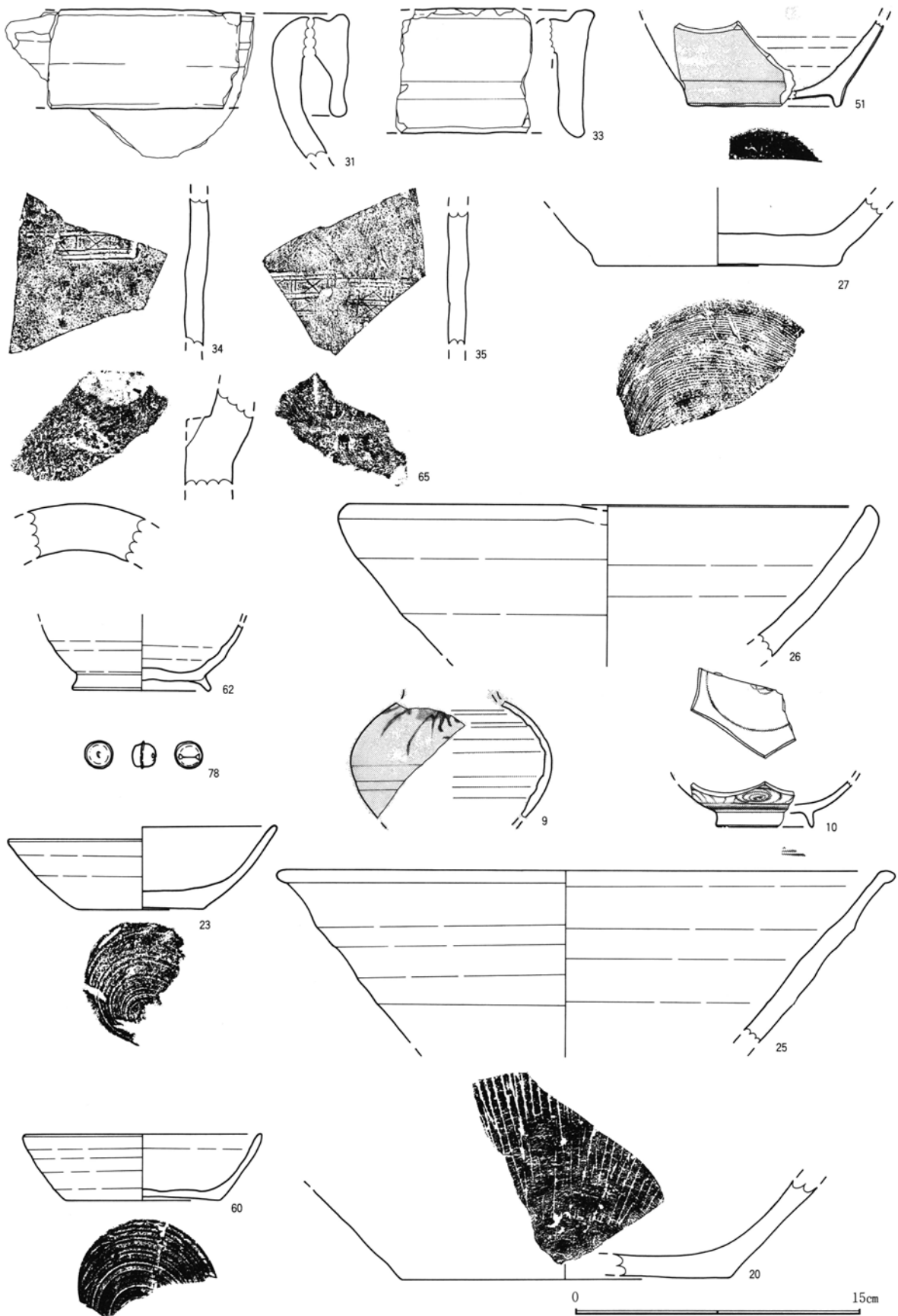
### 第3章 検出された遺物

#### 第1節 出土遺物



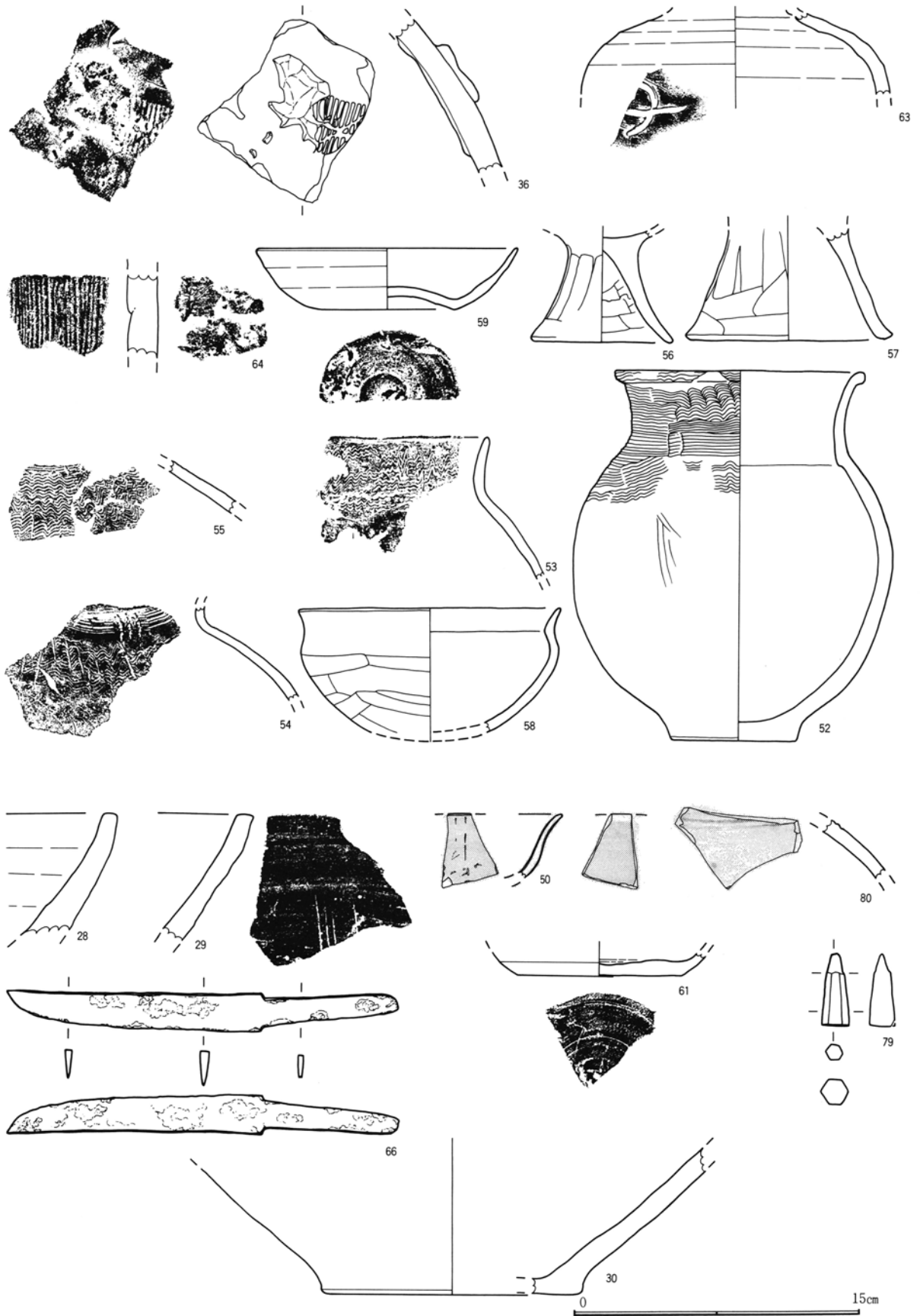
第20図 出土遺物

第3章 検出された遺物



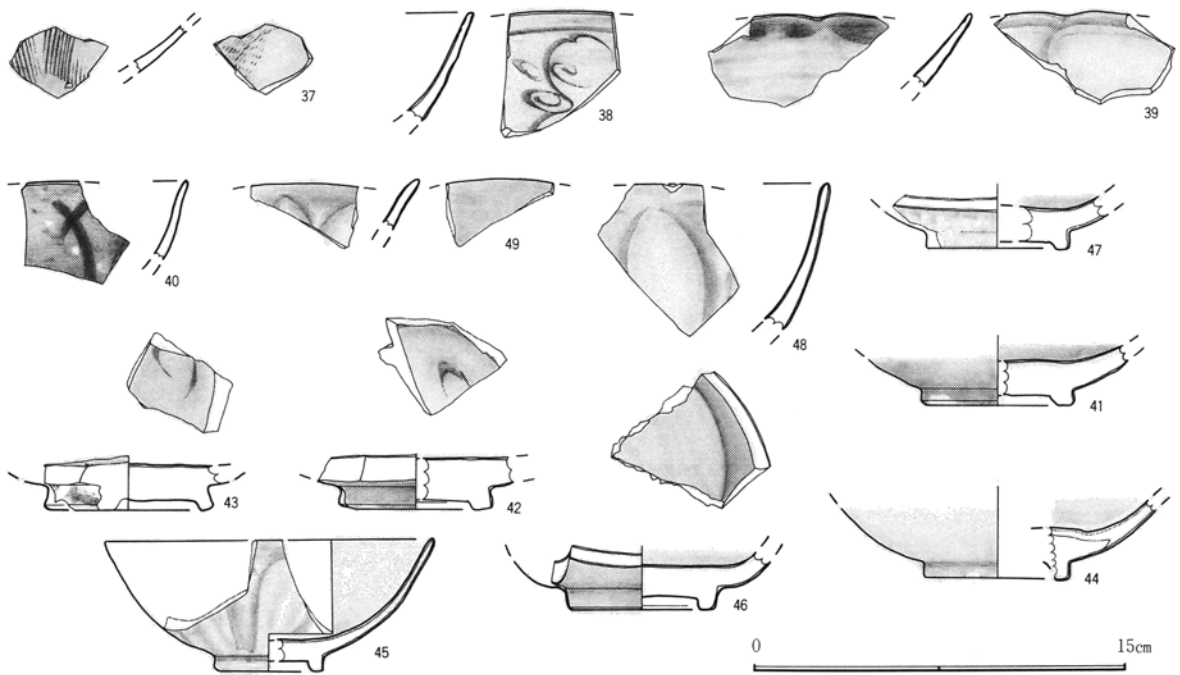
第21図 出土遺物



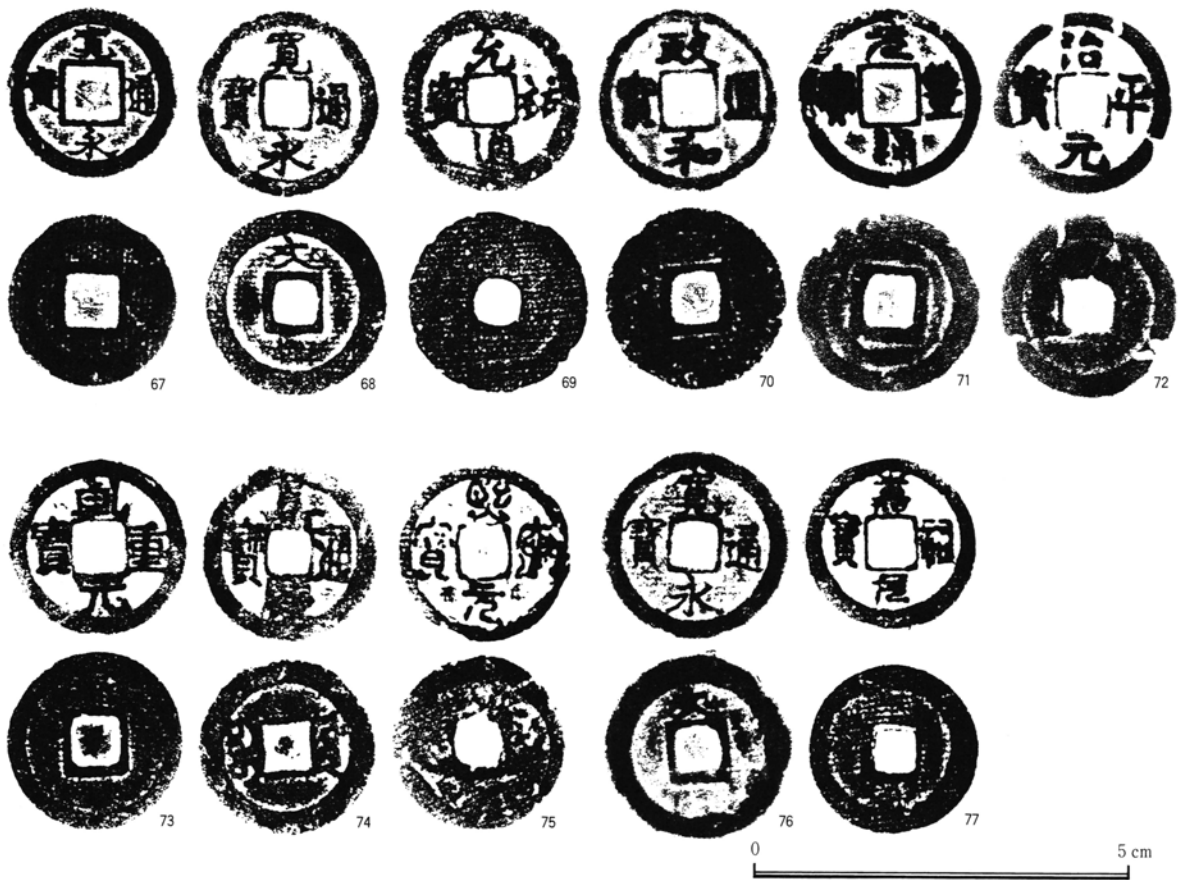


第22図 出土遺物

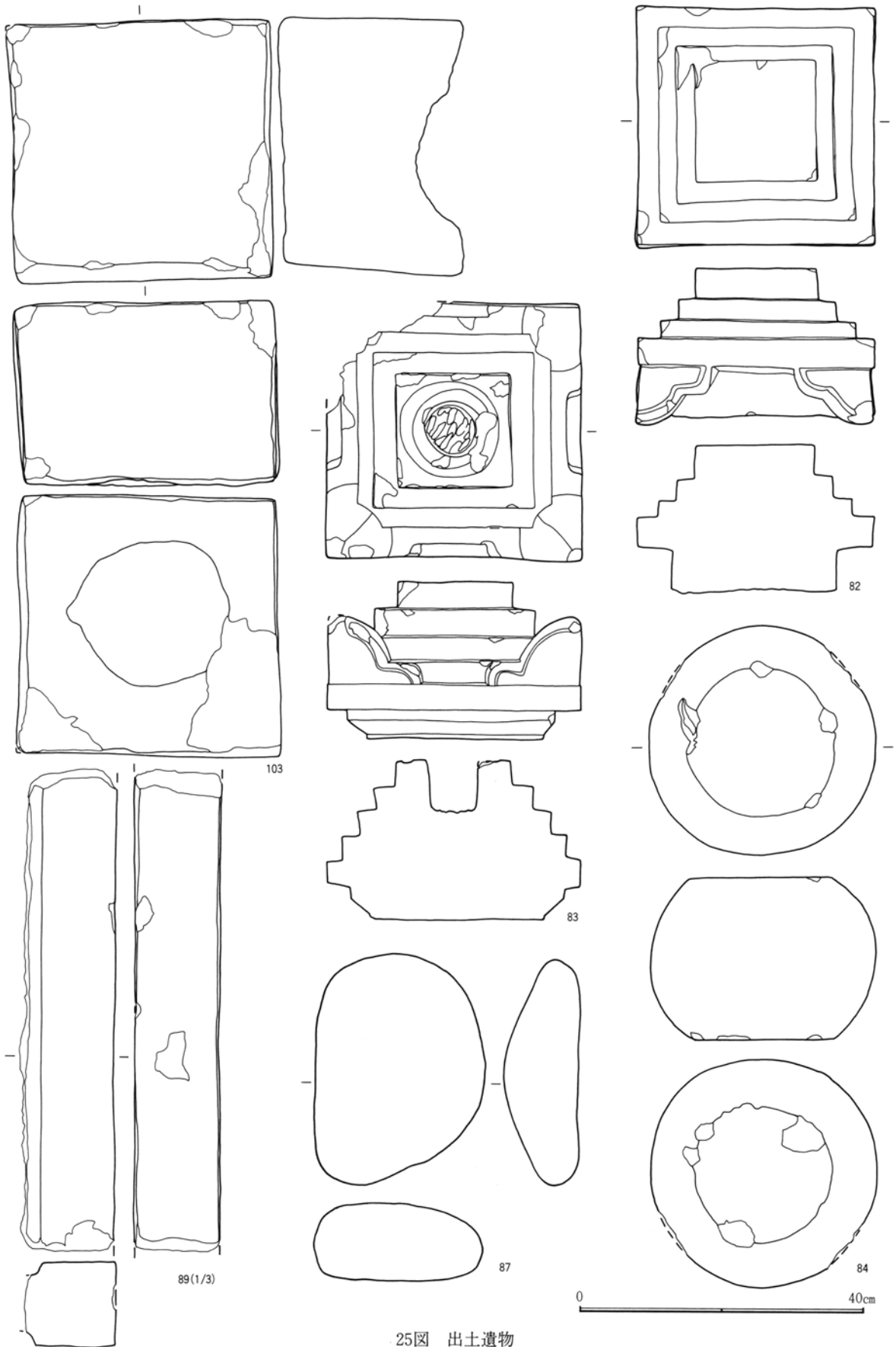
第3章 検出された遺物



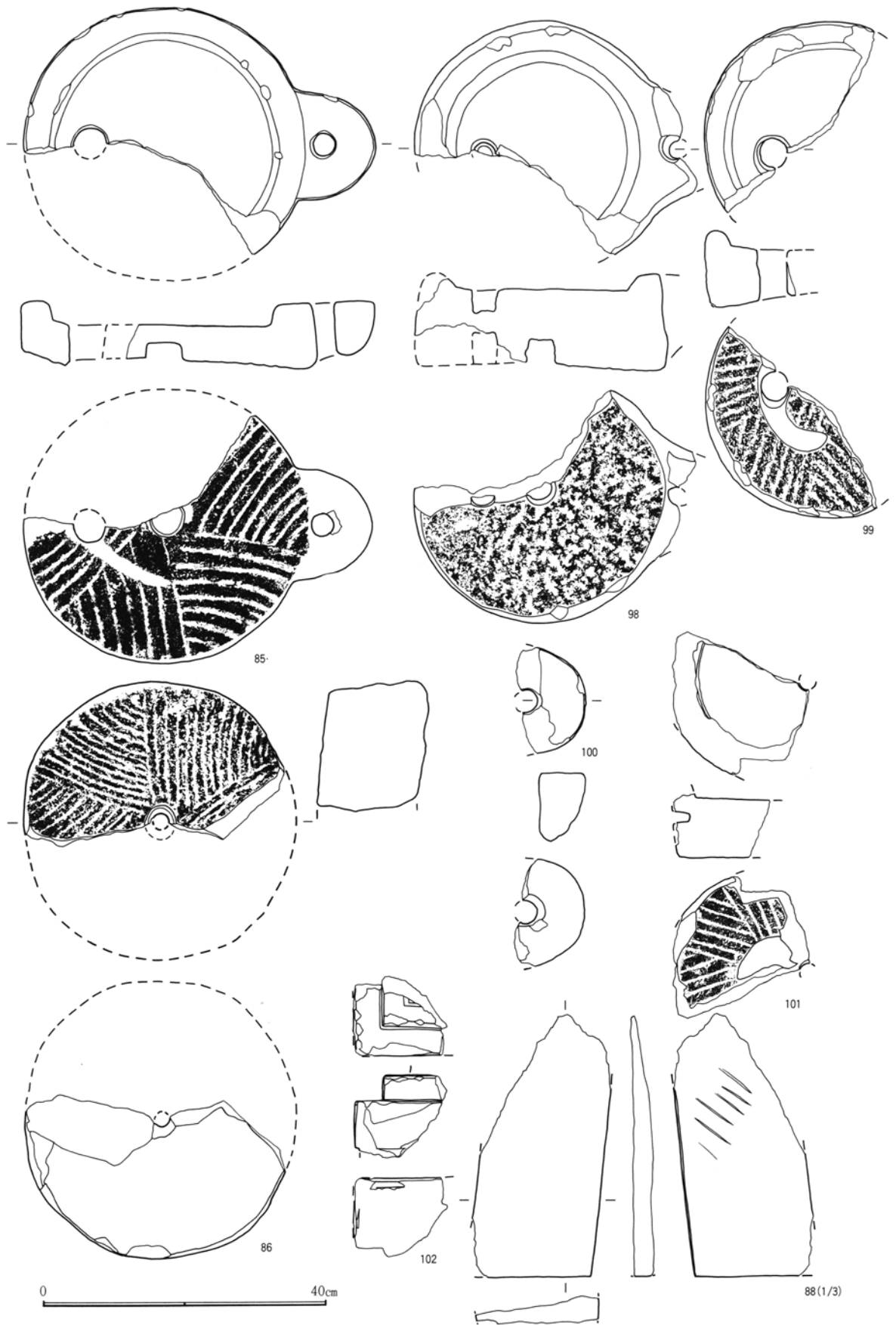
第23図 出土遺物 中国陶磁器



24図 出土銭



25図 出土遺物



26図 出土遺物

## 第4章 中宿在家遺跡科学分析

### 第1節 自然科学分析（1）

株式会社 古環境研究所

#### I. 中宿在家遺跡の地質とテフラ

##### 1. はじめに

中宿在家遺跡の発掘調査では、棚田状の水田跡が検出された。そこで基本土層断面を対象に地質調査を行い、地質層序についての記載を行うことになった。調査分析の対象となった地点は、第1地点（1区J-20グリッド）、第3地点（2区北壁G-35グリッド）、第4地点（2区南壁B-34グリッド）の3地点である。

##### 2. 地質層序

###### （1）1区J-20グリッド

1区J-20グリッドの地質層序を図1に示す。ここでは下位より暗灰色粘質土（層厚2cm以上）、黄色砂層（層厚2cm）、暗灰色シルト層（層厚0.2cm）、黄色シルト層（層厚0.2cm）、成層した黄褐色砂層（層厚6cm）、黄灰色シルト層（層厚0.8cm）、成層したテフラ層、亜円礫を含む葉理の発達した暗灰色砂層（層厚86cm、礫の最大径178mm）、褐色砂質土（層厚25cm）、黒褐色砂質土（層厚16cm）の連続が認められる。発掘調査では、これらの土層のうち、最下位の砂層直下から水田跡が検出されている。

成層したテフラ層は下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色粗粒スコリア層（層厚0.8cm、スコリアの最大径18mm）、黄色細粒軽石層（層厚0.7cm）、暗灰色細粒軽石層（層厚4cm、軽石の最大径3mm）、桃色がかった褐色細粒軽石層（層厚1cm、軽石の最大径5mm）、灰色細粒火山灰層（層厚0.4cm）、黄色細粒軽石層（層厚2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）、黄色細粒軽石層（層厚4cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、赤褐色粗粒火山灰混じり黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.8cm）、褐色粗粒火山灰層（層厚1cm）、橙色がかった褐色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、桃灰色細粒火山灰層（層厚2cm）、桃色細粒火山灰層（層厚2cm）の連続から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108（天仁元年）に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B, 新井, 1979）に同定される。

###### （2）2区北壁G-35グリッド

本地点の地質層序を図2に示す。ここでは下位より灰色がかった暗褐色土（層厚3cm以上）、成層したテフラ層、黄色砂層（層厚2cm）、黄褐色砂質土（層厚5cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.8cm）、黄灰色砂層（層厚0.8cm）、下位の成層したテフラ層に由来する円磨された軽石や亜円礫混じりで葉理の発達した暗灰色砂層（層厚25cm）、暗褐色土（層厚9cm）、暗灰色砂質作土（層厚21cm）が認められる。発掘調査では、これらの土層のうち、成層したテフラ層の直下から水田跡が検出されている。

成層したテフラ層は下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色スコリア混じり黄色細粒軽石層（層厚0.8cm、スコリアの最大径23mm）、黄灰色細粒軽石層（層厚3cm）、橙褐色細粒軽石層（層厚2cm）、褐色

#### 第4章 中宿在家遺跡科学分析

細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄色細粒軽石層（層厚12cm、軽石の最大径4mm）、桃色細粒火山灰層（層厚3cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）から構成されている。このテフラ層も、その層相からAs-Bに同定される。またその上位の砂層中に認められる青灰色細粒火山灰層は、1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間-粕川テフラ（As-Kk, 早田, 1991, 未公表資料）に同定される。

##### （3）2区南壁B-34グリッド

比較的高位にある本地点の地質層序を図3に示す。ここでは暗灰色粘質土の上位に、下位より黄灰色砂層（層厚9cm）、成層したテフラ層、成層した桃色シルト層（層厚8cm）、暗灰色砂層（層厚0.5cm）、成層した桃色シルト層（層厚7cm）、葉理の発達した灰色砂層（層厚13cm）、黄褐色土（層厚23cm）、円磨された軽石や礫を含む暗灰色砂層（層厚10cm以上、軽石の最大径34mm、礫の最大径83mm）が認められる。これらの土層のうち、発掘調査では最下位の砂層の直下から水田跡が検出されている。

成層したテフラ層は下位より青灰色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、褐色粗粒スコリア層（層厚0.8cm、スコリアの最大径21mm）、黄色細粒軽石層（層厚1cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、橙褐色細粒軽石層（層厚0.8cm）、褐色細粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄色細粒軽石層（層厚1cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚1cm）、黄色細粒軽石層（層厚3cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、赤褐色粗粒火山灰混じり黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.4cm）、黒灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄褐色粗粒火山灰層（層厚2cm）、桃色細粒火山灰層（層厚0.8cm）から構成されている。このテフラ層も、その層相からAs-Bに同定される。

### 3. 小 結

中宿在家遺跡の発掘調査で検出された水田跡は、1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B）のすぐ下位の洪水砂層の堆積によって埋没したものである。なお一連の水田面のうち、比較的高位にある水田面に洪水砂層の堆積は認められず、As-Bによって直接埋没している。またAs-Bの上位の砂層中には浅間-粕川テフラ（As-Kk, 1128年）の堆積が認められた。As-B降灰に伴う洪水はAs-B降灰後少なくとも20年以上続いたことが推定される。

#### 参考文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層. 考古学ジャーナル, No. 157, p. 41-52.  
早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち. 佐久考古通信, No. 53, p. 2-7.

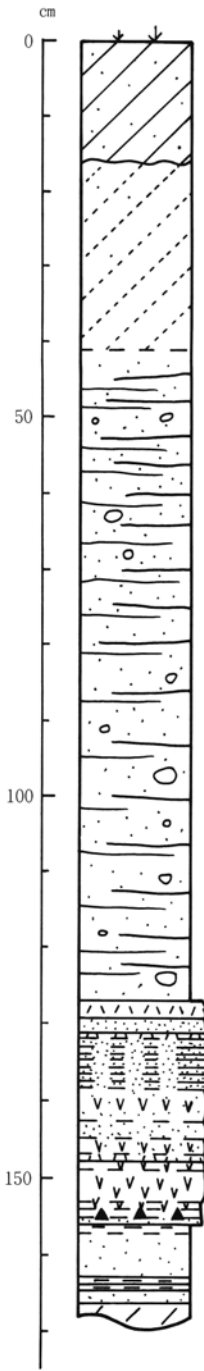


図1 中宿在家遺跡第1地点の土層柱状図

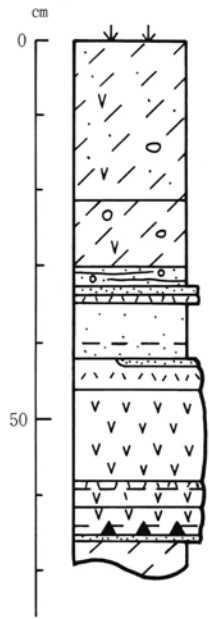


図2 中宿在家遺跡第3地点の土層柱状図

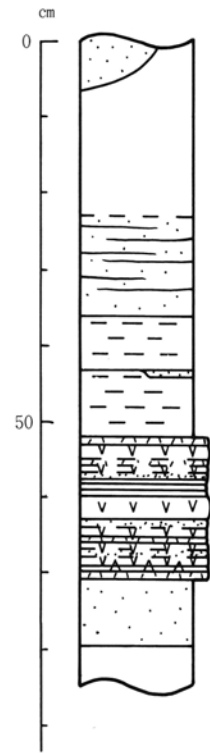


図3 中宿在家遺跡第4地点の土層柱状図

- V V 軽石
- ▲ ▲ スコリア
- 粗粒火山灰
- - - - 細粒火山灰
- / / / / 黒褐色土
- / / / / ● 暗褐～暗灰色土
- - - - ● 褐色土
- 黄褐色土
- ○ 礫
- 砂
- - - - シルト

## 第2節 植物珪酸体（プラント・オパール）分析（1）

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ $\text{SiO}_2$ ）が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体（プラント・オパール）分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，1987）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

中宿在家遺跡では、浅間Bテフラ（As-B）のすぐ下位の洪水層直下から棚田状の水田跡が検出された。そこで、同水田跡の試料について分析を行い、稲作跡の検証および古植生・古環境の推定を試みた。

### 2. 試料

調査地点は、第1地点～第4地点の4地点である。試料は、水田跡の検出層準を中心に第1地点で2点、第2地点で16点、第3地点で3点、第4地点で3点が採取された。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾（ $105^\circ\text{C}$ ・24時間）
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約 $40\mu\text{m}$ 、約0.02g）  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- 5) 沈底法による微粒子（ $20\mu\text{m}$ 以下）除去、乾燥
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位： $10^{-5}\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科はネザサ節の値を用いた。その値は2.94（種実重は1.03）、8.40、6.31、1.24、0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡の検証が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族（ススキ属など）、タケ亜科（おもにネザサ節）の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図3に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。



## 5. 考 察

### (1) 稲作跡の検証と探査

水田跡(稲作跡)の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

#### 1) 第1地点(1区J-20グリッド)

水田跡の検出層準(試料2)およびその直上のシルト層(試料1)について分析を行った。その結果、試料2からイネの植物珪酸体が検出された(図1)。密度は6,100個/gと高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 2) 第2地点

棚田状の水田跡から採取された試料1~13(北から南へ各水田の中央で採取)について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された(表1)。密度は南端の試料13では1,000個/g未満と低い値であるが、その他の試料では平均9,300個/gといずれも高い値である。したがって、試料1~12の各水田跡では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

本地点では、水田面から検出された炭化物(試料17~19)についても分析を行った。その結果、各試料からイネの植物珪酸体が17万~62万個/gと非常に高い密度で検出され、イネ葉部や茎部に由来する細胞組織片も多量に検出された。これらのことから、同炭化物は稲藁(イネの茎葉)に由来するものと推定される。

#### 3) 第3地点(2区北壁G-35グリッド)

水田跡の検出層準(試料22)、浅間Bテフラ(As-B)層(試料21)、浅間-粕川テフラ(As-Kk)直下層(試料20)について分析を行った。その結果、試料22からイネが検出された(図2)。密度は14,100個/gと非常に高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

#### 4) 第4地点(2区南壁B-34グリッド)

水田跡の検出層準(試料25)、浅間Bテフラ(As-B)層(試料24)およびその直上層(試料23)について分析を行った。その結果、試料25からイネが検出された(図3)。密度は13,200個/gと非常に高い値である。したがって、同層準では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

以上のように、浅間Bテフラ(As-B)のすぐ下位の洪水層直下から検出された棚田状の水田跡では、南端の試料13を除くすべての試料からイネの植物珪酸体が多量に検出され、調査区のほぼ全域で稲作が行われていたことが分析的に確認された。また、同水田面で検出された炭化物は、稲藁(イネの茎葉)に由来するものと判断された。

第4章 中宿在家遺跡科学分析

(2) 植物珪酸体分析から見た植生・環境

ヨシ属は比較的湿ったところに生育し、ウシクサ族(ススキ属など)やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境(乾燥・湿潤)を推定することができる。

おもな分類群の推定生産量(表1下段)によると、水田跡の試料ではイネが圧倒的に卓越しているが、部分的にはヨシ属も多くなっていることが分かる。

これらのことから、当時の遺跡周辺はヨシ属が生育するような比較的湿潤な環境であり、そこを利用して水田稲作が行われていたものと推定される。

6. まとめ

以上の結果から、浅間Bテフラ(As-B)のすぐ下位の洪水層直下から検出された棚田状の水田跡では、調査区のほぼ全域で稲作が行われていたものと推定される。

参考文献

- 杉山真二(1987) 遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: p. 27-37
- 藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) — 数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9: p. 15-29.
- 藤原宏志(1979) プラント・オパール分析法の基礎的研究(3) — 福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—. 考古学と自然科学, 12: p. 29-41.
- 藤原宏志・杉山真二(1984) プラント・オパール分析法の基礎的研究(5) — プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17: p. 73-85.

表1 群馬県、中宿在家遺跡の植物珪酸体分析結果(主要な分類群について計数)  
検出密度(単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	第1地点		第2地点										第3地点			第4地点									
	1	2	As-B 下の洪水直下水田面										20	21	22	23	24	25							
			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10							11	12	13				
イネ	97	127	106	97	98	91	99	90	100	69	94	47	8	6159	1715	2573	141	15	15	15	39	8	132		
ヨシ属	7	15	45	15	15	46	30	23	15	16	47	46	9	14	7	9	8	15	15	15	24	8	46		
ウシクサ属(ススキ属など)	75	45	38	67	60	45	92	112	23	61	70	39	15	14	7	9	8	15	15	15	24	8	31		
タケ亜科(おもにネザサ節)	7	15	8	30	38	23	23	30	8	15	8	62	101	14	14	14	39	15	15	15	39	8	15		
推定生産量(単位: kg/m <sup>2</sup> ・cm)	1.80	2.87	3.74	3.10	2.86	2.88	2.66	2.92	2.64	2.94	2.75	1.38	0.23	181.08	50.41	75.63	4.15	0.07	0.07	0.07	0.19	0.04	0.04	3.87	
イネ	1.45	0.47	0.94	2.85	0.95	2.89	1.89	1.46	0.97	0.98	2.95	2.93	0.54	0.17	0.09	0.54	0.50	0.07	0.07	0.07	0.19	0.04	0.04	2.93	
ヨシ属	0.10	0.57	0.93	0.56	0.47	0.84	0.75	0.56	1.14	1.39	0.87	0.48	0.19	0.17	0.09	0.19	0.29	0.07	0.07	0.07	0.19	0.04	0.04	0.38	
ウシクサ属(ススキ属など)	0.07	0.37	0.04	0.07	0.14	0.18	0.11	0.11	0.14	0.04	0.04	0.30	0.48	0.07	0.07	0.07	0.19	0.07	0.07	0.07	0.19	0.04	0.04	0.07	
タケ亜科(おもにネザサ節)																									

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

第2節 植物珪酸体(プラント・オパール)分析 (1)

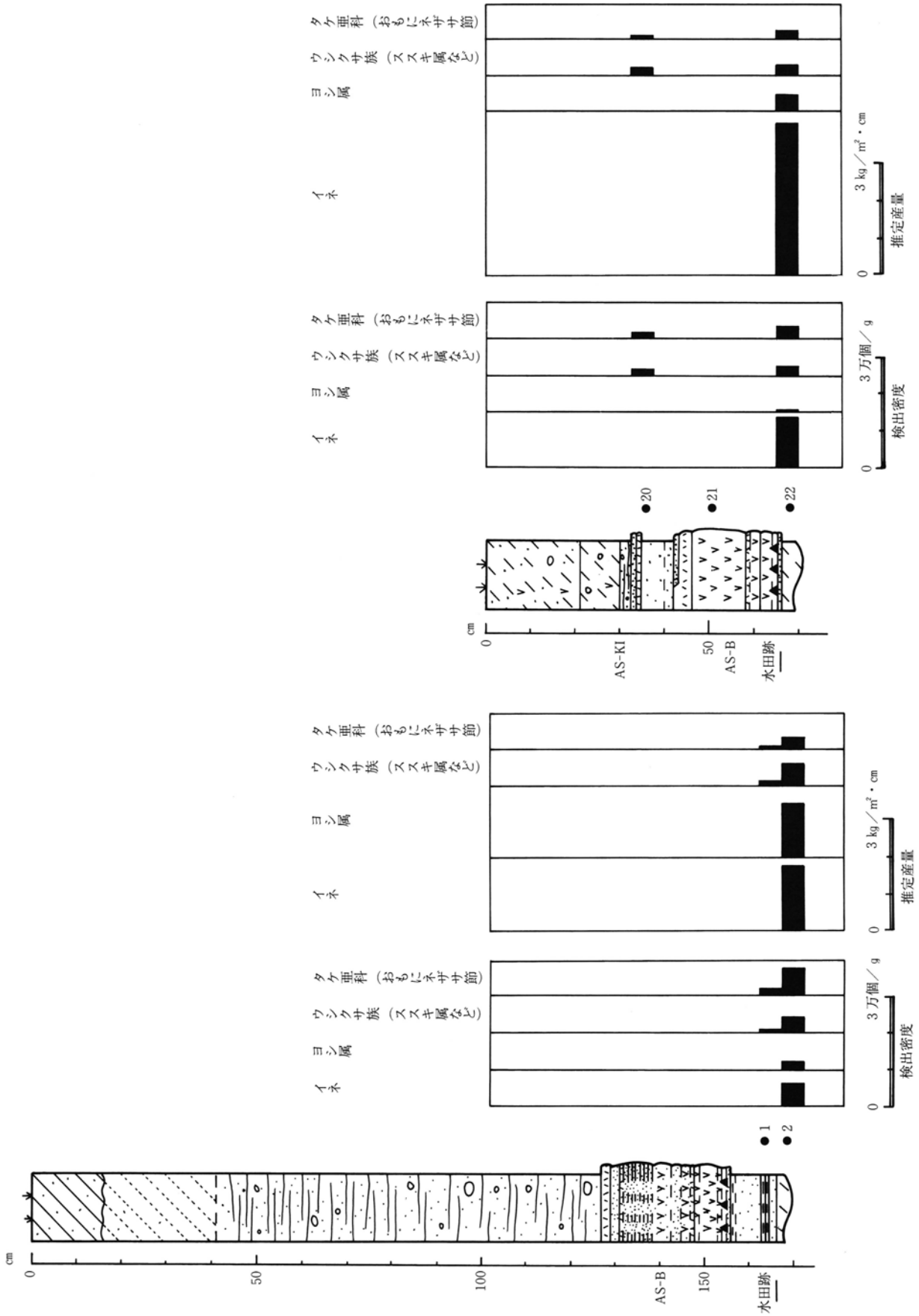


図2 中宿在家遺跡第3地点の植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示

図1 中宿在家遺跡第1地点の植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示

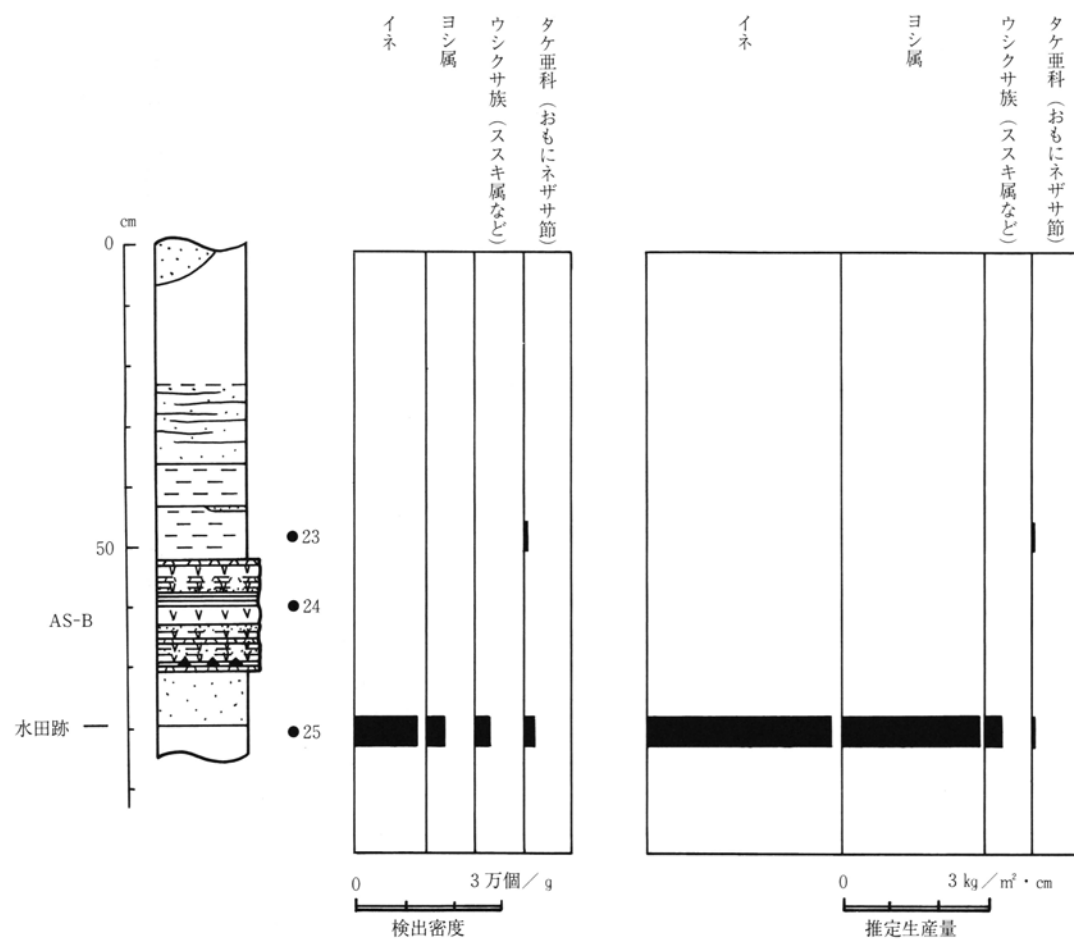


図3 中宿在家遺跡第4地点の植物珪酸体分析結果 ※主な分類群についての表示

### 第3節 寄生虫卵分析 (花粉を含む) (1)

#### 1. はじめに

寄生虫卵分析は、便所遺構の検出や食生活の復原のみならず、農耕における施肥の技術などの検証も分析課題となる。また寄生虫の種類によっては寄生動物の特定ができ、家畜の存在を検証することも可能である。なお、土壤生成作用で著しく分解された堆積土では、寄生虫卵のみならず花粉も残存していない場合がある。

#### 2. 試料

試料は、1区北壁第1地点最下層の暗灰色粘質土(K-1)と2区As-B下洪水直下の水田層(K-2)の2点である。

#### 3. 方法

微化石分析法を基本に下記のように行った。

- 1) サンプルをそれぞれ1cm<sup>3</sup>ずつ採量する。
- 2) DW(脱イオン水)を加え攪拌する。
- 3) 篩別により大きな砂粒や木片等を除去し、沈澱法を施す。
- 4) 25%フッ化水素酸を加え30分静置。(2・3度混和)
- 5) 水洗後サンプルを2分する。
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す。
- 7) 両方のサンプルを染色後グリセリンゼリーで封入しそれぞれ標本を作製する。
- 8) 検鏡・計数し密度を算出する。

#### 4. 結果と所見

寄生虫卵分析過程において検出された炭化物や花粉も観察し、花粉粒は計数を行った。

その結果、2試料とも寄生虫卵が検出されなかったが、炭化した木片が少し認められ、わずかの花粉粒が検出された。花粉粒は分解のため著しく痛んでいた。このことから、試料となった堆積物が乾燥的な土壤生成作用によって分解されたことが推定される。寄生虫卵も分解する環境であったとみなされるが、従来から含まれていなかったのか分解されたために検出されなかったのかは判断できない。これらの堆積層是水田遺構であるため、分解の著しい乾田であったか、埋没後に上位から乾燥化されたことなどが考えられる。

表1 中宿在家遺跡における寄生虫卵分析結果(花粉も含む)

(-) : 含まれていない

寄生虫卵	1区K-1	2区K-2
Helminth egg	(-)	(-)
Arboreal pollen	樹木花粉	
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	
	1	

## 第4章 中宿在家遺跡科学分析

Nonarboreal pollen	草本花粉		
Gramineae	イネ科		3
Cyperaceae	カヤツリグサ科		1
Artemisia	ヨモギ属	2	2
<hr/>			
Fern spore	シダ植物孢子		
Monolate type spore	単条溝孢子	1	1
<hr/>			

### 参考文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992). Methods for Extracting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science* 19.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫, 藤原京跡の便所遺構, 奈良国立文化財研究所.

金子清俊・谷口博一 (1987) 新版臨床検査講座 8 医動物学, 医歯薬出版.

## 第4節 自然科学分析 (2)

株式会社 古環境研究所

### I. 中宿在家遺跡の地質とテフラ

#### 1. はじめに

中宿在家遺跡の発掘調査では、水田跡が検出された。そこで基本土層断面を対象に地質調査および屈折率測定を行い、地質層序についての記載を行うことになった。調査分析の対象となった地点は、3区北西壁、6区第1トレンチおよび6区第2トレンチの3地点である。また調査担当者により採取されたテフラ試料4点についてテフラ検出分析と屈折率測定を合わせて行い、示標テフラの検出、同定を試みた。

#### 2. 地質層序

##### (1) 3区北西壁

この地点の地質層序を、柱状図にして図1に示す。ここでは下位より黄白色軽石混じりで淘汰のよい黄褐色砂層 (層厚14cm, 軽石の最大径34mm, VIIIb層)、暗灰色土 (層厚8cm, VIIa層)、黄色軽石混じり褐色土 (層厚25cm, 軽石の最大径6mm, VIIc層)、灰褐色土 (層厚13cm, VIIb層)、灰色粘質土 (層厚10cm, VIIa層)、成層したテフラ層 (V層)、暗灰色砂層 (層厚4cm)、黄褐色土 (層厚4cm)、層理の発達した黄灰色砂層 (層厚8cm, 以上IV層)、成層したテフラ層 (III層)、黄褐色土 (層厚4cm)、層理の発達した灰色砂層 (層厚5cm)、褐色土 (層厚15cm, 以上IIb層)、円磨された灰白色軽石に富む砂礫層 (層厚26cm, 軽石の最大径18mm, 礫の最大径13mm, IIa層)、亜円礫混じり灰褐色砂質土 (層厚14cm, 礫の最大径11mm, Ib層)、砂混じり灰色土 (層厚12cm, Ia層)、盛土 (層厚46cm) の連続が認められる。これらの土層のうち、下位の成層したテフラ層の直下からは、水田跡が検出されている。

下位の成層したテフラ層は、下位より暗灰色細粒火山灰層 (層厚0.4cm)、褐色粗粒スコリア混じり黄褐色細粒軽石層 (層厚4cm, スコリアの最大径35mm)、暗灰色粗粒火山灰層 (層厚2cm)、橙色がかった褐色細粒軽石層 (層厚2cm, 軽石の最大径5mm)、褐色軽石層 (層厚1cm, 軽石の最大径6mm)、褐色細粒火山灰層 (層

厚0.6cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚5cm)、黄色細粒軽石層(層厚5cm、軽石の最大径4mm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.6cm)、赤褐色粗粒火山灰混じり黒灰色粗粒火山灰層(層厚0.4cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.4cm)、黄色粗粒火山灰層(層厚0.5cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚1cm)、褐色粗粒火山灰層(層厚1cm)、暗灰色粗粒火山灰層(層厚0.5cm)、褐色粗粒火山灰層(層厚0.2cm)、橙色細粒火山灰層(層厚0.5cm)、桃色細粒火山灰層(層厚1cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)の連続から構成されている。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 新井, 1979)に同定される。

またその上位の成層したテフラ層は、下部の灰色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)と上部の青灰色細粒火山灰層(層厚0.8cm)から構成されている。このテフラ層は、層相から1128(大治3)年に浅間火山から噴出したと考えられている浅間-柏川テフラ(As-Kk, 早田, 1991, 未公表資料)に同定される。

#### (2) 6区第1トレンチ

本地点の地質層序を図2に示す。ここでは下位より黄褐色砂層(層厚21cm以上, VIIIb'層)、暗褐色砂質土(層厚25cm, VIIIa''層)、砂混じり暗褐色土(層厚15cm, VII層)、成層したテフラ層(V層)、砂礫混じり褐色土(層厚15cm, Id'層)、砂礫混じり褐色土(層厚9cm, Ib'層)、砂混じり灰色土(層厚15cm, Ia層)が認められる。成層したテフラ層は下位より青灰色細粒火山灰層(層厚0.3cm)、褐色スコリア混じり黄色細粒軽石層(層厚9cm, スコリアの最大径18mm)から構成されている。このテフラ層も、その層相からAs-Bに同定される。

#### (3) 6区第2トレンチ

この地点の地質層序を、図3に示す。ここでは下位より暗灰褐色土(層厚8cm以上, VIIe層)、灰褐色砂質土(層厚17cm, VIIId層)、黄灰色砂層(層厚4cm)、褐灰色砂質土(層厚13cm, 以上VIIIc'層)、暗灰色土(層厚22cm, VIIIA''層)、黄灰色砂層(VII層)、黄褐色砂層(層厚9cm, VI層)、黄色軽石層(V層)、砂礫混じり灰褐色土(層厚22cm, Ic'層)、砂礫混じり灰褐色土(層厚18cm, Ib'層)、砂混じり灰色土(層厚13cm, Ia層)が認められる。黄色細粒軽石層は、その層相からAs-Bに同定される。

### 3. テフラ検出分析

#### (1) 分析試料と分析方法

調査担当者により採取されたVIII-6層、VIII-5層、VIII-4層、VIII-3層の4試料について、テフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の特徴を観察。

#### (2) 分析結果

分析結果を表1に示す。VIII-6層には黄白色軽石が多く含まれている。軽石の最大径は8.2mmで円磨されておらず、角ばっている。VIII-5層には、最大径19.2mmの黄白色の円磨された軽石が比較的多く含まれている。ま

Ⅷ-4層には、若干円磨された最大径8.9mmの黄白色軽石が比較的多く含まれている。さらにⅧ-3層には最大径15.8mmの円磨された黄白色軽石が多く含まれている。

#### 4. 屈折率測定

##### (1) 測定試料と測定方法

3区北西壁の試料番号1およびⅧ-6層に含まれる軽石について、位相差法（新井，1972）により屈折率測定を行うことにした。

##### (2) 測定結果

屈折率の測定結果を表2に示す。3区北西壁試料番号1には、斜方輝石のほか単斜輝石および磁鉄鉱が認められる。火山ガラスの屈折率は測定できなかったものの、斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は1.707-1.711である。Ⅷ-6層の軽石には、斜方輝石のほか単斜輝石および磁鉄鉱が認められる。軽石の火山ガラスの屈折率（ $n$ ）は1.513-1.520、斜方輝石の屈折率（ $\gamma$ ）は1.706-1.711である。Ⅷ-6層の軽石の火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率は、4世紀中葉の浅間C軽石（As-C，新井，1979）の軽石のそれとほぼ一致する。

#### 5. 小 結

中宿在家遺跡において地質調査およびテフラ検出分析さらに屈折率測定を行った。その結果、浅間Bテフラ（As-B，1108年）とその上位の浅間-粕川テフラ（As-Kk，1128年）の2層のテフラが認められた。また調査担当者により採取された試料のうち、Ⅷ-6層の中に浅間C軽石（As-C，4世紀中葉）に由来すると思われる軽石が検出された。

#### 参考文献

- 新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，No. 157，p. 41-52  
早田 勉（1991）浅間火山の生い立ち。佐久考古通信，No. 53，p. 2-7。



表1 中宿在家遺跡のテフラ検出分析結果

試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径	円磨
VIII-3層	+++	黄白	15.8mm	○
VIII-4層	++	黄白	8.9mm	△
VIII-5層	++	黄白	19.2mm	○
VIII-6層	+++	黄白	8.2mm	×

++++:とくに多い, +++:多い, ++:中程度,  
+:少ない, -:認められない.

表2 中宿在家遺跡の屈折率測定結果

試料	重鉱物	火山ガラス(n)	斜方輝石( $\gamma$ )
3区北西壁試料番号1	opx>cpx, mt	—	1.707-1.711
VIII-6層	opx>cpx, mt	1.513-1.520	1.706-1.711

屈折率測定は, 位相差法(新井, 1972)による.  
opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, mt:磁鉄鉱.

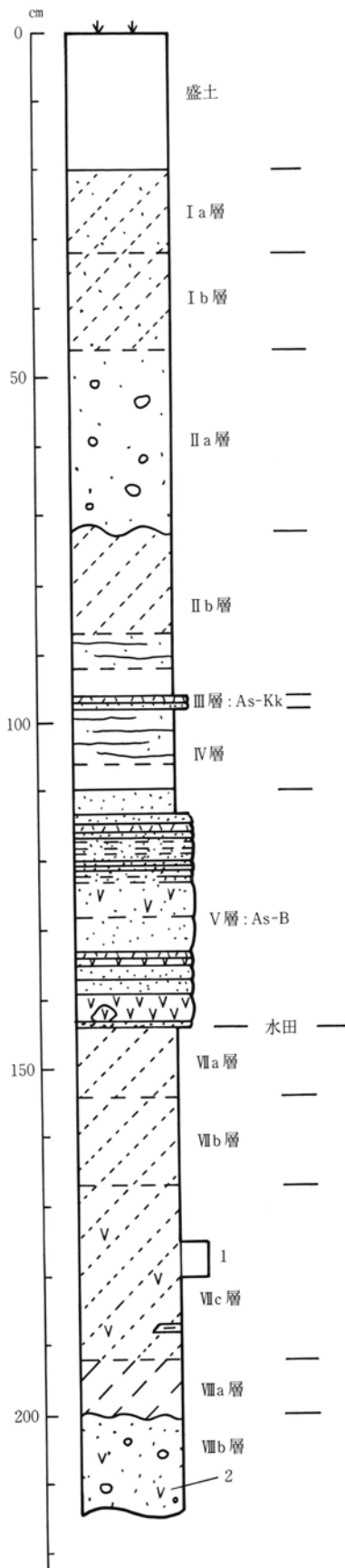


図1 中宿在家遺跡Ⅲ区北西壁の土層柱状図  
数字はテフラ分析の資料番号

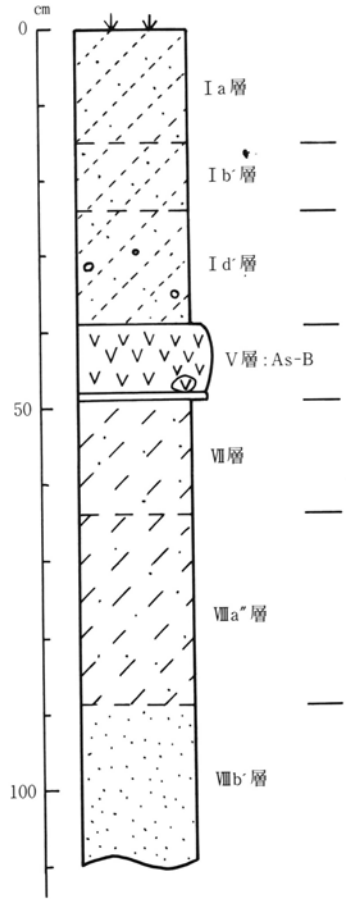


図2 中宿在家遺跡Ⅵ区  
第1トレンチの土層柱状図

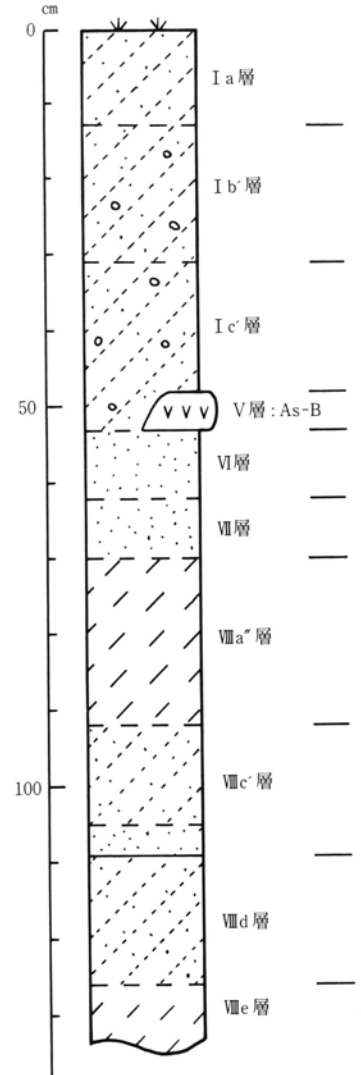
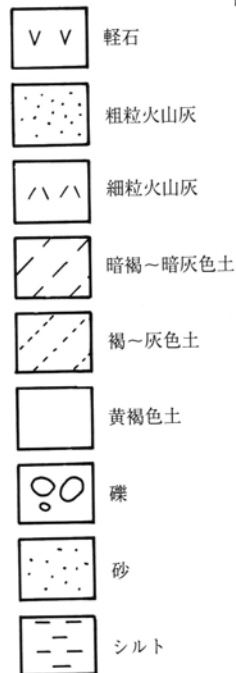


図3 中宿在家遺跡Ⅵ区  
第2トレンチの土層柱状図



## 第5節 植物珪酸体(プラント・オパール)分析(2)

### 1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸( $\text{SiO}_2$ )が蓄積したものであり、植物が枯れた後も微化石(プラント・オパール)となって土壤中に半永久的に残っている。植物珪酸体(プラント・オパール)分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている(杉山, 1987)。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である(藤原・杉山, 1984)。

中宿在家遺跡では、浅間Bテフラ(As-B)直下から水田跡が検出された。そこで、同層における稲作の検証およびその他の層における稲作跡の探査を目的として分析を行った。

### 2. 試料

試料は、3区北西壁で9点、6区第1トレンチで5点、6区第2トレンチで8点、VI区2面で10点の計32点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

### 3. 分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、プラント・オパール定量分析法(藤原, 1976)をもとに、次の手順で行った。

- 1) 試料の絶乾(105℃・24時間)
- 2) 試料約1gを秤量、ガラスビーズ添加(直径約40 $\mu\text{m}$ 、約0.02g)  
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- 3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- 4) 超音波による分散(300W・42KHz・10分間)
- 5) 沈底法による微粒子(20 $\mu\text{m}$ 以下)除去、乾燥
- 6) 封入剤(オイキット)中に分散、プレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-5g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、キビ族はヒエ、ヨシ属はヨシ、ウシクサ族はススキ、タケ亜科はネザサ節の値を用いた。その値は2.94(種実重は1.03)、8.40、6.31、1.24、0.48である。

### 4. 分析結果

水田跡の検証および探査が主目的であることから、同定および定量はイネ、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族(ススキ属など)、タケ亜科(おもにネザサ節)の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1～図4に示した。写真図版に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

## 5. 考 察

### (1) 稲作跡の検証と探査

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層に植物珪酸体密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、各地点ごとに稲作の可能性について検討を行った。

### (1) 3区北西壁

Ⅱb層からⅧb層までの層準について分析を行った。その結果、Ⅶa層（試料5）からⅧa層（試料8）までの各層およびⅣ層下部（試料4）からイネが検出された。このうち、水田跡が検出されたAs-B直下のⅦa層（試料5）では密度が9,000個/gと高い値であり、その下層のⅦb層（試料6）、Ⅶc層（試料7）、Ⅷa層（試料8）でも9,000個/g前後と高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Kkより下位のⅣ層下部（試料4）では密度が1,500個/gと低い値である。ただし、同層上部（試料3）ではイネが検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層準の時期に調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

### (2) 6区第1トレンチ

I b'層からⅧb'層までの層準について分析を行った。その結果、I b'層（試料1）とI d'層（試料2）、およびAs-B直下のⅦ層（試料3）からイネが検出された。密度はいずれも5,000個/g以上と高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

### (3) 6区第2トレンチ

I b'層からⅧe層までの層準について分析を行った。その結果、これらのすべてからイネが検出された。このうち、I b'層（試料1）では密度が9,600個/g、I c'層（試料2）では6,800個/gと高い値であり、Ⅷa"層（試料5）とⅧc'層（試料6）でも約4,500個/gと高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Bより下位のⅦ層（試料3）では密度が3,000個/gと比較的高い値であり、明瞭なピークが認められた。したがって、同層でも稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層では、密度が比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

### (4) VI区2面

I d層から⑦層までの層準について分析を行った。その結果、I d層（試料14）、I e層（試料15）、③層（試料16）、Ⅱk層上部（試料17）、⑤層（試料21）、⑥層（試料22）、⑦層（試料23）の各層からイネが検出された。このうち、I d層（試料14）では密度が7,700個/gと高い値であることから、稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-Bより下位の⑤層（試料21）では密度は2,300個/gと比較的低い値であるが、直上の④層（試料20）ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の層では、

## 第5節 植物珪酸体(プラント・オパール)分析(2)

密度が比較的低いことから、稲作の可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の危険性も否定できない。

### 6. まとめ

以上のように、水田跡が検出された浅間Bテフラ(As-B, 1108年)直下のⅦ層では、イネの植物珪酸体が多量に検出され、同層で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-Bより下位のⅦ層およびⅧ層などでも稲作が行われていた可能性が認められた。

#### 参考文献

- 杉山真二(1987)遺跡調査におけるプラント・オパール分析の現状と問題点. 植生史研究, 第2号: p. 27-37  
藤原宏志(1976)プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—. 考古学と自然科学, 9: p. 15-29.  
藤原宏志(1979)プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜臼式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(O. sativa L.)生産総量の推定—. 考古学と自然科学, 12: p. 29-41.  
藤原宏志・杉山真二(1984)プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オパール分析による水田址の探査—. 考古学と自然科学, 17: p. 73-85.

#### 植物珪酸体の顕微鏡写真

(倍率はすべて400倍)

No.	分類群	地点	試料名
1	イネ	6区第2トレンチ	1
2	イネ	6区第2トレンチ	5
3	キビ族型	Ⅵ区2面	20
4	ネザサ節型	6区第2トレンチ	5
5	不明	6区第2トレンチ	8
6	樹木起源	Ⅵ区2面	20

表1 群馬県、中宿在家遺跡の植物珪酸体分析結果 (主要な分類群について計数)

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	3区北西壁					6区第1トレンチ								
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	1	2	3	4	5
イネ														
キビ属(ヒエ属など)			8	15	90	97	84	94		62	56	56		
ヨシ属					7								8	
ウシクサ族(ススキ属など)			8	8	30	15	23	8		39	24	24		
タケ亜科(おもにネザサ節)			8	8	22	15	46	16		23	32	32		

推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ				0.44	2.64	2.85	2.46	2.77		1.83	1.63	1.63		
キビ属(ヒエ属など)			0.65		0.63									
ヨシ属						0.47	0.96	0.49		1.00	0.50	0.50		
ウシクサ族(ススキ属など)			0.10		0.37	0.18	0.28	0.10		0.48	0.30	0.30		
タケ亜科(おもにネザサ節)			0.04		0.11	0.07	0.22	0.08		0.11	0.15	0.15		

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群 / 試料	6区第2トレンチ								VI区2面									
	1	2	3	4	5	6	7	8	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23
イネ	96	68	8	30	46	45	23	7	77	23	23	15						
キビ属(ヒエ属など)																		
ヨシ属					15	15	8	15				8						
ウシクサ族(ススキ属など)	16	30	24	22	23	8	23	30	8	30	61	8			90	15	38	
タケ亜科(おもにネザサ節)	40	23	24	22	15	8	8	15						23	37	38	7	23

推定生産量 (単位: kg/m<sup>2</sup>・cm)

イネ	2.81	1.99	0.23	0.88	1.35	1.33	0.68	0.22	2.27	0.67	0.67	0.45						
キビ属(ヒエ属など)																		
ヨシ属					0.95	1.00	0.96	0.48	0.10	0.37	0.76	0.10			1.12	0.19	0.47	
ウシクサ族(ススキ属など)	0.20	0.37	0.30	0.28	0.28	0.09	0.29	0.37	0.10	0.37	0.76	0.10		0.11	0.18	0.18	0.04	0.11
タケ亜科(おもにネザサ節)	0.19	0.11	0.11	0.11	0.07	0.04	0.04	0.07										

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出

第5節 植物珪酸体(プラント・オパール)分析 (2)

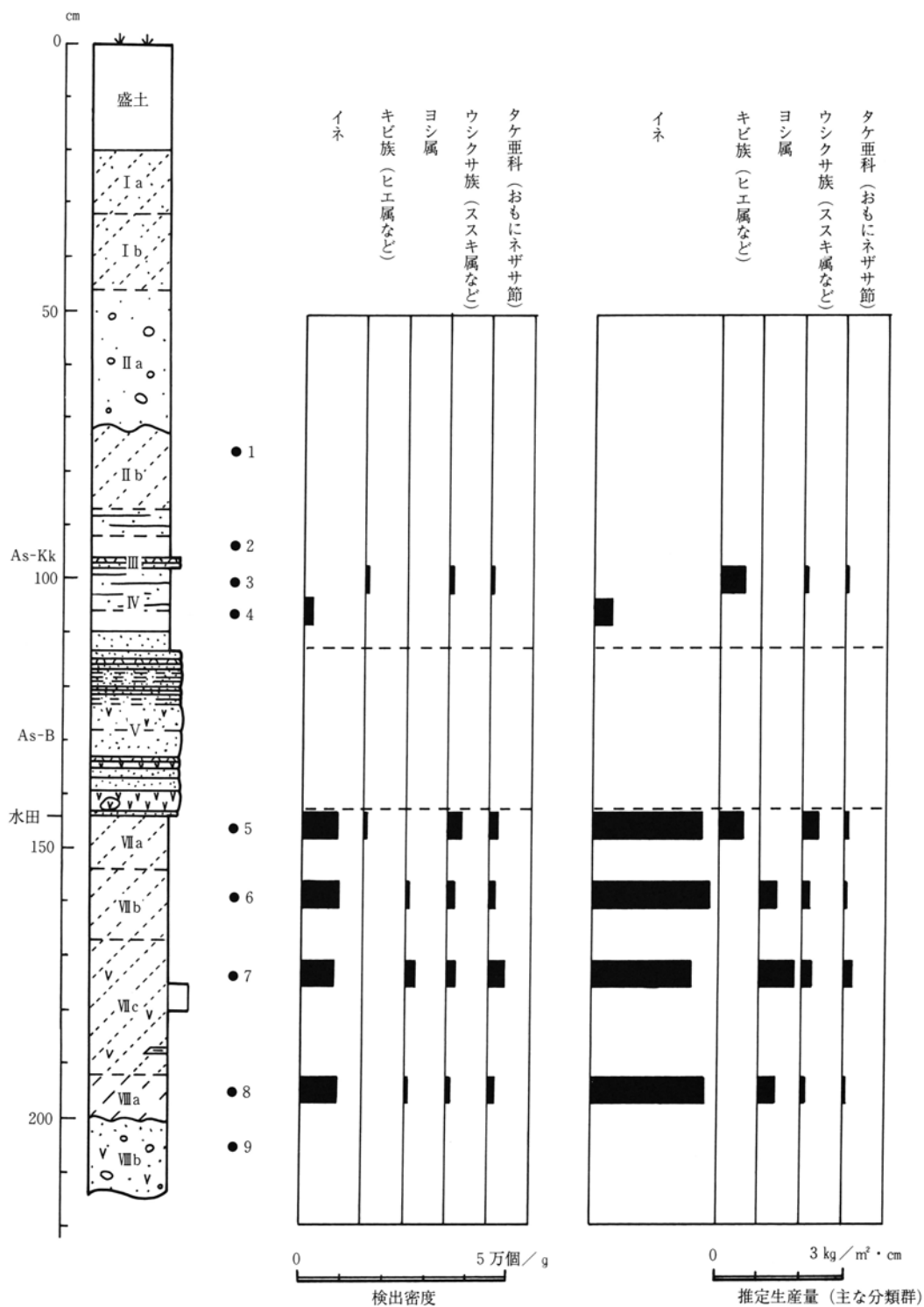


図1 中宿在家遺跡Ⅲ区北面壁の植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示

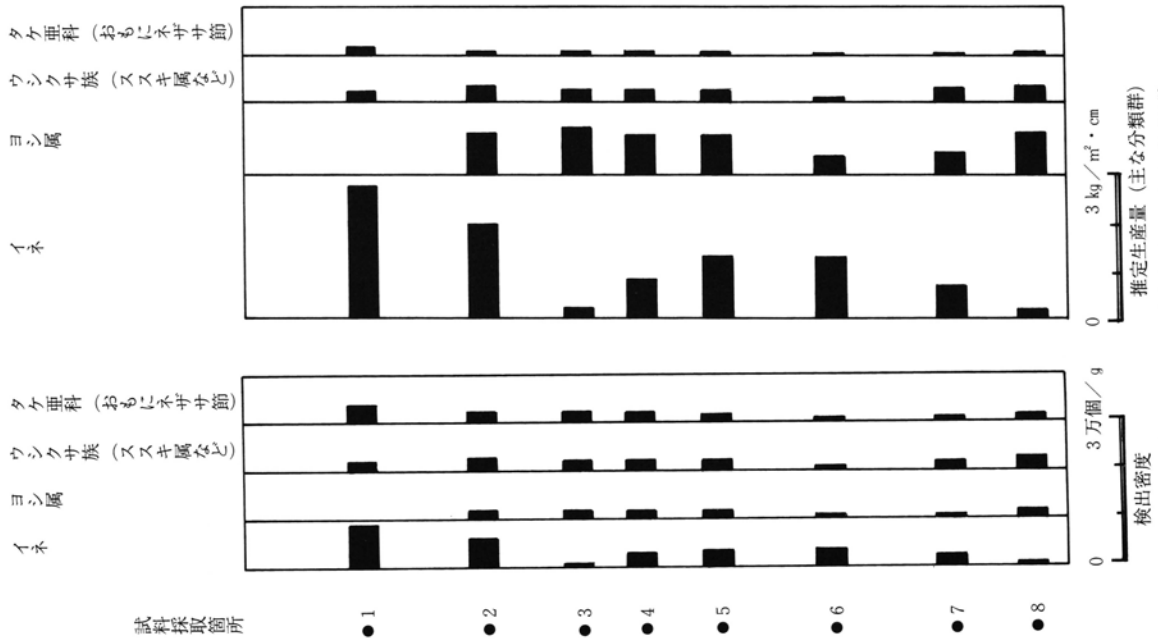


図2 中宿在家遺跡VI区第1トレンチの植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示

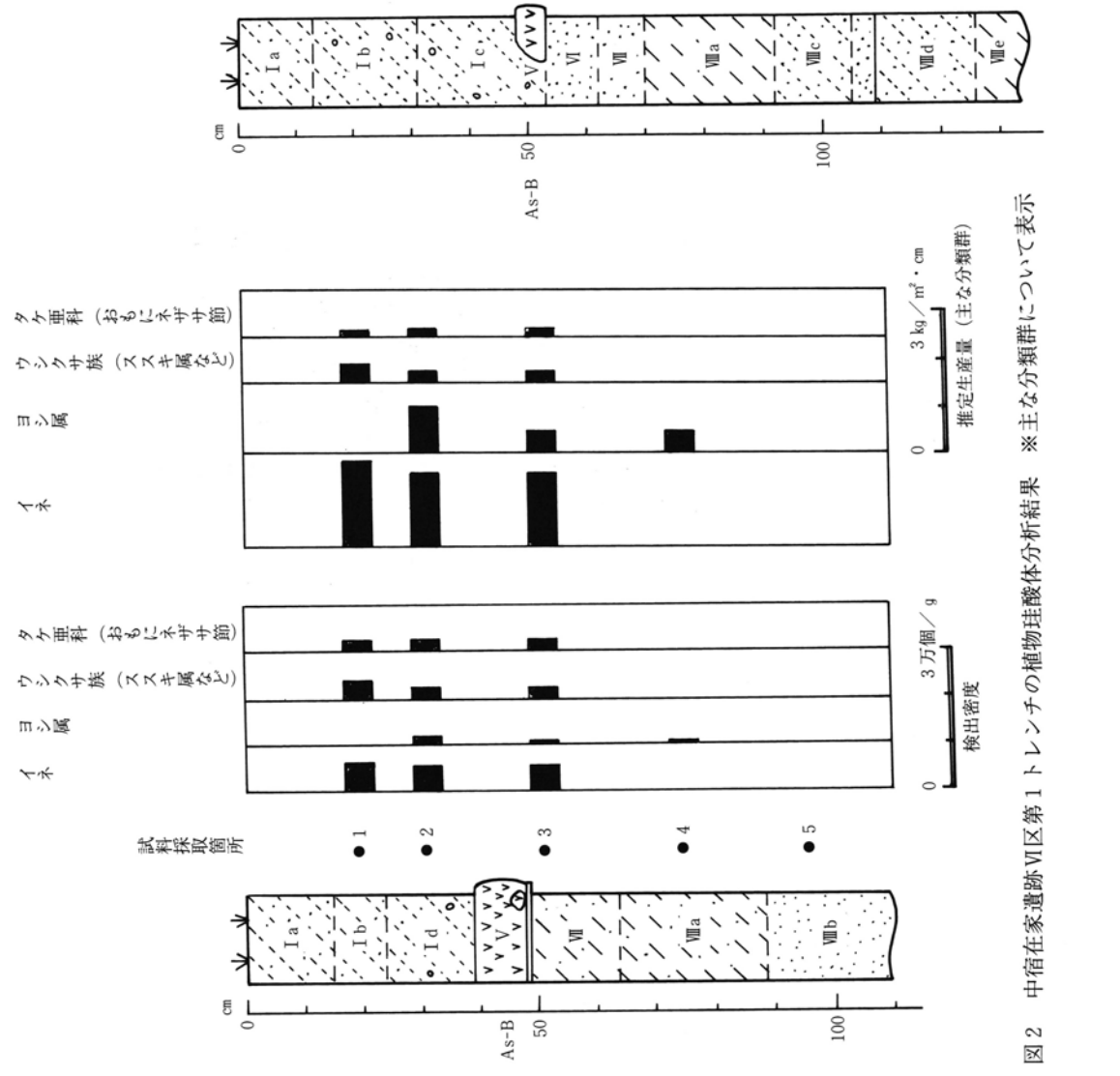


図3 中宿在家遺跡VI区第2トレンチの植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示



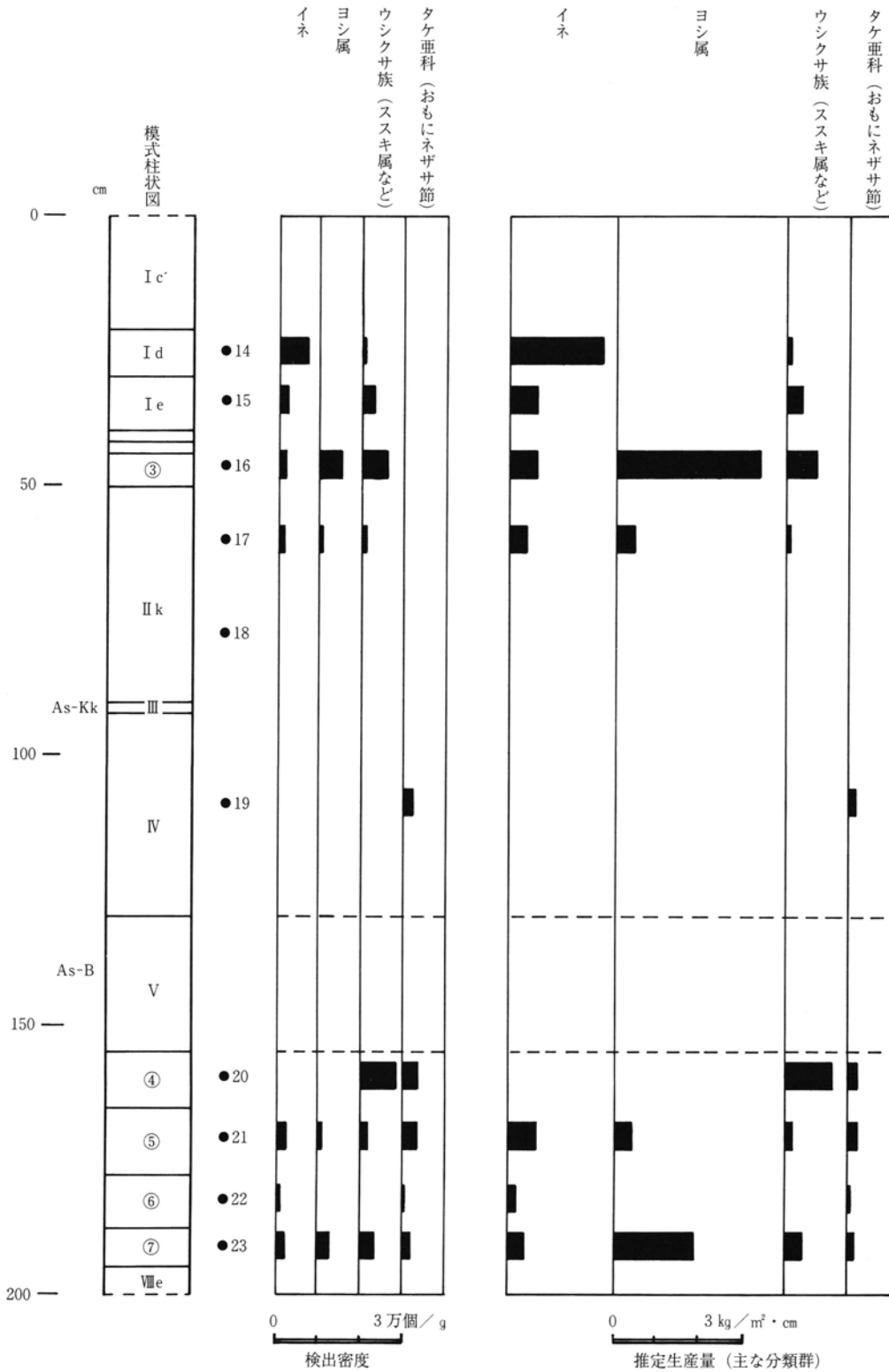


図4 中宿在家遺跡VI区2面の植物珪酸体分析結果 ※主な分類群について表示

## 第6節 炭化材の樹種同定

藤 根 久 (パレオ・ラボ)

### 1. はじめに

中宿在家遺跡は、安中市内に所在する中世の遺跡である。ここでは、掘立柱建物跡のピット等から出土した炭化材について検討した。

### 2. 方法と記載および結果

取り上げられた炭化材すべてについて、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面（木口と同義）、接線断面（板目と同義）、放射断面（柾目と同義）の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡（日本電子(株)製 JSM T-100型）で観察する。表1にその結果を示す。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。

なお、同時に取り上げが行われた種子状のものは、その特徴が認められなかったため、同定するには至らなかった。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 図版1a~1c.

大型の管孔がやや径を減じながら単独または放射方向に2~4個複合して散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性に近い同性で、1~4細胞幅、3~36細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、クルミ科クルミ属のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版2a~2c.

やや小型の丸の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合し散在する散孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一である（放射断面）。放射組織は、異性で1~3細胞幅、3~30細胞高である（接線断面）。

以上の形質から、カバノキ科のクマシデ属イヌシデ節の材と同定される。イヌシデ節には、イヌシデ(*Carpinus tschonoskii*) 及びアカシデ (*C. laxiflora*) があり、暖帯から温帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高15m、幹径60cmに達する。材は硬く、家具材、柄類などに用いられる。

アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 図版3a~3c.

大型の管孔が放射方向に配列する放射孔材である（横断面）。道管のせん孔は単一で、チロースが見られる（放射・接線断面）。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある（接線断面）。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のアカガシ亜属の材と同定される。アカガシ亜属の樹木には関東に分布するアカガシ (*Q. acuta*) やアラカシ (*Q. glauca*) やシラカシ (*Q. myrsinaefolia*) をはじめ8種類ほどある。アカガシ亜属の樹木は、樹高20m、幹径1mに達する常緑広葉樹である。

コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 図版 4a~4c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科コナラ属のコナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ (*Q. serrata*) やミズナラ (*Q. mongolicavar. grosseserrata*)、カシワ (*Q. dentata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*) などがあるが、現在のところこれらを識別するには至っていない。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版 5a~5c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、時としてチロースが見られる(放射断面)。放射組織は、単列同性のものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ (*Q. acutissima*) と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ (*Q. variabilis*) がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版 6a~6c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから除々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~13細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科クリ属のクリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版 7a~7c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、早材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~45細胞高からなる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキの材と同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版 8a~8c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、3~40細胞高で、この分類群を特徴づける韌細胞が認められる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に

#### 第4章 中宿在家遺跡科学分析

分布するエノキ (*C. sinensis*) や、温帯に分布するエゾエノキ (*C. jessoensis*) などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

**タケ亜科 (ササ類)** subfam. Bambusoideae イネ科 図版9a~9b.

左右の後生木部、外側の後生木部・原生師部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘が取り巻く維管束が、多数散在する (横断面)。

以上の形質から、イネ科のタケ亜科の稈と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的では識別できない。試料は、多くが稈の厚みが厚く、曲率が小さく (曲率半径が大きい) ことから、タケ類と考える。

表1 中宿在家遺跡出土炭化材の樹種

No.	出土地区	遺構	位置	樹種	備考
1	Ⅱ区	E31C	No.1	—	草本類
2	Ⅵ区-2面	7号掘立柱建物	Pit 22	タケ類	タケ類稈厚：5mm
3	〃	〃	Pit 24	タケ類	タケ類稈厚：4mm
4	〃	9号掘立柱建物	Pit 4	広葉樹	保存悪い
5	〃	〃	Pit 10	タケ類	タケ類稈厚：4mm
6	〃	1号掘立柱建物	Pit 8	クヌギ節	
7	〃	3号掘立柱建物	Pit 3	—	保存悪い
8	〃	5号井戸		アカガシ亜属、タケ類、コナラ節	タケ類稈厚：3mm
9	〃	T-2		クヌギ節	
10	〃	T-3		クヌギ節	
11	〃	T-6		コナラ節	
12	〃	T-7		クリ	
13	〃	T-15		クヌギ節	
14	〃	T-19		タケ類、クヌギ節	タケ類稈厚：3mm
15	〃	T-20		クリ	
16	〃	T-25		タケ類	タケ類稈厚：6mm
17	〃	G-85		コナラ亜属	
18	〃	Ⅶ層直上	F-32bGr	クヌギ節	
19	〃	1号竪穴住居	aGr	コナラ節	
20	〃	〃	bGr	イヌシデ節	
21	〃	〃	cGr	イヌシデ節	
22	〃	〃	dGr	タケ類、コナラ節	タケ類稈厚：3mm
23	〃	7号掘立柱建物	Pit 2	タケ類、ササ類	タケ類稈厚：4mm・ササ類：φ5mm
24	〃	〃	Pit 3	タケ類、クリ	タケ類稈厚：3mm
25	〃	〃	Pit 4	タケ類、オニグルミ	タケ類稈厚：3mm
26	〃	〃	Pit 5	タケ類	タケ類稈厚：4mm
27	〃	〃	Pit 6	ケヤキ	
28	〃	T-24		クヌギ節、エノキ属	

## 第5章 考察

### 第1節 中宿在家遺跡の中近世

坂井 隆

#### 1) 遺物について

##### A 陶磁器

##### ア 舶載陶磁

本調査では、全体の遺物量に比べて比較的多い計15片の舶載陶磁片を検出した。その内容は次の通りである。

青磁	同安窯系	計 1片	碗：1片	皿：なし	その他：なし
	竜泉窯系	計12片	碗：8片	皿：4片	その他：なし
白磁		計 2片	碗：なし	皿：1片	その他：1片（瓶類）

碗類では、櫛描施文をして光沢の強い釉調を示す同安窯系の小片（37）、そして内面に片切彫の画花雲文を見せる竜泉窯系の碗口縁片（38）がある。共に12世紀代のものと考えられる。続いて13世紀代の竜泉窯系の破片として、高台内無釉の蓮弁文系のもの（45,47）と畳付まで施釉する光沢を持つもの（44）が見られる。前者はヒスイ灰色の釉色で鎬蓮弁も鋭利な秀品である。さらに14世紀前半のものでは高台外側を削ったもの（46）、また粗製の蓮弁文口縁片（40,48,49）がある。

皿類は、高台無釉で見込に片切彫雲文のある底部片（42,43）、また稜花皿口縁片（39）そして口禿げの白磁皿片（50）が13世紀代のものだろう。粗蓮弁文で高台外側を削り粗く鉄錆の付いたもの（41）は、14世紀代と考えられる。

光沢のある黄灰色の釉が全面にかけられ、畳付のみ剥がされた瓶類底部（51）は、あまり類例のないものだが、13世紀代のものと考えておく。

以上図示した以外に小片が、計11片見られた。その中で図示資料と同一個体の破片は5片で、残り6片（91～96）は次のように分かれる。

同安窯系碗（37）と同類の口縁片（91 釉やや白灰色）	1片
竜泉窯系碗（38）と同類の口縁（92 釉やや青灰色）・体部片（93）	2片
（45）と同類の体部片（94 釉やや緑灰色）	1片
（47）と同類の体部片（95 釉オリーブ褐色）	1片
（48）と同類の体部片（96 釉オリーブ褐色）	1片

これらの舶載陶磁は、全体に継続的な搬入と思われ、年代幅は12世紀後半から14世紀前半と考えることができる。また器形的には、碗皿類がほとんど全てである。

同安窯系青磁を含む12世紀代の舶載陶磁は、二之宮宮下東遺跡（前橋市）でまとまって発見されている以外は、上野地方での出土は他に9遺跡程度あるが量は極めて少ない（図参照）。

##### イ 国産陶磁

【近世】 肥前磁器では、碗類に染付碗（03,07）と青磁染付碗（05）そして窓絵筒型碗（11）、染付小杯（02）が見られる。他に染付（09）と色絵（08）の油壺もあった。

陶器では、京焼・畿内系（06,10,13,14）と肥前（01）の碗類、そして肥前の皿（04）が食器である。調理

## 第5章 考 察

具では堺焼締（19,20）と瀬戸美濃錆釉（18）の播り鉢片があった。調度具では、志土呂灯明皿（12）・瀬戸美濃飴釉香炉（16）・同錆釉大花瓶（15）・同褐釉壺（17）の破片が出ている。

いずれも18世紀代のもので、ほとんどは上野地方で一般的に見られるものである。むしろ、ここでの出土量は、この時期ではかなり少ないとすることができる。

【中世】 常滑系焼締の大甕口縁片（31,33）と甕胴部片（34～36）出ている。前者は14世紀後半また後者のうち34と35は14世紀前半と考えられる。産地不明の鉢片（30）は窯内で鉄分が付着したものである。

### B 土器・土製品

【近世】 瓦質の把手付塀片（22）と、土師質の狐型人形（21）のみが見られた。

【中世】 コネ鉢では瓦質（26,27）と土師質（28）がある。器壁の薄い瓦質のもの（25）は、コネ鉢か是不明。また放射状の摺り目を持つ瓦質の播り鉢（29）もあった。

近世はほとんど皆無に等しい。中世は、一般に14世紀以降に調理具として顕著に出土する塀の破片が、全く見られない点が注目される。

### C 金属製品

#### ア 銅銭

ばらばらの状態で11枚の出土があった。近世では、清銭の嘉慶通宝（74）と新寛永通宝（67,68,76）がある。中世では、唐銭の乾元重宝（73）と北宋銭の嘉祐元宝・治平元宝・熙寧元宝・元豊通宝・元祐通宝・政和通宝が各1枚ずつ見られた。熙寧元宝と政和通宝は縁が小さく、踏み返し銭の可能性はある。

いずれも一般的なものだが、清銭の嘉慶通宝の出土は稀少である。

#### イ その他

真鍮製の鈴（78）は近世のものだろう。鉄刀子（66）は古代の竪穴住居から出ているが、ここでは舶載陶磁片が多く見られ、中世の可能性が考えられる。

### D 石製品

#### ア 石塔類

宝篋印塔笠部（粗粒輝石安山岩 82,83）と五輪塔水輪（角閃石安山岩 84）が出土した。他に破片類なども少しあり、いずれも中世と考えられる。

#### イ その他

石臼（粗粒輝石安山岩 85,86）と風字硯片（頁岩 88）がある。年代は単独では確定しがたいが、いずれも近世のものであり、次項に見るように石臼（86）は、共伴遺物より18世紀代の可能性が高い。

## 2) 遺構の年代観について

上記遺物より判断される遺構の年代観は、次の通りである（数字は出土遺物）。

### A 近世

I区1号石垣	18世紀後半（03,07,08,13,16,25,33,34,35）
2号石敷	19世紀初頭（06,12,14,17,18,19,86,90）
1号貯蔵穴	18世紀中葉（01,02,11）
II区2号溝	近世（78）
3号溝	19世紀前半（10）

このように近世の遺構は、I・II区に集中している。なお、肥前染付碗（01）・小杯（02）・筒型碗（11）が

出土したと調査中に記録した1号貯蔵穴は、遺憾ながらは形状や位置の図をとることができなかった。また1号石垣中には中世後半の常滑甕片なども混じっていた。

#### B 中世

V区8号溝	12世紀後半(93)
VI区1号住	14世紀前半(30,37,40,48,66,72,77,80,87,92)
4号掘立	12世紀後半(38)
2号掘立	14世紀前半(46)

大半が、VI区に固まっている。特にグリッド出土である舶載陶磁片は、その大部分がこの掘立群の位置からであり、掘立建物で使われていたものは、上記の柱穴中で出土したものだけでなく、本遺跡の舶載陶磁の大半である可能性は極めて高い。掘立群の北側に接する1号住は、形状的には中世の方形堅穴である。ここから6点の陶磁片と2枚の北宋銭そして鉄刀子が出ている。陶磁器類の出土した高さは床面に近いが、いずれも破片である。また完存の鉄刀子は、床から30センチの高さで出ている。そのため、ここでの出土遺物は、台石(87)を除いていずれも混入の可能性が高く、それは南側の掘立群で使われていたものと考えられる。

以上により、この掘立群の年代は、周辺のピット群の展開も併せて、12世紀後半～14世紀前半の間に入ることは間違いない。方形堅穴1号住は、その終末時期に埋没したということになる。

### 3) 遺構群の性格について

#### A 近世

調査地東側に、天明の浅間山爆発後に復興した畠とそれにかかわる水路が見られる。また最東端では、同時期、即ち18世紀後半～19世紀初頭の石垣及び複数の石敷遺構また石組井戸と炉がある。

石垣より西側の石敷遺構は建物の地業である可能性は極めて高く、少なくとも主屋的なもの(3～5号石敷)と、地下倉的なもの(2号石敷)で構成されている。炉跡は、主屋の土間にかかわる竈跡である可能性が考えられる。地境の要素を持つことは間違いない石垣の東側でも、やはり建物地業の可能性が高い石敷があり、また石組井戸はこちら側に存在する。

問題は、この地境の石垣で区切られた両側が、単独の屋敷地内を構成するのか、全く別のものになるのかという点である。石垣から調査区の境界となった現存道路までの距離は、約32mほどである。この距離は単独の屋敷地の東西幅としては、決して短すぎるものではない。しかし、石垣と地下倉(2号石敷)の間はかなり接近しており、そこには小道程度しか空間が残らない。また井戸は、東側で1基しか発見されていない。そのため、両者は同一の屋敷地であったと考えるのが妥当であろう。

だが、前述のようにこの部分で発見された遺物は、同時期の上野地方の一般的な例から見て、極めて少ない。特に中山道の間近という立地点を見るならば、その貧弱性はさらに増大する。石組井戸・石組地下倉そして石垣など、屋敷構えの造成あるいは屋敷そのものには、ある程度の費用をかけた様子がうかがえるだけに、遺物の少なさは、実際の居住がほとんどなされていなかったか、洪水などにより大きく散逸してしまったかのどちらかを示しており、後者の可能性が自然だろう。

#### B 中世

調査地西端に5棟以上の掘立柱建物が集中的に配置される区画がある。この区画は、少なくとも東西45m以上、南北40m以上の広さがあり、建物群の北側には東西方向に走る浅い堀(2号水路)が見られる。

堀の南側は、庇付建物が少なくとも3棟建てられており、東端には覆屋付の井戸がある。この井戸の東側で

## 第5章 考 察

は境界の堀は、検出されていない。一方、堀の北側では、倉庫状の掘立が2棟及び方形堅穴（1号住）が見られる。興味深いことに南側の庇付建物の中で中心的な唯一の東西棟（2×5間 4面庇）のすぐ北側部分では、堀が外側へ弧状にカーブしている。この部分が区画の南北方向の中心軸であることを、十分推定させる配置である。

前述のように、堀外の方形堅穴を含めて、この区画全体では、上野地方の中にあっては十分と言える量の舶載陶磁片（12世紀後半から14世紀前半）が出土した。また他に、量は決して多くないが、コネ鉢などの調理具や北宋銭が見られた。それらの舶載陶磁は、調度具的な器種はほとんどなく、大部分が当地方では高級食器とされるものである。方形堅穴を含めるこの区画の構成は、この時点における上級武士階級とその従者群の居住地であると考えるのが妥当である。ただし、防衛構造が著しく弱い点は否定できず、それはこの屋敷の居住者の性格を示している。

なお、東に200mほど離れて宝篋印塔などの石塔群の造立が見られる。それが、この屋敷と同一の時期のものであるかについては確定しがたい。ただし、調査地最東端の近世屋敷の石垣中に見られた常滑系の甍片は14世紀代のもので、この屋敷地の廃絶と並行及び後のものである。

### 4) 中近世の中宿と周辺の遺跡

#### A 近世の中宿

17世紀後半の寛文年間には安中藩領であった中宿村の近世後期の姿は、『上野国郡村誌』（明治10年頃成立）に詳しい。そこには、次のような記載がある。

まず耕地については、総面積121町7畝の区分は下記のとおりである。

田 64町5反7畝(53%) 畠 35町1反6畝(29%) 宅地 6町7反4畝(6%) 林 14町5反8畝(12%)

水田面積が総面積の過半数であり、畠地の倍近くを占めている。これは、寛文年間の郷帳による収穫量、田457石・畠153石にはほぼ対応する状態である。畠作優先地域である上野地方にあっては、水田面積が優位であることはかなり際だった特徴である。

人口は121戸計484人（男252人・女232人）そして牡馬29頭がおり、物産に上げられるものは繭43石と生糸104貫600目である。隣接する周辺の村々の状態は、やや異なる。

	戸数	人口	田	畠	牛馬	繭	生糸	生絹	太織	その他
板鼻駅	355	1,306	12.2	143.8	牡馬21	753貫	37貫570目	30	35	梨・茄子・瓜
下野尻村	164	686	18.9	42.1	牡馬9	65石2斗	5貫818目			陶器
谷津村	233	610	27.5	46.0	牡馬7	96石5斗	62貫			蚕種(製糸場)
常木村	19	72	73.4	26.6	牡馬3	13石3斗	10貫600目			
野殿村	160	660	32.5	129.6	牡馬68	360貫	35貫500目	350	250	梨・薪他
岩井村	111	501	34.2	68.7	牡馬44	62石2斗	33貫200目	51	88	梨・薩摩芋

常木村と板鼻駅を除いて、人口はそれほど大きな差はない。ただ、耕地の状態が似ているのは、人口の少ない常木村だけである。また特産物は、生糸の生産量が製糸場のある谷津村よりも多い。

村の北側を東西に中山道が走っており、碓氷川の通行は、西の安中との間は木橋だが、東の板鼻との間は船橋である。また、中山道から南西方向に富岡に向かう一ノ宮道そして南方向に野殿・岩井村への通路が分岐している。



社寺の状態は、次の通りである。( )内は所在する字。

社 諏訪社(在家) 巖島社(在家) 白山社(山王) 天神社(下宿北) 神明社(九ノ谷戸)  
寺 蓮華寺(在家) 埋ノ薬師仏(館谷津)

このように、所在は字在家周辺と南側の丘陵裾部に偏っている。

小字には、次のものがある。( )内は『碓氷郡小字名調書』(明治14年)に記されたもの。

宿(宿裏) 堰下 道々巻 柳町 二ツ橋 上宿北 下宿北 山王(久保) 在家(寺後 田中 新田) 一町田(名榎 寺後) 石合 宮街道北 宮街道南(柳瀬端) 宮街道西 八反町 梅ノ木 岩戸(大沢野殿境) 茶臼塚(大沢) 餓鬼石 九ヶ谷戸 霧ヶ谷津 館谷津(土井ノ内) 伊勢宮下(岩井道上) 岩井道下(三ツ俣) 川向 桐ノ木 鷹巣下 更正地

なお、中山道に沿った字宿には、道筋と直交する短冊形地割りが集中して見られ、ここに町並みが続いていた。それは中山道絵図(文化3年作図)にも描かれている。

以上のように、近世後期～幕末頃の中宿は、周辺では例外的に水田耕作を優先させている村だが、少なくとも幕末以降には生糸の生産が拡大している。交通が発達しており、村の北側を通る中山道の両側には、町並みが続いていた。また、寺社はむしろ中山道から離れた字在家と南部丘陵裾にかたまっていた状態と見ることができる。

## B 中世の伝承

中宿の中世にかかわるものとしては、第一に本調査地と同じ小字内にある蓮華寺(現天台宗)の創建とこれにかかわる伝承がある。

近世の地誌『安中志』によれば、蓮華寺は、寛喜3(1231)年に臨済宗長楽寺(承久3(1221)年開山で新田郡尾島町所在)開山の栄朝が、創建したとされる。栄朝の高弟である栄西は、上野那波郡の出身で、もともと上野には縁があった(蓮華寺と中宿の名が記された最古の記録は、福德2(1491)年「於上州中宿蓮花寺書寫了」(溪嵐拾葉集奥書)である。)

『安中志』には、次の伝説が記されている。

- 1 ア 栄朝は仏像・経巻を牛に積んで諸国を行脚する イ 中宿に来て牛が突然倒れる ウ 仏法に縁があるとして、寺を建てる

実は同様の伝説は、長楽寺そのものの開山にも残っている(「長楽寺記」)。

- 2 ア 栄朝は叡山を岡部六弥太のために秘法を行ったことで追放される イ 栄西から禅を学ぶ ウ 白い牛に乗って東国に向かう エ 新田庄世良田郷に来た時、牛が臥して立ち上がらなくなる オ 岡部六弥太の援助で世良田に寺を建設し、牛は境内に牛石として残る

栄朝と牛に関する伝説は、伊勢崎市馬見塚にもある。

- 3 ア 建仁2(1202)年、栄朝は京より牛に乗って世良田に向かう イ 馬見塚の入り口の土橋(「三ツ橋」)で麻疹の子供を抱えた旅の夫婦に出会う ウ 栄朝が牛の上に置いていた松の小枝を子供にかざして、麻疹を治す エ 橋のたもとに捨てた松の小枝が根付く

高僧と牛の頓死に関する伝説は、藪塚本町にも残っている。

- 4A ア 藪田智明房(桐生崇禅寺開基)は法然の弟子になって修行を積む イ 出身地の桐生に帰国する際に、法然より阿弥陀像をもらう ウ 阿弥陀像を牛に積んで上野に戻ったところ、藪塚で牛が死ぬ エ ここで供養塚をたてる  
4B ア 東伝士啓禪師(鎌倉建長寺45世)が崇禅寺へ石塔を送る イ 石塔を運んだ牛が倒れて死ぬ

## 第5章 考 察

### ウ 供養のために石塔をたてる

現在、藪塚に残る宝篋印塔「牛之塔」にかかわる伝説である。

かつて筆者は、古代・中世の交通路と牛疲労死伝説の関係を考えたことがあったが、貴人通行と牛疲労死が合わさった伝説は、上野南部平野地域に計7例が確認できる。上記以外は、次の通りである。

#### 5 前橋市女屋町(頼朝) 6 佐波郡赤堀町五目牛(義経) 7 藤岡市牛田(義仲夫人葵御前)

これらのうち、栄朝がかかわる3では牛は死んでいないが、貴人が牛といっしょにやってくるパターンは同一であり、3も死にかけた子供を救うという形になっているが、本来この時に牛は死んでいた可能性も考えられる(根付いた松を「牛うちの松」と呼んでいる)。

ここで重要なことは、僧侶であれ武士であれ、13世紀後半の交通の実状を最も良く描いている『一遍聖絵』では、牛を運搬手段に使ったり、乗用する例が極めて少ないことである。そこには、京都とその周辺でしか、運搬手段としての牛は描かれていない。もっぱら、馬が主体であった。

つまり「牛」とは、その荷物が何であれ、当然、事実を表しているのではない。貴人が、貴重な品あるいは貴人自身を、都風の運搬具である「牛」によって運んでくることに意味がある。貴人そのものは2を除いてその場所には定着しないで去って行くが、貴人の分身である「牛」がそこで死ぬことにより、その場所が貴人と深いつながりを持つことになる。疲労死する「牛」とは、その場所の聖化を意味する象徴と思われる。

なお、ここでもかかわる義経通行伝説は、あづま道(後述)沿線に多く残っている。かつて指摘したように、それは上野地方での東西方向の幹線移動路を示していることは間違いない。

その一つが、東側の碓氷川対岸で中宿と接する板鼻での、伊勢三郎伝説である。吾妻鏡などに源義経郎党の伊勢能盛は、出生地はもちろん義経との出会いについても記録されていない。しかし、平治物語や義経記などの軍記物説話に、出会い地として板鼻・松井田・荒蒔などが語られている。

現在板鼻には、伊勢三郎邸宅跡の伝承地が残っている。それは、その場所の実体よりも、義経縁者の名がここで口承されていたことが重要である。

### C 中世の城館

中宿周辺での中世城館跡には、次のものがある。

- 1 館谷津館址 本遺跡の南側約500mの丘陵裾に位置する。字館谷津の中に「土井ノ内」という小字が見られ、該当箇所と思われる部分に、南を除く三方が堀状の細長い地割りで囲まれた部分がある。残念ながら、未調査のまま、亜鉛精錬所の用地として破壊されてしまっており、実体は不明。
- 2 野殿北屋敷 本遺跡南側の野殿丘陵上で、崖際の北端から約600m南側に位置する。長方形の堀跡(東西140m南北240m)が残っている。1987年に西側の堀について発掘調査がなされ、近世の堀であることが判明した。近世初期に旗本小幡氏が封ぜられたとの伝承があり、概ねそれに合致するものとされる。
- 3 古城館址 板鼻城の北西側に位置する。1986~88年全面発掘調査がなされて、2期にわたる計17棟の掘立建物と2基の井戸を検出した。14~15世紀頃の100年間程度の存続と報告される。山崎一氏は、文亀2(1502)年に関東管領山内上杉顕定の法事を行った依田徳昌軒館跡であり、板鼻城築城後に出丸として再使用された可能性を指摘した。
- 4 板鼻城 近世の板鼻宿北側に位置する螺旋状の大規模な郭構造(450×300mほどの楕円形 本丸と低地の比高約40m)城郭で、西の碓氷川崖上に鷹巢出丸、東側に小丸田出丸がある。上記3も出丸として使われている。1986,88年に一部を発掘調査。遺物は少量ながら、15,16世紀の遺物が多く、また13,14世紀の陶磁片も含まれている。天正11(1583)年に存在しており、永禄初年に武田信玄が築城したと山崎一

氏が想定した板鼻城が規模の点からもここであることは間違いない。ただ、発掘資料からはそれ以前の活動があったことは否定できず、前身が上記依田徳昌軒館跡がここである可能性も残る。

以上の中で、確実に中世に属する城館は3と4だけだが、3は中世前期まで遡ることはできない。4は可能性は残っている。下記のようにこの地域が中世全般に軍事的要衝としてあったことを考えると、3・4と相対する碓氷川右岸の1の内容が古いものであったかもしれない。

## 5) 交通拠点としての中宿・板鼻 (第27図)

### A 中山道

板鼻と安中は、中山道の宿場であった。特に板鼻は上野国内の宿では最大の賑わいを見せた宿場と言われている。江戸から板鼻は14番目、安中は15番目である。中宿は、文字通り両者の間に位置しているが、単独の中山道の宿場として数えられていない。ただし、嘉永5(1852)年の板鼻宿明細帳には、東の八幡(現高崎市八幡町)から西の中宿までを含めている。

近世の中山道の形成は、おそらく後北条氏時代には整備され初めていた可能性が高く、天正11(1583)年には板鼻の「上宿町人衆中」宛に出された北条氏の禁制(「福田文書北条氏邦印判状」)が見られる。この時点で、すでに木戸の設置や「町人かしら」の存在など、近世の宿の体裁はかなり整っていた感じである。寛政3(1791)年の記録では、本陣1・脇本陣1・旅籠屋43・茶屋15となり、安中宿(天保14(1843)年本陣1・脇本陣2・旅籠屋17)とはかなり規模が異なっている。

中宿は、文化3(1806)年の「中山道分間延絵図」には、街道に沿った家並みの中に、一里塚(両側)・高札(北側)が描かれている。南側の一里塚の近傍には、「十王堂」と「円乗院」という堂宇があり(前述『郡村誌』にはなし)、家並みの途絶えた東の碓氷川近くには水車が見える。東の板鼻との境の碓氷川には、「仮土橋」がかかっており、そのたもと両岸それぞれに私領(安中藩領)と御領(天領)の傍示杭が建てられている。

この絵図に記された他の宿場間の村と比べて、やや戸数が劣る感じがある。沿道を中心に描かれていることもあるが、ここには本遺跡周辺は記載されていない。概して街道から見渡せない範囲は描写がかなり少ないが、本遺跡地周辺も特筆に値するものがなかったことを示しているだろう。ただし、蓮華寺は御朱印地と書かれている。

以上のように、街道沿いに比べての貧弱さは、調査で検出した近世の状況と合致する。

ただし、ここで注意を要するのは一里塚の西に南に向かう枝道が描かれ、そこに「上野国一ノ宮道三里」と書かれていることである。一ノ宮へ中山道から向かう道は、他には西の安中宿内に「脇道小幡町江三里半七日市町江二里半一之宮江二里半」と「村道一之宮江出ル道法二里半」しかない。この中宿からの一ノ宮貫前神社へ向かう道は、前述の字で宮街道と記されたもので、そのまま南西方向に向かって現在の安中市下間仁田・上間仁田そして富岡市上黒岩・黒川・七日市を経て、一ノ宮に通じている。安中宿からの「脇道」と「村道」も、碓氷川を渡ってこの宮街道に合流する。

中宿は、中山道では唯一碓氷川の右岸(南側)に位置しており、南西方向に10キロ離れた一ノ宮へ向かうには最適の場所である。

## 第5章 考 察

### B あづま道・鎌倉街道

#### 1 文献資料・軍事要衝

前述のように、中宿そのものの文献での初現は、13世紀前半の蓮華寺の創建伝承を除いて、15世紀末である。しかし、板鼻についての記録は、次のように多く見られる。

- |   |             |  |
|---|-------------|--|
| ア | 13世紀中葉      | 板鼻別宮（高崎市八幡町八幡神社）の預所は守護安達景盛「関東御教書写」：『榊葉集』 |
| イ | 弘安 3（1280）年 | 時宗 <small>もんみょうじ</small> 聞名寺開山伝承：『寺明細帳』  |
| ウ | 正和 3（1314）年 | 「鎬河・山な・倉賀野・豊岡・坂（板）鼻・松井田」：『宴曲抄』           |
| エ | 鎌倉後期        | 「山名板鼻松井田宿」：『曾我物語』                        |
| オ | 元弘 3（1333）年 | 「八幡庄」へ甲斐・信濃源氏軍：『神明鏡』                     |
| カ | 建武 3（1336）年 | 「板鼻合戦」：『佐野義綱軍忠状』                         |
| キ | 建武 4（1337）年 | 八幡庄他が守護領として上杉憲顕に預ける：『上杉文書 高師直奉書』         |
| ク | 応安 4（1371）年 | 「（山名）郷宿在家壱字孫五郎跡」：『比丘尼妙本寄進状』              |
| ケ | 永享12（1440）年 | 信州勢防衛のため長尾景仲「板鼻へ着陣」結城合戦：『上杉憲実書状安保文書』     |
| コ | 文亀 2（1502）年 | 「板鼻道場」「管領御館」管領顕定母13回忌「板鼻庄海竜寺」：『談柄』       |
| サ | 室町期         | 「大井・伴の里・碓氷川・板鼻・佐野・山本の里」：謡曲『鉢木』           |
| シ | 天正10（1582）年 | 「板花之代」で北条軍、板鼻城を攻撃：『小川右京の高名覚抄』            |

以上の中で、交通要地として板鼻を記しているのが、イ・ウ・エ・サである。

イは、一遍が信濃佐久伴野の市庭から奥州へ向かった時に、板鼻の聞名寺が開山されたことになっている。『一遍聖絵』には板鼻自体は描かれていないが、この寺院の存在は13世紀後半に信濃の佐久伴野から下野を経て奥州へ向かう道筋に板鼻があったことを暗示している。一方、残りの3例は、佐久から鎌倉方向へ向かう「鎌倉街道」的なものを示している。「山本の里」を含めて鎬川と烏川の合流点に近い山名（高崎市山名町）と板鼻が共通する要地となっている。「宿」は、近世の宿場とはかなり異なったものである可能性が高いが、以上の中で松井田は「宿」と表現され、クでは山名も同様に記されている。

なお、「在家」は「住屋（屋敷）と付属耕地を一体として把握し、在家役賦課の対象としたもの」で「浜・市・津・宿など非農業生産領域ではより一般的に在家支配が維持された」（工藤敬一『国史大辞典』）とされるが、本例と同様にクでも「宿在家」が記されていることは興味深い。

次に、オ・カ・ケ・シは、板鼻が戦場になった例である。南北朝動乱（オ・カ）・結城合戦（ケ）・戦国期（シ）と関東での戦乱の際に、信州方向からの勢力との衝突点、あるいは防衛点として板鼻がなった例が多い。これは、上記の交通拠点であることと同じ原因でもあるが、地形的に碓氷川沿いでは最大の隘路を形成しているためであろう。そのため、南北朝期以前の戦乱の際も、要地として扱われた可能性は高い。

そのような交通・軍事上の拠点であるため、上野守護権力がここを把握していたことを示すのが、ア・キ・コである。中世の上野守護府がどこであったかは、15世紀の関東管領を兼ねる山内上杉氏の平井（藤岡市）移住までは不明である。しかし、板鼻周辺が守護の直轄的な場所であったことを、これらは示している。

#### 2 板鼻・中宿の存在意義

中世の上野交通における板鼻の意義について考察した山本隆志は、ここが発達した交通上の理由について「信濃－鎌倉ルートと東山道の分岐点であること、碓氷川の河川交通の一支点であること」を大きなものとしてまとめている。「信濃－鎌倉ルート」とは、いわゆる「鎌倉街道」である。1本の道ではないこの中世の幹線道

の一つが板鼻を通っていたことは、前述の文献資料より間違いない。

ただし、古代の幹線道である東山道については、延喜式段階の10世紀に、「坂本・野後・群馬・佐位・新田」の各駅があったことは確かだが、その具体的なルートについては、特に8・9世紀のものはいまだに完全に確定しがたい。

ここでは東山道問題には立ち入らないが、群馬郡西部における9世紀以降の国府推定地（前橋市元総社町）からの直線路が、板鼻に向かっていることは指摘しておく。12世紀初頭の浅間山爆発以後、その復興に際して建設された上野を東西に横切る幹線道が、あづま道である。直線路の東山道と大きく異なり、建設に直接かかわった各地の豪族の居館を結ぶジグザグ走向をとっている。

前述のように、このあづま道周辺には、牛疲労死伝説あるいは義経通行伝説が多く残っている。その点で中宿・板鼻は、大きな資料を提示している。近世地誌に記された文献上のあづま道の記載は、板鼻から西は不明だが、信濃方向への幹線路としてあづま道を定義するなら、ここを通っていたことは否定できない。

その意味で、東山道をあづま道に置き換えるなら、山本の指摘は正しい。

だが、本調査で確認したように、近世では板鼻の付属的な寒村にすぎない中宿は、中世前半において予想以上の流通拠点であった。これまでの調査で検出した古城館址と板鼻城の一部を見る時、中世前半における内容は中宿在家の居館が板鼻よりはるかに経済力において豊富である。

中宿の持つ地理的意味を考える時、前述のように碓氷川右岸にあるということ、そして近世にはここから一ノ宮への道が走っていたことを、再起する必要がある。古代以前より、上信間の交通の最大拠点は、この一ノ宮貫前神社のある場所であった。鍋川流域はもちろん、碓氷川流域のどの国境の峠を下っても、最も自然の状態で集まるのが、この場所である。貫前神社が、式内「名神大社」あるいは中世の「一ノ宮」であり続けた理由は、上野あるいは関東全域から信濃・畿内へ向かう際の山越えの拠点であったことによる。

そのことを考えれば、古代末から中世の幹線道あづま道が、ここを通っていた可能性は極めて高い。近世に「宮街道」として記憶されていた道こそが、板鼻以西のあづま道であるとするのが妥当であろう。文献に記された松井田と板鼻の間は、碓氷川沿いに通る路線も皆無とは言わないが、主要なものは一旦鍋川水系に移って一ノ宮を経ていたと思われる。もちろん、一ノ宮から鍋川流域＝甘楽回廊を東進する道も「鎌倉街道」の一つであった。

中宿の盛衰が、古代末以来の国府（前橋市元総社町周辺）に何らかの価値が残って、この一ノ宮経由ルート（あづま道）に大きな存在意義のあった時期とほぼ一致するのは、そのためだろう。

本遺跡の中世居館は、鎌倉期前後における上野守護権力と関係の深い防衛の様相の弱い施設と考えられ、それはあづま道の存在と密接にからまっている。なお防衛拠点の可能性のある館谷津館址と一体であったとも想定できる。

#### 参考文献

- |  |  |
|--|--|
| 安中市教育委員会. 1987 『板鼻城遺跡』   | 洪沢敬三. 1984 『絵巻物による日本常民生活絵引 第2巻 一遍聖絵』 平凡社   |
| . 1988A 『板鼻城遺跡二次調査報告書』   | 日本福祉大学知多半島総合研究所. 1992 『知多半島の歴史と現在』 校舎書房    |
| . 1988B 『野殿北屋敷・西殿遺跡』   | 平凡社. 1987 『日本歴史地名体系10 群馬県の地名』              |
| . 1988C 『古城遺跡』   | 薮塚本町誌編纂室. 1991 『薮塚本町誌上巻』                   |
| 五十嵐富夫. 1985 『図説 伊勢崎・佐波の歴史』 あかぎ出版   | 山崎 一. 1988 『板鼻城の成立と歴史』 『古城遺跡』 安中市教育委員会     |
| 碓氷郡志刊行会. 1973 『碓氷郡志』 上毛新聞社   | 山本隆志. 1986 『西上州における交通と守護権力』 『内陸の生活と文化』 雄山閣 |
| 群馬県史編さん委員会. 1980 『群馬県史資料編27民俗3』  | 山本光正. 1979 『中山道分間延絵図 第5巻』 東京美術             |
| 群馬県文化事業振興会. 1984 『上野国郡村誌10 碓氷郡』  |  |
| 国立歴史民俗博物館. 1993 『日本出土の貿易陶磁—東日本編—』  |  |
| 坂井 隆. 1989 『東山道・あづま道を中心とする道路遺構の考古学的特徴—上野地方の陸上交通史序論—』 『研究紀要6』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 |  |

第2節 中宿在家遺跡観察表

番号	種類	時代	産地	釉装飾	文様	器形	部位	成形	焼成
01	陶器	近世	肥前	染付		碗	口~底部		
02	磁器	近世	肥前	染付	草花文	小杯	々	歪み	高台砂
03	磁器	近世	肥前	染付		碗	々		
04	陶器	近世	肥前	染付	唐草文	皿	底部	外鑄	
05	磁器	近世	肥前	青磁染付	円文	碗	々		
06	陶器	近世	畿内系	染付	若松文	碗	々		
07	磁器	近世	肥前	染付		碗	々		
08	磁器	近世	肥前	色絵		油壺	体部		
09	磁器	近世	肥前	染付	草文	油壺	々		
10	陶器	近世	畿内系	染付	渦文	碗			
11	磁器	近世	肥前	染付	草花文窓絵	筒型碗	口縁		
12	陶器	近世	志土呂	錆釉		灯明皿	々		重ね痕
13	陶器	近世	京焼系	灰釉鉄絵		碗	口~底部		貫入
14	陶器	近世	京焼系	灰釉		碗	口縁		
15	陶器	近世	瀬戸美濃	錆釉		大花瓶	頸部		
16	陶器	近世	瀬戸美濃	飴釉		香炉	口縁		
17	陶器	近世	瀬戸美濃系	褐釉		耳壺	々		口縁上無釉
18	陶器	近世	瀬戸美濃	錆釉		播り鉢	口~底部片	左回転摺り目	灰かぶり
19	陶器	近世	堺	焼締		播り鉢	口縁		還元
20	陶器	近世	堺系	焼締		播り鉢	体部		酸化
21	土器	近世	在地	土師質	狐形	人形		型作り中空	酸化
22	土器	近世	在地	瓦質		把手塼	把手		還元
23	土器	古代	在地	土師器		坏	口~底部	右回転糸切り	酸化硬質
24	土器	古代	在地	土師質		小皿	底部	右回転糸切り	中性軟質
25	土器	中世	在地	瓦質		コネ鉢?	口縁	下位削り	還元
26	土器	中世	在地	瓦質		コネ鉢	々		還元
27	土器	中世	在地	瓦質		コネ鉢	体部	右回転糸切り	還元
28	土器	中世	在地	土師質		コネ鉢	口縁		酸化軟質
29	土器	中世	在地	瓦質		播り鉢	体部	放射摺り目	還元軟質
30	陶器	中世	不明	焼締		鉢	々		還元灰かぶり
31	陶器	中世	常滑系	焼締		大甕	々		酸化やや軟質
32	欠番								
33	陶器	中世	常滑系	焼締		大甕	口縁		酸化
34	陶器	中世	常滑系	焼締		甕	体部	窯記号叩き目	還元
35	陶器	中世	常滑系	焼締		甕	々	窯記号叩き目	還元
36	陶器	中世	常滑系	焼締		甕	々	窯記号叩き目	還元粘土塊付着
37	磁器	中世	同安窯系	青磁	櫛描文	碗	体部片		淡オリーブ色
38	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	内片切彫画花雲文	碗	口縁		オリーブ色
39	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	画花線	稜花皿	口縁		オリーブ色
40	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	蓮弁文	碗	口縁		暗オリーブ色
41	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	蓮弁文	皿	底部	高台外削り	淡オリーブ色
42	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	見込画花雲文	皿	底部		暗オリーブ色
43	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	見込画花雲文	皿	底部	畳付外傾	暗オリーブ色
44	磁器	中世	竜泉窯系	青磁		碗	底部		淡オリーブ色
45	磁器	中世	竜泉窯	青磁	鎚蓮弁文	碗	口縁底部		ヒスイ青灰色
46	磁器	中世	竜泉窯	青磁		碗	底部	高台外削り	ヒスイ青灰色
47	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	蓮弁文	碗	底部		灰青色
48	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	蓮弁文	碗	口縁		灰青色
49	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	蓮弁文	碗	口縁		暗オリーブ色
50	磁器	中世	不明	白磁	口禿げ	皿	口縁		線状窯積痕白灰色
51	磁器	中世	不明	白磁		瓶類	底部	底櫛目	灰白色

第2節 中宿在家遺跡観察表

番号	釉 調	胎 土	備 考	年 代	出 土 状 態	口径長	底径幅	器高厚	重 さ
01				18c前	I 1 1貯穴				
02	発色良		くらわんか	18c中	I 1 1貯穴	(7.6)	3.5	4.5	
03			くらわんか	18c後	I 1 1石垣2				
04				18c中	I 1 IGI層		(8.2)		
05			大明年制銘	18c中	I 1 F18I層		3.8	(2.5)	
06	細貫入			19c初	I 2石敷		(4.2)	(4.3)	
07			太明年制銘	18c前	I 1 1石垣		4		
08				18c	I 1 1石垣				
09			くらわんか	18c後	II 1 57				
10				19c前	II 1 3溝21				
11			蛸唐草	18c中	I 1 1貯穴	7.6			
12				18c初	I 1 2石敷	(10.0)			
13	貫入			18c前	I 1 1石垣1	11	3.8	5.5	
14				18c	I 1 2石敷				
15				18c?	I 表採				
16				18c前	I 1 1石垣2石敷	(16.0)	(11.0)	6.3	
17				不明	I 1 1, 2石敷	(11.0)			
18				18c?	I 1 1貯穴	24.4	10.6	9.5	
19				18c前	I 1 2石敷				
20				18c	II 1 P54		17		
21				18c	I 1 H2 19.1		3		
22				19c	I 表採				
23				9c	II E32VII層	14	6.4	4.4	
24		気泡多		11c?	I 2 T21VII層		4.6		
25		小礫多	器壁薄い		II 1 1石垣	(30.4)			
26		微砂粒			I J17 I層				
27		微砂粒	二次焼成		I 1 H14 I層		6.2		
28		砂礫			VI 2 T26				
29		微砂粒			VI I 88 I層				
30		気泡多			VI 1 住6				
31				14c後	I 1 G15,17 I層				
32									
33				14c後	I 1 1石垣				
34		黒色鋳物粒		14c前	I 1 1石垣				
35		黒色鋳物粒		14c前	I 1 1石垣3				
36	自然釉	礫含有	断面磨耗		V 表採				
37	光沢貫入	白黄色石英粒		12c後	VI 1 住5, 2 T12				
38	光沢強	灰白色		12c	VI 2, 9掘立P24				
39		灰黄色		13c	VI H84 VI層				
40		灰黄色	二次焼成	14c	VI 1 住a, 2 T11				
41	高台内無釉錆化	灰白色		14c	VI 2 T24,25,E81		(6.0)		
42	高台内無釉	灰白色		13c	VI H83BC		(6.0)		
43	貫入高台内無釉	灰白色		13c後	?表採		(6.2)		
44	光沢虫喰い高台施釉	外白黄色 内灰色		13c	V 確認面, VI 2 H83 BCトレ		(5.8)		
45	高台無釉	灰白色 黒色微粒子		13c後	VI G84 PIT				
46	高台内無釉	灰白色		14c前	VI T13,7掘立P5		5.6		
47	高台内無釉光沢	灰白色	二次焼成	14c前	VI		(5.6)		
48	貫入	灰色		14c	VI 1 住6				
49	貫入光沢	灰黄色		14c	V A B 確認面				
50	虫喰い	白灰色		13c後	VI J83				
51	貫入光沢高台施釉	黄灰色		13c?	I 表採		(8.0)		

第5章 考 察

番号	種類	時代	産地	釉装飾	文様	器形	部位	成形	焼成
52	土器	弥生	壺	弥生土器	口縁部内外面磨き須部廉状文胴上部波状文全体的なプロポーションは後期末。				
53	土器	弥生	甕	弥生土器	外面波状文		胴部		
54	土器	弥生	甕	弥生土器			〃		
55	土器	弥生	甕	弥生土器			口縁		
56	土器	古墳	杯	土師器	口縁部横などで、体部へら削り、内面などで				
57	土器	古墳	台付甕	土師器	外面へら削り、内面などで				赤褐色
58	土器	古墳	台付甕	土師器	外面へら削り、内面などで				赤褐色
59	土器	古代	在地	須恵器		坏	口～底部	上げ底	還元
60	土器	古代	在地	須恵器		坏	〃	右回転糸切り	還元
61	土器	古代	在地	須恵器		坏	底部	回転へら調整	還元
62	土器	古代	在地	須恵器		瓶	〃		還元
63	土器	古代	在地	須恵器		瓶	体部	窯記号	還元硬質
64	埴輪	古墳					破片		
65	土器	古代	在地	土師質		丸瓦	〃		
66	鉄器	中世				刀子	完形		
67	銅製	近世		新寛永通宝		銭			
68	銅製	近世		新寛永通宝	背文	銭			
69	銅製	中世	北宋	元祐通宝	草体	銭			
70	銅製	中世	北宋	政和通宝		銭			
71	銅製	中世	北宋	元豊通宝	篆体	銭			
72	銅製	中世	北宋	治平元宝		銭			
73	銅製	中世	唐	乾元重宝		銭			
74	銅製	近世	清	嘉慶通宝		銭			
75	銅製	中世	北宋	熙寧元宝	篆体	銭			
76	銅製	近世		新寛永通宝	背文	銭			
77	銅製	中世	北宋	嘉祐元宝	篆体	銭			
78	真鍮	近世				鈴			
79	石製	近代	人工ガラス			六角錐状			
80	陶器	古代	美濃	灰釉	圏線刻花	瓶類			灰白黄色
81	土器	古代	在地	須恵器		蓋	口縁		
82	石造	中世	粗粒輝石安山岩	宝篋印塔		笠			
83	石造	中世	粗粒輝石安山岩	宝篋印塔		笠			
84	石造	中世	角閃石安山岩	五輪塔		水輪			
85	石造	近世?	粗粒輝石安山岩	石白		上玉			
86	石造	近世?	粗粒輝石安山岩	石白		下玉			
87	石製	中世	粗粒輝石安山岩			台石			
88	石製	近世?	頁岩			風字硯?			
89	石造	中世	粗粒輝石安山岩			石塔片			
90	石製品		未固結凝灰岩			自然石?			
91	磁器	中世	同安窯系	青磁		碗	口縁		灰オリーブ色
92	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	内片切彫画花雲文	碗	口縁		灰青色
93	磁器	中世	竜泉窯系	青磁	内片切彫画花雲文	碗	体部		オリーブ色
94	磁器	中世	竜泉窯	青磁	鎬蓮弁文	碗	体部		灰緑色
95	磁器	中世	竜泉窯系	青磁		碗	体部		暗オリーブ色
96	磁器	中世	竜泉窯系	青磁		碗	体部		暗オリーブ色
97	石造	中世	角閃石安山岩			五輪塔			
98	石製	中世	粗粒輝石安山岩			石白			
99	石製	中世	粗粒輝石安山岩			石白			
100	石製	中世	粗粒輝石安山岩			石白			
101	石製	中世	粗粒輝石安山岩			石白			
102	石造	中世	粗粒輝石安山岩			宝篋印塔			



第2節 中宿在家遺跡觀察表

番号	釉調・色	胎土	備考	年代	出土状態	口径長	底径幅	器高厚	重さ
52	赤褐色			後期	V	13.0	6.5	19.0	
53	赤褐色			後期	V	破片			
54	赤褐色			後期	V	破片			
55	赤褐色				V	破片			
56	橙色		良好		V	13.6		7.0	
57					V				
58					V				
59				9c	V (A)23				
60				9c	II 2 E 1列石				
61				8c	VI 2 E78Ⅶ層				
62				9c	I I 22 Ⅶ層				
63				8c	V B 8溝				
64					V B水田				
65				9c	I 1 H15				
66					VI 1住1	20.2	2	0.6	
67					I 1 I層				
68					II 1 P27				
69					II 1 P43				
70			模鑄		II 1 P44				
71					II C25 II層				
72					VI 1住P2				
73					VI G83 II層				
74					VI G87 試掘				
75			模鑄		VI				
76					VI 表採				
77					VI 1住3				
78					II 1 2溝16	1.5	1.4	1.3	
79					VI 2	3.8	1.3	1.3	
80		灰白色黒色微粒子		10c ?	VI 1住7				
81				9c	II 2 E33 1列石				
82					II 1				25.8kg
83					II 1				23.1kg
84					II 1				19.1kg
85					I 1石敷				12.2kg
86					I 2石敷				19.8kg
87					VI 1住P8				13.1kg
88					I 1 E16 I層				
89					I 1 I19 I層				
90			焼成痕		I 1 2石敷				
91	光沢貫入	灰白色		12c後	VI				
92	光沢強	白灰色		12c	VI 1住a				
93	光沢強	灰黄色		12c	V (B) 8溝				
94		灰白色		13c後	VI G83 VI				
95	光沢	白灰色		14c前	VI 2 T18				
96	貫入	灰黄色		14c	VI 2 T23				
97					II 1 2号石敷				44.1kg
98					II 1 2号石敷				18.4kg
99					II 1 2号石敷				6kg
100					II 1				1.7kg
101					II 1				3.6kg
102					II 1				0.9kg



第27図 遺跡周辺図

## 第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討

石井 榮一

### 1. はじめに

中宿在家遺跡の所在する中宿は、近世期には中宿村字在家と呼ばれ、中山道に面し開けた宿である。東の板鼻宿と西の安中宿の中間に位置し、中山道の宿としては数えられておらず、板鼻宿の村内であった。隣接する板鼻宿は戦国期には存在があきらかで、近世には相当に賑わいを持った宿であった。

字在家は、中宿から南西方向にやや下がった位置にあり、本遺跡は現在の在家集落の西側、信越本線の北側で安中駅に近い。

調査地は、I区・II区・III区・IV区・V-A・B区・VI区の各調査区域からなり、このうち第VI区からは掘立柱建物址や竪穴建物址、また井戸や溝、土壌跡が確認されている。これらの遺構からは、同安・竜泉窯系と思われる陶磁器片や、石塔類・土器・土製品が出土しており、出土遺物から中世期以降、12世紀後半から14世紀前半までの年代幅内に存在した遺構と推定されている（本報告書「中宿在家遺跡の中近世」－坂井隆－に詳しい）。

また、同稿では「この区画全体では、上野地方の中にあつては十分といえる量の舶載陶磁片が出土した」とし、「それらの舶載陶磁は、調度具的な器種はほとんどなく、当地方では高級食器とされるものである」と内容を高く評価している。つまり、本遺構の住人はかなり高いレベルの生活を営んでいたことになる。

本稿ではそれらの遺構から検出された掘立柱建物址を中心に、建物の検討を試みるものである。

なお、文中で尺度或いは専門用語に文字のみの表記では内容を把握しにくいものがあり、本論のみ以下の通りの表記方法を用いることとした。例えば各建物址の規模や、細部寸法はメートルを用い、他は尺を用いる。また、柱と柱の間を示す場合は一間と漢数字で表記することとする。

### 2. 遺構の概要

中宿在家遺跡は、北側に碓氷川が作り出した河岸段丘、南側に観音山丘陵の連なりが控え、その間を流れる碓氷川とその支流である柳瀬川に挟まれた位置にある。柳瀬川は過去に何回となく洪水をおこしていることが今回の調査で判明している。柳瀬川流域は、平安時代には水田の耕作が行われ、約300年程の間続いていた。その後、天仁元年（1108）の浅間山の噴火により付近は埋没し、その後本遺構が構築されたものである。

遺構の下層からは平安時代末期頃の用水跡、またV-B区からは水田跡が検出されている。古代には、ほぼ中山道と同一ルートを通っていたと推定される「東山道」が、また中世には「あづま道」の存在が遺跡の北側に推定されている。板鼻宿辺りからは、上野国一宮である富岡の貫前神社へ通づる「宮街道」が分岐して南西方向に向かい走っていたとも推定され、本遺構は宮街道が南西し観音山丘陵にはいる手前、柳瀬川と接する辺りに展開している。

中世期における調査地周辺の詳細な歴史的背景については、本報告書に報告されており省略するが、周辺には中世の遺構が多く確認されている。板鼻宿北側には板鼻城が存在し、文献資料から少なくとも天正11年（1583）には記録がみられ、発掘調査等からそれ以前に遡る可能性が認められている。

また、本遺跡の南方約500m程の丘陵の中段に館谷津館址が知られていたが、調査されぬまま開発されている。さらに南側の丘陵縁辺部、字野殿には中世期と推定される野殿北屋敷が存在し、近年の発掘調査で近世期の堀も確認されている。

## 第5章 考 察

この他、本遺構のある字在家には天台宗蓮華寺（旧臨濟宗）がある。同寺は世良田の臨濟宗長楽寺（承久3年（1221））を開山した僧榮朝により開山したと伝えられている。新田義季に招かれた榮朝は世良田に向かう途中在家において夢を見、当寺を開いたとの伝承が残っている。また板鼻宿にある聞名寺は、一遍上人により弘安3年（1280）に開山されたとの寺伝が残っており、本遺構が存在していた13世紀には両寺院とも存在していた可能性が強い。

これらのことから、本遺構周辺は中世からの歴史的背景が裏づけられている。

次に、遺構から検出された柱穴に基づき建物を想定し、それぞれの内容の検討を加えてみる。

### 3. 掘立柱建物群の検討

#### 1号掘立柱建物址

本遺構は2号水路の北西外側、1号竪穴建物址の東側に隣接して検出されている。北側角及び北側中央の柱穴は溝により切られ、確認はできないが、恐らく存在していたものと思われる。長軸（桁方向）は東西で二間、総長4.2m、短軸（梁方向）は南北で二間、総長は3.4mである。中央に柱穴が確認されていることから、総柱建物と思われ、桁行は西に約30度振れる配置となっている。

柱間寸法は、桁行が約14尺の二つ割で一間7尺、梁間は約12尺を二つ割とし、一間が6尺となっている。特徴としては、桁方向の柱間は一応約7尺間に設定をしているが、かなり大まかである。梁方向の通芯交点と直交していない。しかし、桁行の柱間を約7尺としていること、軸線の設定は2・4・5号の各遺構と同様に南東に振れている。

#### 2号掘立柱建物址

本遺構は、平安時代末期と推定される5号溝が入り込んでいたため、柱穴の一部は確認できなかった。また、遺構の南西部分を構成すると思われる部分は、調査範囲外であるため確認はできなかったが、凡そ建物の規模は推定できた。

遺構の概要は長軸（桁方向）は東西で13.2m、短軸（梁方向）は南北で6.8mの規模である。桁行は南東方向に30度程振れている。柱穴の検出状況を見ると、ほぼ各通芯交点には柱穴が確認できる。このうち主体をなす2.12mグリットで、約7尺間構成される範囲は身舎部分で、梁間方向二間、桁方向五間から成っている。

柱穴の検出状況を精査すると、規模は身舎部では直径約500～550mm、外周部では300～350mm程度ある。

さらに、外周には四面にわたり庇或いは縁等と想定される柱穴が検出され、重なった柱穴もみられた。しかし身舎部では少なく、総じて検出状況は明瞭で、建て替え等はなく、修理などが若干行われた程度であろう。

次に建物遺構の規模及び寸法を検討する。まず身舎部分の桁方向総長は35.97尺、梁方向14.19尺となる。この寸法値から柱間寸法を算出すると、およそ桁行は7.2尺、梁間は7.1尺の寸法により計画されていることが推定できる。また4面に回る柱穴は、何れも身舎柱から3.96尺の出である。

P5・P6・P11の柱穴には柱痕跡が確認されている。特にP6には顕著に残っており、直径110mm程度、深さは200mm程度、また、P11は直径200mm深さ200mmである。このP6・P11はいずれも本建物址では身舎部に位置する柱である。またP5にも柱痕跡が検出され、直径110mm程度、深さは520mm程度である。これらの柱痕跡は、発掘状況等から見ると、建物を取り壊した際の柱材の引抜き痕であろう。他の柱穴と同様の覆土が検出されている。厳密には当時使用されていた柱材の寸法と見るのは早計だが、凡そこの寸法に近い径を持つ材料であったことはまちがいないであろう。

いずれにしても、本項で検討した2号建物址はほぼ7尺の柱間寸法を正確に用い、且つ桁行・梁行の通芯を

### 第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討

直交させ、柱穴を穿っており、究めて高い技術レベルを認めることができる。このように、正確に柱間寸法や通芯を設定し建てる建物は、平面的には畳等の敷込みや、建具などの柱間装置が他の遺構に比べ多用されていたと推定できる。また、規模も隣接して建つ4号建物址と共に本遺構中最も大きい。

遺構の存在時期は、出土した陶磁器などから下限は14世紀前半と推定されている。建物の精度・規模等から推定するなら、本遺構中でも最も中心をなす建物、つまり主殿的な存在であったと考えられる。

#### 3号掘立柱建物址

本遺構は2号水路の北西外側に一部を接するように検出されている。長軸(桁方向)は南北で二間、総長3.6m、短軸(梁行)は東西で二間で、総長は2.6mである。中央に柱穴が確認されていることから、総柱建物で、桁行が約6度西に振れる配置となっている。柱間寸法は、桁行が約12尺の二つ割で一間6尺、梁間は約9尺を二つ割とし、一間が4.5尺となっている。

柱穴は数カ所に重複或いは切りあって検出されており、若干の改修など、手が加わっているようである。柱穴を構成する土層は他の遺構と差が無く、この状況を見る限り年代的差は認められない。しかし桁行の柱間を6尺としていること、軸線の設定をほぼ南北に合わせており、他の遺構とは明らかに異なっている等の点から考えると、2号・4号建物址などとは異なる時期の遺構と思われる。

#### 4号掘立柱建物址

本遺構の南側に5号溝が入り込んでいたため、柱穴の一部は確認できなかったが、規模及び内容の検討はできた。

遺構の概要は短軸(梁方向)は東西で総長6.0m、長軸(桁方向)は南北で総長12.7mの規模、桁行は南西方向に30度程振れている。柱穴の検出状況を見ると、ほぼ各通芯交点に柱穴が確認できる総柱建物と思われる。このうち、建物の主体をなす約7尺グリットで構成される範囲は身舎部分で、梁間二間、桁行五間から成っている。さらに、その外周には四面にわたり庇或いは縁等と想定される柱穴が検出されているが、それ以上の平面的な広がりはない。

柱穴の検出状況を精査すると、身舎部側通りでは直径約400～500mm、中通り及び外周部では200～350mm程度ある。想定遺構範囲の主体を成すと思われる柱穴は総じて明瞭であるが、軸線を特定できない柱穴や、規模・掘りの浅い柱穴等が多数検出されており、他の遺構を圧倒している。

2号掘立柱建物址と同様に遺構の構築精度は高く、各通芯は正確に直交しており、ほぼその交点に柱穴が掘られている。

その他、下屋回りの柱穴をみると南側及び西側に多数が確認されているが、柱穴の深さは他に比べ浅い。西側はかなり作り替えているように見え、庇などのしっかりした建物を考えるには少し簡易な印象は残る。2号建物址と隣接していることなどから考えあわせれば、縁或いは廊下を想定しても不自然ではない。

次に規模及び寸法であるが、身舎部分では桁方向の総長が41.9尺、梁方向では19.8尺となる。また4面に回る庇或いは縁と思われる通りは、いずれも身舎柱から東側通りでは3.3尺、西側通りでは2.64尺、南側通りでは2.97尺、北側通りでは2.31尺の出である。身舎部の柱間寸法を検討してみると、おおよそ梁方向では14.2尺で、一間では7.1尺となる。桁行では五間の柱間中、南寄りの三間は20.8尺、一間あたり約7尺の寸法になる。しかし北寄りの二間は15.9尺で、一間は約8尺となる。

ここで問題としておきたいのが、なぜ一棟の建物で梁方向は7.1尺と一定にしておきながら、桁方向のみ7尺と8尺の二通りの柱間寸法を採用しているかである。

そこで試案であるが、南寄り三間では建具や畳等をしつらえた表向きの部屋、一方北寄りの二間はそれらを

## 第5章 考 察

あまり使用する必要のない部屋であったのではないだろうか。例えば土間或いは板敷き・竹スノコ等で構成され、塗壁或いは網代壁等の壁材で構成された空間であるなら、7尺の柱間寸法にする必要がない。中世では造作材や建具等の使用は高価で貴重なものであり、その利用は必要最低限の範囲であったと考えるのが妥当である。このような状況を考え併せるなら、本建物址が二通りの柱間寸法を使用していたことは、複数の機能を持った部屋が併存する建物、例えば台所や居間等の居住空間と接客等を目的とした空間が併存した建物等が想定できる。

本建物址の存在時期であるが、出土遺物等から12世紀後半を上限としており、遺構中では最も初期の建物址である。範囲内には他の建物址に比べ多数の柱穴が検出されており、数度の立て替えや改修などが行われたものと推定でき、生活が色濃く反映した建物であったとの想定ができる。

炊事場等の機能を持つ建物について、保立道久氏は「煙出と釜殿」（『絵巻物の建築を読む』東京大学出版会－1966.11－）の論考で「主殿が荒廃した後も従者等が残っている限り、修理しながら使用したものであろう」との解釈をされている。つまり人の生活にはなくてはならない機能を持つ建物であるなら、長期間存在した可能性は十分に考えられるのである。

ここでもう一点注目しておきたいのが、本建物址と2号建物址との位置関係である。2号建物址に対して、本建物址は軸線を直交するように配され、さらに隣棟間隔を7尺としているなど、計画的に配置している点である。2号建物址の存在時期は14世紀前半を上限としていることから、両建物は年代的にズレがある。しかし本建物址が長期間に亘り存在していた可能性は高く、規模的にみても14世紀前半には2号建物址と共に本遺構の中心をなす建物であったと想定できる。

### 5号掘立柱建物址

本遺構は、4号掘立柱建物址の北東側に約7尺の隣棟間隔をおいて検出されている。長軸（桁方向）は南北で三間、総長7.2m、短軸（梁方向）は東西で二間、総長は5.2mある。梁方向の柱間寸法は大変不揃いで、特に南側の通りは顕著で、その差は約0.35m程である。

桁行は約30度西に振れ、南東角の一部が5号溝に掛かっている。北側及び東側に庇或いは下屋と思われる柱穴が確認される。

身舎部分の柱間寸法は桁行では約20.8尺の三つ割、一間は6.9尺、梁間は北側二間が7尺間、南側通りのみ約13尺で二つ間割としているが、西側は6尺、東側7尺としている。東側には出約3.6尺、北側は約3尺及び約3.6尺の下屋或いは庇と思われる柱穴が確認できる。

柱穴は、北側二間四方は各通芯が直交する位置に確認できるが、南側一間分は芯が通らない。またPA・PB・PCの柱穴低部より石がそれぞれ検出されている。本遺構群からは、柱穴から石が検出された例はなく、資料が少ないため確定はできないが、根石と考えることもできる。2号建物址からは柱痕を残す柱穴が3ヵ所確認されたが、根石の存在は見られなかった。よって本調査地内の掘立柱建物址全てに根石が用いられていたと推定するのは困難で、本建物址のように使用されていた建物もあったのであろう。

以上の点から本建物址を検討すると、他の建物址と比較し通芯の設定が曖昧で、特に南側通りは顕著である。柱間寸法の検討では、この南側一間分も含め身舎部としたが、むしろ身舎は北側の二間四方とも考えられる。南側の一間×二間の範囲は、身舎部とは構造を別とした下屋等の建て増し部と考えたほうが自然であり、柱穴の軸線のズレの意味などに無理がない。例えばこの部分は土間の様な部屋が設けられていたと考えれば、南側の柱間割のズレ等は出入口であったためと考えられるのである。

いずれにせよ、軸線の設定は他の建物址と同一で約7尺の柱間寸法としている、西に隣接して建つ4号建物

### 第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討

址との隣棟間隔を7尺としているなどの点を考え併せれば、2・4号建物址と同時期に存在していたと推定できる。

#### 6号掘立柱建物址

本遺構は、5号建物址の南側にほぼ接するように検出されている。規模は、東西方向二間で総長4.6m、南北方向も二間で、総長は4.4mである。柱間寸法は東西が7.6尺、南北が7.3尺で、総柱建物となっている。遺構は、西に約37度振れる配置となっている。

特徴としては、立地する位置からも判るように、5号建物址と極端に接しており、かつ本遺構群の主体をなすと思われる1・2・4・5号建物址とは遺構の軸線が明らかに異なっている。

遺構内の柱穴同士の切りあいは少なく、軸線位置などに大きな狂いは見られない。また、南側角の柱穴脇には16号土壌が検出されているが、調査段階での両者の結び付きについて判断しうるものは検出されていない。しかし、遺構の範囲内にあること、土壌を囲むように軸線上に柱穴が検出されていることなどから見るなら、何らかの関連を持ったものと考えたい。

以上の点から考えると、前述したように本遺構群の主体をなす建物址とは残念ながら喰い違いがあり、また少なくとも5号建物址とは年代的にも前後して存在していた建物と思われる。また、建て替えなどの痕跡はない。

#### 7号掘立柱建物址

本遺構は5号建物址の南東方向、6号溝を挟んで南側に位置している。規模は、短軸（梁方向）は東西で総長で4.6m、長軸（桁方向）は南北で総長は5.25mである。梁方向の柱間寸法は大変不揃いで、特に南側と北側の各通りでは、その差は約0.35m程である。

桁行は約30度西に振れ、南側には出3.6尺、東側には出3.9尺の庇或いは下屋と思われる柱穴が確認された。さらに、東側には孫庇と想定できる柱穴が、出5尺、幅7尺の位置に検出されており、特に東側下屋庇内には6号溝より直交して分岐した溝が入り込んでいる。また、北側中央にはやはり6号溝より分岐した溝が柱穴際まで入り込んでいる。

身舎部分の柱間寸法は、梁間では約14.2尺の二つ割で一間は7.1尺、桁行は13.9尺の二つ割で6.9尺で、総柱建物である。

本遺構は、1・2・4・5号建物址が東西軸に並び建っているのに比べ、南東方向に飛び出し、6号と8号溝とに挟まれた位置にある。柱穴を見る限り、建て替えられたり修理が施された痕跡は確認できない。また建物の向きは主たる建物址群と同じ方向で、配置的にも意味のある位置にある。また柱間寸法もほぼ同じ7尺間を用いている等の点を考えるなら、1・2・4・5号建物址と同時期と推定される。

#### 8号掘立柱建物址

2号建物址の裏側、2号水路との間には一間四方乃至二間四方面程度の掘立柱建物跡の存在が推定できる。仮に8号建物址とするが、位置的に見て2号建物址と一体になるか、別棟になるか判断の難しいところである。ここで興味深いのは、2号水路がこの部分のみ外に湾曲していることである。恐らく建物を避けるために意図的に湾曲させたものと思われ、2号建物址と同時期か或いはそれ以前から存在していたことが推定できるのである。

## 4. その他の建物址・遺構の検討

### 1号竪穴建物址

本遺構は長軸5.2m、短軸3.2mあり、長軸方向は南西に23度ほど振れている。第VI区検出の遺構中では唯一竪穴形式の建物址である。位置は2号水路の北西側に位置し、1号掘立柱建物址に隣接する。遺構の深さは確

## 第5章 考 察

認面より約0.52m程で、内側の縁3面に溝が掘込まれている。遺構中央西より及び東側縁辺部中央、また東側外部に接して2ヵ所の柱穴が検出されている。

カマド等の生活跡はなく、遺構からは同安・龍泉系の陶磁片や北宋銭・鉄刀子等が多数出土しているが、いずれも混入の可能性が強いとのこと。遺構の存在時期は、遺物などから14世紀前半以前と推定されている。

構造的には前述の柱穴のみしか確認されていないことから、建物は遺構内2ヵ所の柱穴に柱が建ち、その間に棟木を渡し、外周より椽首を掛け、草屋根を葺く簡易な建物であったと推定できる。東側外部にある柱穴は恐らく出入り口を構成するための材が建てられていたものであろう。

建物の機能としては、簡易な構造や位置から推測しても、納屋的な施設等が想定できる。本遺構とほぼ同時期と推定される神奈川県綾瀬市の宮久保遺跡（『宮久保遺跡Ⅱ－神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告15』神奈川県埋蔵文化財センター、－1988－）では「これらの建物群のある台地外縁部には堅穴状遺構があり、周囲に広がる農事用の仮設小屋と推定されて…」と堅穴建物址を位置付けている。このような事例から推定するなら、本堅穴建物址も同様な機能を持っていたことは十分に推定できる。

### 5号井戸と掘立柱址

5号建物址の北側に、5号井戸及びそれを囲むように長軸（桁方向）は南北で3.75m、短軸（梁方向）は東西で2.4mで、掘立柱建物址が検出されている。残念ながら、北角の柱穴1箇所は確認できていないが、明らかに井戸を覆う建物址であったことは間違いのないと思われる。

桁行の軸線は、1・2・4・5・7号建物址と同様に西側に30度振れており、一致する。恐らく2号水路に接するような位置には、流し或いは洗い場等の存在が考えられ、排水はこの水路に流されていたものと推定できる。

### 水路及び溝について

Ⅵ区で検出された水路或いは溝は多数あるが、そのうち掘立柱建物址との関連から見ると、南東より8号・6号の各溝と2号水路が想定できる。何れも調査段階では小規模な“素掘り溝”以上には特段の仕様は検出されていないが、流路はいずれもほぼ平行で、東北～南西間に存在している。これは地形の等高線とほぼ合致し、中央部の建物遺構が集中する部分を最も高い位置とし、南東と北西に向かって各々下り、かつ北東に向かい下っている。

次にこれらの溝や水路の構築年代であるが、先にも引用した「中宿在家遺跡の中近世」では、遺物の年代から8号溝を12世紀後半としており、4号建物址と同時期としている。しかし、6号溝及び2号水路について特定できる遺物は検出できていない。土層からの検討も、明確な年代推定はできなかった。しかし、付近での水田跡などはこの時期には確認できず、農業などに伴うものとは考えにくい。むしろ各建物間を区割りするように配置されていることから、雨落溝や、排水路等と見ることができる。

よって、本稿では6号溝及び2号水路は建物遺構群を構成する上で関連して掘られたものと想定し、同時期には存在した遺構としておく。

## 5. 屋敷配置

以上のように、本遺構内には2本の溝と1本の水路により区画がなされ、その南辺は東北方向から南西方向に延びる宮街道、また北辺は2号水路により仕切られているということになる。

建物の配置をもう一度確認すると、宮街道とほぼ平行に12世紀後半にはすでに存在していたと見られる8号溝が走る。宮街道との間は約15m程。残念ながらその間に建物があったか不明である。さらに北西に9m程の



### 第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討

位置にやはりほぼ平行して6号溝が走っている。ただこの6号溝の存在時期については時期の検討をする遺物がなく、明確ではない。この6号と8号溝間には7号掘立柱建物址がある。

8号溝のさらに北西には、2号水路が約16mの距離でやはりほぼ平行に走っている。この間に、本遺構の中心をなすと思われる2・4・5号建物址及び5号井戸が位置している。この2本の溝・水路及び建物址の配置から推定する限り、本遺構が立地する敷地形状はほぼ当地区の地盤形状と符合しており、柳瀬川と碓氷川の間形成された微高地の最上部、かつ突端部に立地していたと推定できる。

あえて本項では「屋敷配置」としたが、はじめに記したようにVI区を含めた本調査地は、各建物址や隣棟間隔、建物の向き等の条件を鑑みても、一連の機能分担に基づき配置された一屋敷と考えるのが妥当である。凡その屋敷規模は、南北が宮街道から2号水路までとすれば約40m、東西方向は仮に東端を5号井戸とし、西方向は調査範囲外の信越本線側にどのように展開するかは不明であるが、2号建物址を境とすれば約45m程になる。宮街道は、南西するにしたがい柳瀬川と接するが、東西方向はもう少し広がりそうである。

このような敷地範囲内に各建物址は存在していたが、出土遺物等の検討からおおよそ2期の屋敷構成が想定できるのである。I期は、本遺構の初期の段階と想定され、4号建物址を中心に構成された時期である。この時期に想定できる建物址は他にないが、屋敷南側を区画する8号溝の存在は遺物から推定されている。

恐らく若干の付属屋と共に、4号建物址が接客と居住を兼ねた機能を持っていたことは前の各建物址の検討で述べたとおりであり、本遺跡の初期の段階では中心的に存在していたものと推定できる。

その後、14世紀前半までには4号建物址の他に、西隣りに2号建物址が新たに建築され主殿として位置付けられたのではないだろうか。この時期をII期として2及び4号建物址の他、5号、7号建物址、また1号竪穴建物址や5号井戸等を含め、完成された屋敷配置を持ったと推定できる。

II期はその中心となる2・4・5号の建物址が6号溝と2号水路の間に南西向きに建ち、それぞれ隣棟間隔を7尺とし、2号建物址以外は南東、つまり宮街道側に向かい妻側をみせる配置となっている。一方唯一棟を東西に長く持つ2号建物址は、背面に8号建物址を角家風に隣接させている。

4号建物址に比べ、2号建物址は10尺ほど後方に引いて建っているため、南前面の6号溝との間に庭が存在することになる。この様に主殿の全面に庭が存在するのは、寝殿造の空間構成の影響を受けていることが想定できる。つまり2号建物址と前面の庭は、ハレの場として屋敷内で位置づけられていたのではないだろうか。太田博太郎氏は『日本住宅史の研究』(岩波書店-1984.11-)の中で、このような庭について「寝殿造において、各種の行事が行われる場所である」と定義されており、その意味からすればまさにこの庭はハレの場としての機能は十分に果たすと思われる。

一方4号建物址は主殿に対して副屋的存在と思われ、南北に長い建物は、それより東にある釜屋と想定できる5号建物址、及びその東にある5号井戸と共に本屋敷の生活を支える場として存在していたのではないだろうか。

次に6号溝の南西側にある7号建物址であるが、6号溝の南北で本屋敷の中心部と前庭部に分けるとすれば、この遺構は前庭部に存在し、一般的中世の屋敷配置等から見れば廐などが想定できるのである。しかし、調査時にはそれを裏付けるような資料の検出できなかった。強いて遺構状況を検討すると、6号溝より2筋の小規模な溝がこの遺構に向かって入り込んでいる。この溝を馬などの糞尿を流す排水路と考えるならば、この遺構が廐であったとの想定もできなくはない。

4号建物址南面には、6号溝を挟んで柵或いは塀の柱跡と思われる柱穴が東西に想定できる。長さについては、一端が調査範囲外となるため不明である。また2号水路に一部掛かって検出されている3号土壌の前、水

## 第5章 考 察

路側には柱穴が検出されている。位置的には2号と4号建物址間の延長上にあるため、橋も想定できるが、土壙周囲には柱穴も確認されることから、便所等の存在も検討できよう。

この他、本調査地からは屋敷を構成すると思われる遺構は検出されていない。Ⅵ区の調査範囲では、南東の一部が宮街道に接しているが、この範囲からは堀・土塁・柵列等の存在を示す遺構の検出はなかった。

なお、建物配置や宮街道との位置関係から推定するなら、本遺構は南東方向、宮街道に向いて表と考えるのが妥当である。

### 6. まとめ

まず建物の柱間寸法についてであるが、各建物址の精査を行い、一間7尺(2.12m)前後の数値が算定され、おおよそ本遺構で使用された数値が検討できた。柱間寸法については、建物の建築年代を推定する上で重要な資料となるが、中世では明確な数値はない(太田博太郎氏は「間中の出現」(『日本住宅史の研究』岩波書店1984.11)の論考で、14世紀から16世紀初頭までの建物の柱間寸法について検討を加えているが、8~6.5尺の数値がみられ、時代が下ると共に柱間が狭まる傾向を提示されている。)むしろ遺物から建築年代の推定ができた本遺構では、そこから算定された柱間寸法は貴重な資料であり、今後年代と柱間寸法の関係を検討する上で指標となりえる。

最後にもう一度屋敷配置について検討を加え、本稿のまとめとしたい。

まず、今まで検討してきた内容及び遺跡の立地環境・存在時期等を比較すると、神奈川県綾瀬市の宮久保遺跡が、存在時期及び内容から見て大変近い様相をもっている。まず宮久保遺跡は遺構調査から二期に分けられ、Ⅰ期は12世紀後半から13世紀前半、Ⅱ期は13世紀後半から14世紀にかけて存在していた在地領主の館と想定されており、本遺構を検討する場合1つの指標として貴重である。

その遺構からはほぼ同様の規模を持つ主殿と思われる建物址が検出されている。屋敷を形成するために必要な機能を持った付属屋的建物も検出され、明確な配置がなされている。詳細は報告書を一読願いたいだが、ここで記しておきたいのは橋口定志氏は「中世居館研究の現状と問題点」[帝京大学山梨文化財研究所シンポジウム報告集考古学と中世史研究(石井進編・名著出版社-1991.6-)]の中で、「南関東の範囲」との前提で「考古学的に見ると土塁・堀を持つような、いわゆる方形館の調査事例を集めるとほとんど14世紀以降の段階のもので、15~16世紀の時期に圧倒的に多い」との見解を示している。詳細については省略するが、大変興味深い論考である。少なくとも、宮久保遺跡のⅠ期では中世の方形館的館形式に囚われる必要のない事例として提案されている。

いままで検討を加えてきたとおり、Ⅱ期ではまとまりのある屋敷としての機能は十分持っており、またそれは出土した遺物の内容からも、在地領主クラスの屋敷であることは十分想定できるのである。しかし、立地条件から検討するならば、過去に何度となく洪水に見舞われた地域であることは調査からも判明しており、あえて不安定な場所を選地した不明確さはある。また坂井氏が指摘されているように「防衛構造が著しく弱い点は比定できず」とあるようにその感は否めない。

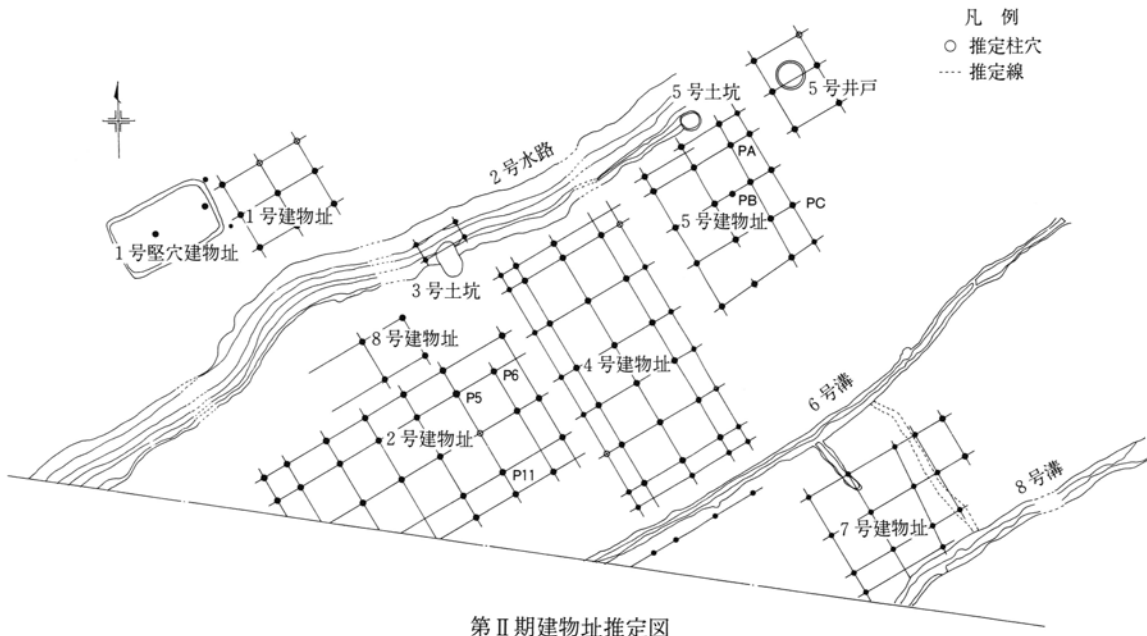
残念ながら中宿在家遺跡では、一般的な中世在地領主の館の構えとされる堀・土塁・柵列・櫓門等の備えや、建物の平面構成に見られる寝殿造の名残や、中門廊らしき痕跡は検出されなかった。しかし、橋口氏の説に従うなら、北関東ではあるが本遺構からそれらの構えが検出できないからといって、館として位置付けられない条件にはならないことになる。

『一遍上人絵伝』(鎌倉末期の作品、13世紀頃の建築様式を知ることができる)に描かれている「信濃国佐

### 第3節 VI区調査区から検出された建物遺構の検討

久郡の武士大井太郎の館」は主屋及び台所・茅葺棟・板葺棟等4棟の建物と、小川とそれに掛かる橋が描かれている。ある意味ではこの大井太郎館も本遺構に類似する内容で、武士の館に必要な櫓門や廐・土塁・堀・堀などは特に描かれていない。しかし玉井哲雄氏は、「武家住宅」（『絵巻物の建築を読む』前掲）の中で「…中世武士の館に廐や、防御的な堀等がまったくないとは考えられないので、この大井太郎の館の場合にはそのような要素は絵画として省略したと考えるのが自然であろう」との解釈を加えている。しかし、考古事例には12世紀後半の館に土塁や堀などの防御的構えが絶対条件ではないことは、先の橋口氏も述べているとおりである。垣や柵列の必要性は十分に考えられるが、残念ながら本遺構にはそれらの痕跡は検出されていない。

この疑問を明らかにする資料はないが、北には東山道の存在が十分に推定でき、板鼻宿辺りで分岐し南西方向に走る「宮街道」が敷地の南辺を走る。まさに交易上からは重要な地点であったことは十分に推定できる。また前掲の坂井氏は「これらの舶載陶磁は、全体に継続的な搬入と思われ、」と推定されている。本遺構は、12世紀後半から14世紀前半に掛けて継続的に存在しており、このような様々な状況から判断する限り、例えば南側の観音山丘陵北面に存在していた館谷津館の領主などとの繋がりから本屋敷を検討するのが順当であろう。つまり背後に館を構えた領主が、交易上重要な拠点として何らかの役割を与えて設置した屋敷と考えるのは十分に可能であろう。



第II期建物址推定図

## 第4節 ま と め

中宿在家遺跡は古代東山道に位置していると想定される。この地域は従前より発掘調査が行われることは少なかった。今回中宿在家遺跡の発掘により東山道以外の道の存在を再確認するとともに東山道の交通の要衝としての道・街道の重要性を改めて示した。一つには交通の要衝における政治勢力のぶつかり合い、また2つ目に政治面と密接な関連をもつと理解できる経済の面、つまり物の流通経済の問題等を上げることができる。

まず今回中宿在家遺跡で検出されたⅥ区の掘立柱建物7棟の周辺から中国製陶磁器の出土が目される。群馬県内をみても竜泉窯・同案窯の製品が出土する例は非常に少ない。中宿在家遺跡で出土した中国製陶磁器の年代はほぼ13世紀～14世紀に限られ、当時の日本国内の流通経路から推察すれば東山道板鼻を中心として中宿在家遺跡がその中でルート上に何らかの拘わりをもっていた意味づけができる。陶磁器に伴い掘立柱建物の意味も同様に考えることが可能になる。おそらくこの陶磁器類は東山道のルートから上野東部、信州さらには日本海側上越への交易を想起させる。

そこで13世紀から14世紀にかけての中宿在家遺跡の周辺の環境を考えてみると、13世紀と言えば鎌倉幕府の成立後、源家一族の直系の血が絶え、執権家北条一族が実権を握っている。特に北条得宗家が要職を占める時期に当たる。上野守護は鎌倉初期有力御家人である安達氏がその任にあった。やがて安達一族が霜月騒動の結果鎌倉幕府から失脚すると、板鼻を中心とした中宿在家遺跡周辺は北条得宗家直轄の所領となる。安達氏から北条家へ移領することから本地域が鎌倉幕府の中でも重要な位置にあったことが伺える。板鼻から信州へぬけると別所がある。ここもまた北条得宗家の直轄の地である、つまり鎌倉から信州別所へ行くにはこの板鼻を通過することになる。また実際人が通過しなくとも物の行き来を考えてもこの板鼻を中心とした地域が北関東と上越、信州等への重要な道である。事実鎌倉街道は武蔵の国から上野南部に入り西北にルートを取り山名を越えやがて板鼻へ到着する。板鼻はまた東上野、越後等のルートへの分岐点ともなる。このような重要な地点であるがゆえ安達や北条が所領としたと考えられる。新田が上野で挙兵し、越後、甲州勢と合流しその後武蔵を攻めたとの文献がある。義貞の生まれは板鼻の周辺的美郷であるとの伝承もあり、鎌倉幕府崩壊時の新田義貞が挙兵したときに越後勢、信州勢と合流した所がここ板鼻であるとの見解もある。

さて室町時代になると本地域の南現在の藤岡市に関東管領上杉家の白井城がある。山ノ内上杉の拠点となる城である。板鼻海龍寺で関東管領上杉家の法要があった記載がある。また板鼻に管領家の屋敷があったとの伝承もあり、やはり板鼻を中心とした地域の重要性が伺える。さて山ノ内上杉はやがて憲実の代に越後長尾輝虎に家名を譲り、輝虎は上杉謙信となる。その後板鼻地域は現箕輪町に所在する箕輪城主長野氏が伺うこととなる。が長野氏も板鼻地域を完全に押えることはできなかった。やがて長野氏は上野を伺う武田信玄との決戦を迎える。武田信玄は大部隊を率いて箕輪攻めを開始する。この結果板鼻は武田に落ちる。武田信玄が倒れ武田が衰退すると、織田信長幕下滝川一益、滝川を攻めやがて後北条氏がこの地に入ってきた。豊臣時代徳川家康が関東に入府すると井伊家が箕輪城に入城している。井伊家の領地に板鼻の地名も見える。井伊家が入城した箕輪城は戦乱の世が終わると山城としての役割を終え、井伊家も高崎城に居を移し箕輪城は廃城となる。話が箕輪に飛んだがいずれにしても箕輪を居城とした長野氏はその地の利がありながら板鼻を取る力がなかった。武田信玄に滅ぼされた時に板鼻は完全に信玄に押えられ、箕輪城を落とすことはイコールこの板鼻地域を取るということである。江戸時代初期に井伊家は彦根に転封されるが井伊家は安中領に血筋を残す。

このように13世紀から16世紀にわたり、板鼻周辺の歴史的環境を見たが鎌倉時代から江戸時代に至るまで一般的にも有名な武将たちがここに拘わっていた事がわかる。板鼻を中心とした周辺が中世から非常に重要な意

味をもっていたと理解できる。この重要性は東山道、中山道、さらには今回確認された上野一ノ宮街道としての交通の要衝にあるという事を物語っている。中世より上野の西部にあたる板鼻周辺が交通路の重要拠点としての重要性を再認識させる遺跡として中宿在家遺跡の意義を認めることができる。

さて今回あらたに発見されたもうひとつの道は本中宿在家遺跡内を南西に区切る形での宮街道である。宮街道は中世に栄えた上野一ノ宮へ通じるルートである。中宿在家遺跡のV区とVI区を分ける現道がこれにあたる。発掘の過程では確認できていなかったが線路を越え南西部にいたり現在の字名に「宮街道北」「宮街道南」「宮街道西」の字名が残っている。そして宮街道沿いにあるVI区に掘立柱建物が存在している。また別の観点からみると板鼻宿に伴う物の流通地点としての「市」等の可能はうすい。さらに言えば館跡の可能性もあるが防衛的な周囲を囲う掘りの存在がないがその可能性が強い。これらの具体的な検討は陶磁器の観点から坂井隆氏、建築学の観点から石井榮一氏に検討をいただいた。

#### 浅間山B軽石下水田

当遺跡I～VI区にわたる大部分は浅間山B軽石下（天仁元年1108年噴火軽石）水田跡が検出されている。V・VI区の高台部にもあぜ状の遺構が検出され、広い範囲で水田耕作が行われた事が分かる。また基本土層のIV層はすべての区では確認されていないが砂質層が確認され、大小の洪水かあるいは増水があった可能性を示している。（これは後代の浅間山A軽石天明3年1783年以降の耕作面も同様である。）水田面で目を引くのはII区からV区にわたり、東西に延びる大あぜである。全長は約240mを測り、水路の機能をも備えている。あぜはIII区内で堰状の集石をもつ。この東西大あぜは機能的にはあぜを挟む北側と南側の水田耕作面の高低の差を解消すると共に大きく西から東へ傾斜する地形を水田耕作を可能にしている。また大あぜと併設する水路は水田への水の供給とともに排水の機能をも備え傾斜地の水田耕作上の水管理の高い技術を伺わせる。水の管理は当遺跡一帯に供給したと思われる5号溝が確認されている。5号溝は台地上を蛇行しV区の東部でこの東西大あぜに水を落としてしている。VI区台地上でも2本の溝によりさらに高い部分の水田にも水を供給している。さらに大あぜとともに細かいあぜには水口が傾斜に沿って平行に切られ、補強材や水口の用材として人頭大から更に大きな石を使用している。水田の区画もV区のように傾斜の大きい水田では水田の区画が小さくIII・IV区のような傾斜の小さな地域では水田区画が大きい。遺跡周辺は現在も水田耕作が行われており、現代の水田も段差をもって耕作がなされている。

## Brief Summary

# Nakajuku-Zaike Site Excavation Report

### Outline

The site excavation was done by Gunma Archaeological Research Foundation in 1994 to 1995 as a rescue operation due to ongoing work on Route 18 by the Ministry of Construction. The site is located in a rural area at the west part of modern Itahana, about a hundred kilometres from Tokyo to the north-west, where there was a famous station called Itahana, set up on 'Nakasendo Road', now changed to the recent Route 18.

Itahana was very famous in Japanese history from the Ancient to the Edo period (19 c. AD). The Nakasendo has been one of the most important roads politically and economically in Japan since medieval times.

### Features

Significant artefacts unearthed during the excavation included imported ceramics (latter half of 12 c. AD to former half of 14 c. AD) from Zhejiang, China, mixed with domestic porcelains from the Kyusyu and Kinki districts. Ruins of the lifted floored houses and other road than the Nakasendo between the 5th block and the 6th block of the site were found, which were irrelevant to the historic 'Nakasendo', though the latter one was supposed to be 'Miya-kaido'.

Miya-kaido is the way to the road to the shrine, 'Ichi-nomiya' or 'Nukisaki' situated at Tomioka. The discovery of a road which was formally known only from the documents deserves people's notice.

### Main findings

Medieval period : lifted floored house, Chinese ceramics and the road to 'Nukisaki' (the top ranked shrine in Gunma at that time). The Chinese ceramics are among the most valuable findings in this excavation.

Ancient period : rice paddy field

yayoi period : rice paddy field

# 上豐岡一里塚遺跡





## 例 言

1. 本書は、一般国道18号（高崎安中道路）改築工事に伴う事前調査である。報告書には一里塚遺跡と冠してあるが江戸時代以降数度にわたり一里塚の位置は移動している。このため本報告書での発掘調査地点は現状では浅間神社の境内であった。発掘調査の結果も浅間山A軽石遺構すなわち江戸時代末期以降の遺物の出土しかなくさらにさかのぼる遺構、遺物の検出は認められていない。
2. 遺跡所在地 高崎市藤塚町
3. 事業主体 建設省高崎工事事務所
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間及び調査担当者
  - (1) 発掘調査  
調査期間 昭和63年（1989）11月22日～12月23日  
調査担当者 飯田陽一 飯塚 誠 関根慎二 樋口伸男
  - (2) 整理  
整理期間 平成4年（1992）12月11日～平成5年3月31日  
平成8年（1996）4月1日～平成9年3月31日  
整理・編集担当者 神谷佳明（平成4年度） 友廣哲也（平成8年度）
  - (3) 事務  
白石保三郎 邊見長雄 菅野 清 松本浩一 近藤 功 原田恒弘 田口紀雄 佐藤 勉 蜂巢 実  
上原啓巳 神保侑史 赤山容造 桜場一寿 能登 健 岸田治男 住谷 進 斎藤俊一 小淵 淳  
国定 均 笠原秀樹 小林昌嗣 須田朋子 吉田有光 柳岡良宏 船津 茂 高橋定義 宮崎忠司  
大澤友治 松下 登 野島のぶ江 並木綾子 今井もと子 角田みづほ 松井美智子 大島敬子  
塩浦はるみ 内山桂子 山口陽子 星野美智子 羽鳥京子 菅原淑子 佐藤美佐子
6. 報告書作成関係者  
本文執筆 関根慎二 大西雅広  
遺構写真撮影 発掘調査担当者（航空撮影）有限会社 青高館  
遺物写真撮影 佐藤元彦  
整理補助 佐藤美代子 六反田達子 島崎しづ子 角田孝子 小管優子 本多琴恵（平成4年度）  
平野照美 吉田文子 黒田紀子（旧姓鈴木） 福島和恵 吉澤照恵 深代初子  
中橋たみ子（平成8年度）  
保存処理 関 邦一 土橋まり子 北爪健二 小材浩一 樋口一之 萩原妙子  
委 託 測量 株式会社 測研
7. 出土遺物、調査図面は、一括して群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
8. 調査・報告書作成協力者  
国峯民三 熊井一雄 井艸袈裟夫

## 凡 例

1. 本報告書内の縮尺は各々の頁に付してあるが掲載の図はほぼ1/80であり、遺物は1/2、1/3である。

# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
抄 録	
第1章	発掘調査の経緯と経過……………83
第1節	遺跡の位置……………83
第2節	発掘調査に至る経過……………83
第2章	検出された遺構と遺物……………85
第1節	一里塚石垣基壇の概要……………85
第2節	一里塚石垣基壇下の遺構……………88
第3節	一里塚周辺のトレンチ調査……………94
第4節	出土遺物の検討……………97
写真図版	

## 報告書抄録

フリガナ	カミトヨオカイチリヅカイセキ
書 名	上 豊 岡 一 里 塚 遺 跡
副 書 名	一般国道18号（高崎安中道路）改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻 次	第一集
シリーズ名	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第218集
編 著 者 名	大西雅広 神谷佳明 関根慎二 友廣哲也
編 集 機 関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
所 在 地	〒377 群馬県勢多郡北橘村大字下箱田784-2
発行年月日	1996

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カミトヨオカイチリヅカ 上豊岡一里塚 遺 跡	タカサキシフジズカチヨウ 高崎市藤塚町	10202	00428	36°19'45"	138°58'00"	1989.11.22 } 1989.12.23	190m <sup>2</sup>	国道18号 改築工事

## 第1章 発掘調査の経緯と経過

### 第1節 遺跡の位置

本遺跡は高崎市の北西部、碓氷川に沿って通る国道18号線にある。一里塚は、現在高崎市豊岡町と藤塚町の字境になっている。国道18号線を挟んで南側の一里塚は高崎市豊岡町内、北側の一里塚は、藤塚町内にある。この一里塚は、五街道の一つである中山道の里程表であり、江戸日本橋から数えて28番目の一里塚と言われている。

本遺跡は八幡丘陵と碓氷川に挟まれた低地部に位置する。八幡丘陵上には縄文時代以降、観音塚古墳を主墳とした八幡古墳群などがある。本遺跡のある八幡丘陵下の低地は碓氷川の氾濫による砂層が広く堆積している。本遺跡も碓氷川の氾濫による砂層上に作られている。碓氷川をはさんで対岸の丘陵は、達磨で有名な少林山達磨寺がある岩野谷丘陵である。岩野谷丘陵には後期弥生集落や群集墳が広がる。

### 第2節 発掘調査に至る経過

現在、中山道は国道18号線と名前が変わり、首都圏と中部圏を結び新潟を經由して北陸地方を結ぶ重要な道路である。今回、交通量の増加による慢性的な交通渋滞の解消をはかるため道路幅を広げ4車線化工事を行うことになり、北側にある一里塚の一部が削平され改築されることになった。

今回改築される一里塚は、地元藤塚町の名称の由来ともなった、富士浅間神社が奉られている。以前、国道の道路拡幅工事により一度移転したことが分かっている。このため本来の一里塚とは位置や性格が異なっているのであるが、地元の慣例にしたがって遺跡名を「一里塚」とした。今回の道路拡幅工事に伴い再度移転させることとなり調査に至ったのである。昭和63年10月25日20、調査に先立ち地元藤塚公民館および発掘調査現場の一里塚において、地元関係者、建設省高崎工事事務所、県教育委員会文化財保護課、埋蔵文化財調査事業団との間で発掘調査方法、工程、地元対応等について協議を行い、11月から調査を開始した。



第28図 一里塚遺跡周辺図



第29図 遺跡位置図

## 第2章 検出された遺構と遺物

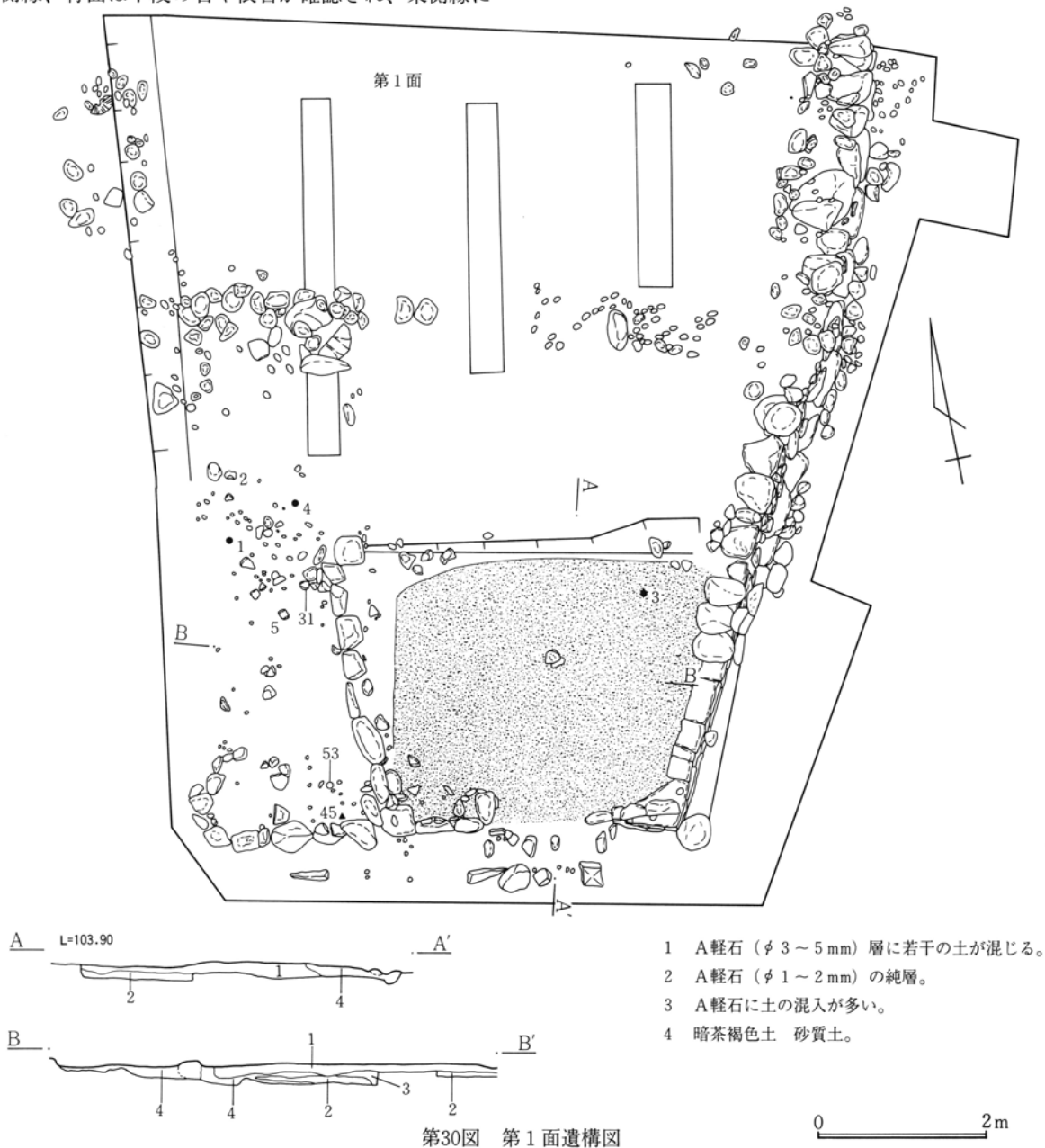
### 第1節 一里塚 石垣基壇の概要

富士浅間神社石垣基壇の前庭部からは、現地表から20~50cm掘り下げたところで、現在地に移転する以前の富士浅間神社の石垣基壇が発見された。確認された石垣は、前庭部と一部現市道下から発見された。東側縁石垣は道路の舗装直下で確認できたもので、比較的良好な形で残存していた。石垣正面と西側縁、背面は下段の石や根石が確認され、東側縁に

比べ残存状況はよくない。

調査の結果、現一里塚は拡張、移転が三回行われていることが推定された。

**第一期** 最初に作られた石垣基壇の規模は、正面が2間(3.6m)、背面が2間半(4.5m)、奥行き2間、高さ2.5尺(82cm)の台形を呈している。石垣は、切石積みである。特に、東側の石垣は、切石積みの石が明瞭に残っている。東側縁の長さ3.6mの内、



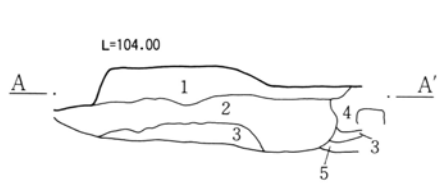
第2章 検出された遺構と遺物

約3m程の幅に切石を積み上げている。切石は、3～4段積みになっている。最上部は、煉瓦状に切り出した石を使用しており、いずれの面も平らに切り出されている。西側の石垣は、残存状態が悪く最下段の切石が残っているのみである。こちら側の石も切石で表面は平らに切り出されている。正面には、中央部に間口幅1.2m程の石垣基壇上に登る出入口が設けられているが、石段は確認できなかった。出入口の外、向かって右側には、縦横20cm、高さ50cm程の角柱状の切石が立てられている。基壇の背

面は、基部に置かれたと思われる小礫がいくつか残るのみで、石積みは残っていない。

石垣の作られた時期は、石垣が天明3年に噴火した浅間山のAs-A軽石層の上に作られていることから1783年以降と考えられる。

**第二期** 第二期では、第一期の石垣基壇の南東コーナーを基準として、北西方向に相似形を呈するように拡張している。拡張した石垣基壇の規模は、正面幅6m、奥行き6mを測る。背面の幅は、調査区外に延びており不明であるが、平面形は第一期の石



- 1 切石の破片とA軽石。
- 2 A軽石。
- 3 A軽石に砂粒が混じる。
- 4 砂粒層（茶褐色）。
- 5 A軽石のラミナ層。

0 2m

第31図 第2面遺構図

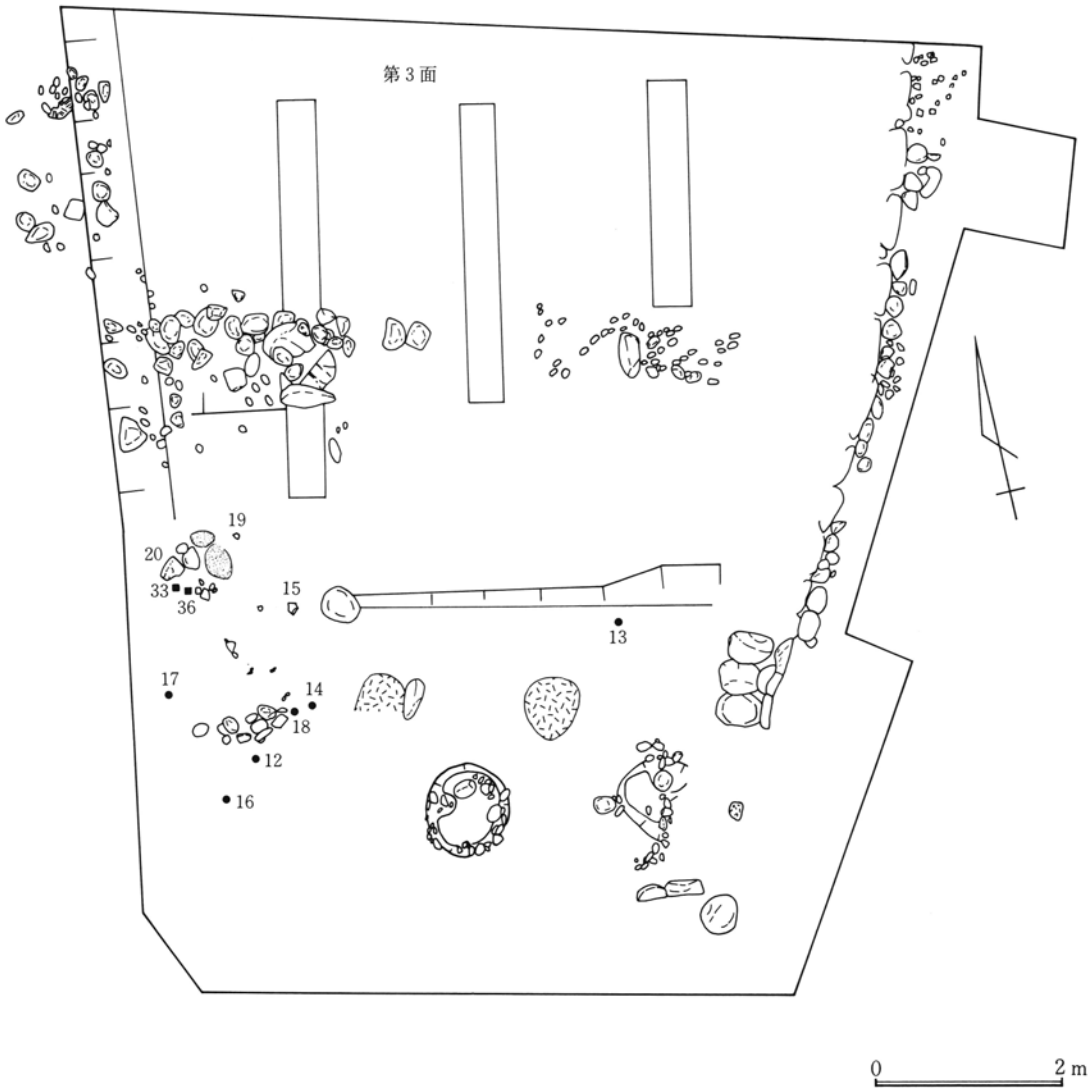
垣同様台形を呈すると思われる。拡張した部分の石垣は、東側縁と正面で第一期の切石積みの石垣に連結するように自然石を積み上げている。上段に置かれている石は比較的扁平の石を使い、石垣の高さも第一期の石垣と同じ高さでそろえている。

第二期の石垣は、石垣内から江戸時代末の陶磁器が発見されたことから、19世紀後半から終末にかけてと思われる。

**第三期** 現富士浅間神社の石垣基壇である。国道18号（中山道）の拡幅に伴う工事によって、第二期

の石垣から6m程北へ移動して作られ、現富士浅間神社の石垣基壇になったと考えられる。石垣は切石ではなく自然石を積み上げ、裏込め碎石とコンクリートによる補強がされている。正面幅下段9m、上段6.7m、奥行き下段12.8m、背面下段10.7m、上段9m、高さ3.3mを測る。

第三期の作られた時期は近代になって、中山道が国道18号へと拡幅された時期である。石垣の前庭部からは、瓦が出土しているが、この時期の富士浅間神社のものと考えられる。



第32図 第3面遺構図

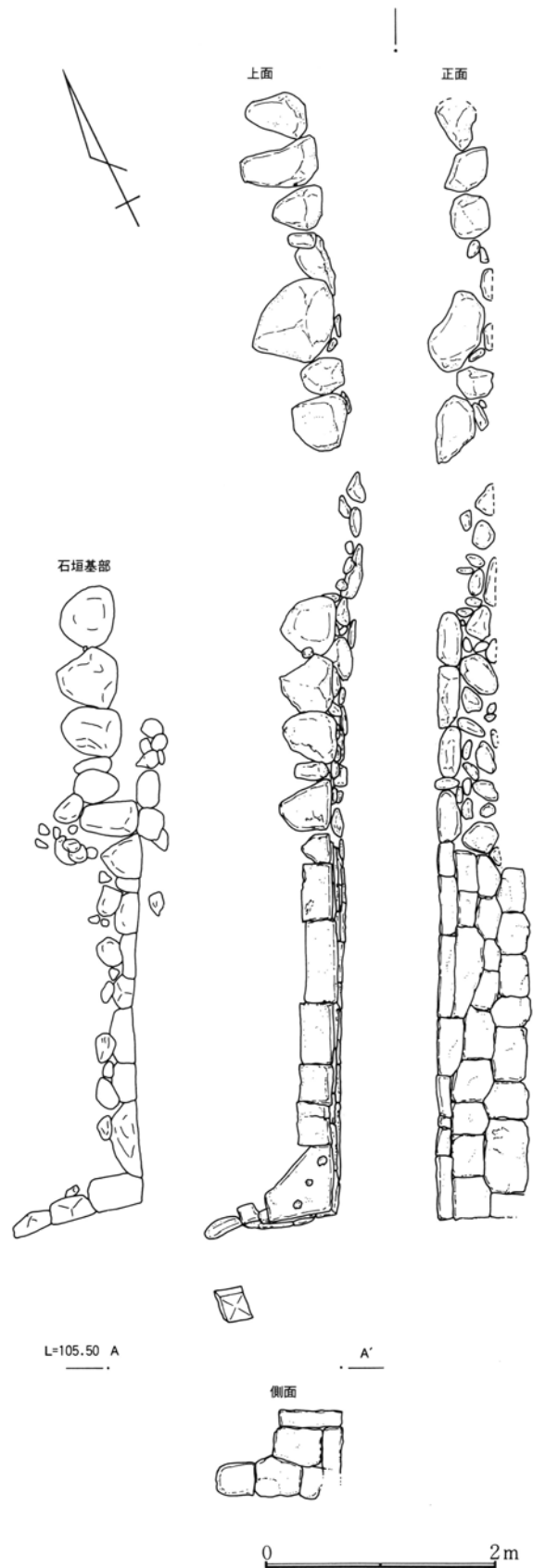
## 第2節 一里塚 石垣基壇下の遺構

富士浅間神社石垣基壇の前庭部分、石垣基底部下の浅間山As-A軽石層を除去した面で、碓氷川の氾濫砂層を地山として、地面が円形に焼けている炉址状のものが二カ所と、礫を円形に並べたものが検出された。

東側の炉址状の焼土部分は直径50cm深さ10cm程のもので、炭化物が多く混入していた。炉址周辺には自然石が置かれた状態であった。西側の炉址状のものは、東側に細長い礫を一個置いた形の炉址である。南半部分が削られているが、東側の炉址と同規模のものと考えられる。炉址内には、焼土層や炭化物が確認された。

礫を円形に並べた遺構は、直径90cmを測る。周りに拳程の自然石を並べ、地面を若干掘窪めている。浅間山A軽石層に埋もれており、焼土や炭化物は確認されなかった。この遺構の中からは、釘が1本出土している。これらの遺構周辺には、粘土の固まりが二カ所検出された他に、柱穴や建物の礎石になるようなものは検出できなかった。

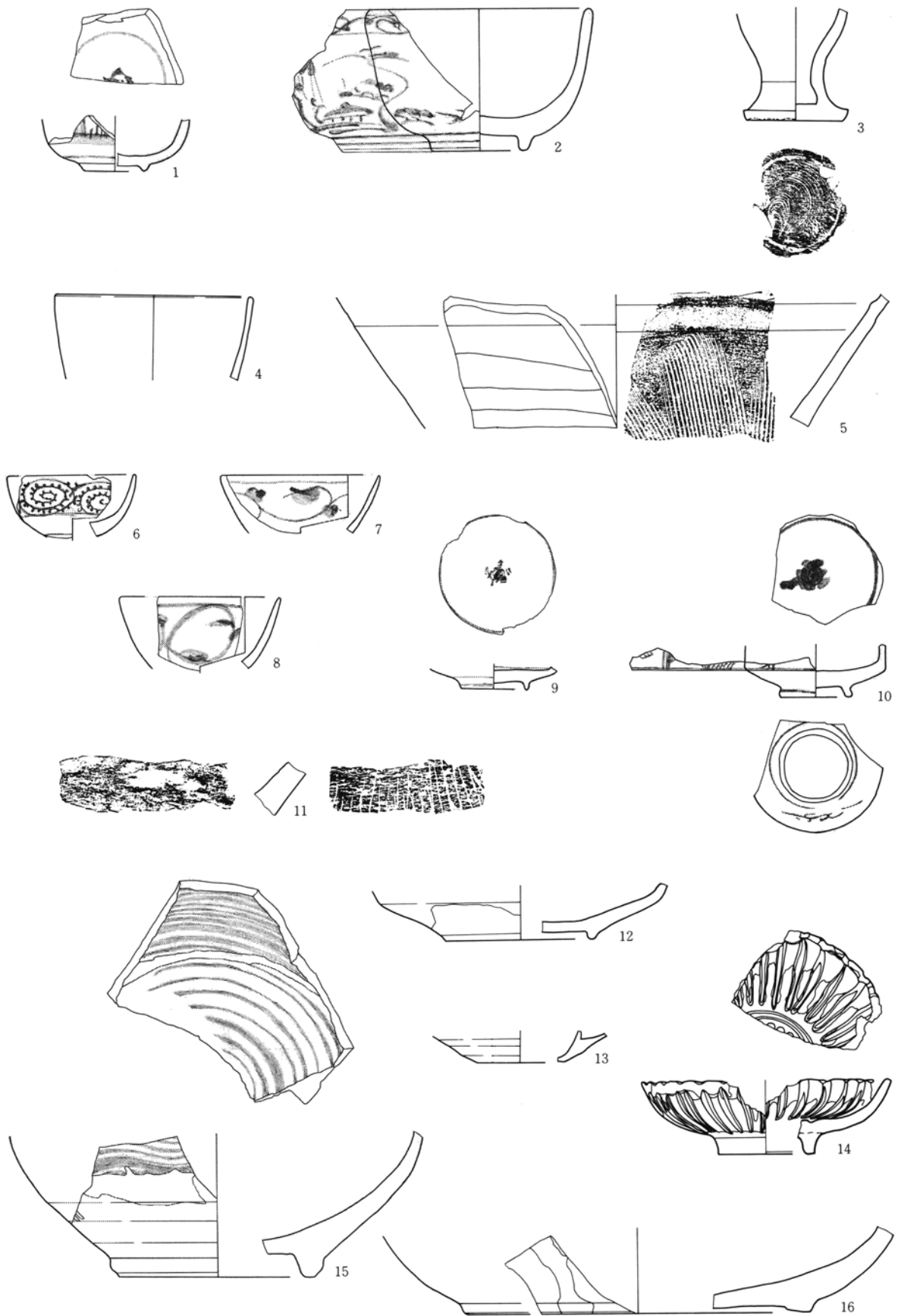
調査地のA軽石層下から発見された遺物は、釘、砥石、陶磁器、銭等である。



第33図 石垣遺構図

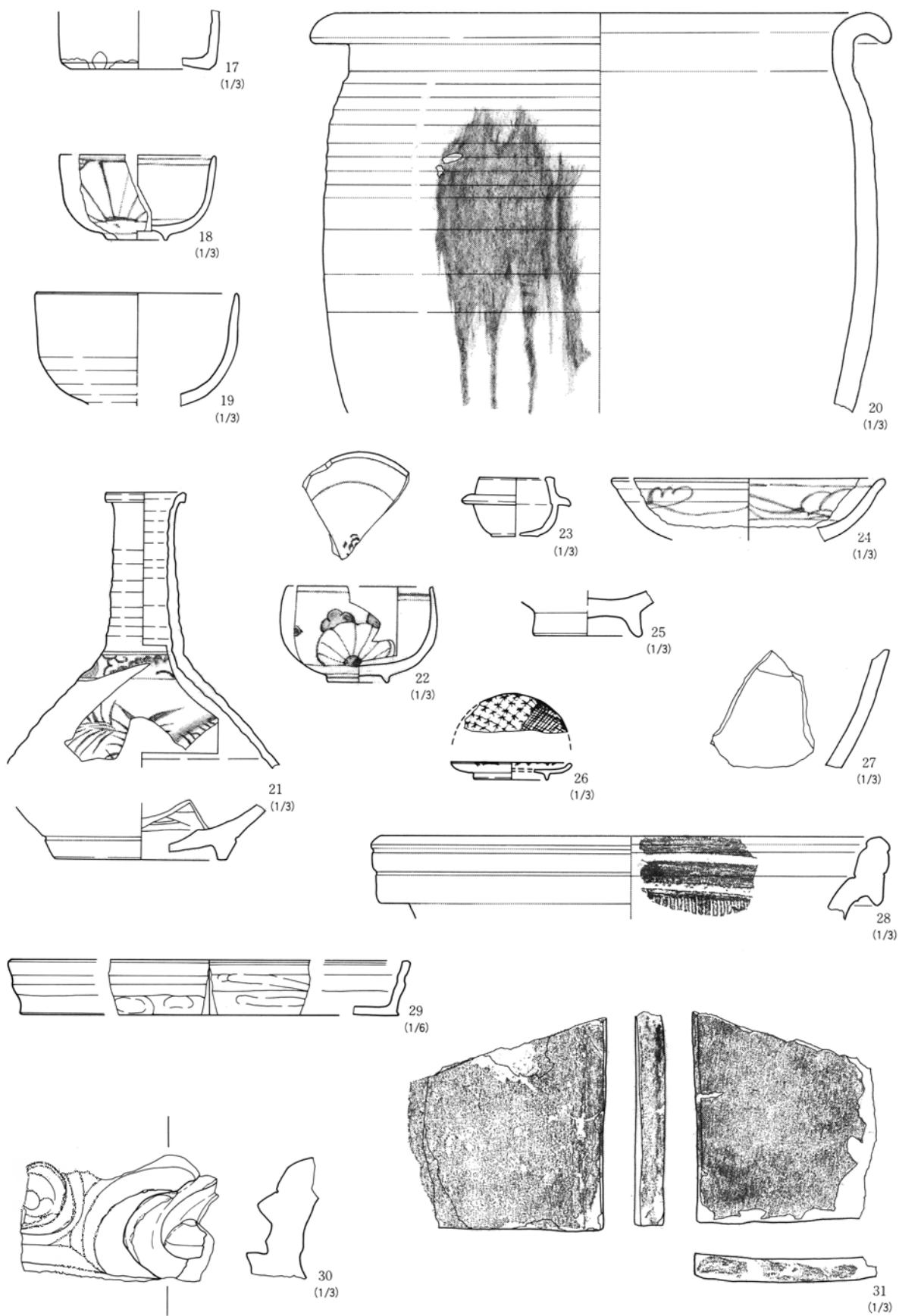


第2節 一里塚 石垣基壇下の遺構



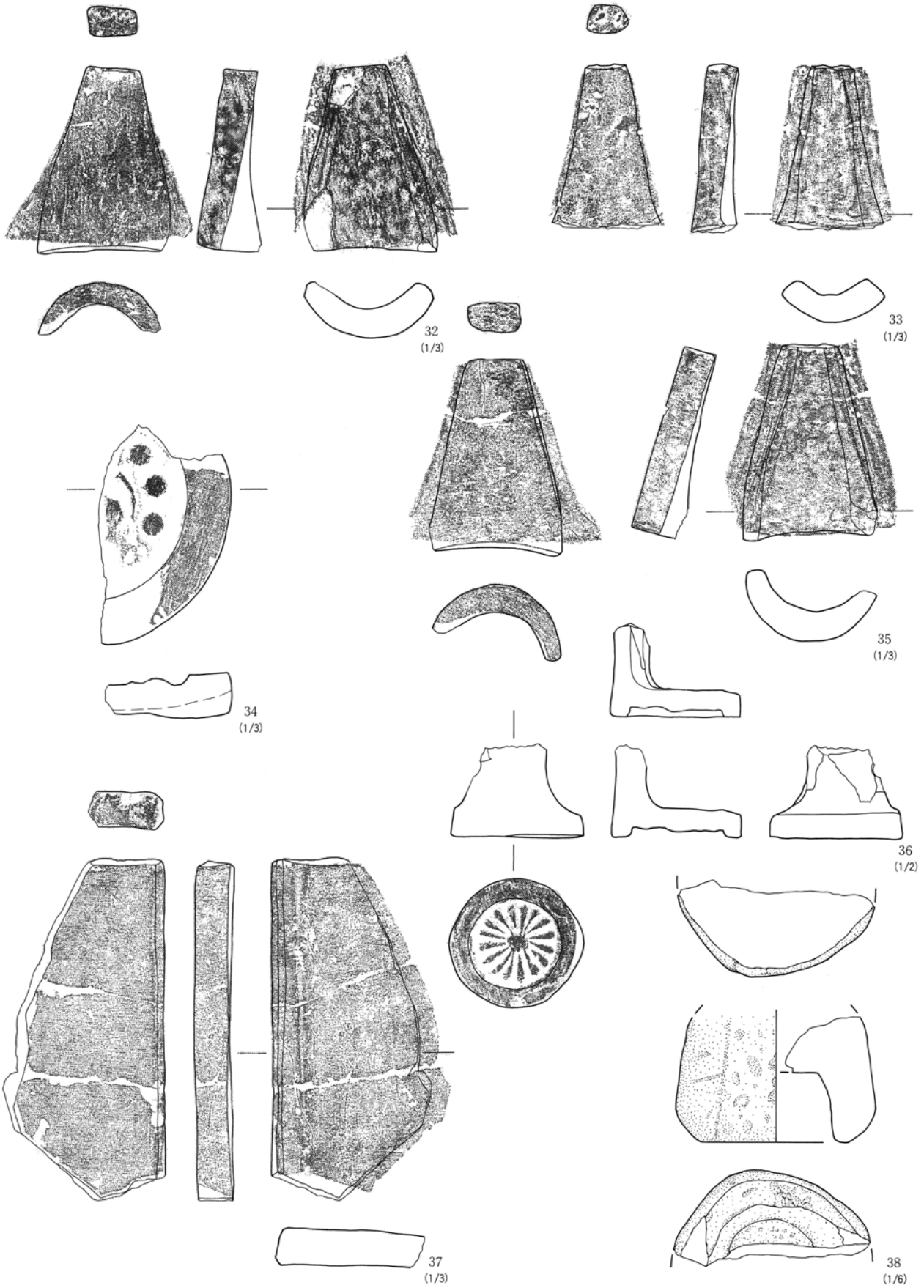
第34図 出土遺物 (縮尺1/3)

第2章 検出された遺構と遺物

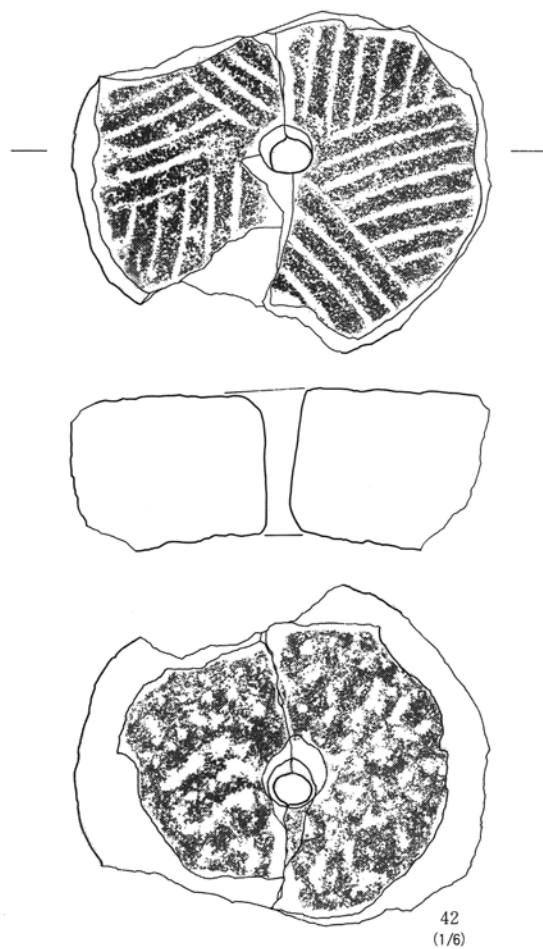
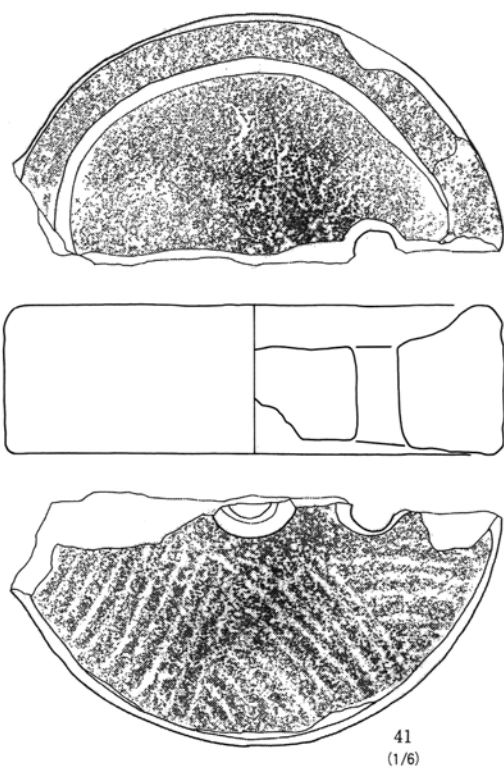
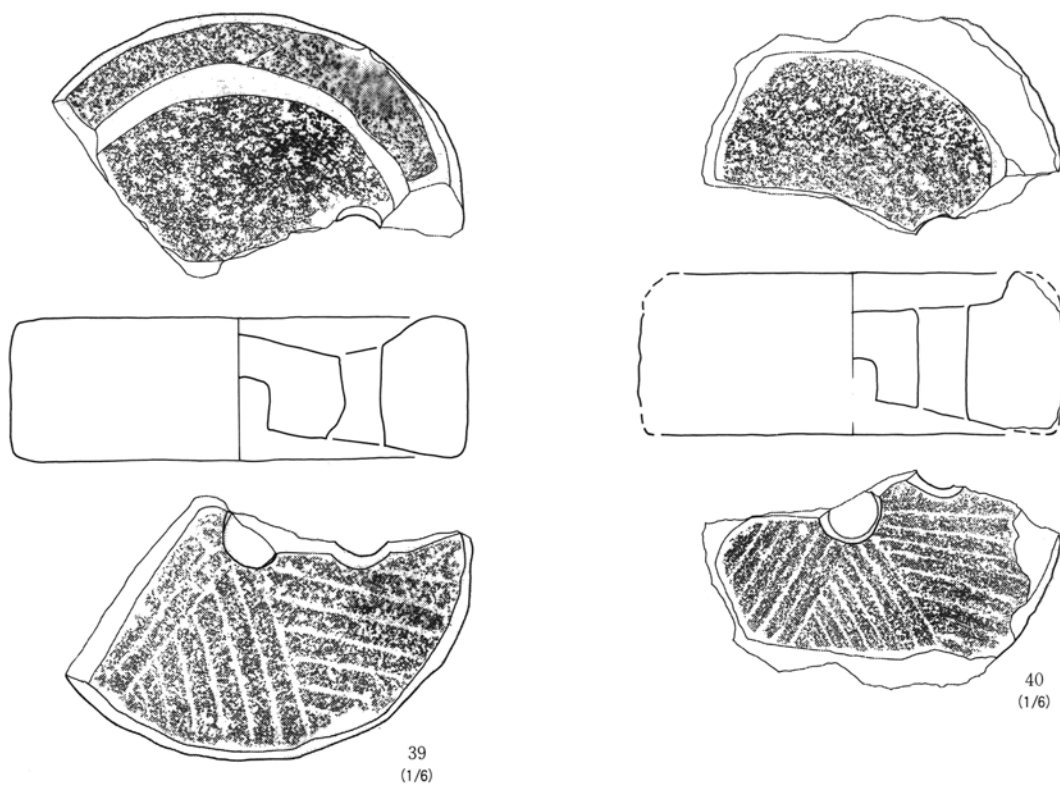


第35図 出土遺物

第2節 一里塚 石垣基壇下の遺構

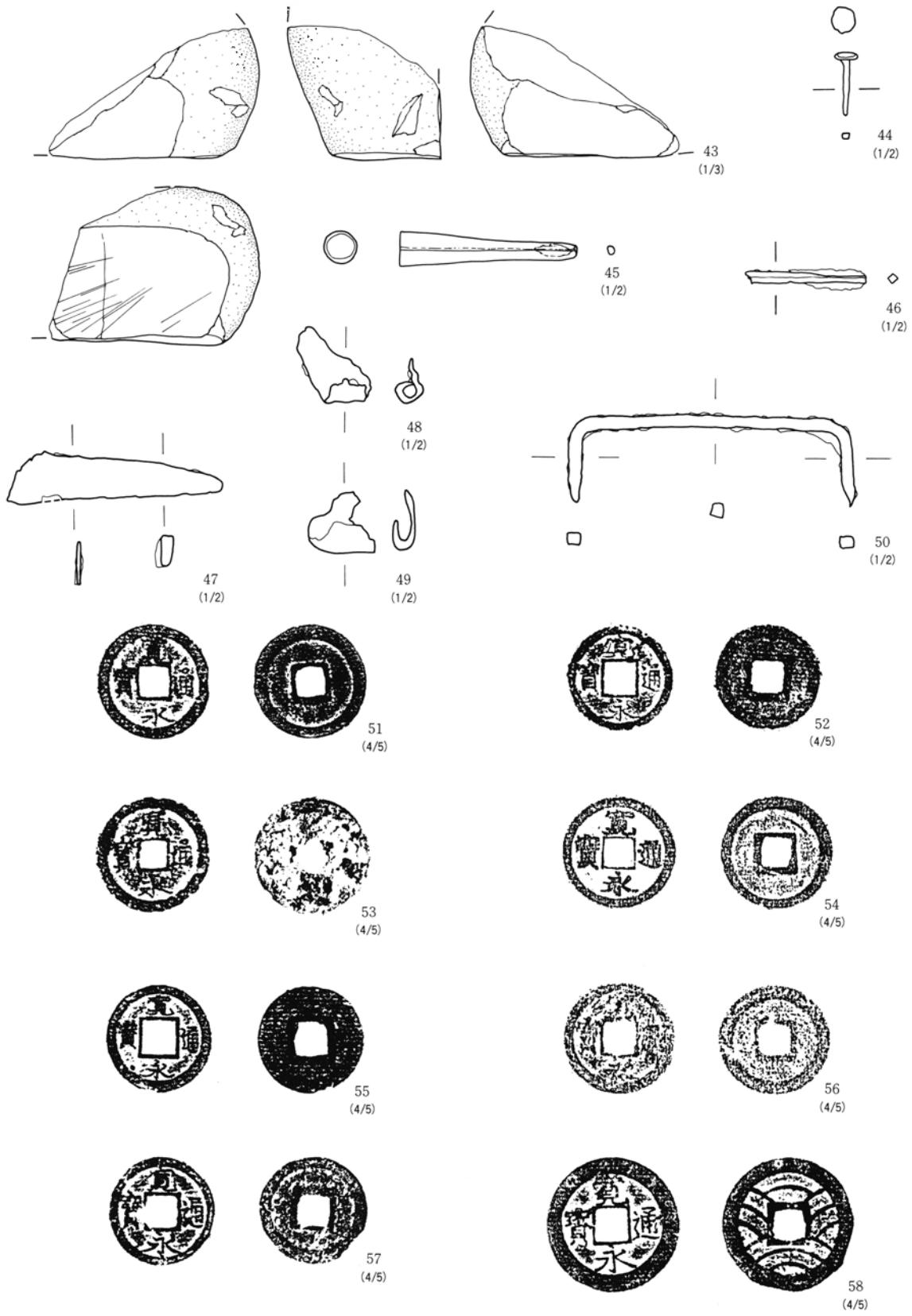


第36図 出土遺物



第37図 出土遺物

第2節 一里塚 石垣基壇下の遺構



第38図 出土遺物

### 第3節 一里塚周辺のトレンチ調査

一里塚の調査に合わせて、南側にある上豊岡一里塚の西側縁部と、国道18号線北側の道路拡幅部分に試掘トレンチを入れた。

第1トレンチは、今回調査した一里塚の西側縁部の調査トレンチである。一里塚から続く石垣基壇状のものは発見されなかった。キセル、鉄製品や陶磁器が若干出土している。第2トレンチとしたのは、一里塚に関連する遺構が検出されるか確認のため、対面の上豊岡地内にある一里塚の西側縁部に、試掘トレンチを入れたものである。このトレンチからは、遺構・遺物は確認されなかった。

第3トレンチから第6トレンチは、国道18号線の北側拡幅部分についての試掘トレンチである。いずれのトレンチも表土から、碓氷川氾濫砂層までの調査であった。

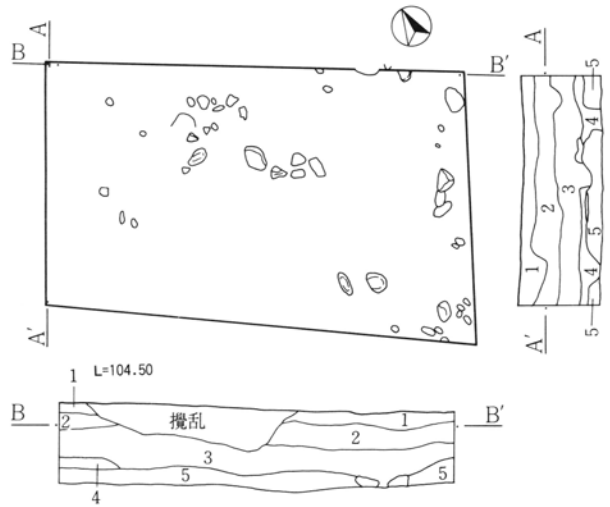
第4トレンチでは、畑の溝状遺構が数条確認された。溝は、碓氷川の氾濫砂層によって埋もれていた。第5トレンチでは、灰層の濃く分布するところと、粘土を礫で囲んだものが検出された。竈状の遺構かとも考えられるが、これ以上の調査はできなかった。第6トレンチでは、洪水と思われる土層の堆積状況が確認された。

第3トレンチから第6トレンチにかけて焼土層・炭化物混じり層が見られるのは、明治中頃にこの付近で大火があり、その時の痕跡と考えられる。

また、一里塚下からは、浅間A軽石層の堆積が比較的良好に確認されたのであるが、他のトレンチでは、砂層とA軽石が混じった状態のものが多かった。軽石混じりの砂層が多く入り、土層が乱れているのは、碓氷川の氾濫によるものである。この付近一帯は、昭和18年に碓氷川に堤防が作られるまでは、毎年のように洪水の被害があったと言われている。特に、明治43年8月に碓氷川の増水による被害は、大きなもので、床上浸水170戸、田畑流失254丁歩の被害を出したものである。

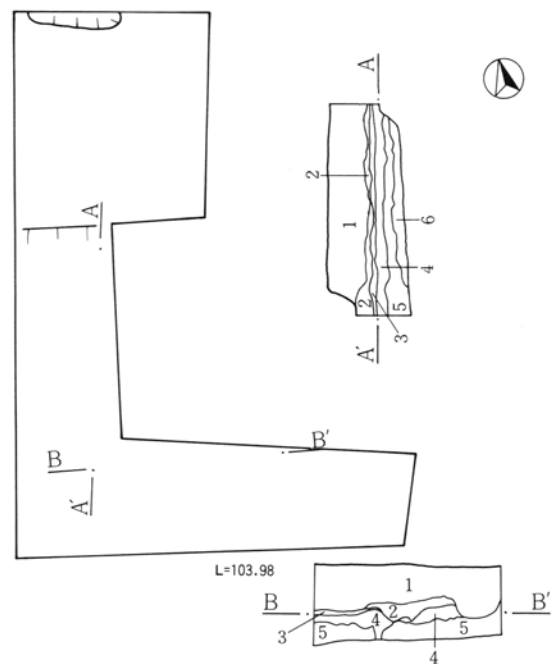
出土した遺物は、江戸時代後期から明治時代にかけての陶磁器、砥石、銭等である。

第1トレンチ



- 1 明茶褐色土 砂質土。
- 2 暗褐色土 φ5~10mmの軽石（FPか）含む。しまり良い。
- 3 茶褐色土 φ1~3mmの軽石（FPか）含む。粘性あり。炭化物、焼土多い。
- 4 明茶褐色土 A軽石を若干含む。炭化物、粘性あり。
- 5 褐色土 軽石をほとんど含まない。焼土、炭化物を含む。

第2トレンチ

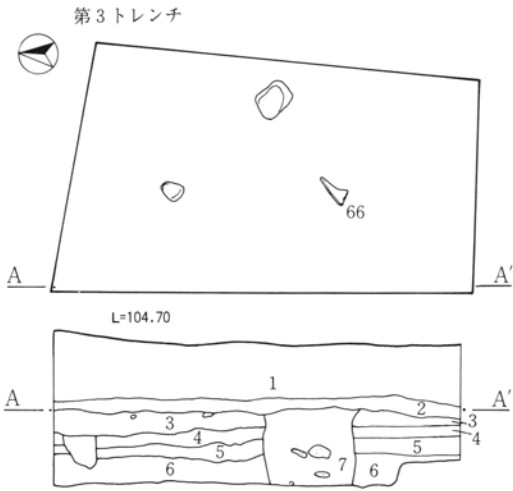


- 1 表土
- 2 砂層、A軽石の流れた物が混じる。
- 3 黄褐色土 砂層、鉄分で赤くなっている部分がある。西第1トレンチと同じ層。炭化物含む。
- 4 暗褐色土 粘性あり。炭化物、A軽石を含む。
- 5 明褐色土 やや粘性があるが、4層に比べ砂質土、炭化物を含む。
- 6 砂礫層

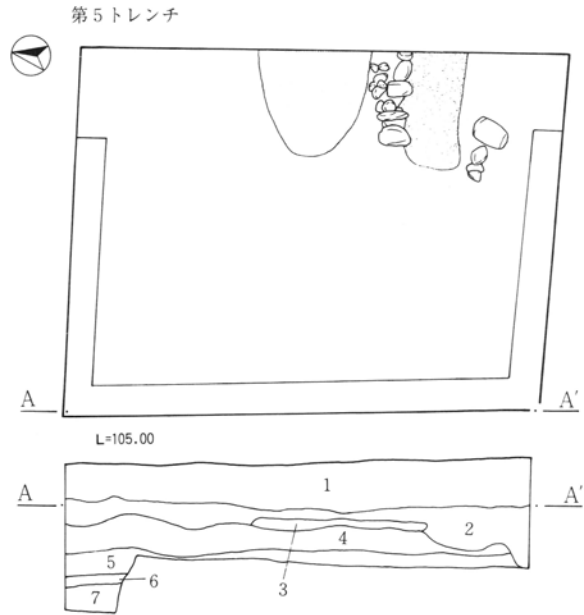
0 2 m

第39図 第1・2トレンチ

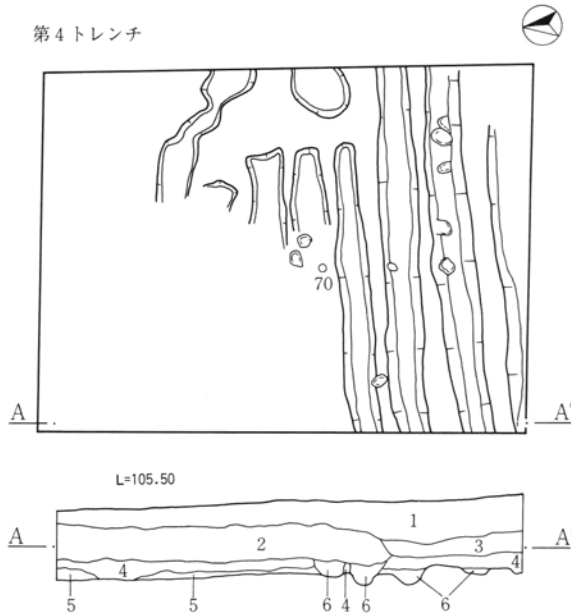
第3節 一里塚周辺のトレンチ調査



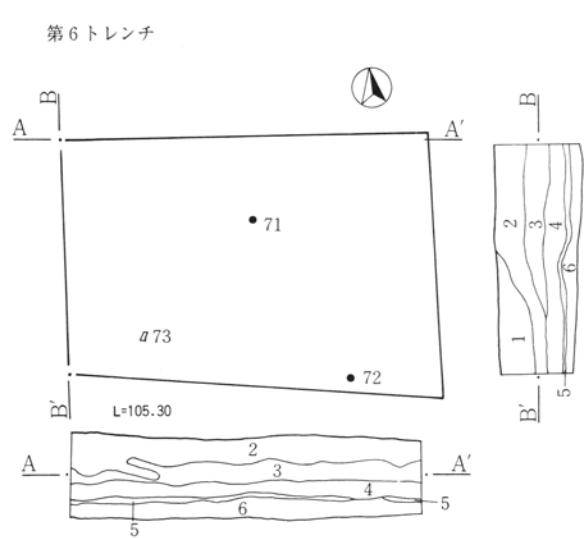
- 1 表土
- 2 黄褐色土 砂質土。
- 3 茶褐色土 A軽石、炭化物を含む。
- 4 茶褐色土 A軽石は3より少なく炭化物が多い。
- 5 明茶褐色土 砂質土、若干のA軽石を含む。
- 6 茶褐色土 砂質土。
- 7 褐色土 炭化物、礫を含む。円筒形の落ち込み。



- 1 表土 礫、A軽石混入。
- 2 明茶褐色土 砂質土、炭化物混入。
- 3 茶褐色土 炭化物の層が認められる。
- 4 明茶褐色土 砂質土。
- 5 茶褐色土 砂質土。
- 6 砂層
- 7 茶褐色土 砂質土。



- 1 表土
- 2 表土の攪乱層 ビニール、炭化物混入。
- 3 表土の攪乱層 ビニール、炭化物混入。2より炭化物多い。
- 4 茶褐色土 砂質土、A軽石を若干含む。炭化物混入。
- 5 明茶褐色土 砂質土。
- 6 砂層

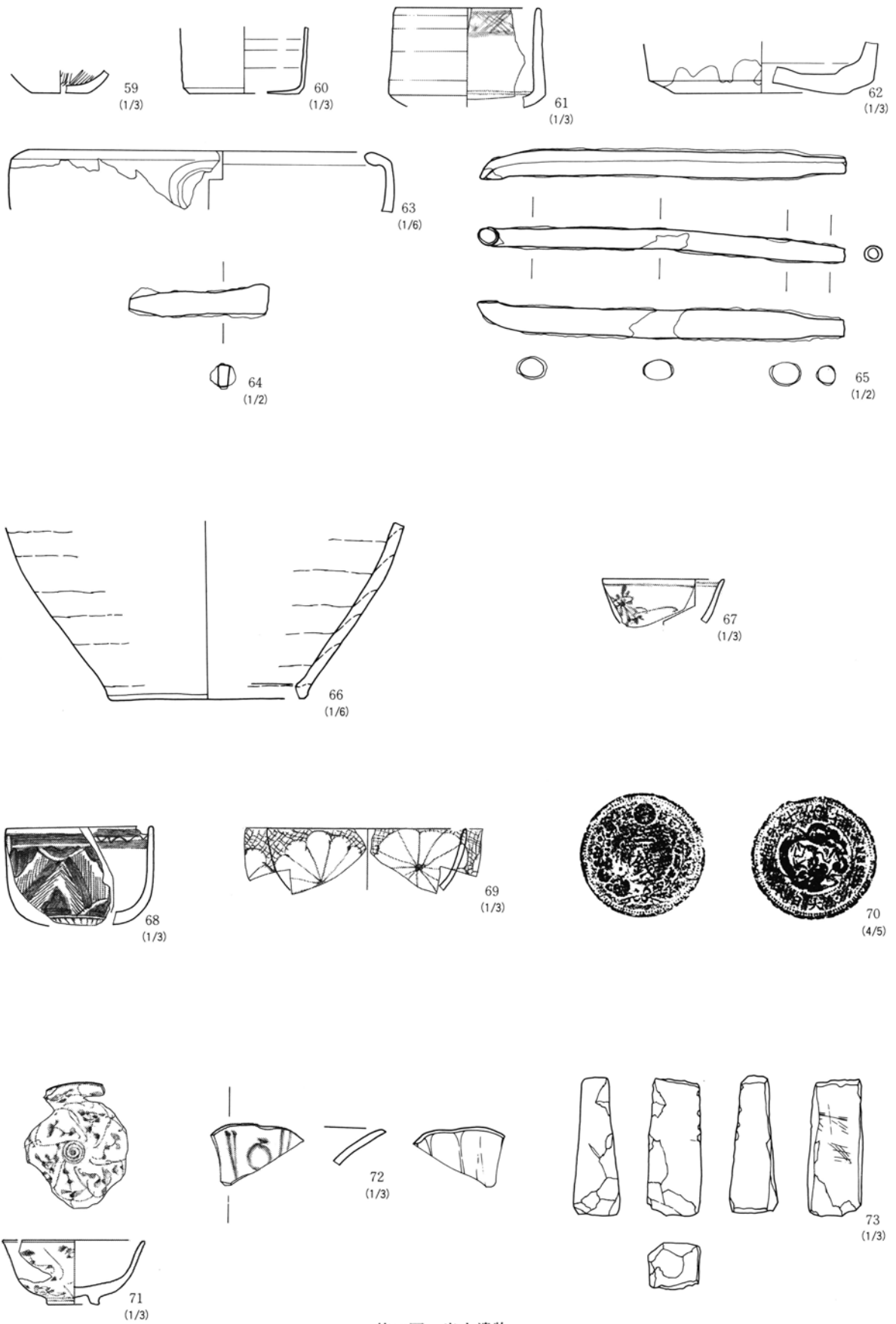


- 1 茶褐色土 砂質土。
- 2 砂層 ラミナ層、水に流された状態。
- 3 茶褐色土 ラミナ層、水に流された状態。砂質土。
- 4 明茶褐色土 ラミナ層、水に流された状態。砂質土。
- 5 灰褐色土 ラミナ層、水に流された状態。砂と粘土混入。
- 6 暗青灰色 炭化物と砂が混入。粘性あり。遺物の包含層。

0 2m

第40図 第3～6トレンチ

第2章 検出された遺構と遺物



第41図 出土遺物



## 第4節 出土遺物の検討

大西雅広

出土遺物（第34図～第38図・第41図）

第1面（1～5、31、53）

第1面において出土した遺物のうち7点を図示した。以下遺物の概要を記す。1は、肥前磁器丸碗の底部片であり、外面に竹と思われる染め付けが認められる。器壁はやや厚く、透明釉は青みを帯びている。2は、肥前陶胎染め付け碗である。図示した中では唯一全体を知り得る個体である。素地に白土掛けし、楼閣山水文を描き、口縁部には雲状の連続文をめぐらす。なお、この碗は、2面と石垣外出土片と接合している。3は瀬戸美濃陶器華瓶の下部である。外面には、底部を除き錆色の鉄釉を施し、内面は無釉である。上半には、灰釉が施されていた可能性もある。底部外面は、右回転糸切り無調整。4は、瀬戸美濃陶器碗の口縁部片である。文様はなく、貫入が全面に入る。5は、瀬戸美濃陶器すり鉢の体部片であり、口縁部は欠損する。錆釉を施す。31は、やや薄い瓦片であり、棧瓦ではないと考えられる。表面には炭素の吸着は認められない。また、制作時に付着させる「きら」が明瞭に認められる。時期は不詳であるが、胎土中に白色の縞が多く存在し、近代以降の生産ではないと考えられる。53は、寛永通寶（銅銭）である。銭径は24.35mm、至輪径は18.95mmで文字の特徴から新寛永と判断される。

第2面（6～11、32、35、37、43）

第2面出土遺物のうち9点を図示した。これらの内訳は、陶磁器6点、瓦3点である。6は、外面にいわゆる「蛸唐草」を施した肥前磁器の仏飯器である。7、8は、外面に唐草文を施した肥前磁器碗であり、8は器壁が厚く呉須の発色も悪い。9、10は、肥前磁器筒形碗である。10は、体部下位外面に簡略化した龍と思われる染め付けを施し、底部内面には「コンニャク印版」による文様が認められる。9に比して器壁が厚く、釉は青味を帯びている。11は、信楽系と考えられる焼締陶器すり鉢の小片である。外面には深い轆轤目がある。32、35は、組棟に使用する「輪違い瓦」であろう。共に表面は灰黒色を呈する。37は、棧瓦であろうか。43は、二ツ岳軽石製の不明軽石製品である。丸みを有する自然面を残し、2面を擦って平坦にしている。1面には、細く直線状の傷が認められる。

第3面（12～20、33、36、44）

12は、瀬戸美濃灰釉陶器皿である。体部下位外面以下は無釉、高台は低く、釉には細かい貫入が入る。13は、灯明皿受け皿の小片であり、胎土は橙色、内面には鉄泥を施している。胎土、釉調から志戸呂焼と考えられる。14は、口縁部に銅緑釉を掛けた瀬戸美濃陶器菊皿である。15は、肥前陶器の鉢である。高台端部から高台内は無釉である。内面と体部外面は、白土を刷毛掛けして文様を施す。体部外面下位は鉄泥を施している。高台端部はかなり磨滅している。16は、瀬戸美濃陶器練り鉢の底部片である。口縁部には、部分的に銅緑釉を流し掛けていたようであり、緑釉が底部まで流れている。底部内面には、団子状の目跡が一カ所認められる。17は、制作地不詳の陶器爛徳利である。体部外面には細かい貫入の入る灰釉を施している。18は、肥前磁器丸碗である。19は、肥前陶器の呉器手碗である。内外面の透明釉には細かい貫入がはいる。20は、瀬戸美濃陶器甕である。内外面に柿釉を施し、体部外面に鉄釉を流し掛けている。外面頸部以下には8条の沈線を巡らす。36は、頭に小さい菊丸を有し、裏には幅の狭い胴が残っている。33は、36と同じ幅の胴部であり、端部には頭部を接合する際の「かきやぶり」が認められる。以上の特徴から、同一個体ではないが、共に組棟に使用される輪違

## 第2章 検出された遺構と遺物

い瓦であろう。なお、33は鈍い橙色を呈しており、2次的な被熱を受けていると考えられる。44は、頭の大きい銅製の釘である。

### グリッド等出土遺物 (21~30、34、38~42、45~52、54~73)

#### 陶磁器

21、26は共に「As-A 軽石中」との注記がある遺物である。21は、肥前磁器徳利である。この徳利は、胎土や色調から長崎県の波佐見で焼成されたと考えられ、時期的にもA軽石降下後の可能性が高い。26は、肥前磁器小皿である。22は、石垣外出土の肥前磁器丸碗であり、底部内面に小さい五弁花を染め付けする。23は、石垣内出土の制作地不詳陶器である。釜のミニチュアで内面から鏝の上面まで銅緑釉を施す。型作りで鏝の下部で貼り付けている。24は、道路南試掘で出土した瀬戸美濃陶器染め付け皿である。口縁端部は緩く外傾する。29も道路南試掘出土で、在地製の焙烙である。25と30は表土出土遺物である。25は、肥前陶器呉器手碗の高台部分である。細かい貫入の入る釉を全面に施している。高台内の削り込みが浅く、呉器手碗の新しい部類に入るであろう。30は、鬼瓦の小片である。27は、「東道路下南」から出土した灰釉練り鉢の体部片である。口縁部外面に鉄釉を流し掛けており、鉄釉の一部が外面に認められる。胎土、釉調の特徴から、群馬県安中市で明治時代に焼かれていた「自性寺焼」と判断される。28は、「東道路下」出土の堺若しくは明石で焼成された焼締陶器すり鉢である。

#### 瓦

34は、表土出土の巴瓦である。胎土はかなり均一で緻密である。

#### 石製品

38は、粗粒安山岩製の窪み石で、用途は不明である。39から42は粗粒安山岩製の粉挽臼である。39、40、41の3個体が上臼、42が下臼である。いずれも、中世の臼に認められるような片減りや目の顕著な磨滅は認められず、表面の加工も丁寧である。すべての上臼には、挽き手穴が残っていない。なお、石臼はすべて表土出土である。

#### 銭貨

銭貨は、1面出土を除いて7枚出土し、すべて寛永通寶である。図示したものはすべて銅銭であるが、これ以外に寛永鉄銭と考えられる小片が1点存在する。これらの内、58のみ4文銭である。銭径は28.35mm、28.30mm、至輪径は21mmである。西第3グリッド出土。同じグリッドからは51、52も出土している。51の銭径は24.05mm、23.95mm、至輪径は18.95mmである。52の銭径は、22.45mm、至輪径は18.80mmである。西側トレンチからは55、57の2枚が出土している。銭径は、55が22.65mm、22.60mm、57が22.70mmである。至輪径は、55が18.20mm、57が18.90mmである。なお、57は、若干歪んでいる。54は、西側道下出土の古寛永で、銭径は23.80mm、至輪径は19.30mmである。56は、石組み出土の寛永通寶で、残りが悪く文字も不明瞭である。銭径は23.25mmで、至輪径は計測不可能である。

#### その他の金属製品

すべて出土地点や層位は不明である。45は、銅製煙管の吸い口であり、器壁はやや厚い。図示した面には接合痕が認められる。46は、鉄釘の基部片である。47から49は、鍛造の鉄製品片であるが、用途は不詳である。50は、鏝である。断面は方形を呈する。

#### トレンチ出土遺物

第1トレンチ出土遺物のうち図示したものは、59から65の7点である。59は、比較的低温の酸化炎焼成され

#### 第4節 出土遺物の検討

た陶器である。内面には緑がかった釉を薄く施し、外面には化粧土を施している。底部外面は、回転糸切り無調整である。すり鉢のミニチュアであろう。60は、制作地不詳の爛徳利底部である。体部下端と底部外面は、回転篋削り。体部外面には透明釉を施す。61は、肥前磁器青磁染め付け筒形碗である。外面に青磁釉、内面に透明釉を掛け分け、口縁部内面と底部周縁に染め付けを施す。胎土は十分磁化しておらず、焼成不良である。62は、瀬戸美濃陶器徳利の底部である。外面には錆色の鉄釉を施し、底部外面の釉を拭き取っている。63は、在地系の土器火鉢である。器表は黒色を呈しており、近年まで県内で「塗り物」と称されていたものであろう。外面には、外型によって付けられた氷割れ状の文様が全面に認められる。取っ手は剥がれている。64は、鍛造の不明鉄製品である。65は、銅製の煙管であり、火皿は欠損している。

第3トレンチ出土遺物で図示し得たのは、66の在地土器甕1点のみである。体部下位が残存するのみであり、底部は欠損している。器表は黒色を呈しており、「塗り物」と称される物であろう。

第4トレンチ出土遺物で図示し得たものは、67の肥前磁器の坏1点のみである。焼成は、やや不良で釉に貫入が認められる。

第5トレンチ出土遺物は、68から70の3点を図示した。68、69は、肥前磁器碗である。69は、器壁が薄く、内外面に菊花を散らしている。70は、明治19年の1銭銅貨である。

第6トレンチ出土遺物は、71から73の3点を図示した。71は、明治から大正時代の瀬戸美濃磁器碗である。72は、肥前磁器青磁染め付け皿である。外面に染め付け、内面に花卉状の沈線を入れた後に青磁釉を施している。口縁部は輪花に作る。73は、砥石である。

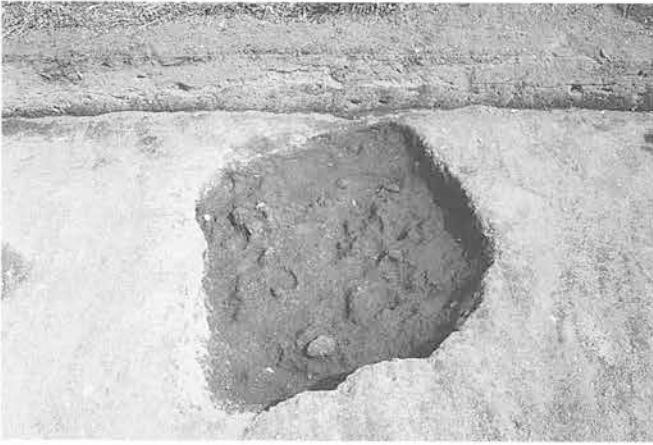
以上、本遺跡出土遺物を概観したが、調査時に1面から3面と分けて取り上げられた遺物に時代差は認められなかった。また、全体の傾向として18世紀後半以降の製品が主体を占めている。遺物の残存状態は全体に悪く、遺物は石と共に集中して出土しており、他所から石と同様に集められたものと考えられよう。



中宿在家遺跡  
上豊岡一里塚遺跡

写真図版





I区1号土坑



I区2号土坑



I区3号土坑



I区4~6号土坑



I区1号井戸



I区1号石敷



I区2号石敷



I区2号石敷



2号石敷



2号石敷



2号石敷



2号石敷



I区1面3号石敷



I区1面4号石敷



I区1面5号石敷



I区1面3~5号石敷





I区1面全景



I区1面石垣



I区1面石垣



I区1面全景



I区1面石垣



I区1面1号炉



I区1面全景



I区2面水田跡



I区2面水田跡



I区2面水田水口



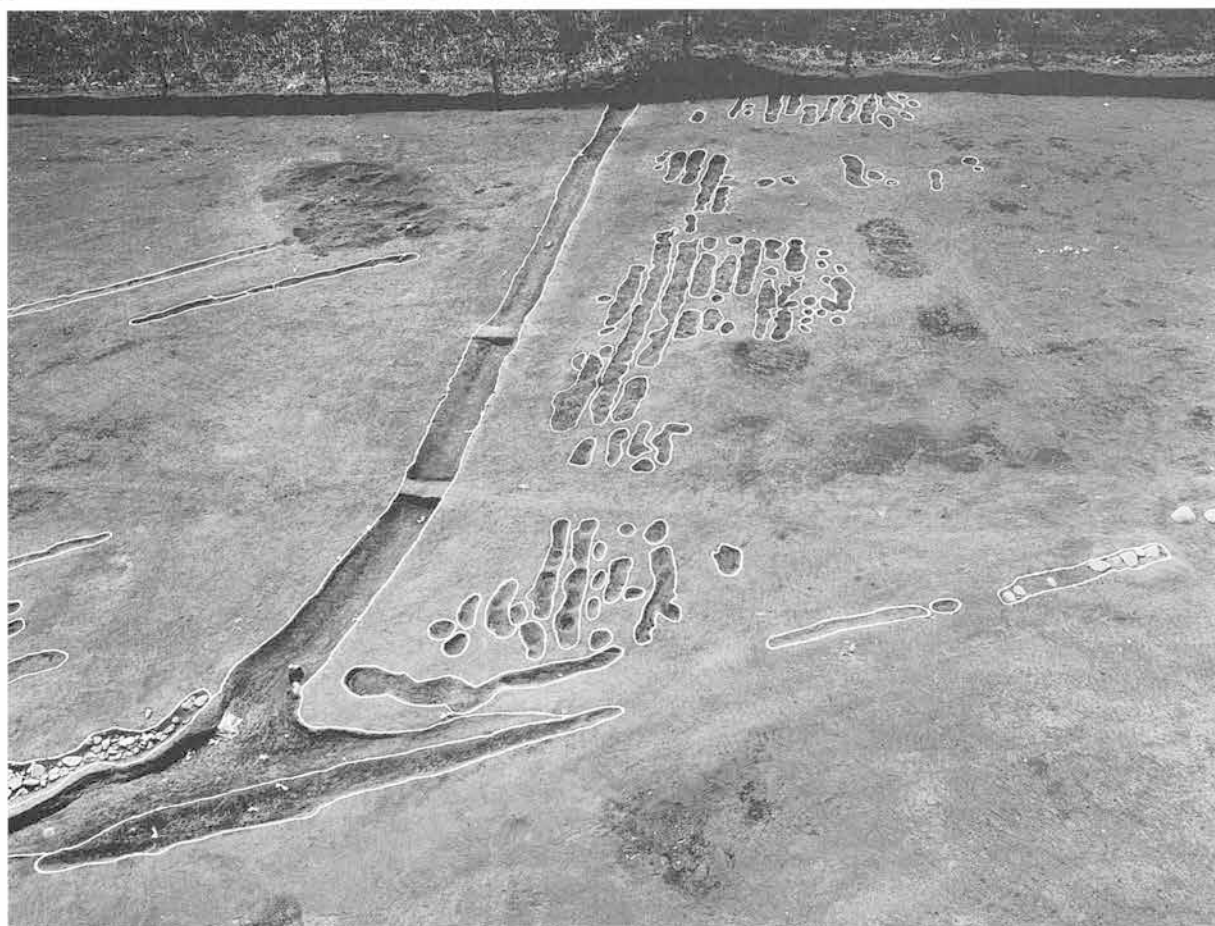
I区2面水田跡



I区2面水田面石列



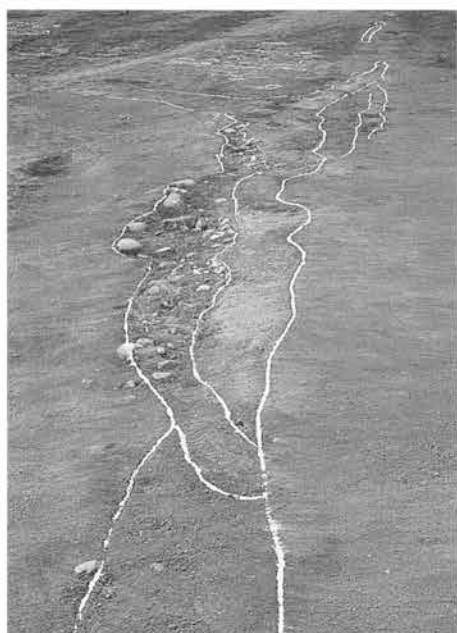
I区2面中央水路



Ⅱ区1面島状遺構



Ⅱ区1面全景



Ⅱ区2面1·2号沟



Ⅱ区2面3号土坑



Ⅱ区2面4号土坑



Ⅱ区2面6号土坑



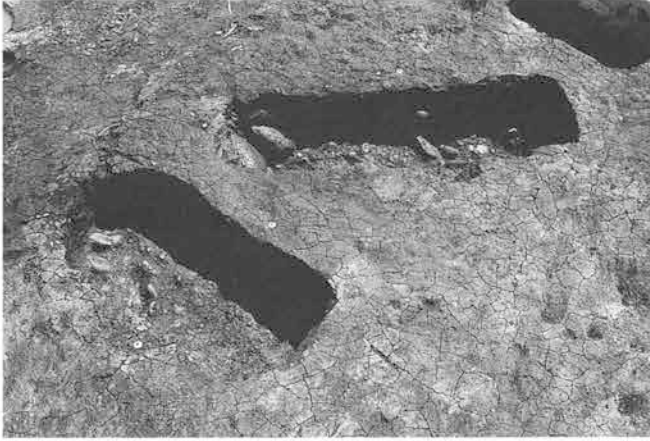
Ⅱ区2面5号土坑



Ⅱ区2面7号土坑



Ⅱ区2面7·8号土坑



Ⅱ区2面1·2号土坑



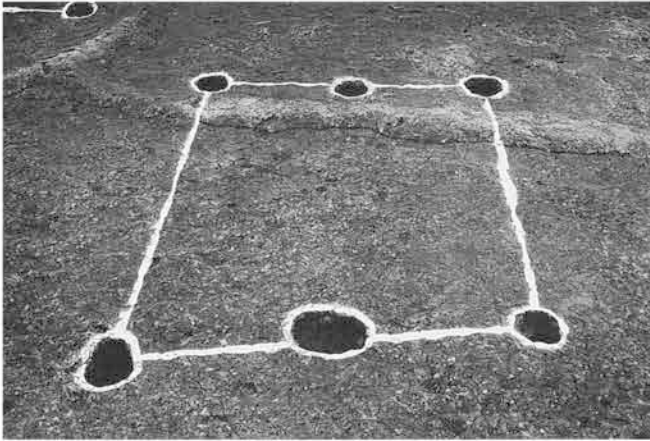
Ⅱ区2面1号井戸



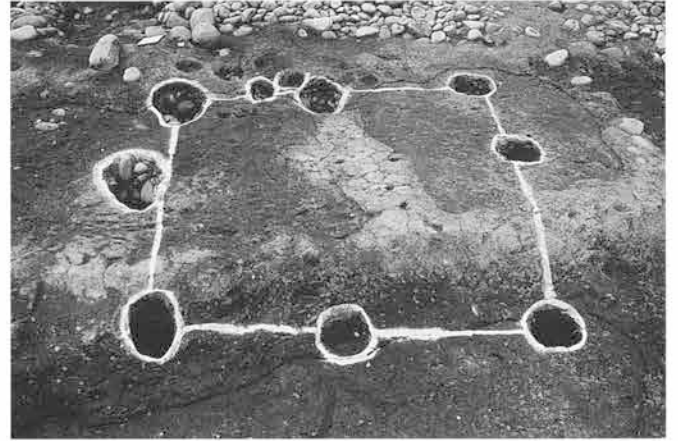
Ⅱ区2面2号井戸



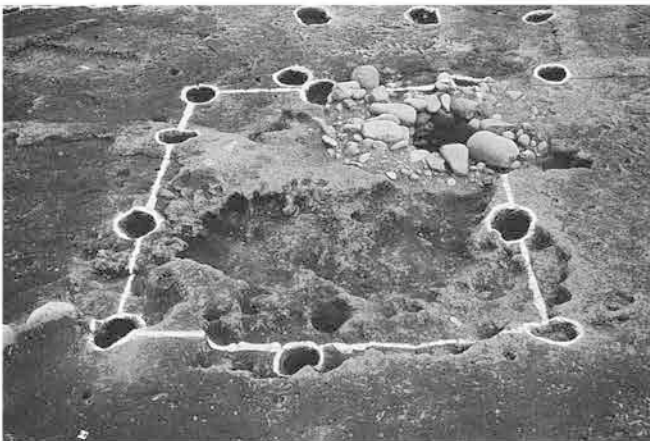
Ⅱ区2面3号井戸



Ⅱ区2面1号掘立柱建物跡



Ⅱ区2面2号掘立柱建物跡



Ⅱ区2面3号掘立柱建物跡



Ⅱ区2面柱穴列





Ⅱ区2面1号集石



Ⅱ区2面2号集石



Ⅱ区2面3号集石



Ⅱ区2面4号集石



Ⅱ区2面5号集石



Ⅱ区2面6号集石



Ⅱ区2面7号集石



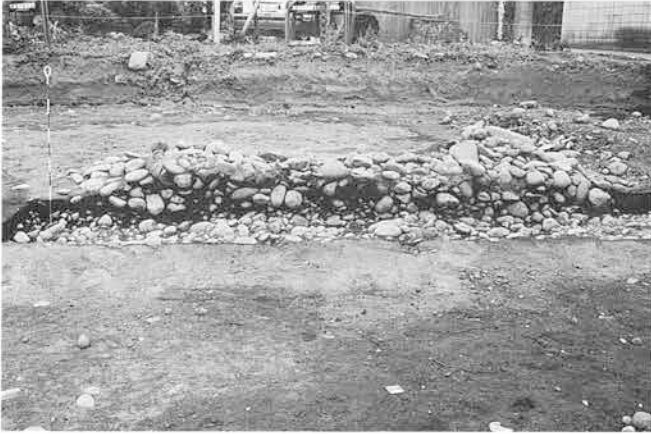
Ⅱ区2面8号集石



Ⅱ区2面9号集石



Ⅱ区2面10号集石



Ⅱ区2面1号集石断面



Ⅱ区2面4号集石断面



Ⅱ区2面掘立柱建物跡・柱穴列



Ⅱ区2面水田跡



Ⅱ区2面水田水口



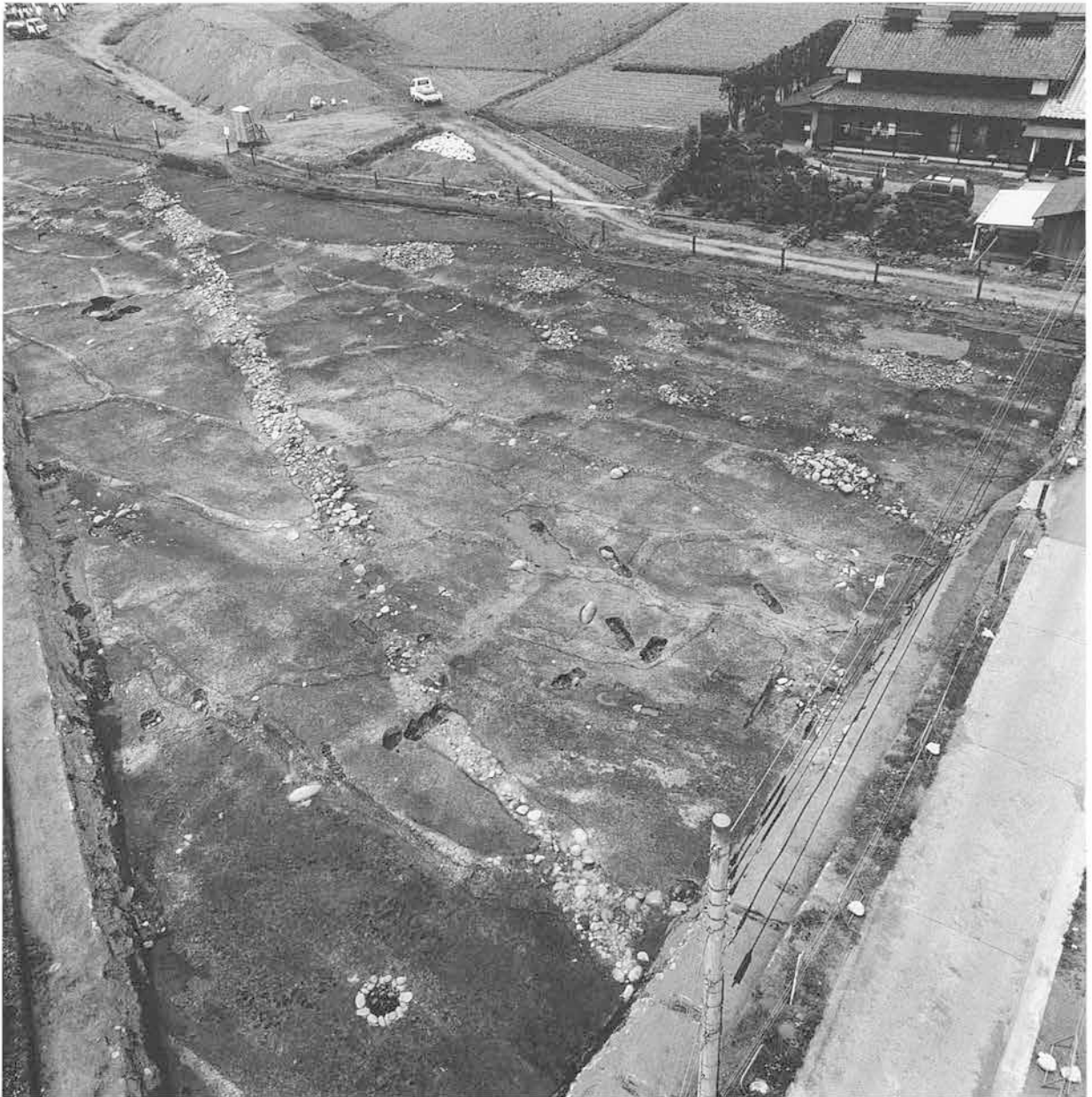
Ⅱ区2面水田水口



Ⅱ区2面水田跡



Ⅱ区2面水田東西大アゼ



Ⅱ区2面水田跡全景



Ⅱ区2面水田東西大アゼ



Ⅱ区2面水口



Ⅱ区2面水田跡全景



Ⅲ区2面6号土坑



Ⅲ区2面7号土坑



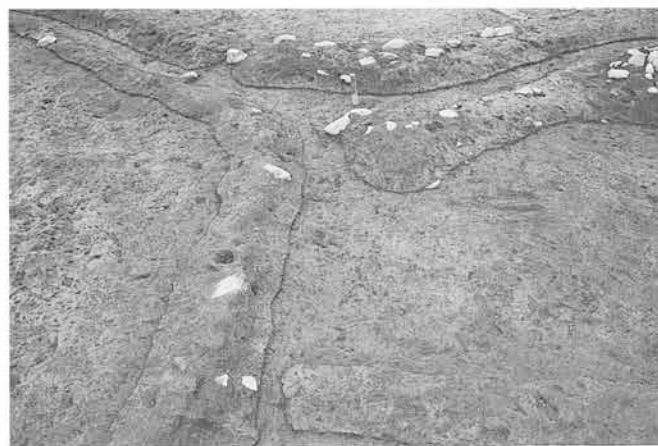
Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面8号土坑



Ⅲ区2面中央水路



Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面水口



Ⅲ区2面全景



Ⅲ区2面全景

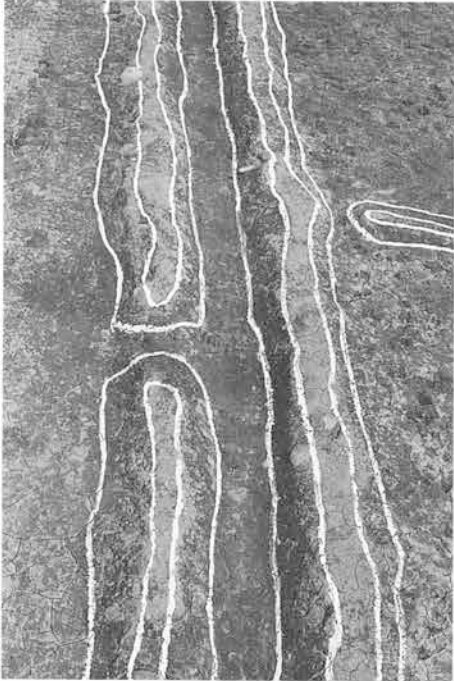


Ⅲ区2面全景

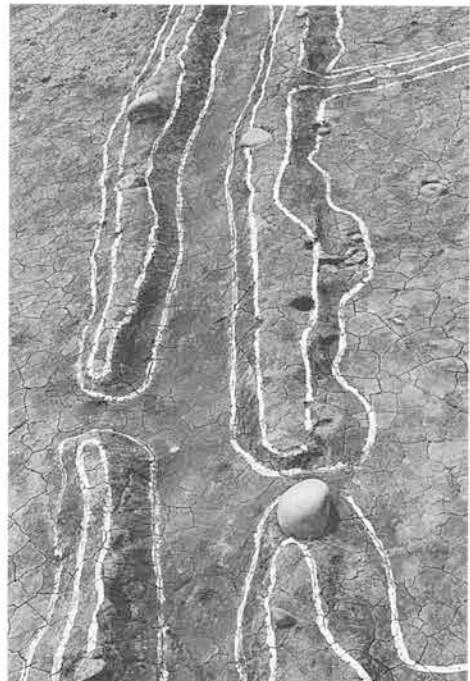




IV区2面水田跡



IV区2面水口



IV区2面水口



IV区2面中央水路



IV区2面中央水路セクション



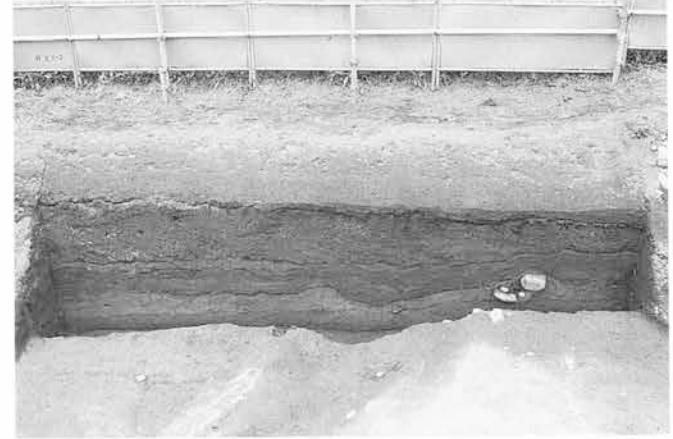
IV区2面中央水路セクション



IV区2面水口



IV区2面水口



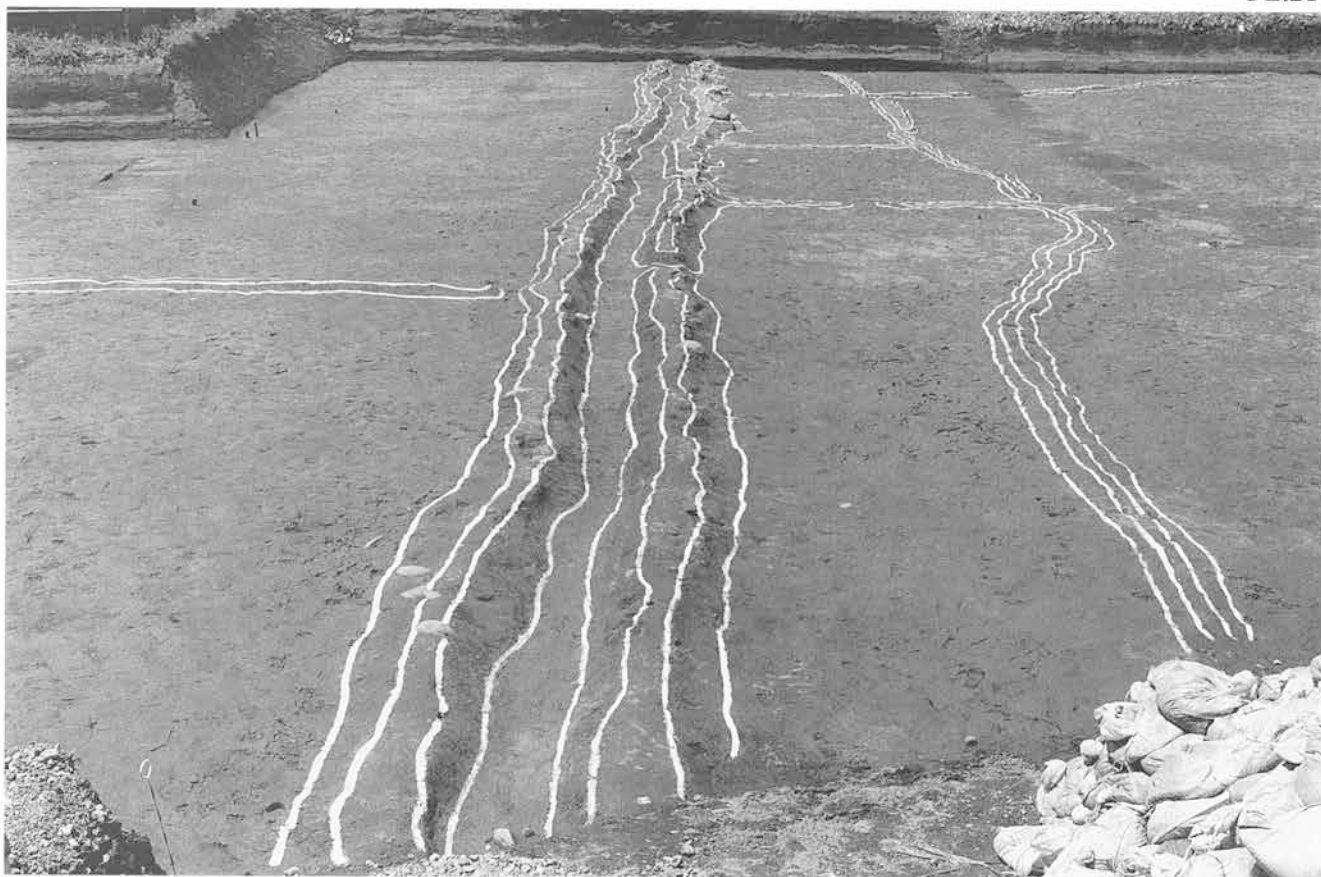
IV区2面中央水路セクション



IV区2面水口



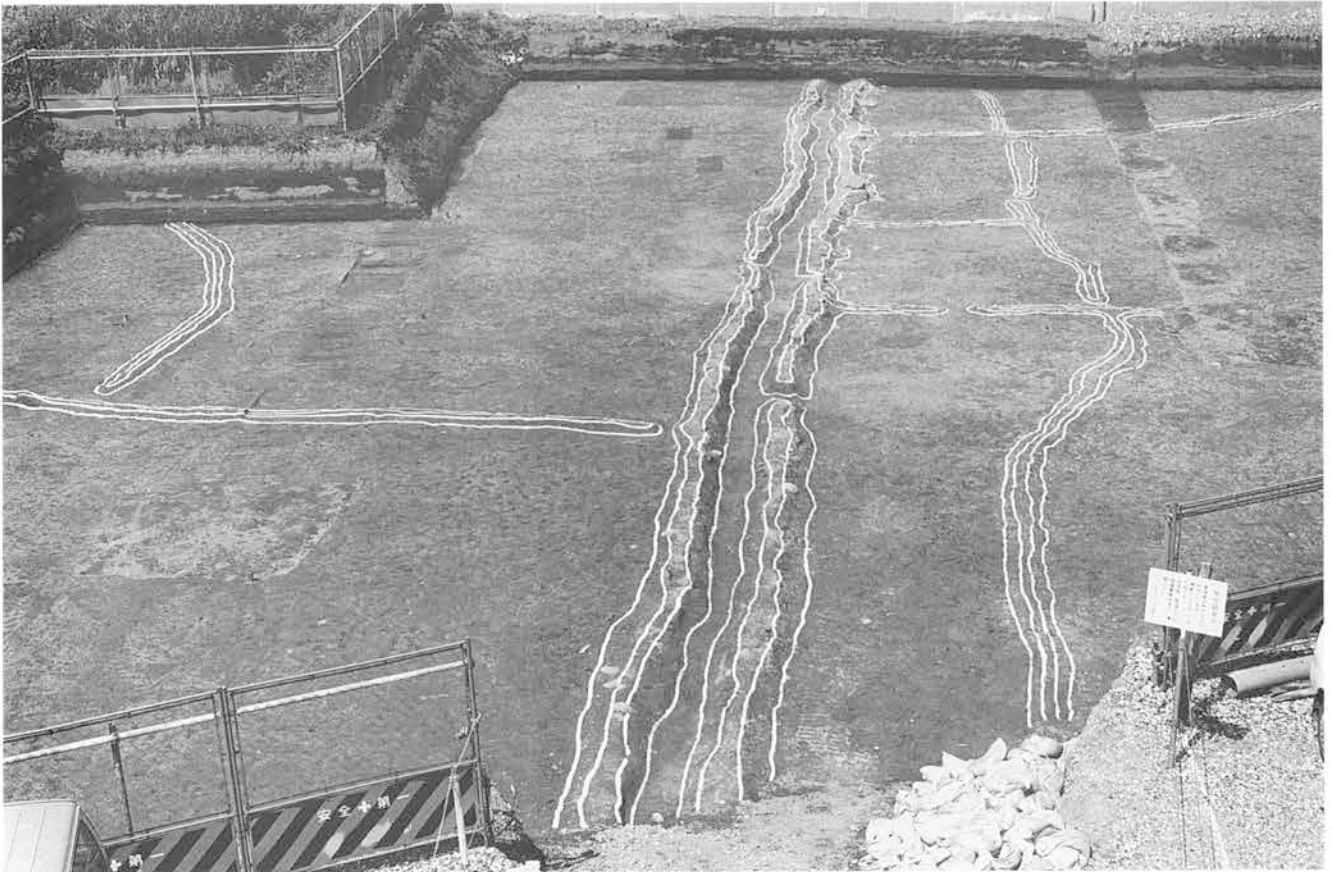
IV区2面高台部水田セクション



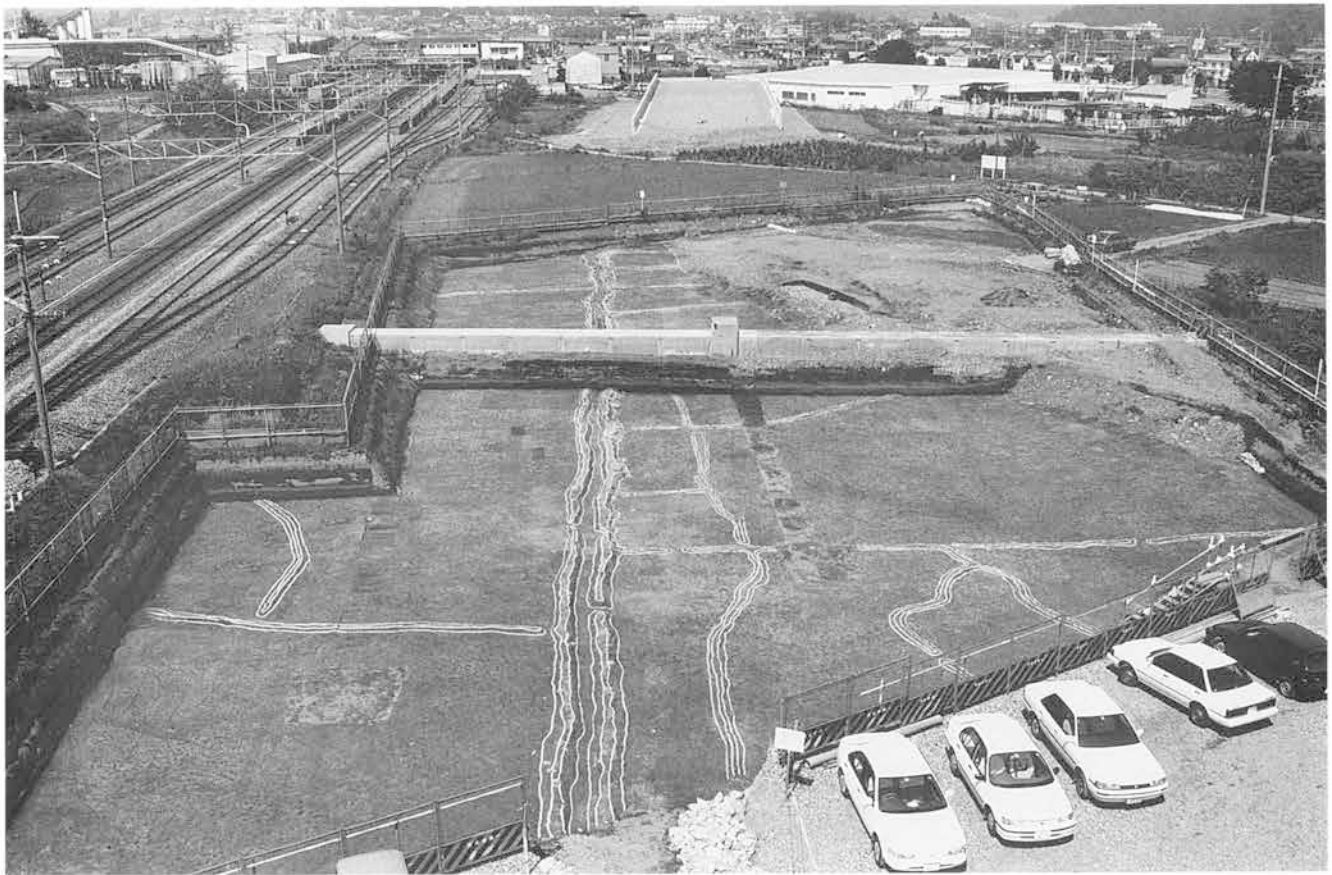
IV区2面中央水路大アゼ



IV区2面中央水路大アゼ



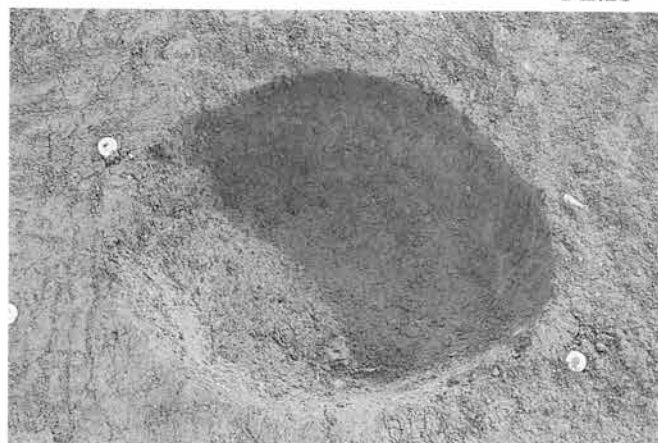
Ⅳ区2面中央水路大アゼ



Ⅳ区2面全景



V区2面10号土坑



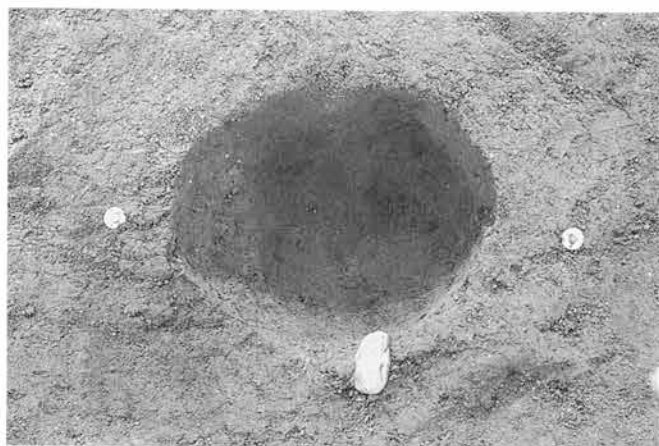
V区2面11号土坑



V区2面12号土坑



V区2面13号土坑



V区2面14号土坑



V区2面15号土坑



V区2面5号溝セクション



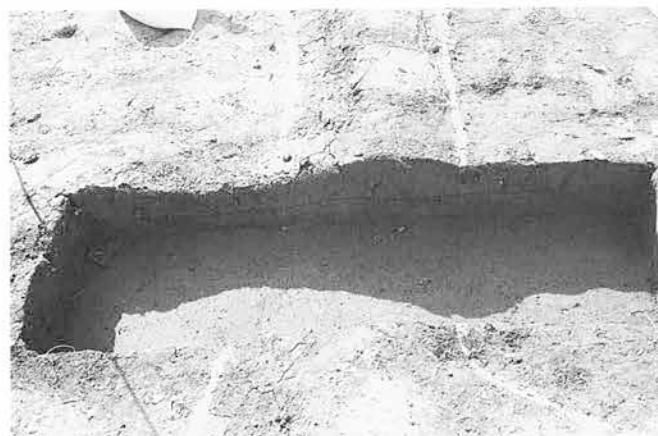
V区北側5号溝



V区北側2面下畠状遺構



V区北側2面下畠状遺構



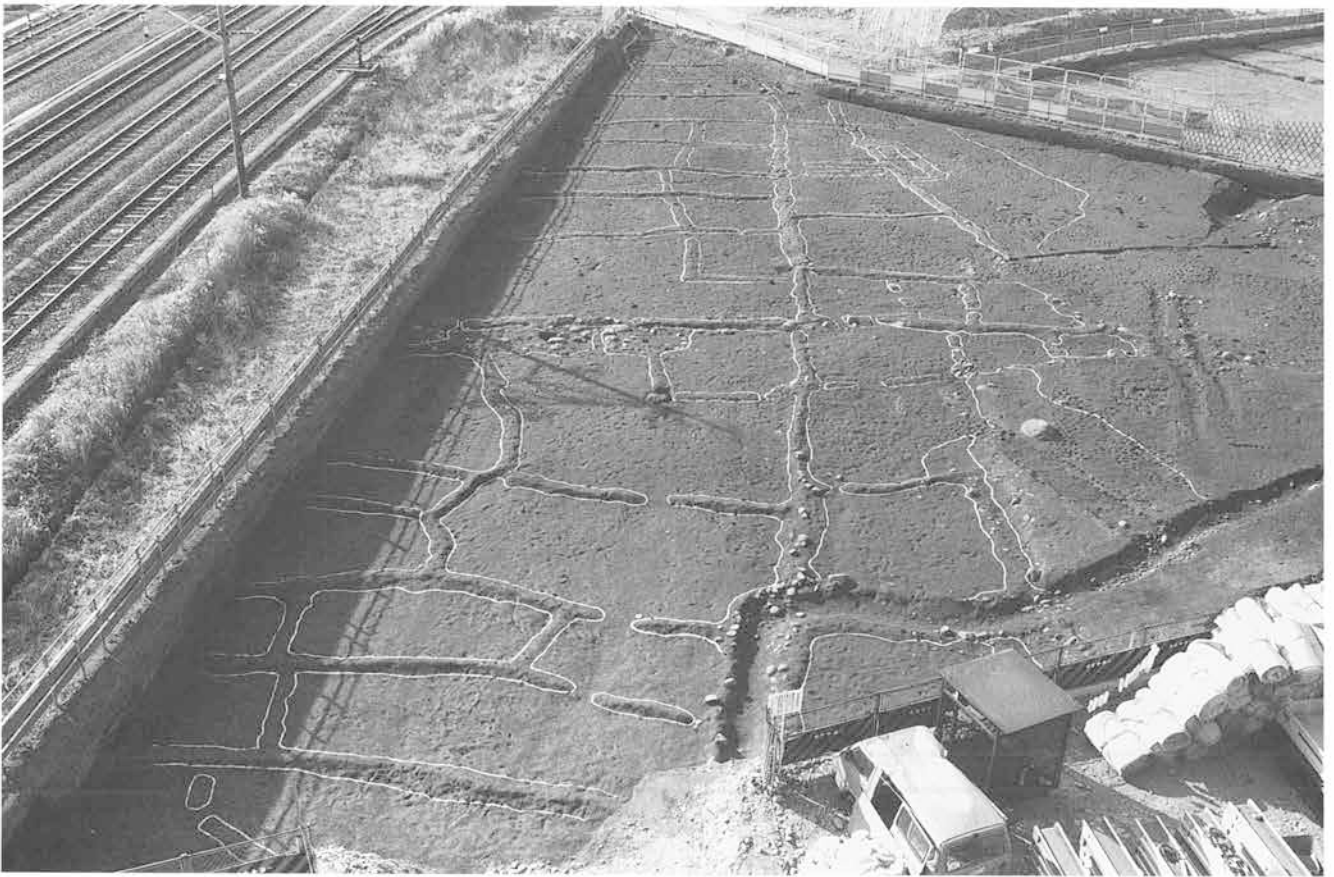
V区2面水田アゼセクション



V区5・8号溝セクション



V区北側C軽石混土層水田遺構



V区2面水田跡12号溝



V区2面水田跡12号溝



V区2面全景

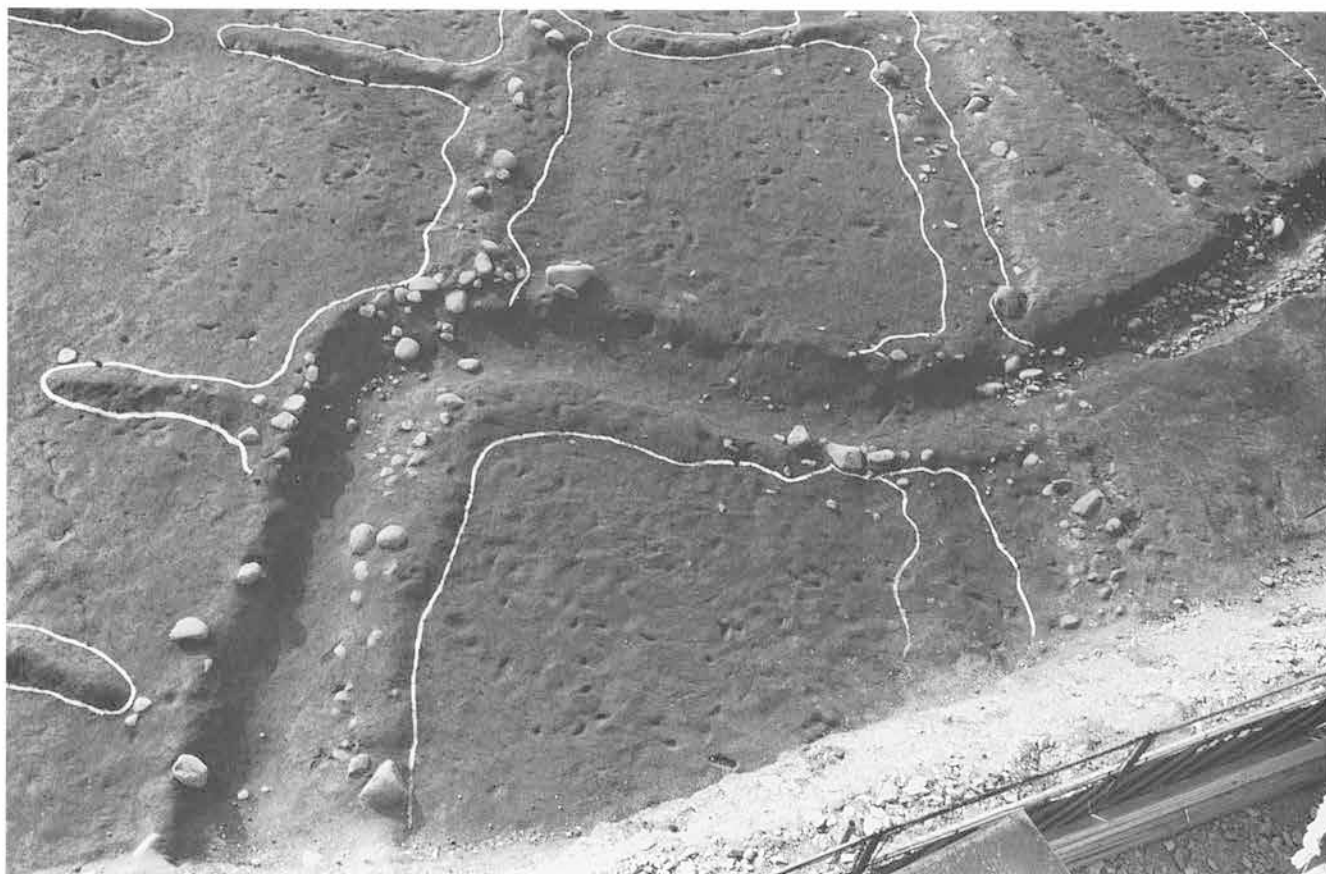


V区2面全景





V区2面12号沟



V区2面12号沟



V区2面水田跡・アゼ・水口



V区2面水田跡・12号溝



V区2面全景



V区2面5号溝・12号溝・推定宮街道



VI区1号住居跡



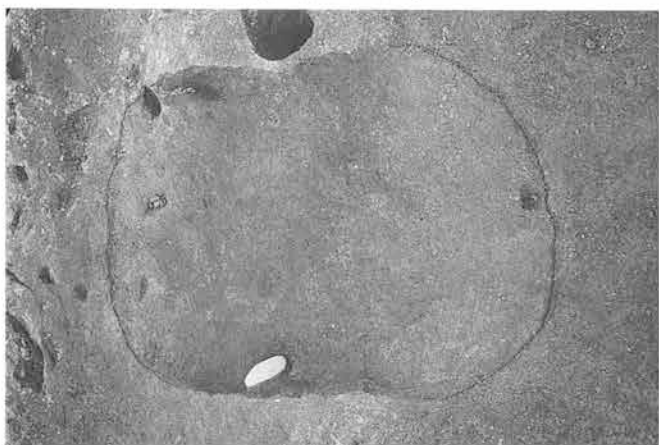
1号住居跡



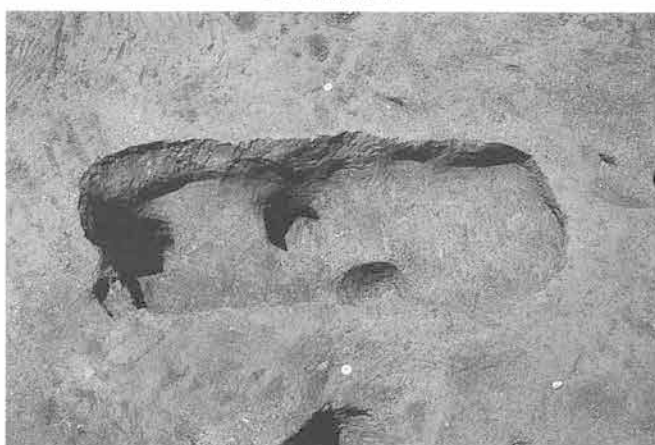
1号住居跡出土刀子



1号住居跡床面



VI区3号土坑



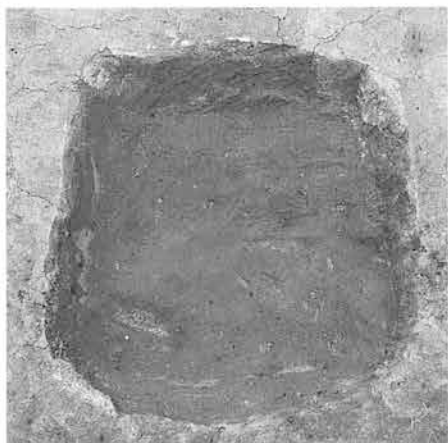
VI区4号土坑



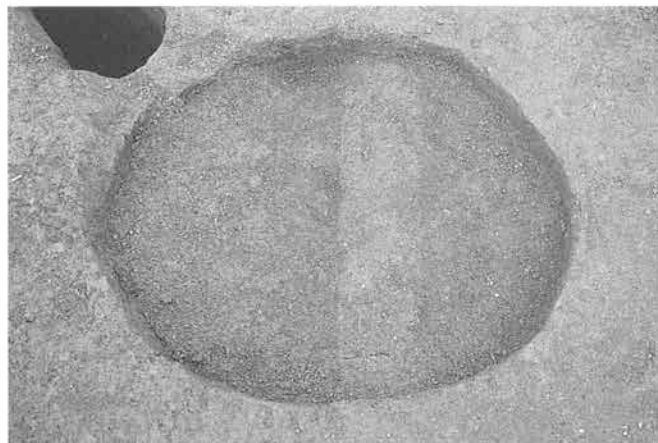
VI区5号土坑



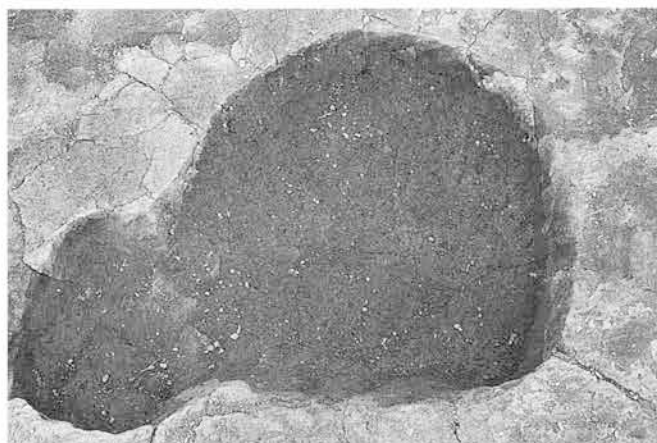
VI区14号土坑



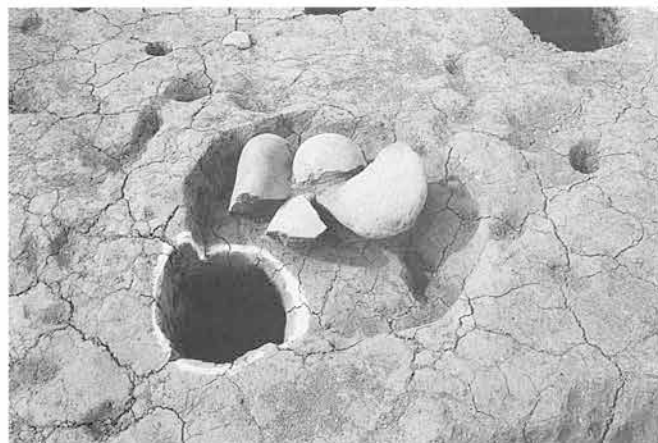
VI区7号土坑



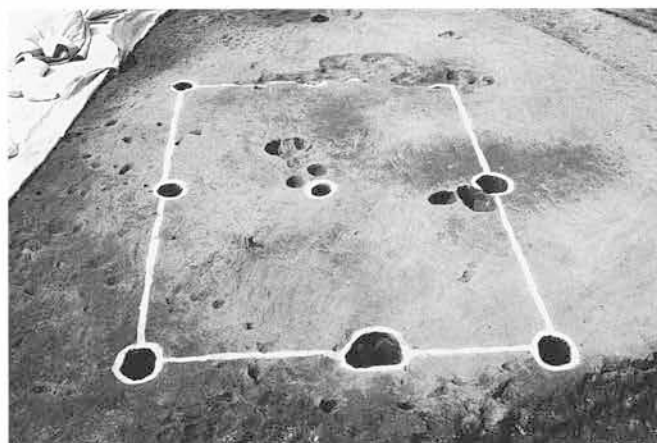
VI区6号土坑



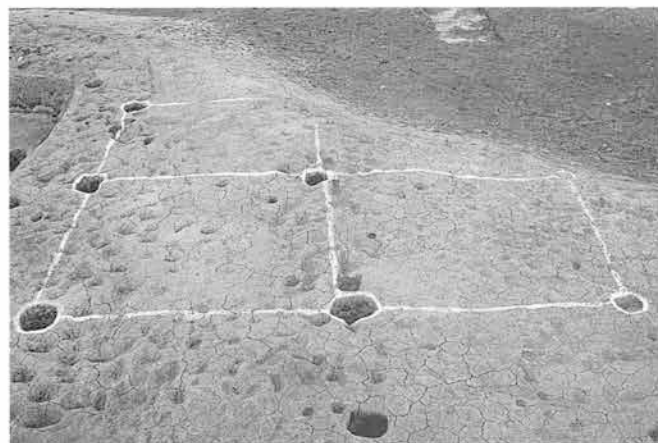
VI区17号土坑



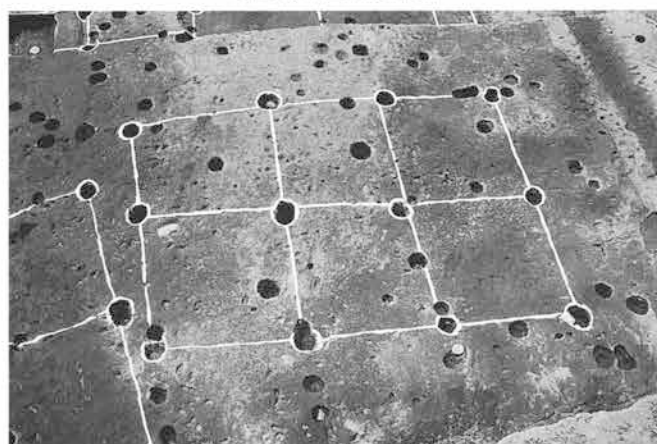
VI区18号土坑



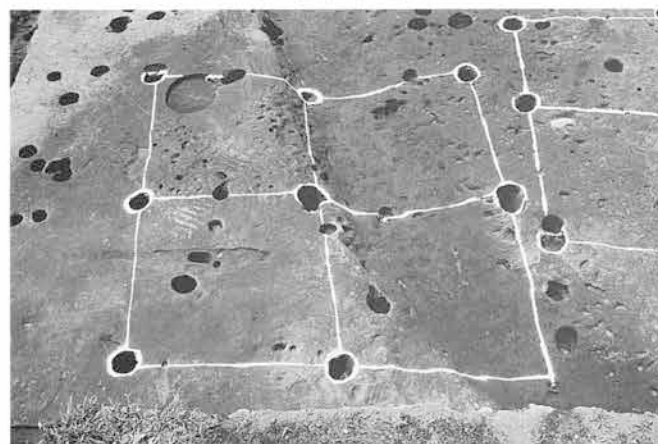
VI区3号掘立柱建物跡



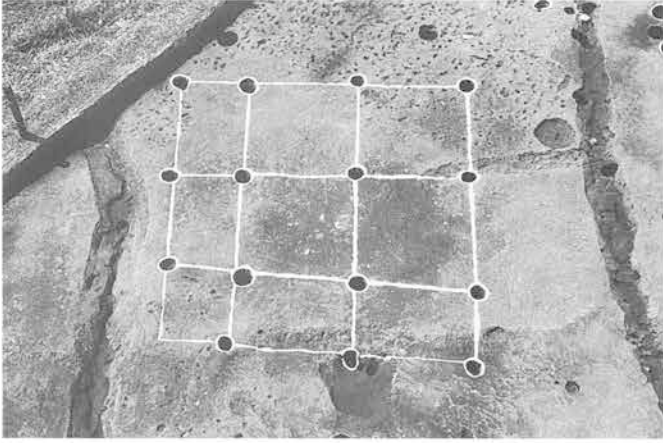
VI区1号掘立柱建物跡



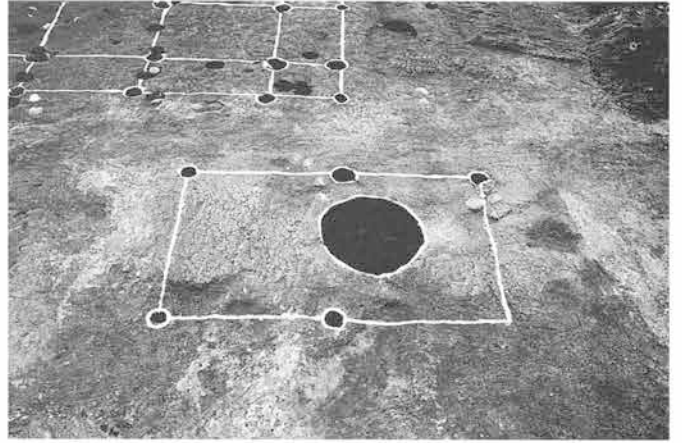
VI区5号掘立柱建物跡



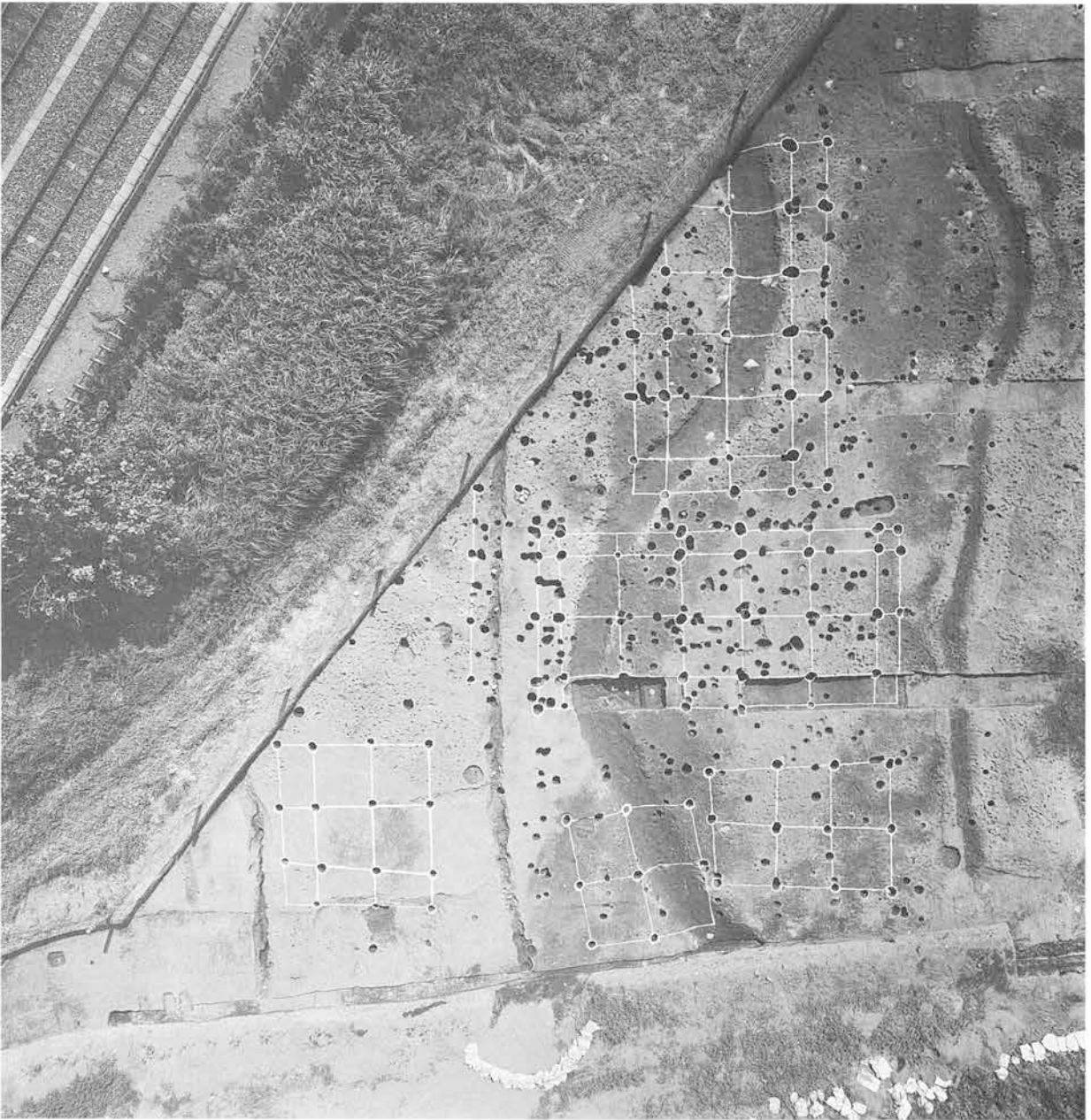
VI区6号掘立柱建物跡



VI区7号掘立柱建物跡



VI区5号井戸



VI区掘立柱建物群



VI区掘立柱建物跡群

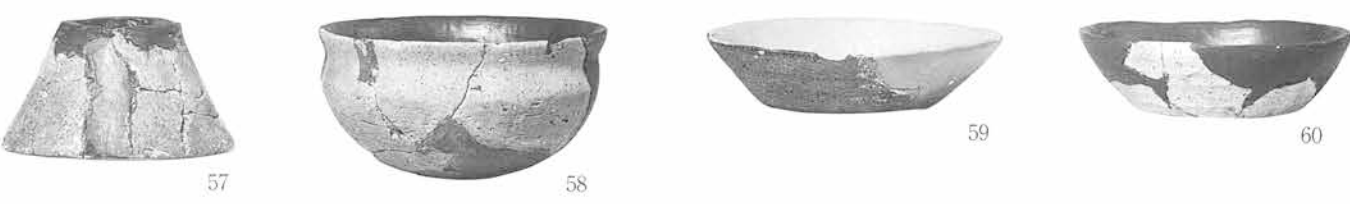
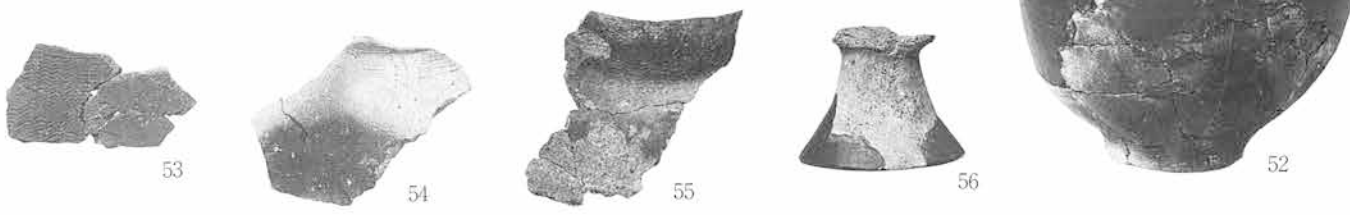
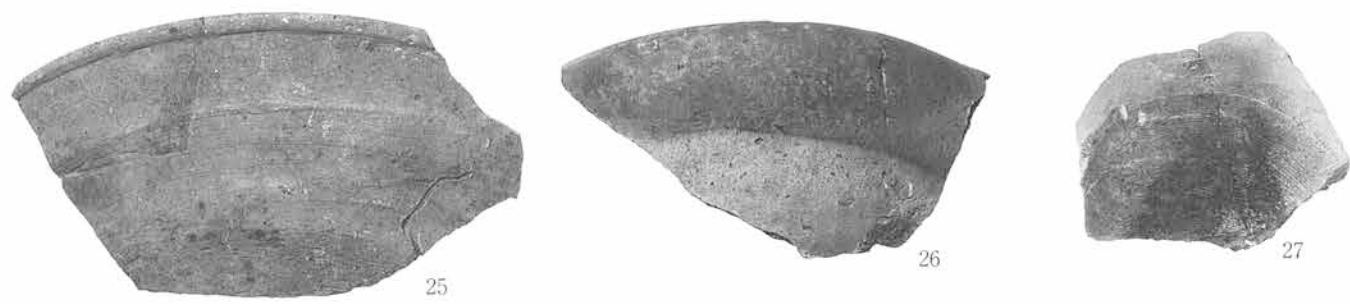


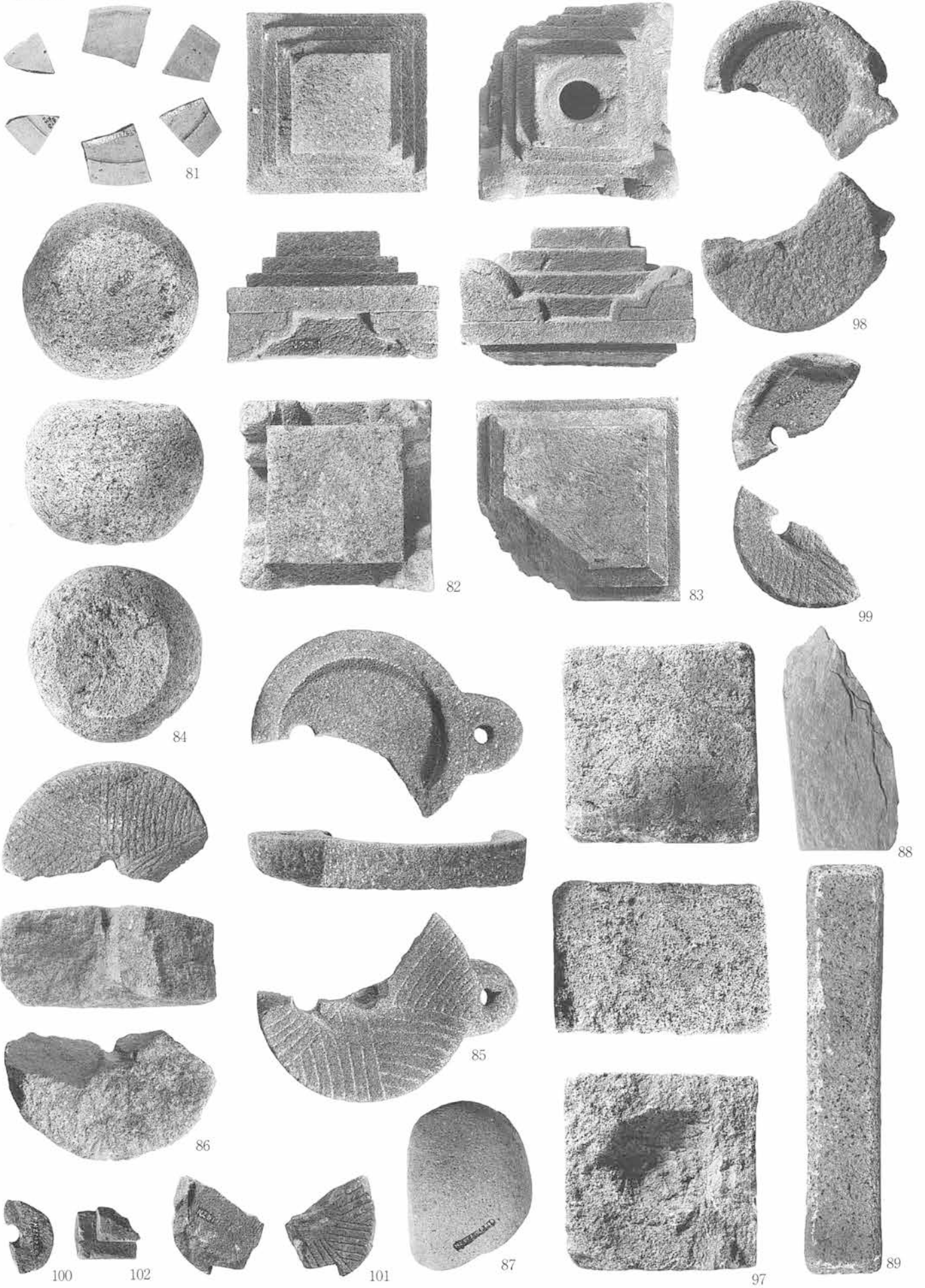
VI区掘立柱建物跡群

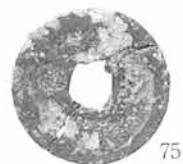




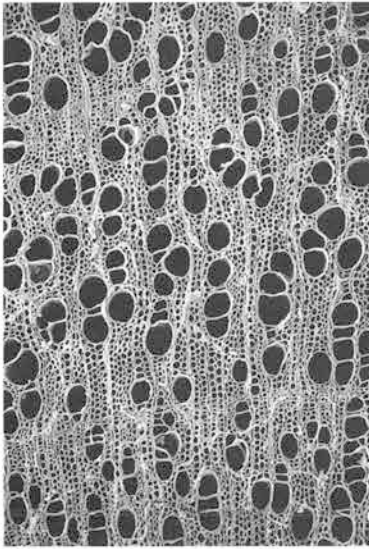








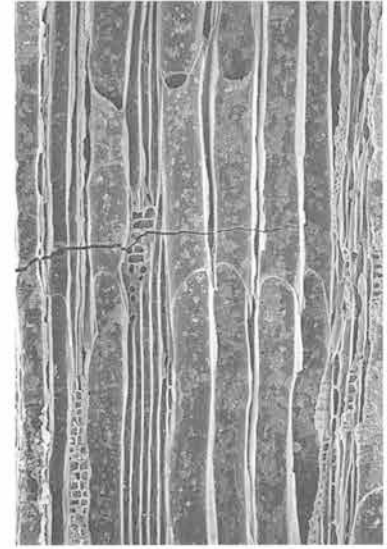
PL.40 中宿在家遺跡出土炭化材の樹種電子顕微鏡写真



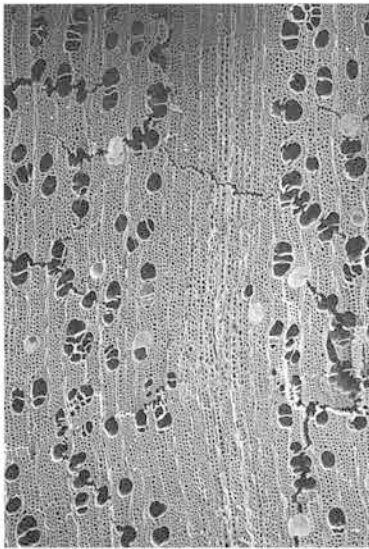
1 a. オニグルミ (横断面) 7号住居  
bar : 0.5mm



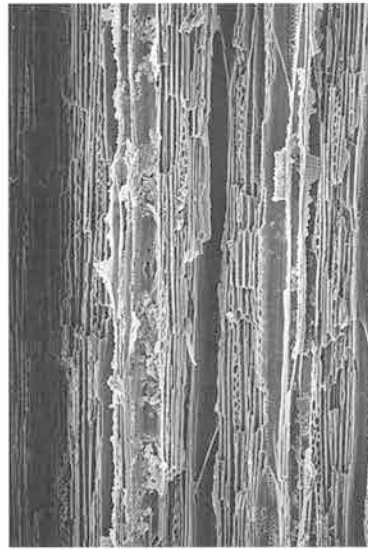
1 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



1 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



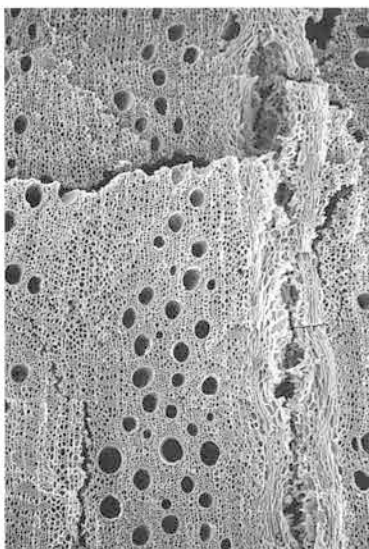
2 a. イモシデ節 (横断面) 1号住居  
bar : 0.5mm



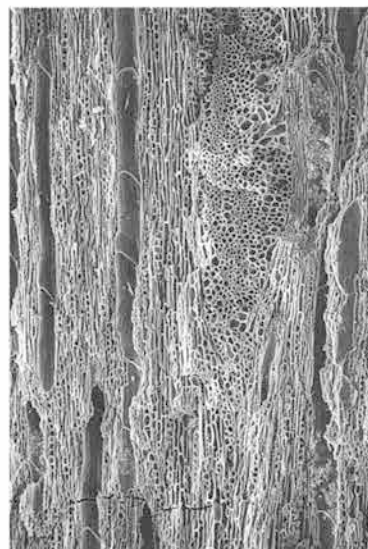
2 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



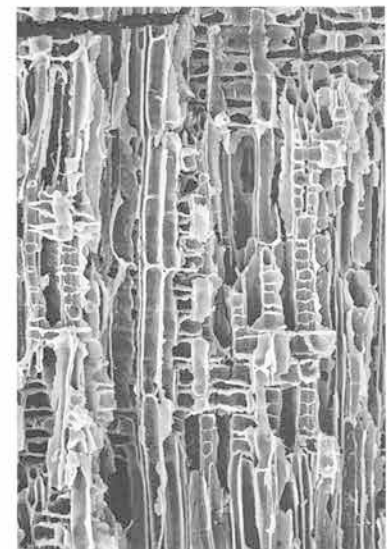
2 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



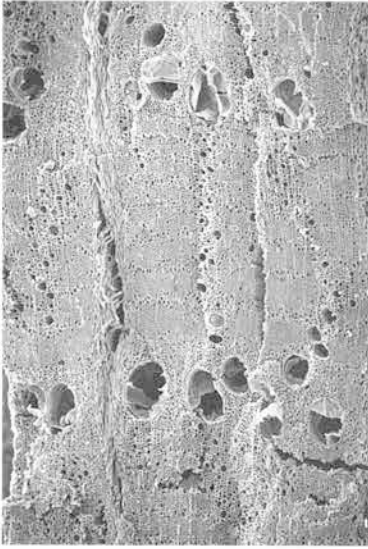
3 a. アカガシ亜属 (横断面) 5号井戸  
bar : 0.5mm



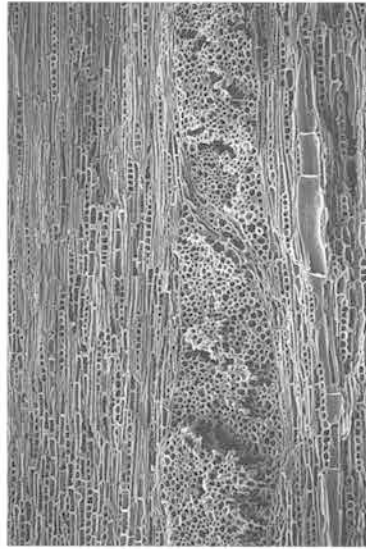
3 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



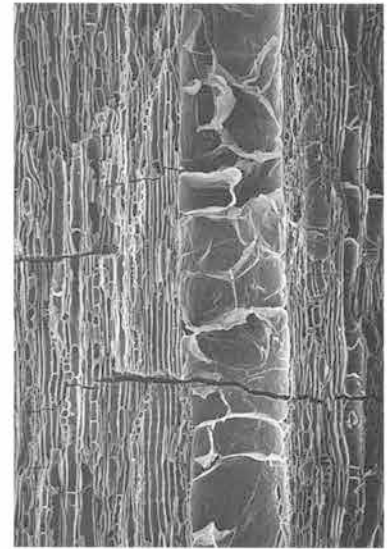
3 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



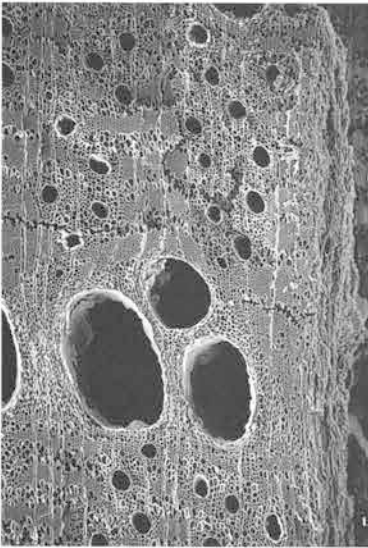
4 a. コナラ節 (横断面) 1号住居  
bar : 1mm



4 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



4 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm



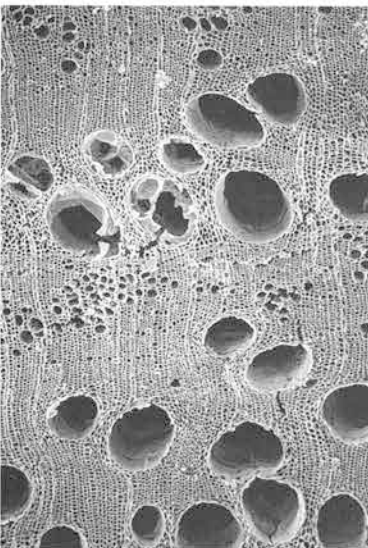
5 a. クスギ節 (横断面) T-19  
bar : 0.5mm



5 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



5 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.5mm



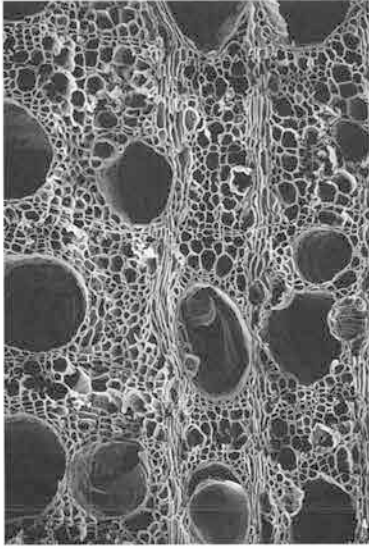
6 a. クリ (横断面) T-7  
bar : 0.5mm



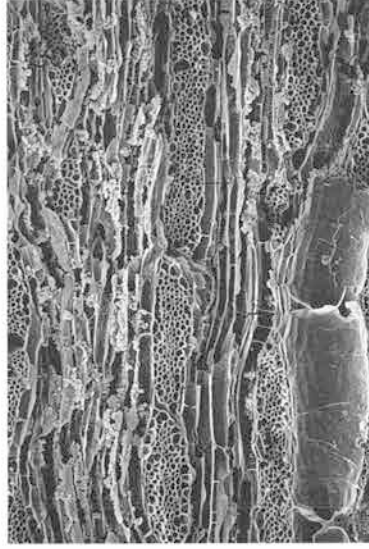
6 b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



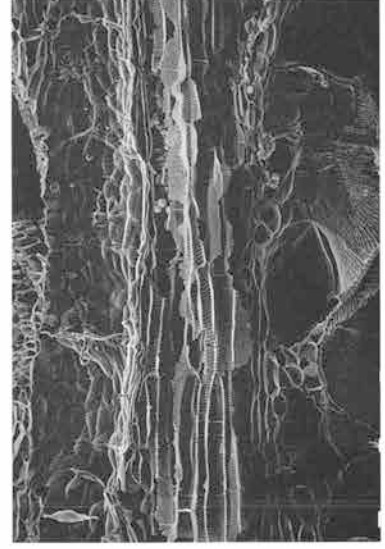
6 c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



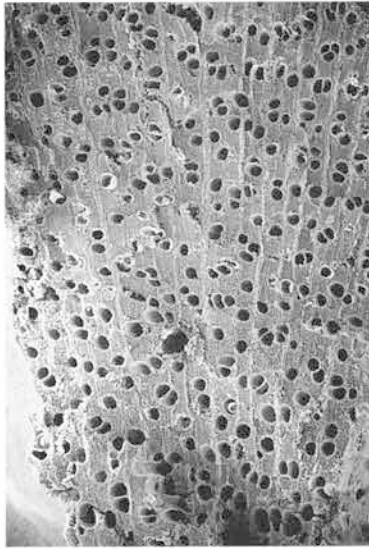
7a. ケヤキ (横断面) 7号井戸  
bar : 0.5mm



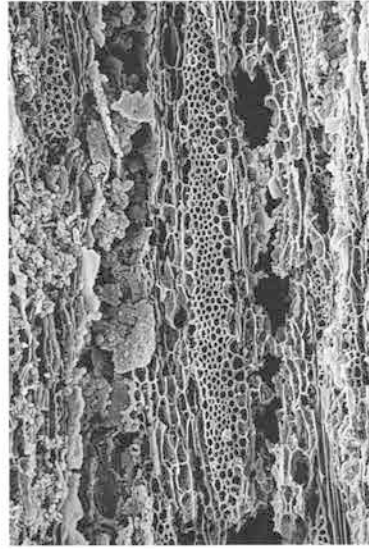
7b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



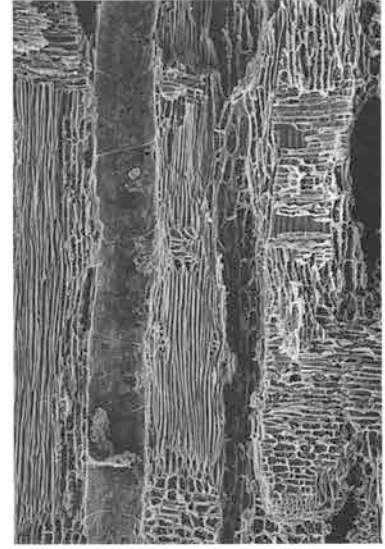
7c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



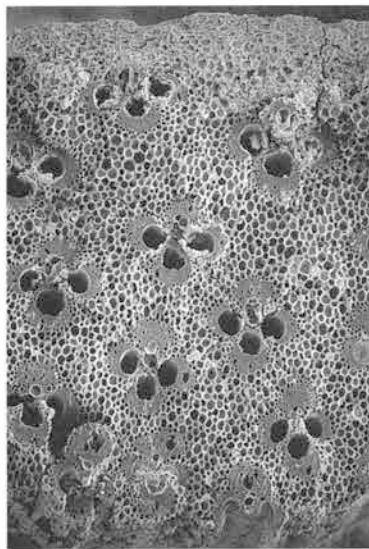
8a. エノキ属 (横断面) T-24  
bar : 1mm



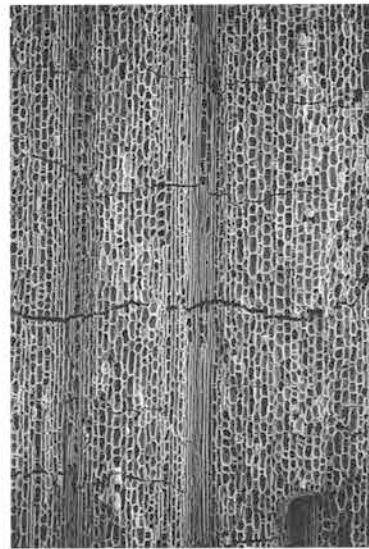
8b. 同 (接線断面)  
bar : 0.1mm



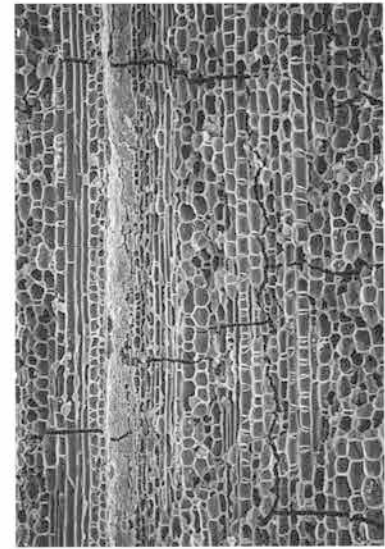
8c. 同 (放射断面)  
bar : 0.1mm



9a. タケ亜科 (横断面) 7号住居  
bar : 1mm



9b. 同 (接線断面)  
bar : 0.5mm



9c. 同 (放射断面)  
bar : 1mm





1.イネ



2.イネ



3.イネ



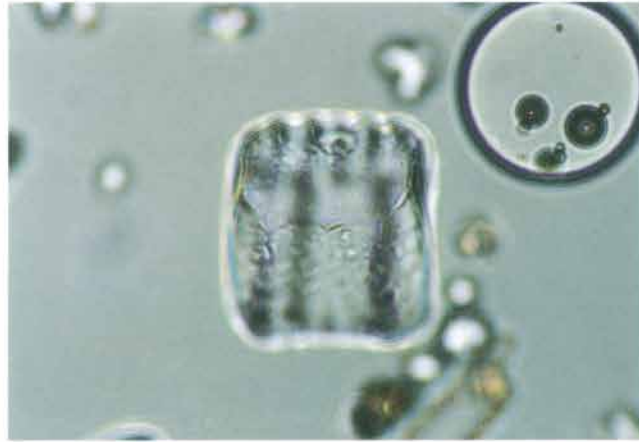
4.イネの糊殻



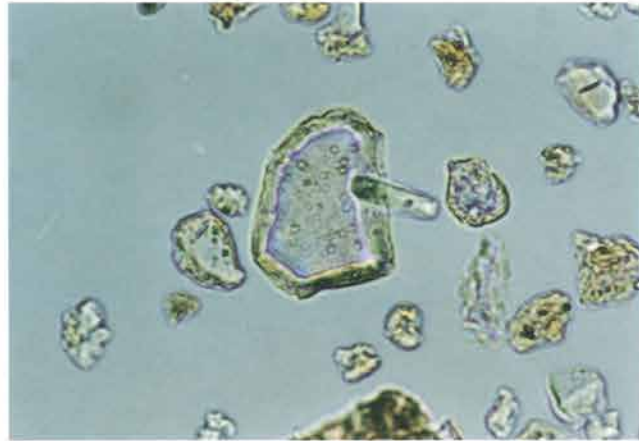
5.ヨシ属



6.ウシクサ属



7.ネザサ節型



8.クマザサ属型



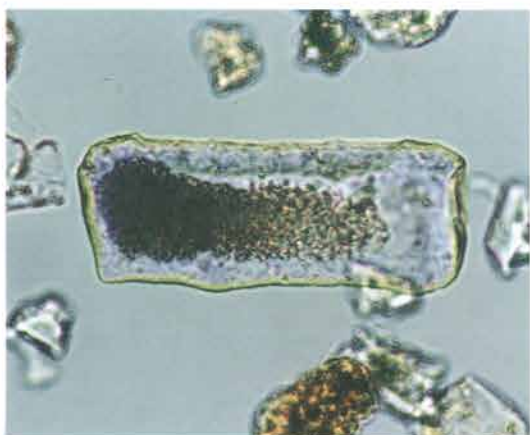
9.表皮毛起源（稲稈の剛毛）



1.イネ



2.イネ



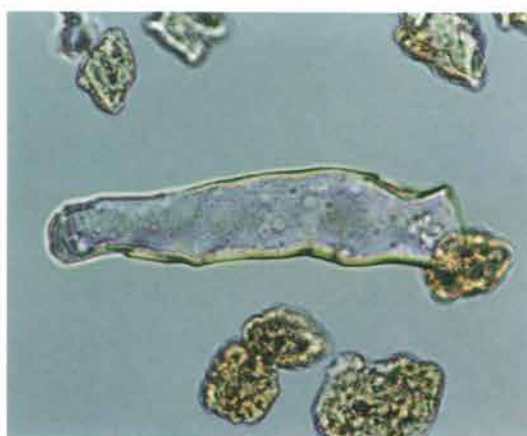
3.キビ属型



4.ネガサ節型



5.不明



6.樹木起源



北側一里塚 調査前



南側一里塚 (現存)



調査地域 航空撮影（西から）



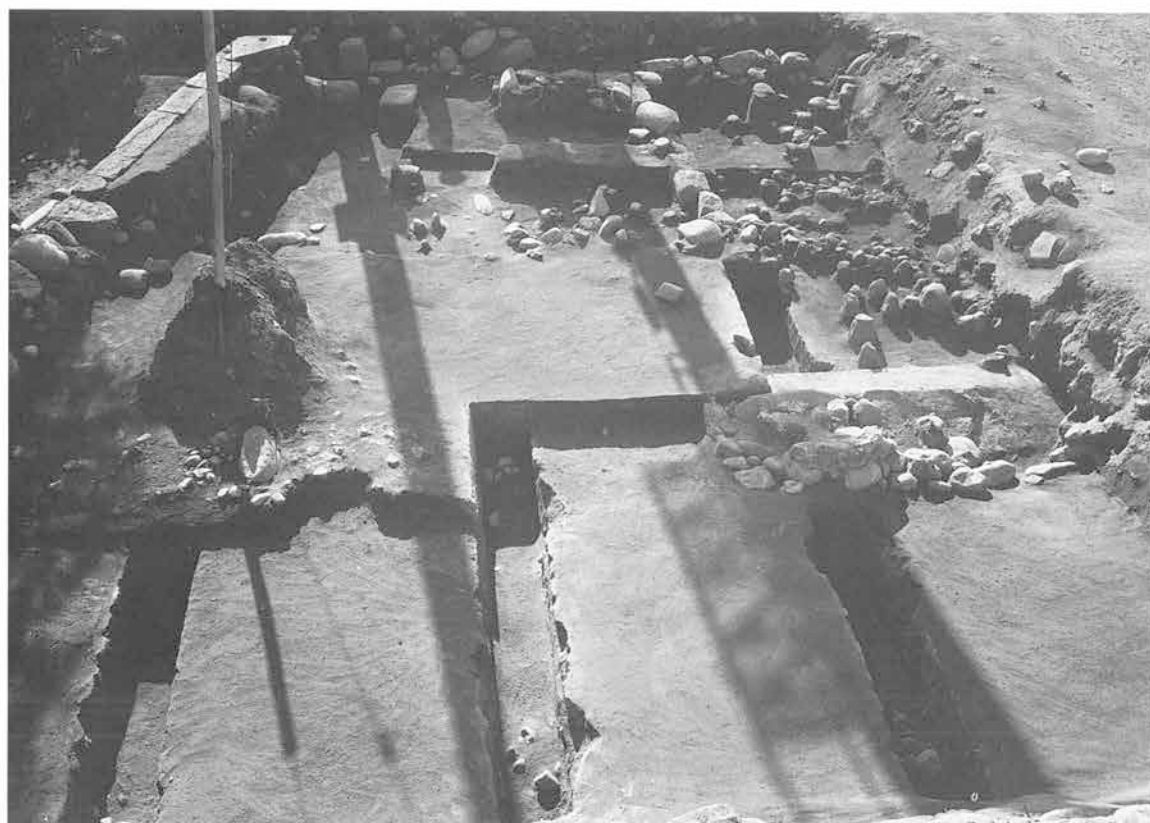
調査区航空撮影（垂直）



調査地域 航空撮影（東から）



調査地域 航空撮影（垂直）



調査区全景（北から）



調査区全景（西から）



上段石垣（北東から）



上段石垣（南東から）





As-A層下 (1)



As-A層下 (2)



第1トレンチ



第1トレンチセクション



第2トレンチ



第2トレンチセクション



第3トレンチ



第4トレンチ



第5トレンチ



第6トレンチ



As-A層下 石垣



As-A層下 石垣



石垣外側礫・遺物出土状況



石垣外側礫・遺物出土状況



As-B下 土層断面



As-A層下 遺物

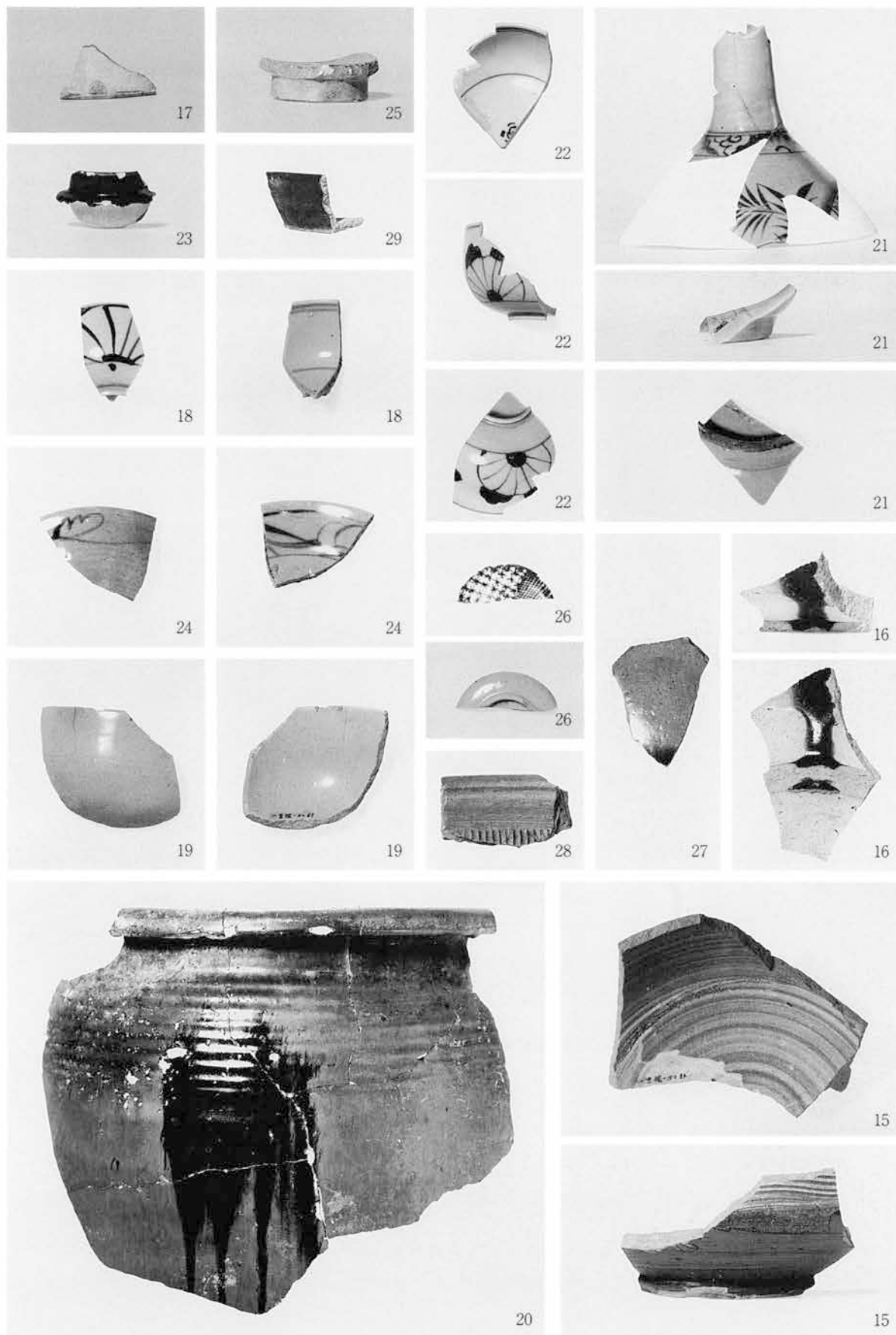


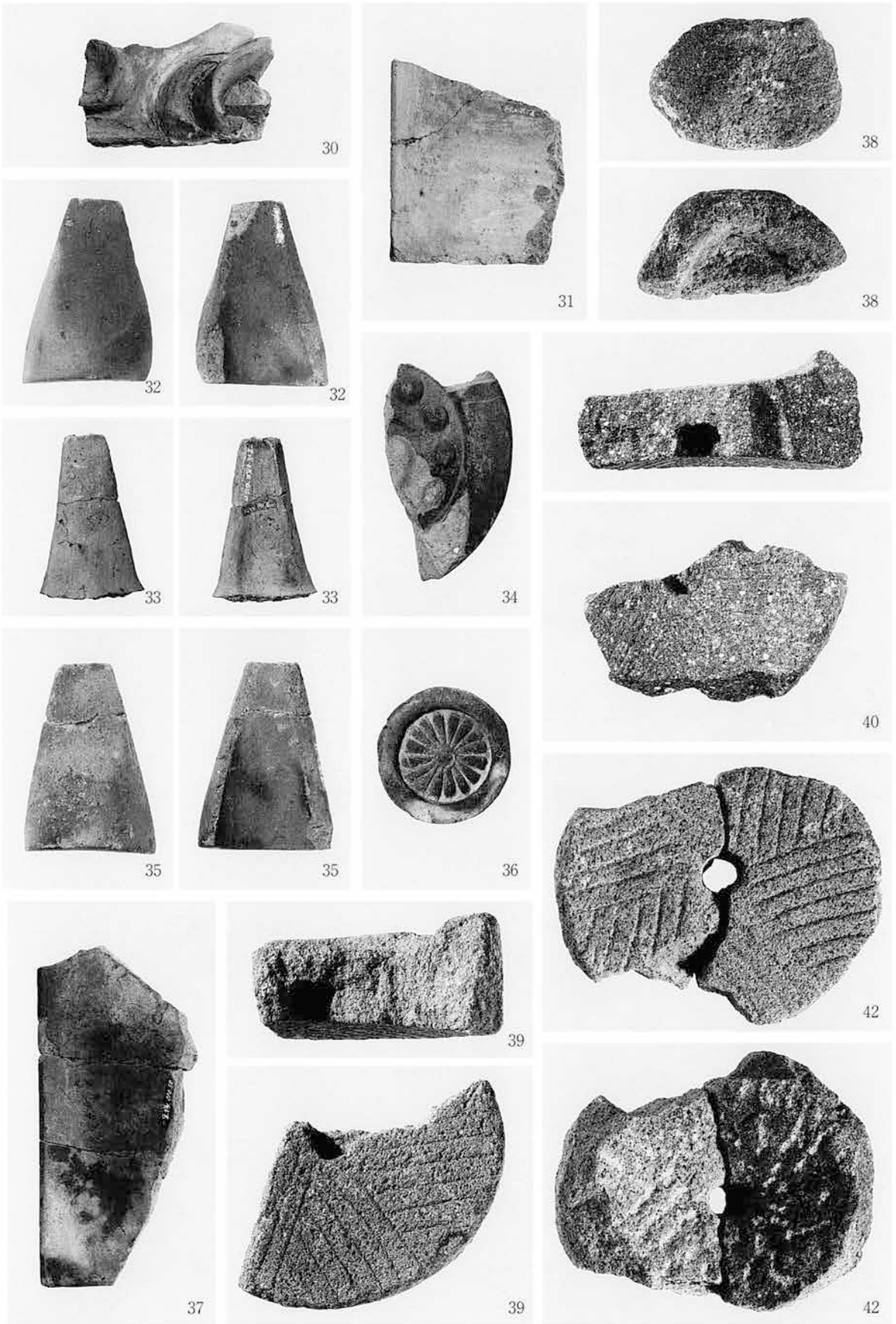
調査風景

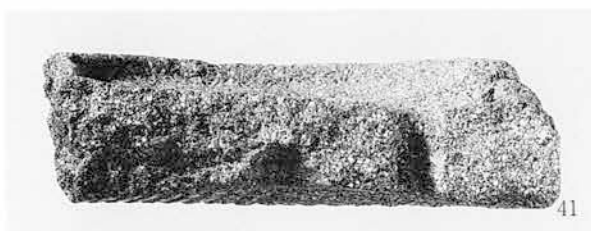


石垣調査風景









41



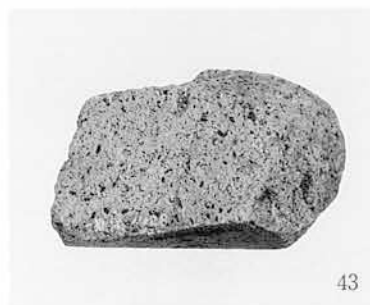
41



45



46



43



44



48



47



49



50



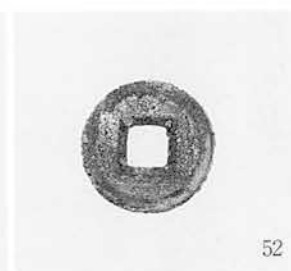
51



51



52



52



53



53



54



54



55



55



56



56



57



57

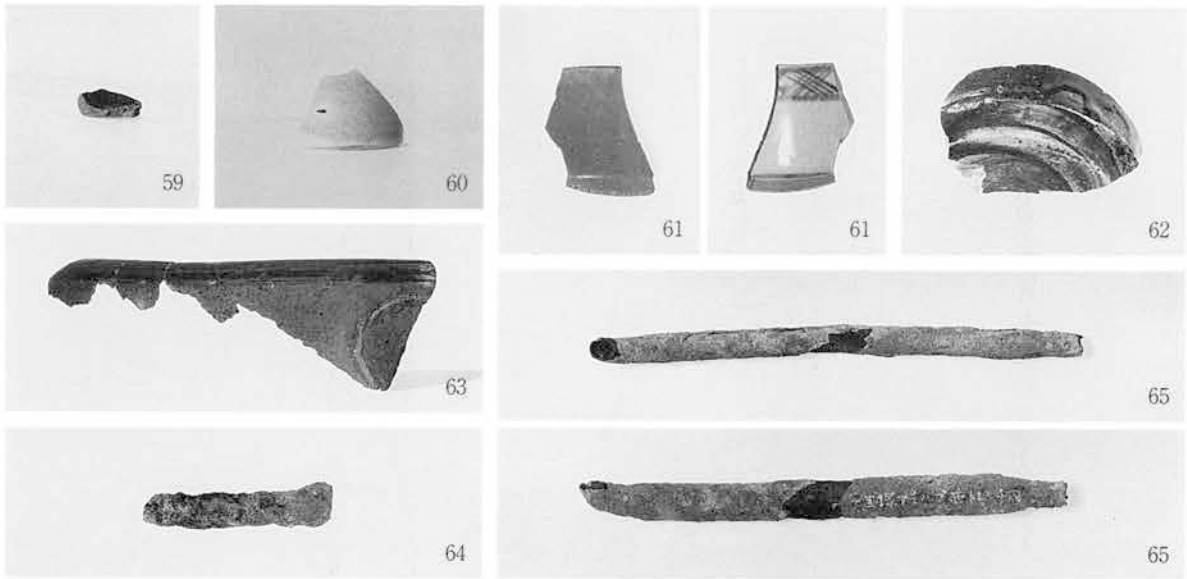


58



58

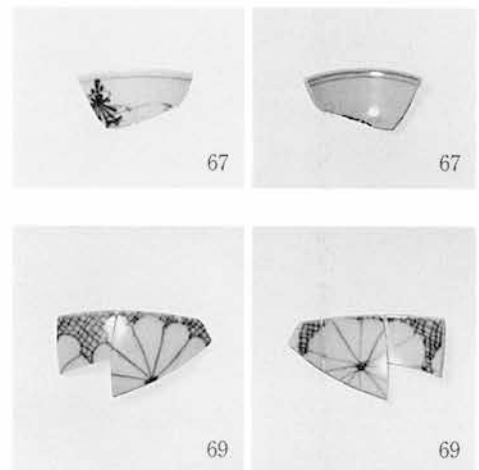
第1トレンチ



第3トレンチ



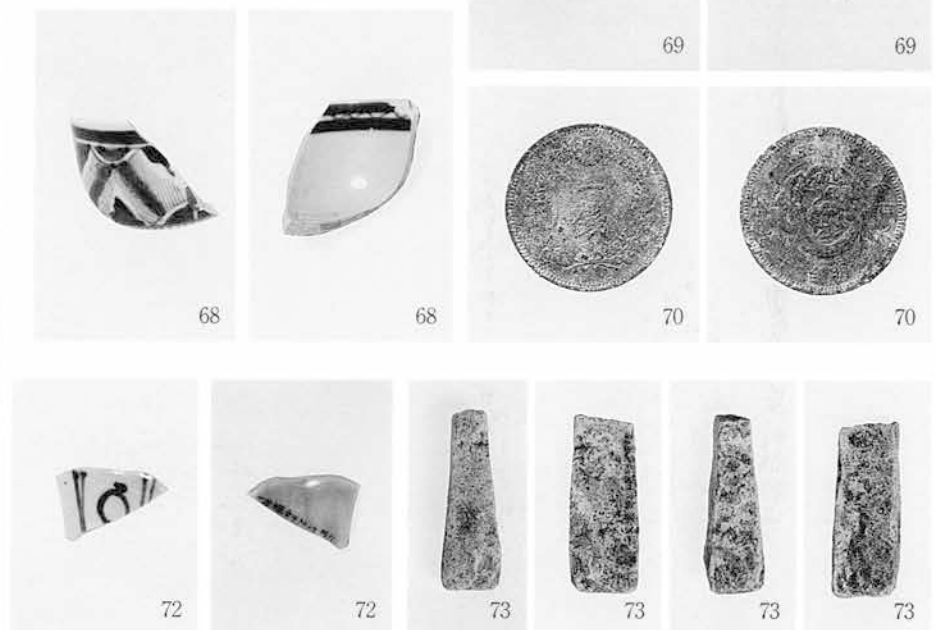
第4トレンチ



第6トレンチ



第5トレンチ





群馬県埋蔵文化財調査事業団  
発掘調査報告第218集

中宿在家遺跡・  
上豊岡一里塚遺跡  
《写真図版》

一般国道18号(高崎安中線)  
地域埋蔵文化財調査報告書

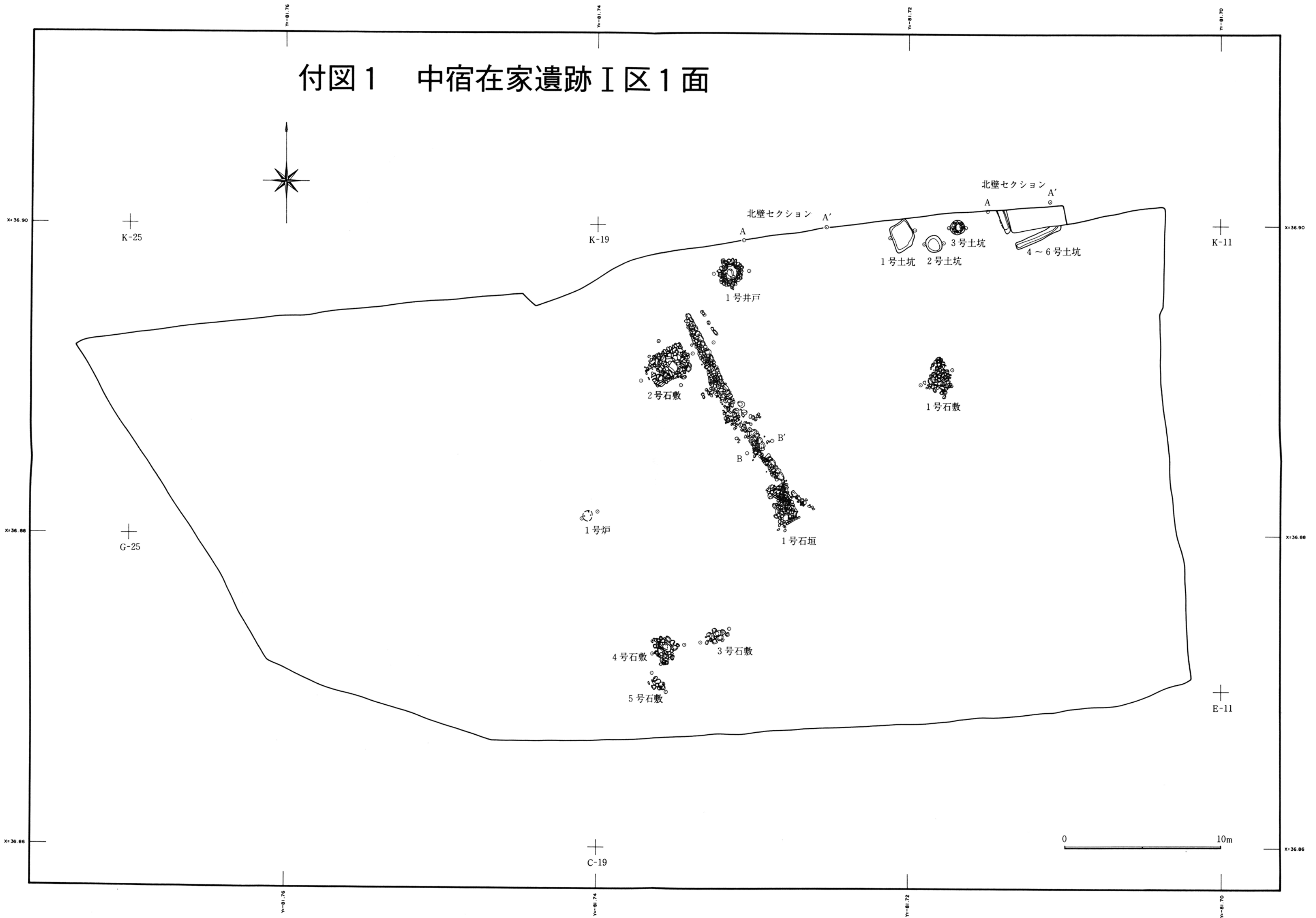
平成9年2月21日 印刷  
平成9年2月28日 発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

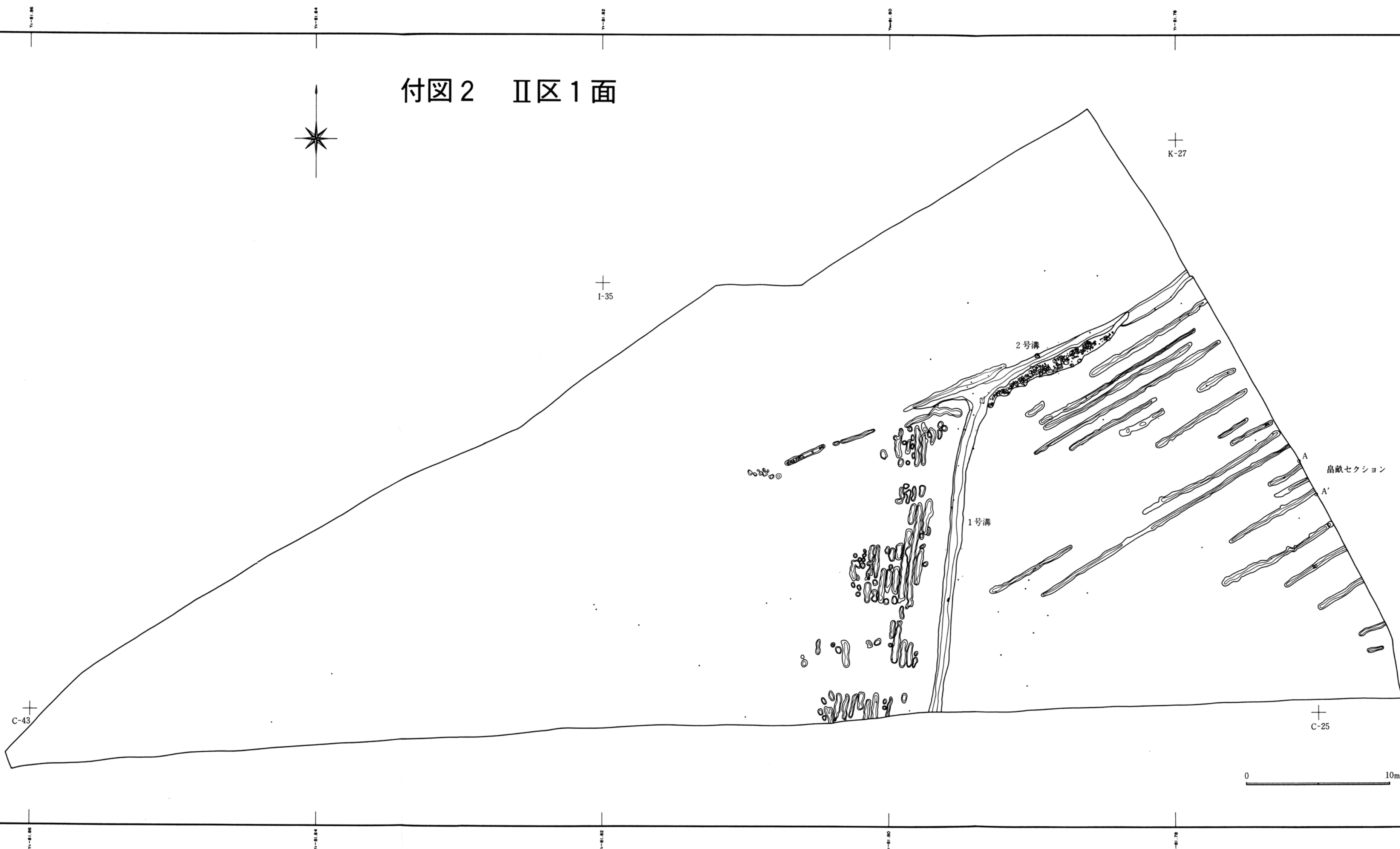
発行／群馬県考古資料普及会  
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局

# 付図1 中宿在家遺跡Ⅰ区Ⅰ面



付図2 Ⅱ区1面



畠畝セクション

A

A'

2号溝

1号溝

I-35

K-27

C-43

C-25

X+36.90

X+36.90

X+36.88

X+36.88

X+36.86

X+36.86

Y+81.86

Y+81.84

Y+81.82

Y+81.80

Y+81.78

Y+81.86

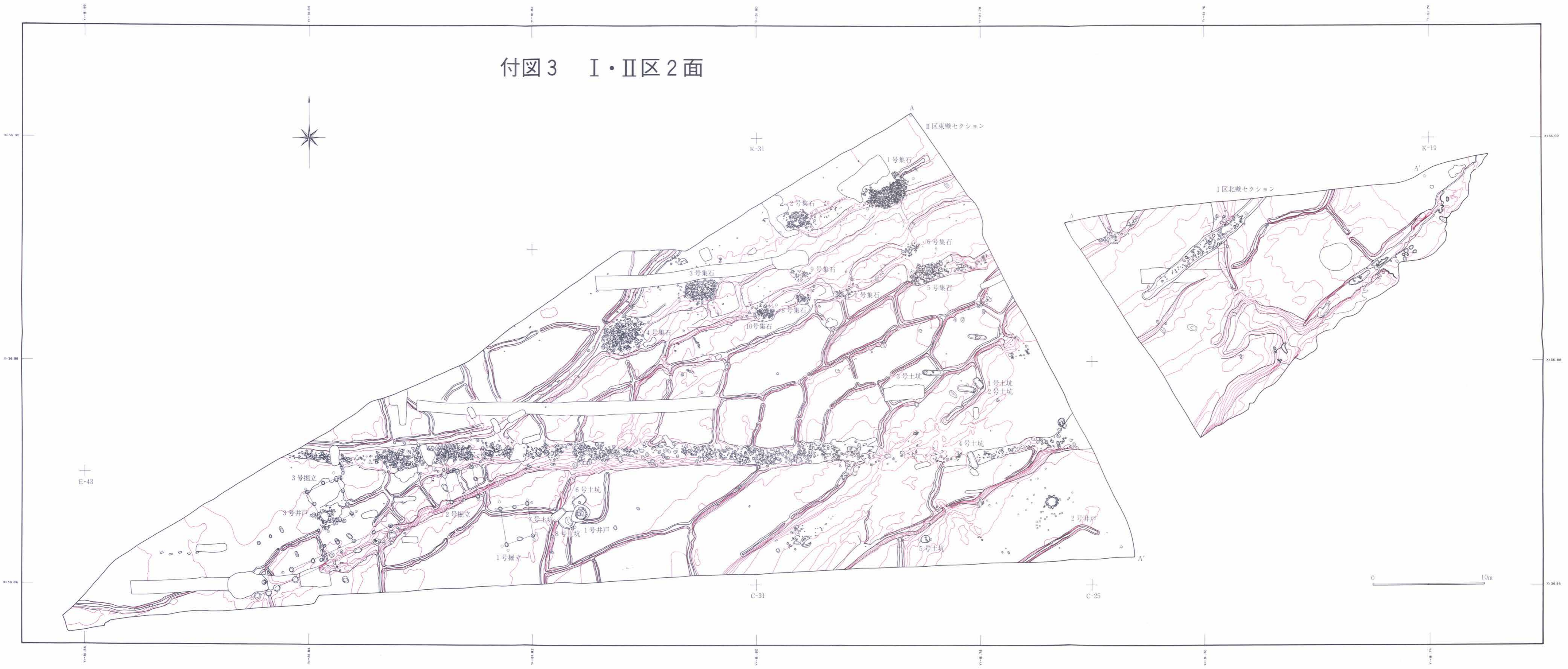
Y+81.84

Y+81.82

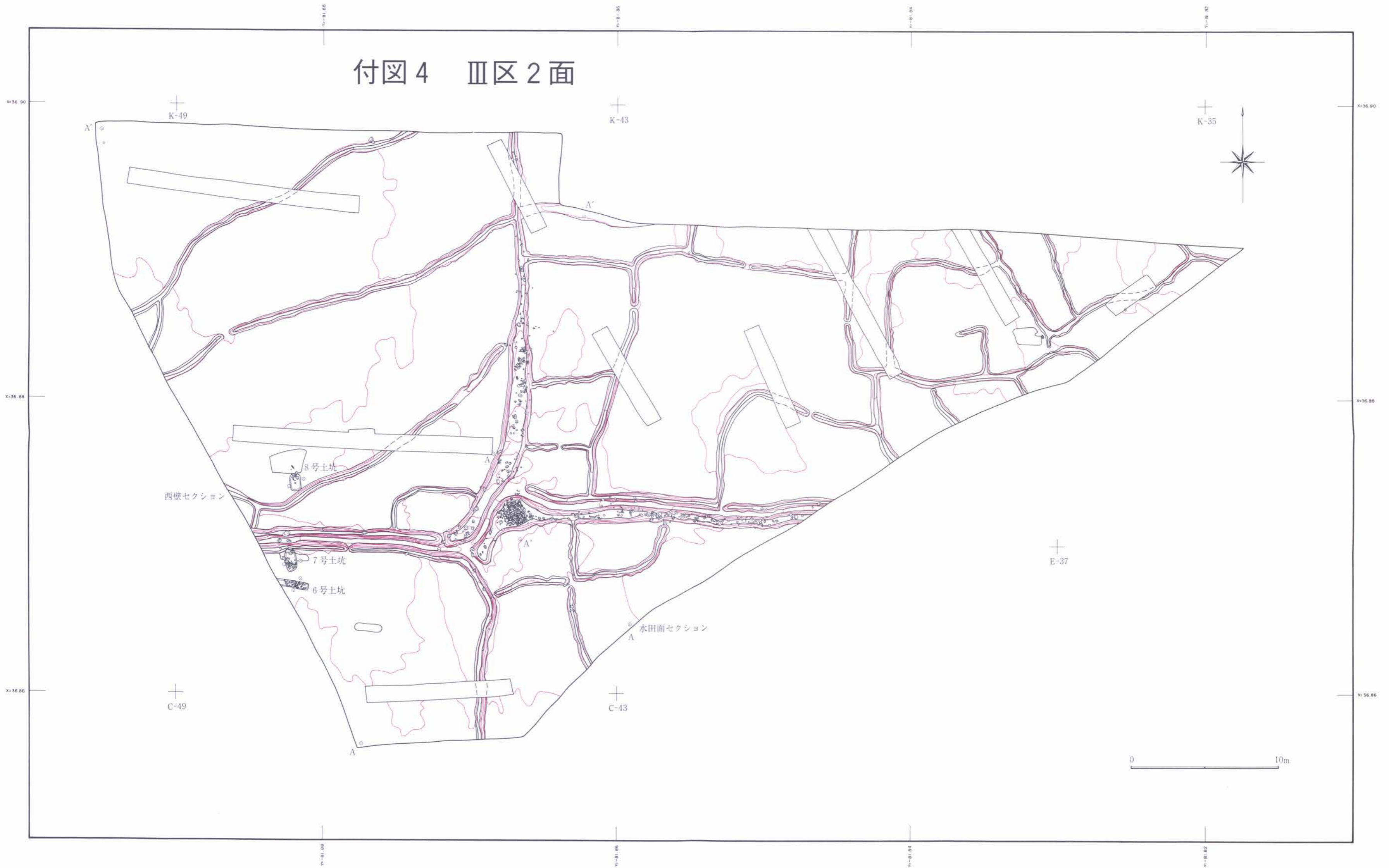
Y+81.80

Y+81.78

付図3 I・II区2面



# 付図4 Ⅲ区2面



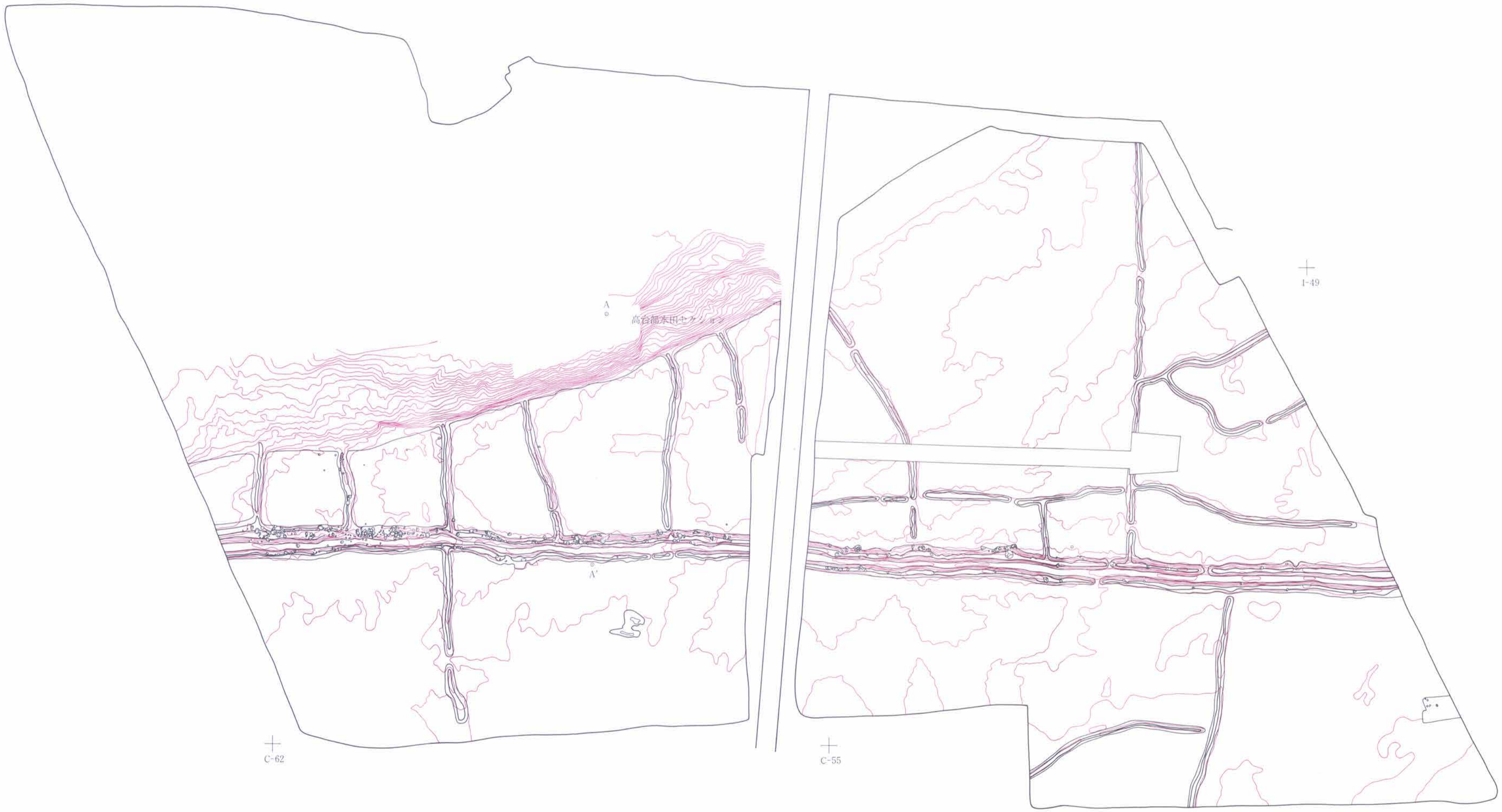
付図5 IV区2面

+

M-65

+

M-55



+

I-49

A  
○  
高谷御本田七ノ

A'

+

C-62

+

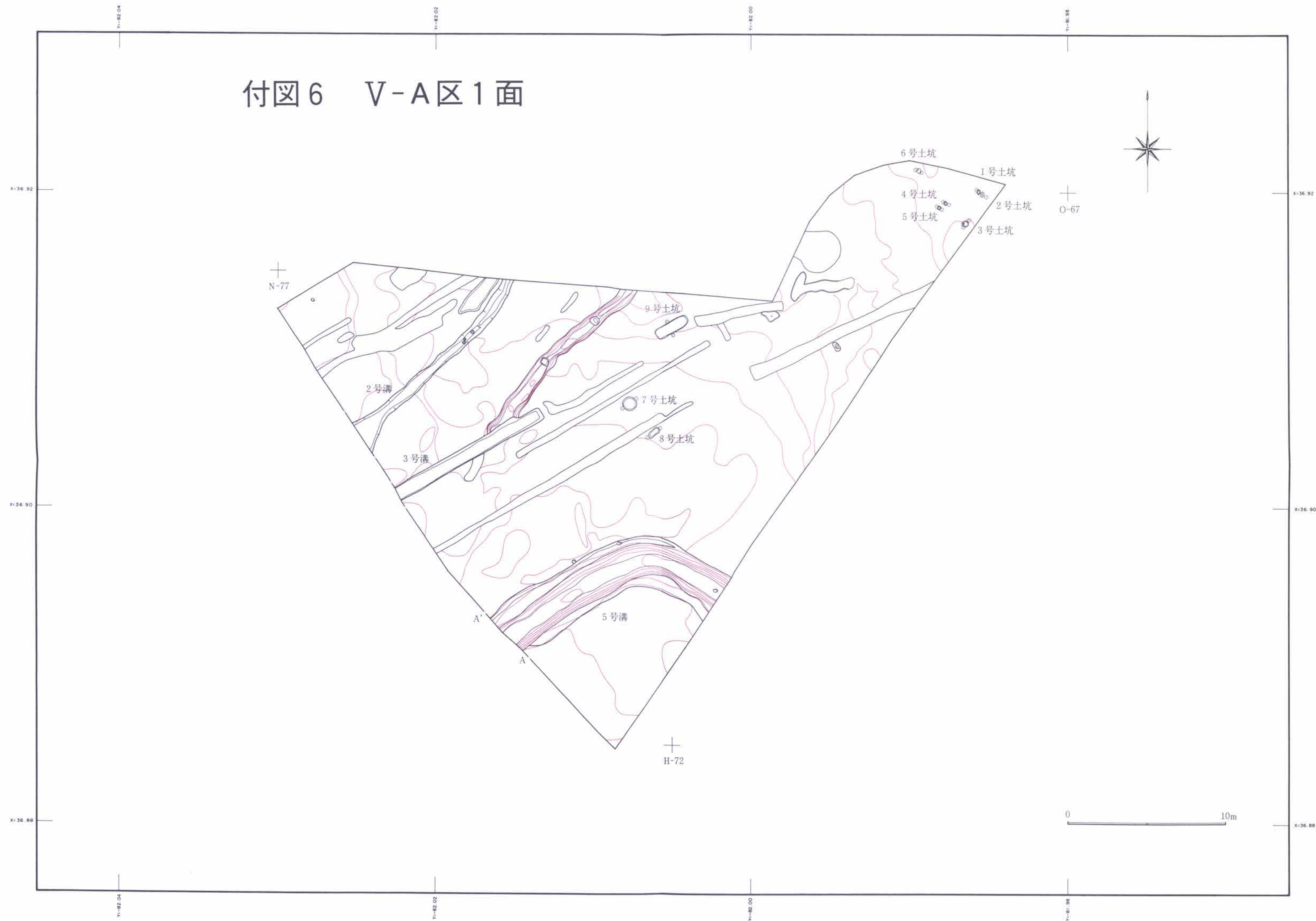
C-55



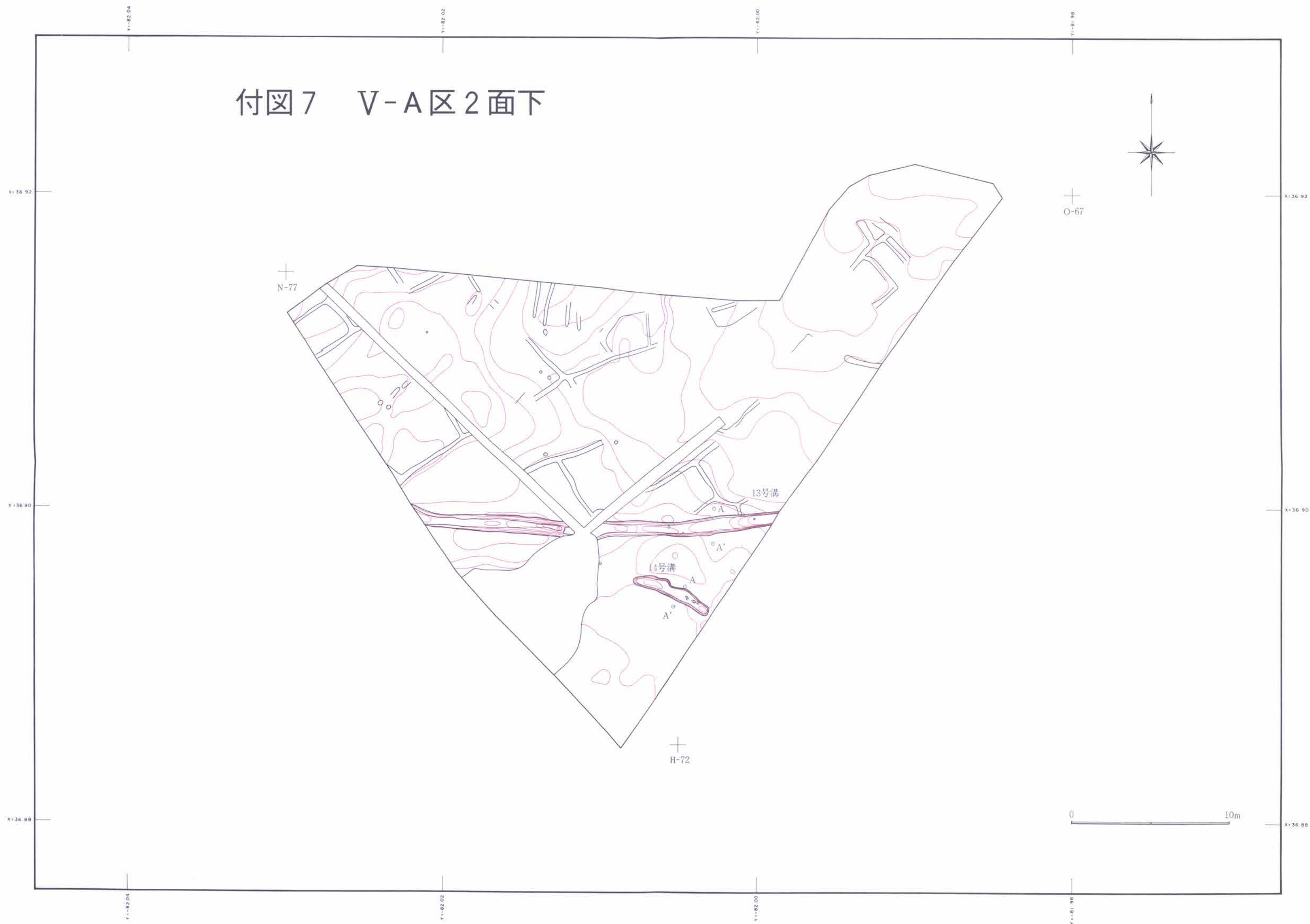
+

A-47

付図6 V-A区1面

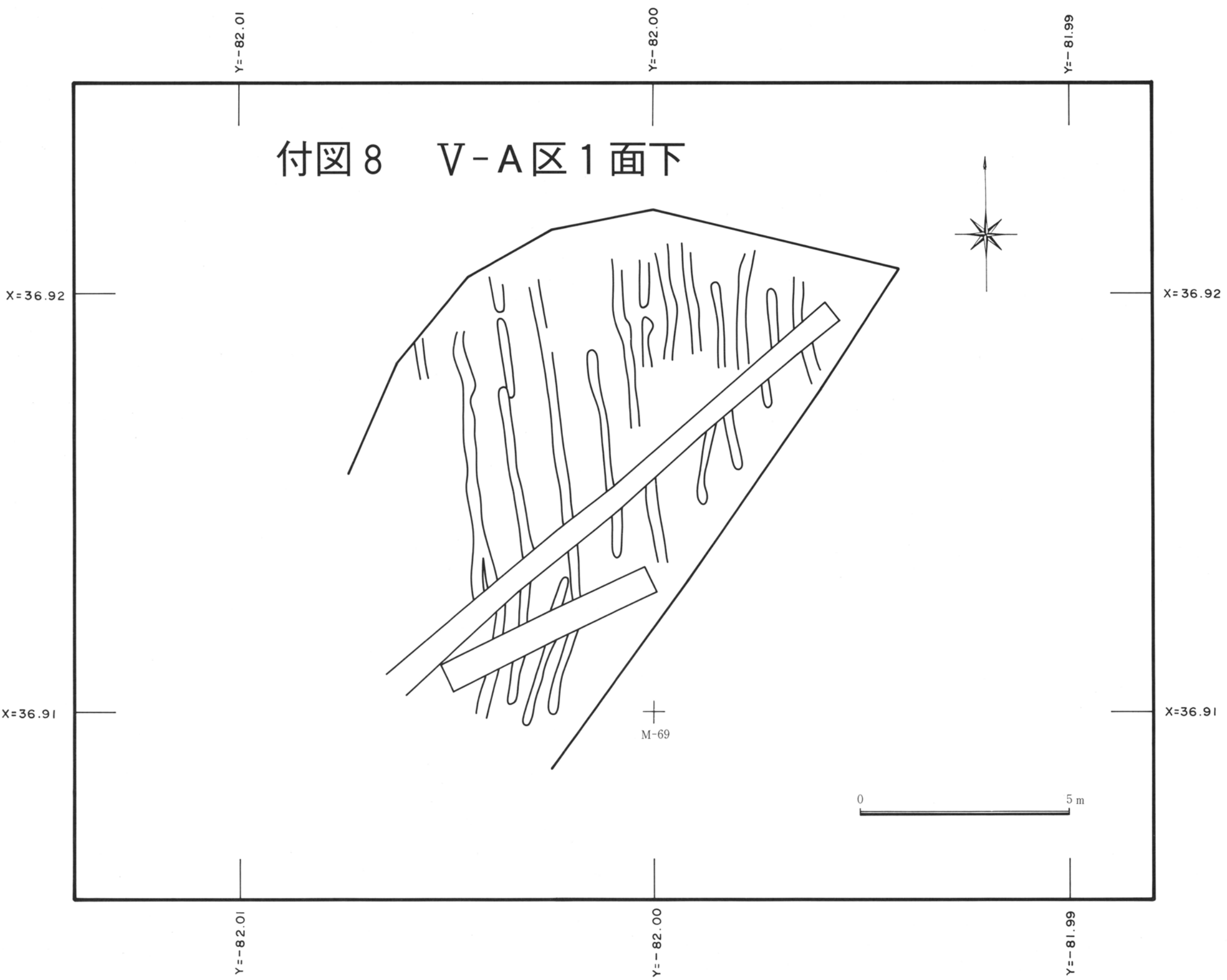


# 付図7 V-A区2面下

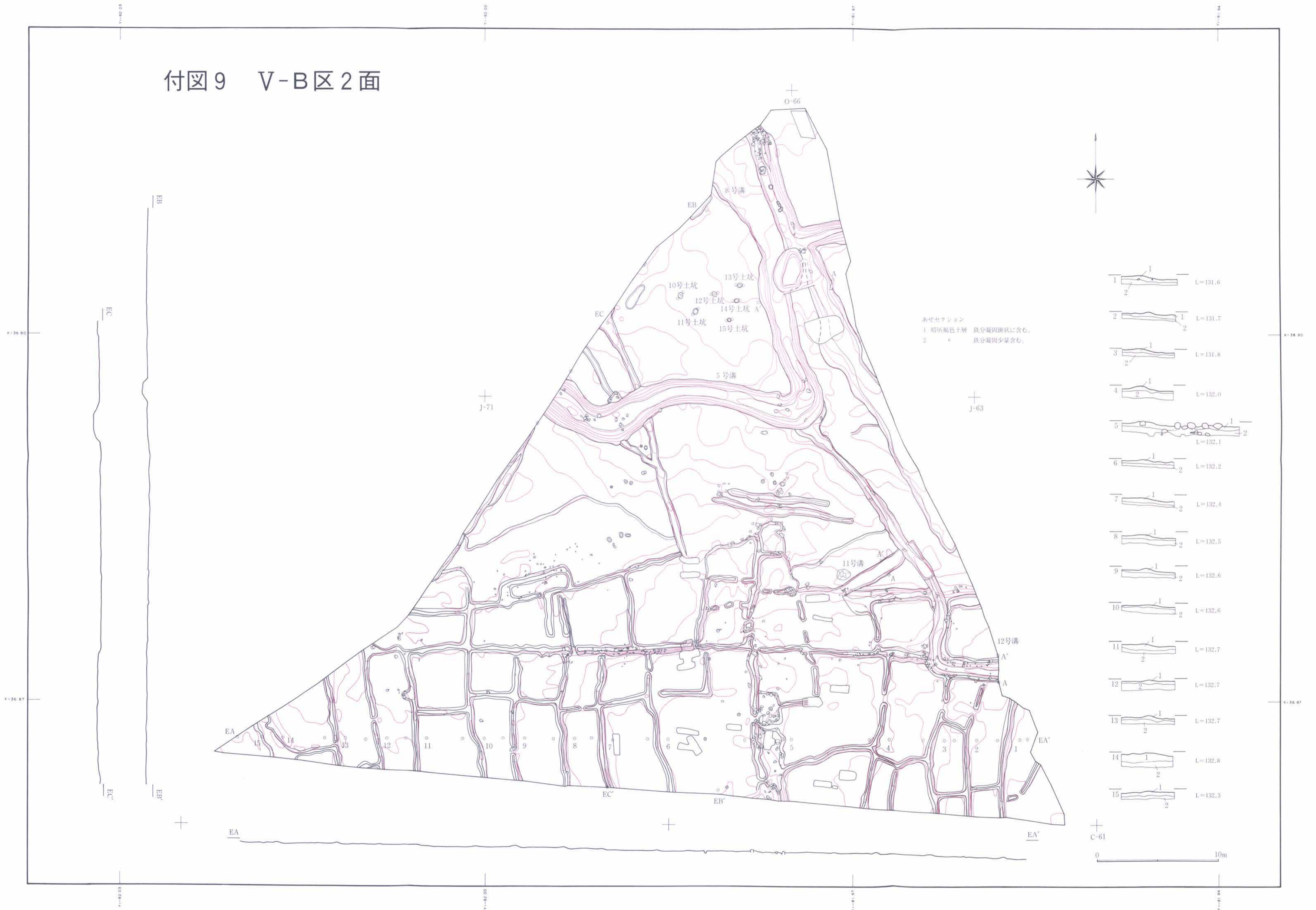




# 付図8 V-A区1面下

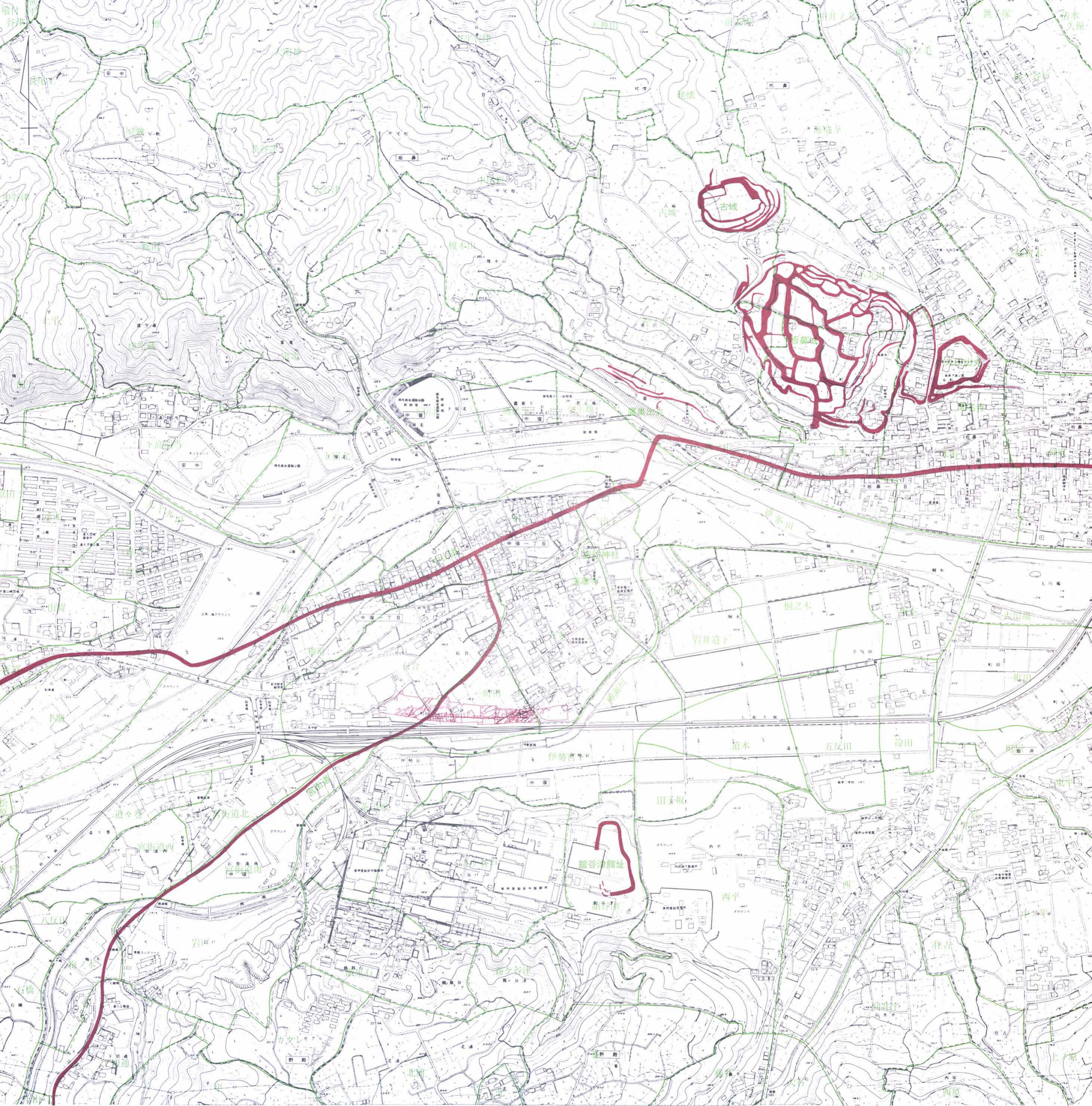


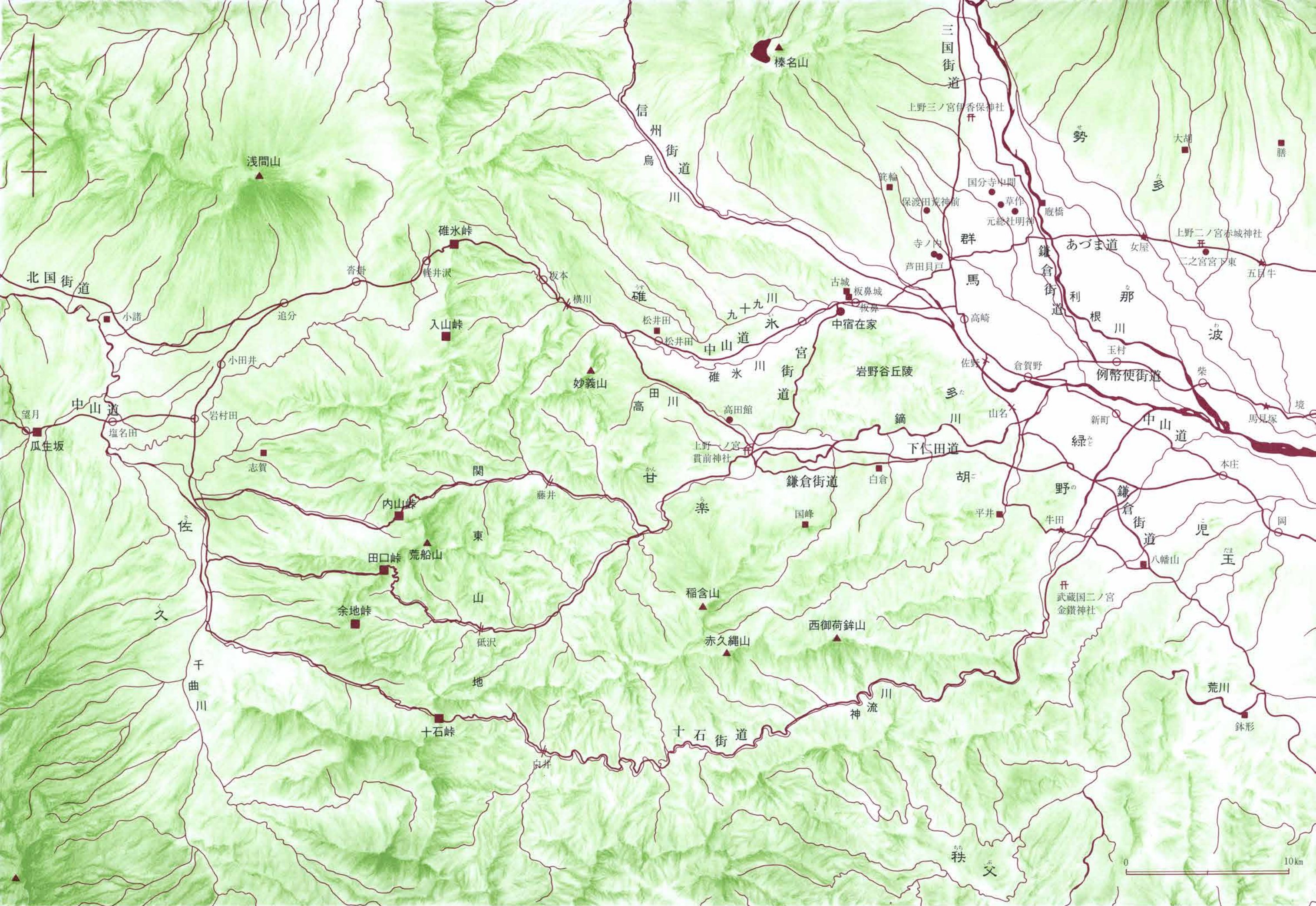
付図9 V-B区2面



付図10 VI区2面







- 峠
- 主要な中世城
- × 中世要地
- 中山道・例幣使街道宿場
- || 近世関所
- ★ 牛疲勞死伝説地
- 同安窯系青磁出土遺跡

付図13 中宿在家遺跡全体図



0 20m

付図14 中宿在家遺跡B 軽石下水田



0 20m





付図16 上豊岡一里塚遺跡

